
私（ぼく）が君にできること

本知そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私が君にできること^{ほく}

【Nコード】

N7353Q

【作者名】

本知そら

【あらすじ】

不慮の事故で家族がばらばらになってから6年後。

主人公の楓は妹の椿と再会し、二人暮らしをすることになる。

新しい学校に出来の良い妹と頭を悩ませる楓であったが、友人の遙や奈菜、蓮達のおかげで平凡とは言い難いながらも楽しい日々を過ごしていく。

しかし楓には人には言えない大きな秘密があった。

この話は、事故によって男から女になってしまった楓の、日々の
高校生活を綴ったお話。少しでも山あり谷ありな、そんな物語。

男 女の性転換学園物です。

第1話 楓と椿 part 1

表紙(前書き)

> i 1 7 9 1 5 | 2 1 9 9 <

第1話 楓と椿 part 1 表紙

季節は夏の8月10日。時刻はまだ太陽が天高く輝く16時。

僕は駅前のバスターミナルに立ち、額から滲み出る汗をハンカチでおさえながら空を見上げていた。

「あづい……」

遠くに見えるビルの屋上に大きな電光掲示板を見つけた。眩しさに細めた目をさらに細くして見ると、そこには37度という数値が刻まれていた。

「……ぢぬ」

真夏に相応しい問答無用の猛暑日だ。

のろのろとした動きでハンドバッグから携帯電話を取り出してインターネットに繋ぐ。表示されたメニューから『今日の天気予報』をクリックする。

今日の天気、曇り時々雨 降水確率30パーセント。今日は全国的に曇り、だそうだ。

「うーん……」

携帯電話を仕舞いながらもう一度空を見上げる。

「騙された」

ぼつりと愚痴を零した。

空は雲ひとつない日本晴れ。風もほとんど吹いていない。ジッと

立っているだけで肌に突き刺さるような直射日光と、アスファルト舗装された地面からの照り返し熱で、汗がプツプツと噴き出してくる。

天気予報を信じたばかりに今日は日傘なんて持ってきていない。昨日見たテレビでは、天気予報が当たる確率は年々上がっていると云ってたのに、昨日の今日で早くも裏切られるとは……。

「やっぱりこの時期は折りたたみの傘を常備するべきなのかな……？」

とは言つもの、『折りたたみ』でも傘は傘。結構な大きさだ。手持ちのハンドバッグに入れると場所を大きく取られるし、なにより重い。出かける際は手持ちの荷物を極力なくしたい僕としては遠慮したいところだ。

右手にぶら下げた必要最低限の物だけ詰めたハンドバッグに目を向けた。

『^{かえで}楓は肌が弱いことから、ちゃんと傘は持っていきなさいよ』

数時間前に別れた友人の奈菜^{なな}に言われた言葉を思い出す。

あの時、奈菜の見透かしたような、突き刺すような視線に、僕は目をそらしながら「うん」と頷いたけど、ご覧の通りバッグの中には傘なんて入っていない。

おかげでこの有様だ。

『まったくあなたは……。少しは自分のことを理解しなさい』

奈菜の小さいながらも力のこもった怒声が聞こえたような気がした。それは幻聴に違いないけど、きつとこの現状を伝えると寸分違わぬ言葉を告げられる自信がある。

「……日傘、持っとこ」

すこーしだけ寒気を感じて、そう心に決めた。

……ま、まあ、遥はるかからもらった日傘ならそんなに重くないし、きつと邪魔にならないはず。

奈菜同様に中学の頃からの友人である遥からもらったその日傘は、以前誕生日プレゼントとしてもらった物で、見た目はちょっと骨組みが太く、取っ手部分が曲がってないだけの普通の日傘なのに、傘をたたむと布部分が奥に収まって竹刀のように使える特殊な構造のものだ。遥が言うには、中軸や骨組にガラス繊維の入った強化プラスチックを使っついていて軽いのに硬い優れもの（？）なのだとか。もちろんそんな変な傘が一般に販売されているはずもなく、オーダーメイド品らしい。高価なものだろうと思いいくらしたのか聞いてみたけど、遥は教えてくれなかった。

もらったときは「傘を竹刀に、だなんてそんな子供じゃあるまいし……」と困惑したものだけど、既に傘以外の用途で二、三回どころじゃなく使用しているので、今じゃなんとも言えない。

『二つの意味で護身用ってことで。楓は体弱いんだから、どうせ使うならアタシの傘を使いなよ』

残念。あの日傘は昨日引越ストラックに積んでしまっで、もう椿つばきの元に届いてる頃だ。僕の手元に日傘なんてない。

とは言え、それが失敗だった。

「……日焼け止め塗っておいて正解だったな」

その証拠とばかりに、露出した腕を見ると、常人より白い（らしい）肌の色が少し赤みがかっていた。かなりきつめの日焼け止めを

塗っておいたはずなのにこれだ。以前日焼け止めを塗らず小一時間ほど外に出ただけで、その夜に高熱で寝込んだことがあるけど、あれはもう御免被りたい。

自分の体が人よりも病弱だということは理解しているつもりだけど、どこまでがセーフでどこからがアウトなのかという線引きが未だに出来ていない。きっと奈菜や遥の方が僕以上に分かっている。だから二人とも僕のことを気にかけてくれるのだろうけど。

そんなことを考えている間にも太陽はその日差しを容赦なく僕に突き刺していた。とにかく今は日陰に入ることが先決だ。肌のことも問題だけど、このまま日に当たっては日射病で倒れてしまいたいそう。

本当に今日は体調が良くて助かった。これで体調が芳しくなかつたら間違いなく倒れている。

……涼しくなるまでは出歩かずに家の中でごろごろしよう。

そうこれから数週間の過ごし方を決めて、数百メートル先に見えるバス停まで早足で向かった。

「ふう……」

バス停のベンチに座りながら一息吐き、バッグから取り出した手鏡で自分の顔を映した。

あーあ……。

お風呂上りのように頬が赤くなっていた。これは今日の夜は濡れタオル必須かもしれない。

そう他人事のように考える。

ふと、僕は腕を伸ばして、携帯するには大きめな手鏡で出来る限

り全身を映した。

そこにはベンチに座ってこちらを見る、白いワンピースを着た女の子がいた。

腰の辺りまであるストレートロングの黒い髪と、小さな顔に大きな目。白い肌に華奢な体。そして少しだけ自己主張する胸。

表情というものを僅かに浮かべて僕を見返す、この女の子が僕。六年前にこの体になってから見慣れた、今の僕の姿だ。

その姿はたまに中学生と間違われるほどの小柄で未だ発展途上。とくに身長に至っては予想を大きく下回り伸び悩んでいる。

バレーボール選手のように、とはいかないまでも、せめて高校生に見られるくらいにはなりたかった。

高校に入学して1年と数ヶ月。一番の悩みは変わらずこれだ。

はあ……と大きなため息をついてから、頭を数回振った。今は身長のことを悩んでる場合じゃなかった。

手鏡をバッグに戻してから腕時計で今の時間を確認し、バス停の時刻表を見た。

「えーっと……」

時刻表に人差し指を当てて、なぞっていく。

ちょうどよかった。あと5分ほどで目的地を経由するバスがくるみたいだ。

ベンチに座りなおすと同時にバッグから電子音が流れた。音楽がらかかってきた相手を特定しつつ、二つ折りの携帯電話を開いた。

予想通り、画面には僕の一下下の妹の『四条椿』よじょうしんぼきの名前が表示されていた。

左隅のボタンを押して携帯電話を耳にあてると、聞き慣れた声が耳に届いた。

『もしもしー。お姉ちゃんだよね?』

「なんで疑問形……携帯なんだから僕しか出ないって」

『かけ間違いつてこともあるでしょ?』

「だったらもう少し誰が出てもいいように丁寧に……まあいいや。で、何の用?」

だいたい予想はつくけど、一応聞いてみる。

『本当に迎えに行かなくて平気?』

「またそれが……」

昨日あれだけ『迎えは不要』と僕が突っぱねたことでけりがついたらはずの話題を蒸し返す椿。ちよっとしつこい。

「ちゃんと地図もあるし、携帯のナビもあるから大丈夫だって昨日も言ったよね?」

『だってお姉ちゃん方向音痴だから心配で……』

「うぐっ……」

痛いところをつかれて返す言葉がない。

って、これは昨日と同じ流れじゃないか。

「え、駅からバス乗って、降りて5分なんだよね? それくらいじやさすがの僕も迷わないよ」

『うーん、そうかなあ……』

「そうそう」

正直100パーセントの自信はないけど、椿を納得させるには嘘も必要だ。

「でも……」

「姉の僕を少しは信じなさいっての」

ほんの少しだけ言葉に力を込めた。あまり聞かない僕の声色に椿は押し黙り、少し間を開けてから渋々といった様子で了承した。

『……わかった。けど、もし迷って道が分からなくなったら電話して。すぐに迎えに行くから』
「りょーかい」

「その必要はない」という言葉を飲み込んでそう返事すると、椿は安心したのか二言三言話してから『ばいばい』と言って電話を切った。

「妹に迷子にならないかと心配される姉、か」

まったく姉としての威厳の欠片もない。

これからは身長以上にこっちのほうが大きな悩みになりそうだ。

そのまましばらく考えていると目的のバスが到着したらしく、空気の抜けるような音とともにバス後方のドアが開いた。

ベンチから立ち上がりつつドア横に表示された経路地を確認し、整理券を受け取って乗り込む。

バスには数人乗っているだけでガラガラだった。僕は運転席から2つ目の窓側に座る。僕が座るとほぼ同時にドアが閉まり、バスは動き出した。

流れる町並みを眺めていて、ふと窓ガラスにうつすらと映る人の

顔に気付いた。

「椿に会うのは何年ぶりだろ。楽しみだね、ひん柊」ま

語りかけたその顔が嬉しそうに笑っているように見えた。

第1話 楓と椿 part 2

バスに乗る数時間前

「昨日送別会してもらったから、見送りはいいって言ったのに」
「あら。あたしには『来てください』って聞こえたのだけど？」

バス停でバスの到着を待っていると、奈菜が見送りに来てくれた。昨日夏休み中だというのに、友人みんなが寮に集まって盛大な送別会をもらったから、今日の見送りは必要ないと伝えたにも関わらずにだ。

「そんなはずはないと思うけど……」

少しからかい気味に言った奈菜の言葉に、僕は曖昧に答えた。間違いなく「来てほしい」とは言っていない。ただ、目でそう訴えていた可能性はある。あまり表情に変化のない僕だけど、奈菜や遙は僕のわずかな変化を読み取り、僕の気持ちを見抜いてしまうことがよくあった。

もしかしたら、僕はあの時奈菜に見送ってほしいと心のどこかで思っていたのかもしれない。

「ふふつ。冗談よ。あたしが楓と話がしたかっただけ」

「なんだよかった。でも、奈菜が冗談言うなんて珍しいね」

「あたしも冗談くらいは言うわよ。ま、どこかの馬鹿みたいにいっても冗談を言うわけじゃないけれど」

「どっかの馬鹿って間違いなく遙のことだよな？」

「他にいる？」

『いない』と首を振る僕を見て、奈菜が上品に口元に手を当てながら笑った。

「あ、そうだ」

僕はバッグをベンチに置き、奈菜に右手を差し出した。

「奈菜。今までありがとう」

これからも週末は会って遊ぶだろうし、完全に別れてしまうわけじゃないけど、二学期からは一緒に登校できなくなるわけだから、一応の区切りをつけたかった。

「こちらこそ」

奈菜が僕の手を握り締める。

「……って、どうせ来月辺りにはまた顔合わせそうだけど」
照れくさくなって、目を逸らした。

「こつこつというのは様式美よ。それに、これで来月からは楓とは休みの日くらいにしか会えなくなるんだから」

そう言った奈菜は、少しだけ寂しげに見えた。

「そっか。そうだね」

もうこれまでのように、学校や寮で毎日いつでも会えるってわけじゃないんだよね……。

改めて考えると、違う学校になるということはやっぱり寂しい。

「楓には感謝しているわ。あなたのおかげで今も部活続けられているようなものだから。勉強もよく教えてもらったし。ありがとう」
「そんなまた大袈裟な……」

それぐらいのこと、僕が奈菜にしてもらったことと比べるとたいしたことじゃない。

奈菜は僕が転校生としてやってきた中学2年生の頃、クラスに馴染めず、また馴染もうとせず、一人ポツンとしていた僕に何度も声をかけてくれて、しかも自分達の輪の中に入れてくれた。奈菜のおかげで、僕は僕が思っていた以上に楽しい学校生活を送れたし、他にもいろいろと知り得なかったことも教えてもらうことができた。

だから、勉強を教えることや部活のことくらい奈菜が僕にしてくれたことに比べればたいしたことじゃない。

そう言おうとしたけど、奈菜は僕の口元に人差し指を当てて制した。

「あなたはいつも謙遜しすぎなのよ」

「謙遜なんて別にしてないよ」

僕がそう言うと、奈菜はゆっくりと首を振った。

「いいえ。あなたには十二分に感謝しているわ。あたしも、もちろん遥もね」

「遥も？」

遥が僕に感謝？ 僕が遥に感謝することならいくらでもあるけど、遥が僕に感謝って。僕は何もした覚えないんだけど……？

「またそんな『まったく分からない』って顔をして」

「だって全然思い当たらないから」

「はあ……ま、そのうち分かると思っわ」

よく分からないけど、とにかく頷いておくことにした。

「……まだバス来ないわね。遅れてるのかしら」

「あ、ほんとだ」

奈菜の言葉に腕時計を見ると、予定の時刻を過ぎていた。

「僕の時計が早いわけじゃないよね？」

「ええ。あつてるわ。……それにしても、結局その言葉遣い直らなかつたわね」

「ん？ ああ、言葉遣いね。まあ、生まれたときからずっとこれで、中学から直せといわれてもなかなか……ね。それに僕が女の子のよくな言葉遣いってのもおかしいと思うけど？」

僕がそう言うと、奈菜は苦笑した。

「むしろ男っぽい言葉遣いのほうが違和感あるのだけど」

「え、なんで？」

「そんな保護欲をかきたてられる女の子、そっくないわよ？」

「ほ、保護欲って……。そ、そう……はあ」

真顔でそんなことを言う奈菜に何も言えず、僕はこっそりため息を吐いた。

よかつたね柊。褒められてるよ。たぶん……。

背後から聞こえた空気の抜けるような音に気づいて後ろを向くと、目的のバスがドアを開けて止まっていた。

急いでバッグを持って乗り込み、ドアに一番近いに椅子に座って窓を開けた。

「楓！ 向こうの学校で遙に会ったら『あとは任せた』って伝えておいて！」

口元に両手でメガホンを作って奈菜が大声を出す。

中学の頃僕達と同じ学校だった遙は、何故だか分からないけど高校は別の私立の学校へ進学した。その学校が、来月から僕が通う学校なのだ。

「『あとは任せた』ってどういう意味？」

「いいから、そう伝えておいて！」

「う、うん。わかった！」

『出発します』

返事すると同時に車内にアナウンスが流れバスが動き始める。

「奈菜見送りありがとう！ またね！」

「ええ。また」

遠ざかっていく奈菜の姿が見えなくなるまで、僕は手を振り続けた。

そして現在

「うーん……」

僕は地図を見て呻っていた。

バスを降りてから地図を頼りに椿が待つマンションに向かったはずなのに……。

『バス降りて5分くらいで着くから』

昨日電話で話した椿はそう言っていた。けれど、バスを下りてからすでに30分近く経っている。

「これってまさか……」

いやいや、そんなはずはない。まさかそんな……。

ブンブンと勢い良く頭を振る。

「きつとこの角を曲がれば」

少し小走りで角を曲がる。

……バス停の通りに出してしまった。

『楓は方向音痴なんだから迎えに来てもらった方がいいんじゃない？』

昨日、奈葉に言われた一言が頭の中で響く。

今更遅い。椿に昨日からさっきまでずっと迎えはいらなと言っておきながら『やっぱり迷子になったから迎えに来て』なんて口が裂けても言えない。

とは言え、バスを降りてからはや30分。街路樹や塀でできた影の中を歩いているから直射日光を浴びることなく進んでいるけど、

これ以上炎天下の中をうろつろしているると本当に今日の夜は熱を出して寝込むことになりそうだ。

数年ぶりに再会して早々椿に迷惑をかける訳にはいかない、絶対に。

「どうしたものか……」

「あの」

顎に手を当てて思案していると、突然背後から声をかけられ、驚いて振り返った。

そこにはどこかの制服を着た男の子が立っていた。身長は180くらいだろうか。かなり高くて見上げてしまう。

「ぼ、僕……ですか？」

初対面の人に一瞬拒否反応が出そうになるが、なんとか押し止め返事をする。

「はい。道に迷っているようだったので……」

そう言っつて男の子は微笑む。

…ナンパ、ではないか。

嘘はついてなさそうな優しい笑みに落ち着きを取り戻した僕は、
ばれないようにこっそり男の子を観察する。

……へえ。

よくよく見ると整った顔に茶色がかった髪。何かスポーツをしているのだろうか、引き締まった身体にこの身長。

僕が普通の女の子であれば、運命の出会い的なときめくを感じるかもしれない美男子（表現が古い気がするけど）ではなからうか。

でも残念。僕は普通じゃないんだよね……。

っと、待つてるから返事しないと。せつかくのチャンスだ。ここは素直に白状して道を聞くことにしよう。

「は、はい。そうなんです。えーっと……」

僕は地図を開いて目的地の住所を確認する。

そのとき、ふと目の端に何か光るものが映った。僕はこっそりその正体はなにか目で追う。

それは男の子の襟元についた校章だった。

これはたしか『学園』の校章。僕が明日から通う学校じゃないか。正式には『私立千里学園高等学校』。叔母さんからもらった学校案内のパンフレットによると、明治時代に創立したこの町に古くからある学校で、数年前までは女子高だったそうだけど、この少子化のご時勢、生徒数を確保するために共学にした学校だそうだ。元々有名な進学校として評判の良い学校だったので、男子の受験者も年々増えているそうだが、それでもまだ女子の方が多いか。

その学園の校章を付けているということは、この男の子は学園の生徒。もしかするとこの人とはここだけの付き合いで終わらないかもしれない。いや、最低でも校内で何度かすれ違ふことはあるだろう。

「……柳町5丁目の、この公園に行きたいのですが」

目的地を知られるわけにはいかない。そう思った僕は男の子に地図を開いて見せて、目的地のマンション近くにある公園を指差した。

「ああ。そこだったらここを右に曲がって、5丁目の交差点を左に曲がってちよっと歩くと右手に見えてくると思います。だいたい5分もあればたどり着けますよ」

男の子が親切に教えてくれた。
それにしても……まさかこんな近くだったとは……。

「はぁ……」

自分が情けなくてガクツと肩を落とす。

「どうかしましたか？」

「あ、いえ。なんでもありません。ありがとうございました」

顔の前で両手を振ったあとに頭を下げる。

「いえ、それでは僕はこれで」

男の子は笑顔で軽く頭を下げて背を向けると、僕が向かう方角とは真逆の道を歩き出した。

あれ、今の表情どこかで見たような……。

男の子が見えなくなるまで記憶の中からさっきの表情を探すが、結局見つからなかった。

そして5分後。

あの男の子が言っていたように、30分も迷っていたのが嘘のように、ものの5分で公園に着き、それから程なくして椿の待つマンションにたどり着いた。

マンションは最近できたばかりのようで、外観もエントランスも傷一つなく、大理石でできた床は光り輝いていた。入り口にはちゃ

んとオートロックもついていてセキュリティもしつかりしているようだ。

叔母さん、椿をこんなところに住まわせていたなんて……。僕同様に可愛がられていたことにほっとすると同時に、少し椿を甘やかしすぎなのでは？ と心配にもなってきた。

「カギはこれだったかな」

バッグの中から叔母さんから届いたカードキーを取り出して、玄関ホールの壁に設置されたカードリーダーにかざした。

ピツと短く鳴ってロックが外れた。

中に入るとエントランスを抜けてエレベーターホールへと向かう。

「えっと…十階の1010号室だったっけ」

ちょうど一階に降りていたエレベーターに乗り込み、10階のボタンを押す。扉が閉まり、ゆっくりとエレベーターが動き出した。

「……気持ち悪い」

エレベーター特有の浮遊感が僕を襲い、気持ち悪さに頭を押さえた。

数秒で10階に到着し、扉が開くと同時に外へ出る。

少しふらつく頭を抱えつつ、1010号室を探して奥へと進む。

「えっと…ここか」

探していた1010号室は一番奥の角部屋だった。

「すう、はぁ……」

玄関前まで来るとさすがに緊張してきた僕は何回か深呼吸を繰り返す。

椿とはよく電話したり、メールで写真を交換したりはしていたけれど、こうやって面と向かって会うのはあの事故以来だから、6年振りだ。

「よし、行くか」

心臓は未だにドキドキしているけど、待っていてもこれは落ち着きそうにないので、僕は意を決してインターホンを押した。

第1話 楓と椿 part 3

インターホンを押して数秒後、ガチャッとカギが外れる音がして扉が開き、中から椿が現れた。

「お姉ちゃん、道に迷ったでしょー？」

開口一番、椿は僕にそう言い放った。

「いや、とりあえずインターホン出ようよ」

少しだけにやりとした笑みを浮かべる椿に、僕はジト目を返しつつインターホンを指差した。

「しかも、ひとこと目が『道に迷った？』って……」

普通ここは、『久しぶり』とか『元気だった？』とか、もっと再会を喜ぶような言葉が来るところだと思っけど……まあ、電話でよくお互いのことを話していたから、そんな気分にもならないか。おかげで緊張も解けたし、これはこれでよしとしよう。

「だって来るの遅かったから」

「うっ……」

椿の言葉にたじろぎ、こっそりと腕時計を盗み見る。

時刻は17時半前。予定より30分過ぎていた。

「やっぱり道迷ったでしょ？」

「い、いや。ほら、こんなに暑いからコンビニで飲み物買って涼ん

でたら遅れたんだよ」

「バス停からここまでにコンビニなんてないけど？」

「え？ だってうるうるしてる時に見かけ あっ……………」

……………しまった。

「やっぱり迷ってたんだ」

「……………」

椿の視線が痛くて目を逸らすと、椿はグツと顔を寄せてきて僕の視線に割り込んできた。

「す、すこーしだけ道に迷った……………かも？」

「かもじゃなくて、間違いなく迷子になってたんだよね？」

「えっと……………それは……………あーもー！」

僕は一步後退して椿の両腕を掴み、力いっぱい押し返した。

「道に迷ったとか迷子になったとかどうでもいいじゃないかっ。こ
うやってたどり着けてるんだし。それより早く中に入れてよ。いつ
まで玄関先で話するつもり？」

「ぶっ……………はいはい。じゃ、中にどうぞ」

まくしたてる僕を見て椿が小さく笑い、玄関を大きく開いて招き
入れた。

「つたく……………おじゃましまーす」

椿の家だからと間延びした口調で靴を脱ぎ家にかかる。

「お姉ちゃん」
「ん？」

椿は片目を閉じて右手人差し指をピンと立てた。

「ここはわたしとお姉ちゃんの家なんだから、『おじやまします』は変だよ？」

少しだけ考え、はっと気づいた僕は言い直す。

「……そうだね。『ただいま』」
「『おかえり』」

満面の笑みで挨拶を返す椿の瞳に、少しだけ光るものが見えた気がした。

「……広いね」

人二人が並んで通れる広い廊下を進み、突き当たりの扉を開くとそこはキッチンとダイニングが一体化した広々としたリビングだった。このマンションは南向きのようで、一面ガラス張りのベランダからは太陽の光が差し込み、扉の近くに立つ僕の足元まで入り込んでいた。

「わたしもここ来た時はびっくりしちゃった。ここって絶対学生用のマンションじゃないよね」

「学生用のマンションにあんな綺麗な大理石のエントランスなんてないよ」

椿が後ろ手に扉を閉め、僕の脇を通ってキッチンへと向かう。外の暑さでバテた僕は、すぐにバッグを床に置いてソファに腰を下ろした。

「はあ……暑かった」

「はいどうぞ。ただの水だけど」

椿はそう言って氷の入ったグラスを僕に手渡して隣に座った。喉の渴いてた僕はすぐそれに口をつけた。思っていたよりよく冷えていて、暑さでぼーっとしていた頭がすっきりした。

改めて部屋を見回しながら椿に話しかけた。

「こんな広いところに椿一人で住んでたんだ」

「ううん。ここはお姉ちゃんが来るからってことで、夏休み入ってすぐに引っ越して来たばかり。だから……まだここにはまだ2週間くらいかな。それまではもう少し小さいところに住んでたよ」

「それでも充分広かったけど」と椿は苦笑しながら付け足した。

来月から僕が通うことになっている学園にひと足先に通う椿は僕の1つ下の高校1年生。叔母さんの家から学園に通うのは遠いということで、4月から学校近くのマンションを借りて一人暮らしをしていたそうだ。学園的には一人暮らしを許可していないけど、保護者である叔母さんもここに住んでいるってことで学校には通しているとか。実際そうやって一人暮らしをしているのはそれなりにいるらしい。

「お姉ちゃんも2学期から学園に通うんだよね？」

「うん。もう少し早ければ切りよく2年生の1学期から転校できたんだけどね」

「お母さん達にも都合があったんだろうし、仕方ないよ」

『お母さん』ね……。

僕と違つて椿はちゃんと叔母さんのことを『お母さん』って呼ぶのか。僕なんて最後まで『伯父さん』『伯母さん』だったのに。

最後まで『お父さん』って勇気を出して呼ぶべきだった、と少し後悔の念に駆られた。

僕が叔母さんに引き取られることになったのは今年の4月に入つて少し経つた頃。『あの事故』のあとに親戚同士が揉めて、母方の親戚には椿、父方の親戚には僕が引き取られた。それから6年経つて、やっと双方が和解したらしく、あれだけ僕達を取り合い引き離れたというのに、今度は『兄妹は一緒にいだろう』ということになった。その頃には椿はもう一人暮らしを始め、学園に通っていたから、僕は叔母さんの薦めもあり、椿と同じ学園へ通うことにし、一緒に暮らすことになった。

「それより、ね、お姉ちゃん」

突然目を輝かせて僕を見つめる椿。

「ん？」

「同じ学校なんだし、帰りは無理でも、朝は一緒に登校しようね」

何を言ってくるのかと思えばそんなことか。

「それくらい別に。元々そうするつもりだったし」

「やった！ 絶対だからね！ 約束したからね！」

椿は嬉しそうにガッツポーズをした。

何がそんなに嬉しいのだろう。あ、一人で登校するのは寂しい、とか？

「あ、お姉ちゃんのお部屋まだ案内してなかったよね？ こっちだよ」

妙にテンションの上がった椿はそう言いながら立ち上がると、勢いよく扉を開け放ってリビングを出ていった。僕はそれを見て首を傾げながら椿についていった。

「はい、ここがお姉ちゃんのお部屋ね」

案内されて入ったのは10畳くらいのフローリング張りの部屋。ここが僕の部屋らしく、その証拠に見慣れた参考書や小説が本棚にきちんと並んでいた。

引越し業者を使って送ったはずの荷物がほとんど片付けられているのを不思議に思いつつ備え付けのクローゼットを開くと、中にはダンボールに詰めて送った洋服が全てハンガーに吊されていた。

「これ全部椿がやってくれたの？」

「ううん、わたしは見てただけ。なんか引越し業者の人が全部やってくれたよ」

「……ああ、そういうプランだったっけ」

道理で綺麗に片づけられているわけだ。僕が引っ越しで使ったのは『おまかせパック』というもので、お客の僕や椿はほとんど何もしないで見ていただけ、引っ越し業者が全て荷造りから荷解きまでしてくれるというプランだった。

おかげで寮での荷造りは楽だったし、あとは部屋の中央に積みまれたダンボール3箱だけで引っ越しは全て終わりそうだった。

「叔母さんに悪いことしたかな……」

「ごういうのって、自分で荷造り荷解きするプランと比べると高かったはずだ。」

「気にすることないんじゃない？ どうせこれもお母さんが選んだんでしょ？」

「そうだけど……」

椿の言う通り、このプランを実際に選んだのは叔母さんだ。先日叔母さんに引っ越しについて電話で相談したら、翌日には引っ越し業者から電話がかかってきて、このプラン前提で日時や荷物の量などを聞いてきた。あとで叔母さんに間違いじゃないかと確認したところ、叔母さんは優しい声で間違いないと答えた。

「これからはお姉ちゃんのお母さん』にもなるんだから、遠慮なんてしたらお母さんが心配しちゃうよ？」

「……うん。そうだね」

僕を引き取ってくれた伯父さん同様に、昔から僕達に優しくかった叔母さんのことだ。遠慮なんてしてたら余計な心配をかけそうだった。

「それに、わたしとお姉ちゃんだけで荷解きしたら、きつと服だけ

で何時間もかかると思う」

椿がため息をつきながらクローゼットに視線を送る。

「結構大きいクローゼットのはずなのにほとんど一杯だし。お姉ちやんって服たくさん持ってるんだね」

「そう?」

椿が深く頷く。

僕としては、寮のクローゼットもずっとこんな感じだったし、同室の遙も似たようなものだったからこれが普通なんだと思っていた。今思えば、遥基準で考えていたのが間違이었다のかもしれない。

「でもお姉ちやんって服の好みいろいろなんだね。この左の方にはフリルの付いた、桜花の子が着そうな、いかにも『お嬢様』っていうのが並んでるのに、真ん中あたりには丈の短めのスカートが並んでて左の服とは正反対。右は……右はばらばらだけど、今流行りの服かな?」

そう言いながら椿はクローゼットの前に立つと、いくつか服を取り出しては自分にあてていく。

「別にそれは僕の趣味がどうとかそういうことじゃなくてね……。左のは伯父さんから送られてきた服。真ん中は友達がくれたもの。右が僕が買った服ってだけのこと」

「へー。それでこんなに違うんだ。……そういえば伯父さんって、小さいときにはわたしにも時々服買ってくれたっけ」

「それが親戚同士で喧嘩始めた頃から全て僕にきたってわけ」

僕は袈裟にため息をついて肩を竦める。

「こんなフリフリしたのは僕の趣味じゃないよ……」
「わたしもこれはちょっと着れないかな……」

やっぱり椿でもこのフリフリはだめか。奈菜も遙も嫌がってたから薄々は感じていたけど、僕が元々男だったからダメってことじゃないみたいだ。

「伯父さんってこういう趣味なんだ……」

「趣味なのかどうかは知らないけど、問題なのは、せっかく買ってくれたものだから、伯父さんに会う時くらいは着ないとだめってことなんだよね……」

以前これを着て伯父さんに会った際に、伯父さんが凄く嬉しそうにしたのを見てしまった。それからというもの、伯父さんと会う時はこれを着ていかないわけにはいなくなったというのが現状だ。

「…がんば、お姉ちゃん」

肩をポンと叩いた椿は、少し僕に同情しているようだった。

「真ん中のは友達からもらったんだっけ？」
「うん」

今度はクローゼットの真ん中あたりをゴソゴソと探り出す椿。

「一杯あるね……」
「着なくなっただのがたくさんあるからってくれたんだよ」

半分以上は買ってもらったものだけど、なんとなくこれは伏せて

おっつ。

「いいなあ……あ、これとか着てみたいかも」

「ほしいならあげるけど……って、椿じゃ入らないか」

僕が椿を見上げると、当然椿は僕を見下ろした。

「まさか妹に身長を抜かれるとは。これじゃどっちが姉なんだか……。椿、身長いくつ？」

「えつと……161だったかな」

「うっ……」

10センチ以上も差があるとは……。

僕は上へ下へと視線を動かして椿を観察した。

6年ぶりに再開した椿は、早々に成長が停滞した僕とは違い、見事に背も胸も順調に成長していた。また肩にかからない程度に揃えた僕と同じ黒色の髪が椿を年相応に見せていて、きつと他人が僕たちを見ると、椿のことを姉だと思っことだろう。

「はあ……」

僕はこっそりとため息を吐いた。

「お姉ちゃんは？」

「えっ？」

「お姉ちゃんは身長いくつ？」

「えーつと……」

……正直言いたくないけど、椿の身長を聞いているのに自分だけ秘密にするのは不公平だ。

渋々、僕は重い口を開いた。

「……センチ」

「え？ よく聞こえなかったんだけど」

「149センチ！」

わざとらしく耳に手を当てて聞き返してくる椿に、なかば自棄になつて叫ぶようにして答えた。

「ひゃく、よんじゅうきゅう……？」

僕はゆっくりと頷く。

「……」

椿が無言で肩にポンッと手を置いた。

「……どんまい！」

「……」

第1話 楓と椿 part 4

「もうこんな時間だ」

椿と一緒に残っていたダンボールを片付けてリビングに戻った時には、時計の短針は18時を回っていた。

「あー！」

僕に続いてリビングに入った椿が突然大きな声を上げた。

「ど、どうしたの突然……？」

真後ろで声を上げられた僕はびっくりして体を震わせ、振り返った。

「晩御飯作るの忘れてた……」

なんだ、そんなことか。

ガクツと肩を落とす椿に対してほっとする僕。と同時にふと気になったことを聞いてみた。

「椿って料理できるんだ」

「うん。家にいた頃は叔母さんの手伝いしてたし、今は料理部に入ってるから」

「へえー、凄いね。僕なんてずっと寮だったから料理なんて家庭科の授業でしか作ったことないよ」

「そういえばお姉ちゃんが通ってた桜花は全寮制だったけ？」

「そうそう。中等部も高等部も全寮制」

桜花とは、制式には『私立桜花女学院』というお金持ちの女の子が通うことで有名な学校だ。偏差値もそこそこ高く、なにより停学、退学、留年する人が非常に少ないので評判もいい。僕が中学2年から最近まで通っていた学校だ。

「寮だと自分用のキッチンがないから、気軽に料理もできなさそうだね」

「そ、そうだね」

……まあ、あったとしても、寮にはちゃんと食堂があったから、自分で料理なんてやってなかったと思うけど。

「それよりも、どうしよう晩御飯……。午前中まではちゃんと覚えてて、スーパーにも行くこうって決めてたのに、引越してたり、再放送のドラマ見てたらすっかり忘れちゃってた……」

リビングの入り口で狼狽える椿を余所に、僕は冷蔵庫を開けて何か食べれそうなものはないか物色する。冷蔵庫の中は空っぽで、ドレッシングとかお味噌とかそういうものしか残っていなかった。

「何か簡単に作れるものはないの？」

冷蔵庫を閉じながら椿に尋ねる。

「ないと思う。まだ調味料くらいしか買ってないし」

たしかに、キッチンの周りを見ても『○○の素』みたいなご飯に混ぜれば出来上がる的なものもないようだ。

僕は一日くらい食べなくても平気だけど、それに椿を付き合わせ

るのはさすがに悪い。

「コンビニで済ませようか」

今からご飯炊いても時間かかるだろうし、コンビニで出来合いの物を買った方が早くて楽だろう。

「うん。ごめんね、お姉ちゃん」

「別に謝ることないよ」

バッグから携帯電話と財布を取り出し、シュンとしている椿の隣で背伸びして頭を撫でた。

「よしよし」

昔一緒にいた時にも、こうして椿の頭を撫でて機嫌をとってたなあ……

幼い頃を思い出して、少し感慨深くなる。

「……お姉ちゃん。わたしもう高校生なんだけど」

「椿が何歳になるうが、僕の妹なんだからいいんだよ」
「……うん」

少し恥ずかしそうに頬を赤くして椿は頷いた。

「さ、じゃあコンビニいこうか」

「うん」

僕の言葉に、椿は元気よく返事した。

僕達はマンションの玄関を出てから2、3分のところにあるコンビニへとやってきた。

『ウエルマート』と書かれた自動ドアを椿と並んで通り店内に入る。『いらっしやいませ』と挨拶する店員の前を通り、お弁当やおにぎりが並ぶコーナーの前に立った。

「椿はどれにする？」

「んー……これでいいかな」

椿は『和風キノコパスタ』と書かれた商品を手に取った。商品名の横には赤いラベルで『NEW!』と書かれていて新商品だということを知らせていた。

「これって前見たことあるのに、どうして新商品なんだろうね？」

僕は赤いラベルを指差した。

「一度出して、販売中止して、また出したから……とか？」

「それって、なんかだまされた気分にならない？」

「たしかにそうかも」

椿はそう言いながら少し笑い、僕が持ってきた籠に商品を入れた。

「お姉ちゃんはどれにするの？」

「うーん……これでいいや。そんなにお腹空いてないし」

僕は高菜の入ったおにぎりを一つ取って籠の中に入れた。

「え、それだけでいいの？」

「うん」

「でも……あ、そうか」

椿は何かを言いかけたけど、すぐに理解したよう言葉で飲み込んだ。

少しだけ悲しそうにする椿の頭を撫でて、飲み物のコーナーへ移動する。

「朝の分も買ったほうがいいよね？」

「うん。午前中にスーパー行くから、今日の夜と明日の朝の分だけお願い」

「りょーかい」

僕はウーロン茶と野菜ジュースを、椿はサンドイッチとウーロン茶、そして野菜ジュースを籠に入れた。

「あとはデザートのプリンっつと」

ぼいぽいっつとプリンを二つ籠に入れる。

「椿もいる？」

「うん。……デザートは別腹なところまで柊お姉ちゃんにそっくりなんだね」

「だって僕は柊だからね」

もう一個プリンを手に取りつつ、僕はそう答えた。

椿が会計を済ませている間に、僕はふと昼間に日焼けしたことを

思い出して自分の両腕を見下ろした。

触ると少しだけ熱を帯びていたけど、これくらいなら帰って少し冷やせば大丈夫そうだった。

「お姉ちゃん、行こう」

会計を済ませて大きな袋を持った椿と一緒にコンビニを出た。

「袋持つよ」

「いい。そんなに重くないし」

「……じゃあ半分」

オレンジ色に光る道を椿と僕とで袋の取っ手の部分を片方ずつ持って並んで歩く。

「そうだ。家事の分担決めようか」

僕がこれからの生活に必要な議題を提案する。

「ご飯はわたしが作るよ」

間髪いれずに椿が返答した。

「というより、家事全部わたしがやるよ？」

「それはさすがに僕を甘やかしすぎ。二人で暮らすんだからちゃんと分担しないと」

「わたしは元々一人暮らししてたし、一人が二人に増えてもそう変わらないんだけど……」

「だめだめ。姉がぐーたらなんて」

とは言え、僕は料理ができないから必然的にやるのが決まってくるけど。

「えっと……そうだ、洗濯は僕がするよ。あとは」

「お姉ちゃんの担当は洗濯だけでいいよ。お部屋の掃除とか他の事は気づいた人がするってことで」

「え？ でもご飯の用意ってそれだけでも結構しんど」

「だめだよ無理しちゃ。お姉ちゃん、あんまり無理できないんですよ？」

椿の言葉に、僕は目を丸くして視線を向けた。

椿には体の調子のことは言っていないのに、どうして知っているんだ。もしかして伯父さんが僕に内緒で椿に教えたのかもしれない。

「……人より少しだけ体が弱いだけで、椿が思っているほどひどくないよ。実際中学では剣道部に入ってたくらいだから」

「部活できるくらいって言っても、試合にたまに出る程度で、練習ではほとんどマネージャーみたいなこととしてたって、ちゃんと伯父さんから聞いてるんだから」

やっぱり伯父さんか。余計なことを……。

「で、でも、もう少しくらいなら家事出来ると思うけど……」

「これ以上やるっていうなら、洗濯も無理矢理わたしがやるけどそれでもいい？」

「うっ……」

普通こういう家事の分担って押し付けあうものな気がするのに、なんだろうこれは……。

とにかく、無理に頑固になると逆に僕の分が減ることになりそう

だから、ここは折れるしかなさそうだ。

「わかった。それでいい」

「うん」

僕の返事に、椿は満足そうに頷いた。

「あ、でも料理の味には自信ないから、あまり期待しないでね」
「お腹壊さなかつたらなんでもいいよ」

僕の言葉に椿が頬を膨らませた。

「……それ、味がどうのこうのって言う問題じゃないよね？」

「ウソウソ。椿が作ってくれるものならきつと何でも美味しいよ」

「お姉ちゃん……」

椿が呟いて目を細めたので、僕も笑顔で返した。

第1話 楓と椿 part 5

「……っ。……」

……。

「……っ……ん」

……んー？

「……ちゃん」

声が聞こえた気がした。遠く……ではないようだ。結構近い。

重い瞼を少しだけ持ち上げてみる。案の定、いつもの通り視界は布団に覆われていたけど、強い日差しは布団の中にまで入ってきていた。

ちゃんとカーテンは閉めて寝たはずなのにどうして明るいんだろう。

僕は眩しくて目を細めた。

「……ちゃん。お姉ちゃん起きて」

ゆっさゆっさと体が揺れ始める。

……ああ、なるほど。

さっきから聞こえる声は誰かが僕を起こしに来たのだということを理解する。

誰だろう。遙……は去年学園に進学したからもういない。ということとは、きっと高等部からルームメイトになった奈菜だ。

「んー……」

あと5分……と言いたいところだけど、それを言うと奈菜は布団を剥ぎ取って無理やり起こそうとする。あれをやられるくらいなら自分から起きた方がまだマシだ。

眠い目を擦りながら頭まですっぽりと被った布団を少しだけめくる。

「お姉ちゃん？ ……はあ、やっと起きた」

あれ、奈菜じゃない……？

「……だれ？」

「誰って椿だよ。……もしかしてお姉ちゃんねぼけてる？」

椿？ ……ああ、そうか。昨日引越したんだっけ。

「もう朝だよ。そろそろ起きないと」

「……うー」

布団の中で伸びをする。

……眠い。

「……つと。あれ？」

体を起こそうとしてみるけど、腕に力が入らなくて上手くいかない。

「んんっ……はあ」

再度試してみるものの、体を一ミリも持ち上げることができない。
……昨日の引越しが原因かな。

「どうしたの？」

「ごめん、椿ちよっと手を貸して」

「ん？ はい」

首を捻りつつも椿が差し出してくれた手に、僕は力が入らない手を重ねる。

「僕の手を引つ張って起こして」

「うん。……行くよ？」

僕が頷くと、椿は僕の手をぎゅっと握って引つ張った。椿に引かれて僕の体が持ち上がり、やっと上半身を起こすことができた。なんとかその体勢のままベッドの縁に移動して床に足を下ろす。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「頭ふらふらするし、体にまったく力入らないけど、なんとか……」

「それって大丈夫って言うの……？」

椿の問いに、首を少し傾げて肩を竦め、苦笑で答える。

「しばらくすれば良くなるから、もう大丈夫。ありがとう椿」

これ以上椿の時間を僕のために使わせるわけにはいかないの、自分の作業に戻るよう促す。

「う、うん。分かった」

と椿は返事したのに、何故かそのまま部屋を出ていかず僕の頭に手を乗せて撫で始めた。

「……椿、なにしてるの？」

「あ。……寝起きのお姉ちゃんが可愛かったから、つい」

ついつてなんだ。ついつて。

「お姉ちゃん可愛いなあ……」

妹に可愛いつて言われる姉ってどうなんだろう……。

そんなことを考えつつ見上げると、椿は僕の頭を撫でながら、凄く嬉しそうな表情をしていた。

……まあ、いいが。

起きるのを手伝ってもらった手前、無下にすることもできず、僕はしばらくの間椿に頭を撫でられ続けた。

パジャマから白地のシャツとホットパンツに着替えてリビングにやってきた僕は、テーブルについて昨日買ってきた野菜ジュースを飲みながら、椿に髪を梳いてもらっていた。

ちらつと時計を見ると9時半過ぎ。昨日はご飯を食べた後にお風呂入って10時にはベッドにもぐり込んだから、11時間は寝ていたことになる。

休みだからとは言え、我ながら寝過ぎだと思つ。

「お姉ちゃん。いつも朝はあんな感じなの？」

「いつもってわけじゃないよ」

話題はさっきの僕のことだ。

「昨日は引っ越して結構動いて疲れたから、そのせいかな」

「そっか……」

髪を梳く椿の手の動きが少しだけ鈍くなった。

……まあ、あんなフラフラした姉の姿を見せられたら心配にもなるか。

普通の人なら荷造り荷解きほとんどなしの引っ越しくらいで、次の日にこんなに疲労するなんてことはない。いや、そもそも凄く体を動かして疲れたとしても筋肉痛になるくらいで、さっきの僕のように自分の体さえ起こせなくなるなんてことはない。

「あ、そうだ。一応言っておくけど、僕は朝弱いから。恥ずかしいことだけど、向こうでは同じ部屋の友達に起こしてもらってたくらいだし。……思い出した。目覚まし買わないと」

「いいよいいよ。わたしが起こすから」

椿が僕の肩に手を置いたので、何かと思い後ろを振り向くと、何か椿は嬉しそうに笑っていた。

「や、でも朝の忙しい時に時間を割いてまでそんなことしなくても……」

「目覚ましの音で起きるなんて気分悪いでしょ？」

「それはそうだけど」

「ね、いいよね？」

つ、椿ってこんなに推しが強かったかな。昔はいつも静かに僕の

後ろを付いてくるような大人しい子だったと思うけど。

「……椿がそう言うなら、よろしく」

「やった。ありがとうお姉ちゃん」

椿はバンザイして喜びを体全体で表した。

「……なんで椿がそんなに嬉しそうなんだか」

「えへへへ。いいからいいから」

上機嫌に笑いながら、椿は再び僕の髪を梳かし始めた。

「はい、できたよ」

椿に手渡された鏡を覗き込む。

見事に寝癖が直されていた。自分じゃこつはいかないのに、何かコツでもあるのだろうか。

「お姉ちゃんの髪って柔らかいんだね」

「そう?」

「うん。こんなに長くて細いのに枝毛一つないし。どんなお手入れしてるの?」

椿が僕の髪に触れる。

「別に特別なことはしてないけどなあ」

飲み終えた野菜ジュースの紙パックを折りたたむと、立ち上がった

てキッチンのゴミ箱に捨てる。

「本当に朝はそれだけでいいの？」

「うん」

「昨日の夜もおにぎり一個しか食べてなかったけど」

「プリン二つ食べた」

「あれはデザートだからご飯には入らないような……でもお腹の足しにはなるし……うーん……」

椿が腕を組んで唸り声を上げる。

何をそんなに悩んでるんだか。

「……とにかく、お姉ちゃんは朝は野菜ジュースとか、それくらい
のものがいいってこと？」

「うん」

「わかった。明日からそうするね」

「ありがとう、椿」

僕の言葉に椿は首を横に振って答えた。

「お姉ちゃん。今日はどうするの？」

身支度のために自分の部屋に戻っていた椿が、リビングのソファ
に座ってテレビを見ていた僕の隣に座りながら尋ねてきた。

「引越し済んだら顔出すって言ってあったから、伯母さんのとこ」

るに行ってくる」

「あ、それならわたしもお姉ちゃんについて行くのかな。春休み終わってから一度も帰ってないし」

「……一度も？」

「え、高校に入ってから全然帰ってないの？」

「うん」

僕は驚いたあとに椿にジト目を向ける。

「それはさすがにどうかと思う」

「だって、行くこうと思えば一時間あれば行けるし、お母さんからはよく電話かかってくるから……」

「それは単純に椿が家に顔を出さないから心配してるんじゃないか……」
「あ、なるほど」

今気付いたらしく、椿はポンと手を叩いた。

「じゃあ、今日はお昼に外出して、どこかでお昼ご飯を食べてからお母さんの家に行って、その帰りにスーパーで買い物するっていうのはどう？」

「それでいいんじゃないかな」

椿の提案に僕はそう言いながら頷く。

「……あ」

そのとき、僕は大事な事を思い出した。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「伯母さんの家行った後に、時間あるかな？」

「うん。わたしは用事ないし、スーパーも遅くまで開いてるから時間なら全然気にしないでいいけど……どこいくの？」

僕は少しだけ考えてから、素直に行き先を告げた。

「お墓参り」

第1話 楓と椿 part 6

「はあ、はあ、はあ……」

「お姉ちゃん。もう少しだから頑張って」

「はあ、はあ……う、うん」

息も絶え絶えになりながら、一段一段ゆっくり上って行く。

このバリアフリーやらユニバーサルデザインやらのご時勢に、どうしてこんな急な階段の上に墓地なんて作ったのか理解に苦しむ。

「大丈夫？ お茶飲む？」

僕に左肩を貸し、右手には僕を強い日差しから守るために日傘を差した椿が、お茶の入ったペットボトルを差し出してくる。

「今、飲んだら、吐く……」

「そんなになんだ……」

椿が心配そうに僕の顔を覗きこむ。

「はあ、はあ……な、なんで椿はそんなに平気なの？ り、料理部じゃなかったの？」

こんなに僕がいつぱいいつぱいなのに、椿はといえば少し額に汗を滲ませているくらいで、あまり息も乱れていなかった。

「お昼休みにバレーしたり、たまに友達の部活にお邪魔させてもらったりしてるから、かな」

「な、なるほど……」

ちゃんと考えもせず、とりあえず返事だけする。
……いよいよ頭が回らなくなってきた。

「ほら、お姉ちゃん。あと5段」

僕を励ます椿の声に反応する余力もなく、ただ荒く息を吐きながら頂上を目指す。

「とーちゃーくっ」

「はあ、はあ、やっと、ついた……っ」

最後の一段を上ると同時に、達成感から膝から力が抜けてグラッと体が傾いた。

「つとと。だ、大丈夫お姉ちゃん？」

倒れそうになった椿が僕を抱きとめた。

「はあ、はあ。す、少しだけ休ませて……」

それだけ言うと、僕は椿の胸に顔をうずめて目を閉じた。自分の息遣いがやけに耳に響くなか、少しずつ呼吸を整える。

そんな僕を椿は苦しくない程度に腕に力を込めて抱きしめた。

「なんかお姉ちゃん良い匂いするね。これ香水？」

椿が僕の頭に鼻をくつつける。

「ひ、ひとの匂いを嗅ぐなんて失礼だ……」

「お姉ちゃんだからいいの」

身じろぎして抗議の声を上げるも椿にさらっと流された。

「ね。香水つけてるの？」

「つけてない。そもそも香水なんて持ってない」

「そっか。じゃあなんでだろ。お姉ちゃんからバラの香りがする」

「それ、友達にも言われたことがある」

『バラの匂いがするから』と、遙や奈菜に何度も抱きしめられたことを思い出す。

理由とかはよく分からないけど、奈菜によるとそういう匂いのする特異体質の人もいるのだそうだ。

「…………ふう。もう大丈夫。ありがとう、椿」

やっと落ち着きを取り戻した僕は椿から離れようと手に力を込めた。

「えー。もう少し」

しかし椿は今よりも少しだけ強く僕を抱きしめた。

「また遅くなって、昨日みたいになるよ？」

僕はポンポンと椿の背中を叩きながら言った。

「あ、そうだった。早くお墓参り済ませてスーパーに買い物に行かないと」

僕の言葉にはっとした椿は、渋々といった様子で離れた。

「そうそう。はい、傘返して」

椿から開放された僕は、日傘を受け取るうと手を伸ばす。

「ダメ。これはわたしが持つとく。傘は背の高い人が差すものだしね」

「ぐっ……」

『背の高い』が嫌に強調されて聞こえた気がした。

未だ疲れが抜け切っていない僕は睨むようにして椿を見上げた。椿は得意げに「ふふん」と鼻を鳴らした。

「じゃ、行くうか、お姉ちゃん」

「はあ……。そうだね」

渋々僕が歩き始めると、椿が隣に並び日傘を差してくれた。

「椿とこうやって一緒にお墓参りするの、お葬式の時以来だっけ？」

「うん。もうあれから6年も経つんだね」

墓地に置かれていた桶に水を汲み、その水を柄杓で目の前の墓石にかける。墓石の表面を水が滴っていくけど、この夏の暑さのせいですぐに乾いていった。

『依岡家』

墓石にはそう刻まれていた。

街を見下ろすように作られた広い墓地の中央に立つその墓石は、よくテレビドラマで見るとような墓地公園にあるものよりも大きい。六年前、小学五年生の頃見たときは今よりも大きく見えて、そびえ立つその様と当時の心情からひどく怖いものに見えた。

桶を脇に置き、枯れてしまった花を花瓶から抜いて、かわりに街で買ってきたお花を差した。これもすぐ枯れてしまっただろうなと少し寂しく思いつつ、お墓の前でしゃがんで手を合わせた。

しばらくして目を開けると、隣で同じように椿も手を合わせていた。椿が目を開くのを待って、一緒に立ち上がる。

『依岡』

それは僕と椿、そしてもう亡くなったしまった父さんと母さん、僕の双子の妹の柩が名乗っていた姓だ。

今じゃ椿は六年前に叔母さんに引き取られた際に、僕もつい先日、叔母さんに引き取られることが決まって、姓を『四条』へと変えることになった。

「僕ももう四条なんだよね」

「お姉ちゃんは今も依岡のままがよかった？」

僕は首を横に振った。

正直に言えば、僕は依岡のままでもいいかなとも考えたこともあった。

別に僕が四条になっても、依岡という姓は僕を引き取ってくれていた依岡伯父さんや、その子供達が引き継いでいるからなくなりはないのだけど、僕や椿の『依岡』という家族がいたということが消えてなくなってしまうような気がして嫌だった。

結局は僕が悩んでいたところを遥に悟られ、相談した末に四条へと姓を変えることで落ち着いたのだけだ。

「僕は椿のお姉ちゃんなんだから」

それが遥と話し合った末に行き着いた答えだった。

「わたしのことは別にいいのに」

「椿は僕が依岡のままのほうが良かった？」

「……四条になってくれて嬉しかった。だって姉妹なのに名字が違うのって、なんか他人みたいで」

少しだけ恥ずかしそうに言う椿の頭を優しく撫でる。

「だったらこれでよかったんじゃないかな。母さんも父さんも、柊もきつと言ってるよ」

「……そうかな？」

椿が僕を見つめる。きっと僕を見て柊のことと一緒に見ているんだろう。

「うん」

椿の目を見つめたまま頷いた。

「……そっか。そうだよな。えへへ」

椿は目を細めて笑うと、すっと顔を背けた。目尻の辺りを拭いているのが見えたけど、僕はそれに気づかぬ振りをした。

「そろそろ行くっか」

努めて明るく言ってから、桶を手に持ち歩き出す。

「うん」

少しだけ涙声になった椿の同意が聞こえた。

「じゃあね。父さん、母さん。また来るよ」

「ばいばい。柊お姉ちゃん」

僕たちはそこに眠る、父さんと母さん、そして柊に別れて告げてその場を後にした。

少しだけ僕と椿の話をしようと思う。

それは時を遡って6年前の話。

良いことや悪いことは続くものであり、そしてまとめてやってく

るものだそうだ。

例えば僕達兄妹の場合は、今から6年前の僕が小学五年生の頃の出来事が如実に表していると思う。

その頃の僕の家族は、父さん、母さん、僕、双子の妹の柊、そして一つ下の妹の椿の5人家族だった。

僕と柊は近くの剣道場に通っていて、時折行われる大会に出るとそれなりの成績を残していた。

その日も僕達は剣道の大会に出場するために、父さんの運転する車で武道館へと向かっていた。

運転席には父さん、助手席には母さん、後部座席には僕と柊。椿は風邪で熱を出していたから、親戚に預かってもらっていた。

朝早くて寝ていた僕が次に目が覚めたのは、武道館にたどり着いた車の中ではなく、伯父さんが経営する病院のベッドの上だった。

まったく現状が飲み込めていなかった僕に、伯父さんは小学生の僕にも分かるように、少しずつ、ゆっくりと何が起きたのか話してくれた。

その話によると、僕達は武道館までの道中で大きな交通事故に巻き込まれ、すぐに伯父さんが経営する病院へと搬送された。しかし父さん、母さんは搬送後に死亡を確認、柊も打ちどころが悪かったせいで一度も目が覚めることなく、父さんと母さんの後を追うように、二日後に亡くなった。唯一僕だけは命を繋ぎ止めることができたけど、それでも怪我の状態は深刻だったそうだ。

体の機能のほとんどが停止していた僕をなんとか助けようと考えた伯父さんは、唯一無傷だった僕の脳を怪我の比較的少なかった柊

の体に移植することにした。何時間にも及ぶ手術は無事成功し、僕は一命を取り留めることができた。

こうして僕は、『楓』から『柊』に……男から女になった。体は柊のものだけど、脳は楓だということ、伯父さんは僕の名前を『依岡楓』のままにしてくれた。

僕は柊の姿である僕を素直に受け入れた。性別は変わってしまったけど、この体は双子の妹の柊のもの。しかも僕と柊は性別は違えどまだ小学生だったこともあり、見た目は両親でさえ間違っただけでそっくりだった。おかげで鏡で自分の姿を見ても別にこれと言って違和感なく、「これが僕なんだ」と認識し、受け入れることが出来た。ただ、女であることに変わりはないし、さすがに二次性徴が始まってからは違いが顕著になっていったから、さすがにいろいろと苦労したけど……。

と、ここまででもかなり悪い出来事が続いたと思うのに、まだまだ僕達の不幸は続いていた。

事故の後、両親が死んでしまったからということで僕達は親戚に引き取られることになった。けれど、父方の依岡家と母方の四条家の親戚同士で、どちらが二人を引き取るかで揉め始めた。

もめにもめた末に出た答えは、僕が父方へ、椿が母方へ引き取られるということだった。

僕達は離れ離れになってしまった。

唯一救いだっただのが、どちらの親戚もいい人であり、僕も椿も歓迎されて引き取られたということだろうか。

そのあと僕は引き取られた伯父さんの病院で自力で歩けるようになるまでリハビリを続け、ほぼ自力で歩けるようになった中学二年生のころには、伯父さんの薦めで全寮制の女学院に転校した。

椿と別れた後もいろいろと苦労は続いたけど、そういつまでも悪いことばかり続くものじゃないらしく、中学に通い始めてからはいいことの方が多かった。例えば、友達ができたこととか、その友達とのきっかけで部活に入ることが出来たこと。そしてなにより嬉しかったのは、ひよんなことから椿の携帯電話の番号を入手することができて、連絡を取り合えるようになったことだ。

そんな感じで今度は良いことが続き、6年経ってようやく四条家と依岡家が和解したらしく、『兄妹は一緒がいいだろう』ということとで、僕も椿と同じ四条家に引き取られることになった。

そして僕は来月から椿と同じ学校に通うために、この町に引っ越しに来て、椿と二人暮らしをすることになった。

これが僕『依岡楓』と妹の『四条椿』の昔の話。

そしてここから始まるのは、僕『四条楓』の高校生活を綴ったお話。

何の変哲もない日常に、少しだけ山あり谷ありな、そんな物語。

第1話 楓と椿 part 6 (後書き)

第1話 柊と楓 完

登場人物紹介 part 1 楓・椿 挿絵

○四条 楓 しじょう かえで

> i 1 8 6 8 6 | 2 1 9 9 <

年齢：16歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年D組

部活：無所属

特徴：身長：低 肌色：白 髪：黒色のロング

一人称：僕

小学生の頃に事故に遭い、その際に双子の妹の『柊』つばきの体へ脳移植され一命を取り留める。

父方から母方に引き取られ、その際に苗字を『四条』へと変更している。以前の名前は『依岡楓』よりおかかえで。

二年の二学期から『私立桜花女学院高等部』から『私立千里学園高等学校』へと転校し、妹の椿と二人暮らしをしている。

体は弱いが運動神経は良い。集中すると周りも自分も見えなくなることが多々あり、そのせいでよく運動した後には倒れることがある。椿の姉であるうと日々心がけ頑張っているが、あまりいい結果になっっていない（と楓は思っている）。

実は結構子供っぽい。

第1話表紙

○四条 椿 しじょう つばき

> i 1 8 1 4 3 | 2 1 9 9 <

年齢：15歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 1年B組

部活：料理部

特徴：身長：中 肌色：黄 髪：黒色のセミロング

一人称：わたし

楓の妹。小学生の頃に母方に引き取られ、その際に苗字が『四条』となる。以前の名前は『依岡椿』よりおかつばき。

姉のことを慕っており、六年ぶりに再会し、二人暮らしをすることになった姉の楓の世話をすることが何よりも楽しく思っている。

料理部に入ったのも楓にご飯やお菓子を作ってあげるため。

クラスメイトの高内香奈たかうちかなとは部活仲間であり、友達。

実は楓よりしっかりしている。

第2話表紙

第2話 楓と遙 part 1

表紙(前書き)

> i 1 8 1 0 3 | 2 1 9 9
<

第2話 楓と遙 part 1 表紙

「眠い……」

目を擦りながらテーブルに着くと、いつものように椿が僕の後ろに立って髪を梳かし始めた。

「休みの間中、毎日9時まで寝てるからだよ」

「まったく仰るとおりで……」

言い返す言葉が見つからない。

『生活リズムを戻そう』というスローガンを掲げ、椿にはだまっ
て7時に起きることを決めたのが先月の25日。そして今日は二学
期が始まる9月1日。この一週間、携帯電話の目覚まし機能を使っ
て頑張つては見たものの、結局二度寝やら気づかなかつたやらで、
一度も予定通りに起きられたことはなかった。

椿を気にして、目覚ましには相応しくはない静かな音楽に設定し
ておいたのが間違이었다。音量も控えめにしていたからなおさら
だ。

椿に遠慮せず、ちゃんとした目覚まし時計を買うべきだった。携
帯電話の音くらいじゃ僕の眠りを覚ますほどの効果はないらしい。

「ふあ……はあ」

一つ欠伸をして、椿が用意してくれた紙パックの野菜ジュースに
ストローを突き刺して口で啜えた。

相変わらずの甘みと苦みが混ざったような変な味。正直野菜ジュ
ースは好きじゃない。ただ、不健康なこの体のため、少しくらいは
気を遣おうと飲み始めたのがこの野菜ジュースだった。

味は二の次って言うのは分かってはいるけど、もう少し飲みやすくないものか……。

「あれ。それ美味しくなかった？ 新商品って書いてあったから買ってみたんだけど」

予想以上に僕は顔をしかめていたらしい。ここで一緒に住み始めて、初めて椿がそんなことを聞いてきた。

「新商品？」

紙パックを目線まで持ち上げてラベルを見ると、それはキャロットジュースだった。

通りでまずいわけだ。よりもよって一番嫌いなニンジンが入っていたなんて。

「……まあ、おいしくはない、かな」

当たり障りなく、あくまでもこの『新商品』が不評だと言うことを前面に押し出す。決して僕がニンジン嫌いなことを悟られないように。

「ふーん。野菜ジュースなんてどれも一緒だと思ってた」

ニンジンさえ入ってなければ、僕もそれに同意見です。

「明日からはまたいつものやつ買ってくるね」

「や、自分の分くらい自分で」

「まとめて買った方が安いときもあるんだから任せてよ」

「だから買ひ物は僕もつきあうって何度も」

「買い物くらい一人でいけるから無理しないで」
「……」

口を挟む隙間がない。仕方ない、ここは言葉ではなく実際に行動で示すしかない。出来るだけ放課後は椿と一緒に帰って、買い物に付き合うことにしよう。

「ほら、早くそれ飲んじゃってね」

椿に急かされて紙パックを振ってみると、まだほとんど残っていた。

「え、や、もういらない、かも？」

「えーだめだよ。お姉ちゃんはこの朝ごはんなんだからちゃんと飲まないよ。……もしかして調子悪いの？」

「ち、違うよ！」

「よかった。美味しくないのは分かったけど、無理でもがんばって飲んでね」

「……」

そう言い残して作業に戻る椿を横目に、渋々僕も作業に戻ることにした。

「はい。お姉ちゃんできたよ」
「ん、ありがとう」

手鏡を受け取って確認する。とは言え、椿が適当にやるなんて思えないので、さっと見ただけで手鏡を椿に返した。

「お姉ちゃんって、これ使わないの？」

椿はそう言いながら、バレッタを持ってぱくぱくと開いたり閉じたりを繰り返した。

「うん。あまり髪を留めるのは……あ、校則で髪が長いとまとめないといけないとかある？」

「ううん。そんなのないけど、邪魔じゃないかなって」

「ああ、そういうこと」

椿の言うとおり、たしかにこの長い髪は邪魔だ。例えば食事の時間なんかはご飯やソースが髪についてしまわないように特に気をつけなくちゃいけない。

「邪魔は邪魔だけど……なんか髪を留めると窮屈な気がして。それに友達がそういうのは跡がつくから止めた方がいって言うから、あまり使わないようにしてるんだ」

「ふーん」

椿がバレッタをテーブルに置き、自分の髪に触れる。

「わたしもお姉ちゃんみたいに伸ばそうかな」

肩に届くか届かないかくらいの髪をくるくると弄る。

「そつえば椿って昔もそれぐらいの長さじゃなかった？」

「うん。ずっとこのままだもん」

「ずっと?」

僕が聞き返すと、椿は「だって」と言いかけて口をつぐんだ。しばらく待ってみただけど、結局椿は話してくれなかった。

「お、お姉ちゃん。……制服似合ってるね」

リボンを結ぶために鏡の前に立っていると、同じ制服を着た椿が部屋に入ってきた。僕を見るやいなや、椿は胸の前で手を合わせて目を輝かせた。

「そう? 椿も制服似合ってるよ」

リボンを結び終えて椿の方を向くと、なぜか椿は力強く首を振った。

「ううん。お姉ちゃんのほうが絶対似合ってる!」

別に否定する必要はなかったと思う。

「見えてみて」

椿に促されて視線を姿見に向けた。鏡には、同じ学園の制服を着た僕と椿が並んで映っていた。

この僕達が着ている学園の制服は、僕が先月まで通っていた桜花のような修道服をイメージしてデザインされたシックなものとは違

い、今風のデザインで巷では評判らしい。

なんでも有名なデザイナーに頼んで作ってもらったとか。さすが私立の進学校。制服でも入学希望者を釣ろつという考えなのだろう。

「ほらね？」

「ほらねと言われても……」

たしかに、僕も椿もその制服はよく似合っていた。けれどそれに優劣があるかと言われたら首を傾げるしかない。

「きつと自分のことだからあまりよく分かってないんだよ」

そっくりそのままその言葉を返します。

椿を一瞥して鏡に映る自分の姿を見た。視線を少しだけ下におろして、桜花に比べてかなり短いスカートの裾を指でつまんだ。

「ちょっとこれ短かすぎない？」

「そうかな？ そんなものだと思うけど」

「制服なのには？」

「うん」

『巷の学生服は膝上何十センチなんて当たり前』

奈菜の言葉が頭の中で響く。

まさか、その巷の学生服を僕が着る事になるなんて……。

「昨日お姉ちゃんが穿いてたスカートもそれくらいじゃなかった？」

昨日着ていたのは膝ぐらいまでの長さのスカートにノースリーブのブラウスという、僕がこの時期好んで良く着るものだ。

「それはそうだけど、制服なんだからもう少し大人しめの方がいいかなあって」

「いつも着る制服だから短い方がいいんじゃない……あ。そういえば桜花の制服はもつとスカートの丈長かったね」

「うん」

僕が通っていた桜花の制服は膝よりもずっと下の長いワンピーススカートだった。そんな制服を毎日着て、今学期から突然こんな短いスカートの制服を着るなんて、少し抵抗がある。

「慣れるしかないかも」

「慣れかあ……」

結局のところ、対策はそれくらいしかないだろう。

小さくため息をつく僕に、椿は「まあまあ」と肩をポンと叩いた。

『おねえちゃん。まだー？』

「今いくー」

玄関にいる椿に返事しながらオーバーニーソックスに脚を通す。

これで日焼け対策と同時に、素足の面積を減らして少しだけ恥ずかしさを軽減することができる……気がする。

鏡で最後の服装チェックをして、どこもおかしなところがないか確認する。

今日は始業式とホームルームがあるだけと椿が言っていたので、

鞆に筆記用具だけを詰めて部屋を出た。

「あ、やっと出てきた」

玄関にいる椿が僕に向かって手を振っている。

「時間は？」

「8時前だから、まだ余裕あるよ」

玄関で学校指定のローファーを履き、傘立てから例の遙の日傘を手に取…ろうとしたけど、既に椿が持っていた。

「その傘は僕の」

「学校つくまで渡さないからね」

僕が言う前に先に宣言されてしまった。ここ数週間一緒に暮らして分かったけど、やはり椿は頑固者らしい。こうなるともう返してくれそうにない。

「はあ……じゃ、いこうか」

仕方なく傘を諦めて玄関のドアノブに手をかけた。

「お姉ちゃん。ちょっとこっち向いて」

椿に呼び止められて何事かと振り返る。

「なに？　　っ!？」

振りむいた瞬間強い光に目が一瞬眩んだ。

「やった、いい表情げつと！ あとでこれ携帯の待ち受けにしよつと」

デジカメの液晶画面を見ながら椿が嬉しそうに言った。

「何を待ち受けにするって？」

腰に手をあてて呆れたようにして椿に尋ねる。

「お姉ちゃん。ちなみに今の待ち受けもお姉ちゃん」

椿が鞆から携帯電話を取り出して僕に手渡した。

…… 本当に待ち受け画面の画像を僕にしていた。

それは去年、桜花の制服を着た僕を見たいという椿に送ったものだった。

「この写真のお姉ちゃん不機嫌そうだから、こっちきたら新しいのに変えたかったんだ」

いくら6年間合わなかったからと言って、実の姉を待ち受けにするのは変じゃないだろうか。…… それよりも、待ち受けにされた僕はすごく恥ずかしいのだけだ。

「実の姉を待ち受けにしてなにしてるんだよ……」

「見て癒されたり、友達に自慢したり」

「見せてるんだ……」

少し頭痛がした気がして思わず頭を押さえる。

「評判良いよ。おかげでわたしも鼻高々」

「人を見世物にしないよーに」

「えー。いいでしょ自慢くらい」

「よくないっ。……ったく。ほら、そろそろ行くよ」

「わわっ。待って」

携帯電話を椿に返して玄関を出た僕に、椿は慌てて鞆に仕舞いながら後をついてきた。

第2話 楓と遙 part 2

「あつっ……」

マンションを出ると同時に強い日差しが僕を襲った。目を細めて空を見上げれば、今日も雲一つない青空。天気予報でも猛暑日になるだろうと言っていたので、日傘を差すには絶好の日和と言っわけだ。

で、その日傘はというと……。

「はい」

椿は何故かニコニコと嬉しそうに日傘を開き僕の隣に並んだ。日傘の作る影に覆われながら、半眼で椿を見上げる。

「それ僕の傘」

「ちゃんと学校に着いたら返すから心配しないで」

「今返して欲しいんだけど」

「それはダメ」

きっぱりと断られた。

「はあ。分かった……と見せかけてっ」

僕は軽く地面を蹴って手を伸ばした。

「はい残念」

けれど椿はそれを予想していたらしく、僕の手が届く前に素早く

傘を持ち上げた。

「へ？ うわっ！？」

「お姉ちゃん！？」

取るはずだった傘が取れず、バランスを失った僕の体を椿が抱きとめた。

「もう。朝から無理しないで」

「……椿が避けなかつたらいいんだよ」

椿から離れて再び並んで歩き出す。

「避けないと取られるもん。本当にあとでちゃんと返すから、今は大人しくしてて」

「嫌だ。今返して」

「ダメ」

「……」

一体誰に似たんだろう。この頑固さは。

椿と並んで通学路を歩く。この町に来てから一通り散策してみたけど、どうもこのエリアは昔大きな公園があつて、それを数年前に住宅地へと転用したらしい。元公園ということに至る所に名残である大小様々な公園があり、それ以外の土地には真新しい一戸建ての住宅と大きなマンションばかりが立ち並んでいる。

そんな新しい住宅街のせいか、公園やマンションの前で幼稚園や保育園のバスを待つ小さな子供やそのお母さんの集団とはよくすれ違う。それ以外に見るのはスーツを着た大人ばかりで、僕達と同年代の子はわずかばかりだった。その中に学園の制服を着た人はいなかった。

「どうしたのお姉ちゃん。キョロキョロして」

結局僕の傘を返すことはなかった椿が日傘を差しながら僕に話かけた。

「学園の制服来た子が一人もないなあって思って」

「このあたりから学園に通っている子はいないんじゃないかな。ここ数ヶ月で見たことないし」

「ふーん」

学園に近いから少しくらいはいると思ったのに、そうでもないみたいだ。

「はい、お姉ちゃん」

学園の校舎が遠くのほうに見えたところで椿は傘を折りたたみ、僕に返した。

僕は少し疑問に思いながらもそれを受け取った。また広げようかとも考えたけど思い直し、鞆に入るようにさらに折りたたんで鞆に仕舞った。

「へ？ それ折りたたみ傘だったんだ……」

「うん」

「普通の傘よりも大きいのに、どういう作りしてるの？」

「さあ……」

僕も疑問に思っていることを聞かれても答えられない。

「それより、まだ学校着いてないのに傘返してくれるなんてどうしたの？」

強い日差しに目を細めながら椿を見上げる。

「そろそろ学園の子と会うから」

「……？」

学園の子と会うことと傘にどういう意味があるのだろう。

「目立つっちゃうから」

「ああ……」

『目立つ』。その言葉で理解した。

桜花では日傘を差す人はそこら中にいて当たり前だったからうつかりしていた。普通日傘を差して登校する高校生なんて少数派だ。しかも転校初日に転校生がそれでは『注目して下さい』と言っているようなものだろう。そう考えて、先月まで通っていた学校が、世間から浮世離れたところだということを確認した。

「仕方ないか」

日差しは突き刺すように痛いけど、学校まで距離にして数百メートル。これくらいであれば平気だ。

「大丈夫？」

椿が心配そうに僕の顔を覗きこむ。

『大丈夫』と返事したのに、椿は僕の腕から手を離さなかった。

「えーと、依岡、依岡っと……」

多くの生徒とすれ違っなか、僕は昇降口で自分の下駄箱を探していた。

僕を見下ろすかのようにそびえ立つ下駄箱が右にも左にもずらっと並んでいる。生徒数が多いとは聞いていたけど、それで僕がどうこうなるわけではないと思っていたのに、さっそく困ったことになっていた。

下駄箱が見当たらない。

「お姉ちゃんあった？」

先の上履きに履き替えた椿がやってきた。

「それが見当たらなくて……って、そうか。転校生だから、クラスが一番最後か……」

僕は二年のクラスの最後尾だけを見ていく。けれど一向に下駄箱

が見つからない。

「あれ…？」

まさか、まだ僕の下駄箱は用意されていない、ということなんだろうか。

「もしかして、まだ用意されてないとか？」

「そんなことはないと思うけど……あ、お姉ちゃんあったよ」
「へ？」

椿が指差した先に視線を向ける。

『四条楓』

下駄箱にはそう書かれていた。

ああそうか。僕はもう『四条』になったんだ。『依岡』で探していたから気づけなかった。

けど、これは……。

僕は無言でその下駄箱を睨みつけた。

「……高いね」

「これは僕への挑戦か……」

『四条楓』の文字は、最上段にあった。

……手を伸ばせば届くけど、中を目視することはできないというなかなか絶妙な高さ。うかつに奥に入れると取り出せなくなりそうだ。

「入れようか？」

「いい」

僕は脱いだ靴を爪先立ちで下駄箱に入れて、家から持ってきた上履きを靴から取り出して履き替えた。

「ふう……」

ひと息ついて顔を上げると、椿が笑顔で僕の肩をぽんと叩いた。

「ナイスお姉ちゃん！」

「うっさい！」

「ここが職員室ね」

椿に案内してもらって職員室の前まで来た。

「ありがとう。後は一人で何とかするから。椿は教室に行きなよ」

「うん。でも一人で大丈夫？ 教室まで行ける？」

心配そうに僕を見る椿にジト目を返す。

「なにその僕が学校でも迷子になるんじゃないかって疑うような言い方は」

「じめんじめん」

僕は椿の向きをクルリと階段方向に向けて背中を押す。

「いいから行けって」

「うん。それじゃ、お姉ちゃん頑張ってね」

椿は僕に手を振りながら階段を上っていった。

椿を見送ってから、僕は何度か深呼吸をしたあとに扉をノックして職員室に入った。緊張しながらキョロキョロしていると、手前の席に座っていた男の人（おそらく先生だろう）が話しかけてきたので、転校生であることを伝えると、彼は僕の担任だという人呼んだ。その担任の先生（山本先生というらしい）から僕が所属するクラスは二年D組であり、席は窓側の一番後ろだと言うことを教えてもらう。「見えなかつたら席を交代してもらおうように」と言われたが、「大丈夫です」と引きつった笑顔で答えて職員室を出た。

余計な御世話だ。

三階に2年の教室があるということで、階段を上がり三階の廊下に出ると、階段手前から順に、2年A組、2年B組、2年C組と順番に教室が並んでいた。おかげで目的の2年D組の教室はすぐに見つかった。

教室前の廊下まで来ると、教壇側の扉付近では男の子が数人集まって道をふさぐようにして立ち、雑談をしていた。元々視線を集めそうな前側から入るつもりはなかったので、僕は後ろの扉から教室に入った。

「ふう……」

先生に言われた、窓側の一番後ろの机に鞆を置いて椅子に座り、一息つく。

「……ん？」

そこでふと異変に気付いた。

さっきまで騒がしかった教室がシーンと静まり返り、わずかに聞こえるのは教室外から聞こえる他クラスの声と、教室内にいる数人の集団が（たぶん）僕を見て話すひそひそ声だけ。

周りの様子を確認したかったけど、視線を合わせるのが怖くて、鞆を机の角に置いて盾にし、頬杖をついて窓の外を見た。

みんなの視線がこちらに向けられていることがなんとなく肌で感じられる。

時計を見ると8時35分。ホームルームまであと5分。

ゆっくりと動く秒針を見て、たった5分がひどく長く感じられた。

……早くホームルームが始まってほしい。

「四条楓さん、かな？」

「っ！？」

突然名前を呼ばれた僕は驚いてビクツと体を震わせた。なんとか平静を保ちつつ、姿勢はそのままに視線だけを声が聞こえた方向に向けた。

そこには僕の前の席に座りこつちを見ている女の子がいた。

座っているから詳しくは分からないけど、おそらく椿と同じくらいの身長だろう。肩にかかる程度の茶色がかかった髪をしていて、前髪は右目にかかる分をピンで横にとめている。

「う、うん。そうだけど……？」

「よかった」

女の子がふわっと花が咲いたように笑う。

かわいい子だな。

それが第一印象。しかも勇気がある。こんな静かな教室で、その原因（だと思っ）である僕に声をかけられるくらいなんだから。

僕にはまずそんなことはできない。

「いつも遥が話すからどんな子かかって楽しみにしてたの」

……はい？

僕の聞き間違いだろうか。今この子『遥』って言ったような……。たしかに遥がこの学校に進学していることは知っていた。だからこの学校に転校することが決まってからは、遥がどのクラスなのかそしてそこに転校生が入る予定はないのか、などと遥に話をふっていた。だけどそういう話になると決まって遥は話をはぐらかした。それでまったく話を聞いていなかったけど、同じクラスであればさすがに教えてくれるはずなので、きつと違うクラスなのだろうと結論づけた。それで僕はあとで違いクラスにいるであろう遥を探して挨拶でもしようと考えていたんだから。

その遥の名前を、まさか目の前の女の子から聞けるとは思わなかった。

「あら？　もしかして……遥から聞いてない、とか？」

やっぱりそうだ。間違いなく『遥』って言った。聞き間違えじゃない。一瞬、僕が知っている『遥』とは違う『遥』のことかとも考えたけど、『いつも遥が僕のことを話す』と、さっきこの子は言った。間違いなく僕が知っている『遥』のことだろう。

ってことは、この子は遥の友達なのだろうか。こんな大人しそうな子なのに。一体どういいうつながりで友達になったのか気になった。

「あの、遙とはどっいつ」

ガタンッ！

「せーふー！」

彼女に質問しようとしたそのとき、突然勢いよく扉が開いたかと思つと、髪を振り乱した女の子が大声を上げながら滑り込むようにして教室に入ってきた。

「はあ、はあ…。あー危なかった。2学期早々遅刻とかシャレんなないって」

僕の隣の席にドンツと鞆を置き、豪快に腕で額の汗を拭った。乱れたショートヘアはそのままに、寝癖も直してこなかったでようで、茶色の猫毛がぴよんと跳ねている。

「おはよう。遙」

「よお。葵あおい」

気さくに挨拶をする女の子は、まるで僕が知ってる遙そのもので、というよりよく見ると遥本人で

「…って、はるか!？」

「よっ」

ひっくり返った声を上げる僕に対して、遙は軽く手を上げて笑って答えた。

第2話 楓と遥 part 3

みなせはるか
水無瀬遥。中学2年生の頃、奈菜同様、友達のいなかった僕に何
度となく話しかけてくれた数少ない女の子だ。あの頃の僕は男から
女になって初めての学校だったから、二人とはいろいろとあつたけ
ど……とにかく、二学期になる頃には僕達は友達となり、それ以来
僕と奈菜、そして遥の3人で平日の放課後や休日にはよく遊びに出
かけたものだ。

その遥が僕や奈菜とは違い、学園に進学することを知ったときは
驚いたけど、遥らしいとも思い、特に止めることもせず遥を送り出
した。

そんなわけで僕は遥がこの学校にいることを知っていたし、だか
ら奈菜も別れ際に遥あての言付けを頼まれもした。けれど、まさか
同じクラスだなんて思わなかった。

「よっ、楓」

軽く挨拶をする遥の様子から、やっぱり遥は僕がこのクラスに転
校してくることを知っていたようだ。

「遥、このクラスだったんだ」

教えてくれなかったことよりも、同じクラスになれた事が嬉しく
て、少しだけ弾んだ声で遥に話しかけた。

「言っただろ？ 同じクラスだって」

「……へ？」

僕は間抜けな声を遥に返した。

「や、そんなこと聞いてない。というより、いつも聞いたらはぐらかされて聞けなかったんだけど……」

「あれ……？ まあいいか」

全然良くない。

「ねえ、遙、いったいどういう」

「あー、疲れたー」

問いたださそうとしたけど、遙は僕から視線を外すと椅子にドカッと座り、鞆からノートを取り出して、団扇のように扇ぎ始めた。

「はあ……。ここ冷房きいてるのか？」

「電源は入ってると思うけど」

葵さんが天井に埋め込まれたエアコンを見上げながら答える。ブウンと動作音がわずかに聞こえるので、ちゃんと動いているはずだ。

「本当か？ ……あぢー」

「遙、みんな見てるよ」

「ん？ あー、気にしない気にしない……。なあ、今何度に設定してるんだ？」

遙が教室全体に聞こえるような大声を出した。

「26度」

エアコンのリモコン近くにいた男の子が答える。

「にじゅうろくう？ この暑いのに省エネ設定かよ」

「十分涼しいだろ。我慢しろよ」

「え〜？ …… はいはい分かりましたよ」

暑い暑いと言いながらパタパタとノートを扇ぎ続ける遙を見てると、なんか中学校の頃を思い出して和んでしまった。

時計を見ると8時39九分。もうすぐチャイムが鳴るだろう。

「遙」

「ん？」

「ホームルーム終わったら、ちょっと話あるから」

そう言う僕に遙は一瞬驚いたようだったが、すぐに笑って頷いた。

ホームルームは僕の簡単な自己紹介と、この後の始業式の日程の説明だけだったので、ものの5分で終わった。このあと行われる今日唯一の行事である始業式は9時10分から体育館でということなので、まだ20分も時間がある。

早く遙と話がしたかった僕は、心の中で先生に感謝した。

これなら始業式の前に遙と話せる。

そう思ったのに……

「桜花から来たんだってね」

「桜花つてお嬢様学校つて聞くけど実際そつなの？」

「水無瀬さんと話してたけど知り合い？」

「桜花では部活はしてたの？」

「彼氏いるの？」

「え？ えつ……？」

ホームルームが終わると同時に男女数人に囲まれてしまった。突然のことに戸惑う僕を置いて、周りは勝手に盛り上がっていた。

「髪綺麗ね。何か手入れしてるの？」

「やっぱりお嬢様学校だと挨拶は御機嫌よう？」

「えつと……」

なんで僕の周りにこんなに人が？ そ、そうか。きっと9月なんという中途半端な時期の転校生だからみんな珍しいんだ。

つて、そんなこと考えてる場合じゃない。今はこの状況をなんとかしないと。

僕は隣の席に座る遥をちらつと見て助けを求める。

それを見た遥は、大げさに肩を竦めて立ち上がった。

「はいはい。お前らそんなに詰め寄っちゃ答えられる物も答えられないって」

遥が無理矢理人を掻き分けて僕の後ろに立ち、椅子に座ったままの僕の肩に手を置く。

「桜花はちょーお嬢様学校でこういう楓みたいな子がいくところ。挨拶は人によつてまちまち。御機嫌ようって言つ人もいる。ちなみにアタシと楓は言わなかつた。で、アタシと楓は中学で知り合つてそれから友達。この髪は天然。特別なことはしてないはず。部活は特にはいつてなかつた。彼氏はいない、というかいたらアタシと勝負しろ」

遙が僕に代わつて質問に答えていく。

……つて、勝負しろつてなに？

「よし。とりあえず質問には答えたな。というわけでえ〜……」

「え……わっ!?!」

肩が軽くなつたと思つたら、手を引つ張られて無理矢理立たされる。

「楓はアタシのモンだからもらつてく! 葵、先行くわ」

「うん。四条さんをよろしくね」

「え? えつ?」

笑顔で手を振る葵さんを残して、僕は遙に手を引かれて教室を出た。

「で、ちっきのはびつこじやわ?」

「ちっきのは?」

遙に連れてこられたのは、とある階段の踊り場。遙曰く、この階段はほとんど使われていなくて、聞かれない話をするときはいつもここにくるのだそうだ。

「ほら、僕が『同じクラスなんだ』って聞いたら、『言っただろ?』って」

「ああ。夏休みはいる前に、転校生がうちのクラスに来るって噂になっていたから、たぶん楓のことだろうなと思って……この話、楓にしたよな?」

「いつ?」

「えーと……たしか7月の下旬ぐらいだったような……」

「そんな話一度も聞いてないと思うけど?」

曖昧な返事に、僕は遙にジト目を向ける。遙の身長は180センチくらいあるだろうか。かなり見上げる形になる。

遙はサツと視線をそらした。

「あ、あー……。そういえば、話したのは夢の中だった……かも?」
「かも?」

ジッと遙を睨み続ける。

「たぶん……いや、おそらく……ほぼ百パーセント……」
「……」

なるほど。つまり遙は僕にその話をしたつもりでいたから、面倒くさがって話をしなかっただけなのか。

そう考えると、遙の面倒くさがり屋に腹が立ってきた。

僕は無言で遙を睨み続けた。

「……あー！ そんな目で見るなよ！ 悪かった！ 悪かったから！」

遙がギブアップを宣言して僕の頭を乱暴に撫でた。

「まさか楓と同じクラスになれるなんて思わなくてさ、嬉しくて言っただけになっちゃったみたいだ。ごめんな」

遙は片目を閉じて、申し訳なさそうに謝った。

「別にいいけど」

「全然『良い』って顔はしてないけどな……」

目をそらしてむくれる僕に、遙は苦笑した。

しばらく遙の謝罪を聞いて幾分気持ちやすきりした僕は、遙からこの学校について話を聞いていた。

「あの学校も変だったけど、この学校も似たようなもんだな」

「似たようなもの、って？」

話は学園と桜花の違いだ。

「変な風習があるってことだよ。風紀委員って分かるか？」

「風紀委員って……服装チェックとか持ち物検査とかして学校内の風紀の乱れを正す委員。だったっけ？」

「それそれ」

聞きなれない言葉にちょっと興味がわく。

と言うのも、桜花にそんな委員会はなかった。桜花は曰くお嬢様学校なので着崩している人は皆無とっていくらいだっだし、問題らしい問題を起こす生徒もいなかった。それに生徒会執行部がそれに似たことをしていたので、必要なかったというのものもあるけど。

「この学校じゃ、その風紀委員がやけに幅利かせてるんだよ。無駄に権限もってるしな」

「権限？ 風紀委員なのに？」

「ああ。自分たちの仕事以外にも口出ししてくるからな。誰も文句を言わないからこの学校じゃそれが普通なんだろうけど」

「……なんか桜花の執行部みたい」

「いやいや。あれよりタチが悪い。会長は良いヤツなんだけど、その下々が鬱陶しいのなんのって」

「下々って……」

嫌な言われようだ。きつと遙のことだから、何かにつけてその風紀委員の人達と衝突しているのだろう。

「でも、遙が人を褒めるなんて珍しいね」

「ん？」

「その風紀委員の会長、さん？」

遙は少し恥ずかしそうに鼻の頭を掻いた。

「まあ……さすが他薦で選ばれただけはある人だよ」

「他薦？ 風紀委員って他薦で選ばれるんだ」

「会長だけな。毎年四月に四季会選挙っていう風紀委員会の委員長

を決める選挙があつて、そこで全校生徒がこの学校の模範生と呼べるべき人に投票して、そこで最も得票数が多かった人が一年間風紀委員会の委員長、通称四季会の会長になるってわけ」

ふーん。なんとも珍しい制度だ。他薦で選ぶということは、人気投票のようなものだろうか。

「とは言え、実質仕事するのは風紀委員だから、会長はお飾りみたいなものだ。一応会議には出席したり、たまに仕事があるようだけど……。最初に言った権限っていうのも、会長だけが持つてるから、権限が必要な時は会長に動いてもらうしかないんだとさ」

「やけに詳しいね。その会長さんとは仲が良いとか？」

「どうだろ。仲は悪くないはずだ。委員のやつらと鬼ごっこしてたらいつのまにか話す機会が増えてな」

鬼ごっこって……。あ、でもその光景が容易に想像できる。

「あ、楓、お前笑つたな！ どうせアタシが委員のやつらにおつかけられてんのを想像したんだろ！？」

「や……そんなことは……ぷっ」

「ほらっ、今声でた！ やっぱ笑ってるじゃないか！」

遙が廊下をダンダンと強く踏んだ。

まったく……。

中学の頃と変わってないんだね。遙。

「……そろそろか」

遙が腕時計に視線を移す。僕も釣られて見ると、ちょうど九時を回ったところだった。

「いくか」

「うん」

遙に撫でられてぐちゃぐちゃになった髪を手櫛で直しながら、歩き出した遙の横に並ぶ。身長の高い遙は僕に合わせてゆっくり歩いてくれる。中学の頃と同じで、少し顔が綻んだ。そのとき、ふと奈菜からの言付けを思い出す。

「そついえば。奈菜が『あとは任せた』だって。どついう意味？」
「へえ〜。アイツがねえ〜……」

にやりと笑う遙だったけど、その表情は嬉しそうだった。

第2話 楓と遥 part 4

始業式は特にこれといった事もなく終わり、僕と遥はロングルームのために教室に戻ることにした。けれど、体育館から教室までの道中で再び質問攻めに会い、ただ教室に戻るだけだと言うのに20分もかかってしまった。遥が間に入って仲介してくれていなかったら、教室に戻れたのはロングルーム開始と同時にだったかもしれない。教室前まで来ると、トイレへ行ってくると言う遥と分かれて教室に入った。窓際最後尾の席に座り、一息つく。ふと視線を前に向けると、葵さんが女の子と話しているのが目に入った。

「あ、四条さん、おかえりなさい」

僕に気付いた葵さんが話を中断してこちらを向く。葵さんと話していた女の子も、葵さんにつられるようにしてこちらを向き、僕を見た。

「ただいま。えっと……」

まだお互い自己紹介をしていないので、何と呼んでいいのか困り、言い淀んでしまう。

「あ、自己紹介してなかったね。私は朝霧葵^{あさぎりあおい}。葵^{あおい}って呼んで」

僕の様子に気付いたのか、そう言って朝霧さんが先に挨拶をしてくれた。

「えっと……僕は四条楓。僕のことも楓でよろしく」

僕が少し焦りながら返すと、葵さんは少し驚いたように目を丸くした。けれどそれは数瞬で、すぐに「よろしく」と微笑んだ。

……何に驚いたんだろう？

「あ、あたしもあたしも。あたしは葵の幼馴染の白水綾音^{はくすいあやね}。綾音でよろしくっ」

綾音さんは僕の手を掴むとブンブンと上下に振った。

「えっと、よろしく。綾音さん」

綾音さんは黒色で短めの髪をポニーテールにして、いかにもスポーツできますって感じの子だ。身長も遥と同じくらいありそう。

「そんな硬くならず。『さん』なんて付けなくていいから」

「や、それは……まだ初対面だから」

……そういえば奈菜と友達になったときにも同じようなことを注意された。『もっとフレンドリーに』だとか。

とは言え、いくら奈菜からの忠告でも、初めから呼び捨てはさすがに無理がある。

「気にすることないって、ねえ葵？」

「うん」

「あー、無理無理。楓って真面目だから、すぐに呼び捨てなんてできないから」

遅れて戻って来た遥が、そう言いながら席に座る。

「アタシも楓に『遥』って呼んでもらえるようになるまでどれだけ

かかったか……」

昔を思い出すように、遙は目を閉じて腕を組み、うんうんと頷く。

「そうなの？」

「桜花の生徒だからな。アタシ達とは出来が違うんだよ」

「あたし達って、あんたも中学まで桜花通ってたんじゃないの？」

「だからここにいるんだろ？」

「ああ……合わなかったってことね」

「そういつこと」

自嘲するように笑う遙。

全然そんなことないと思うけど……。

「だったらあたしも楓さんって呼んだ方が良かったらね……」

綾音さんが一度僕を見た後に、遠慮がちに遙にたずねる。

「別にどっちでもいいんじゃないか？　なあ楓？」

遙が同意を求めて僕に視線を送る。

「うん。これは僕の問題だから、綾音さんと葵さんは僕のことは何と呼んでもらっても」

「そう？　だったらあたしは楓で」

「私は楓ちゃんって呼ぶね。いいかな？」

「う、うん」

『楓ちゃん』かあ。ちゃん付けで呼ばれたことなんてないから、ちよっと恥ずかしいけど……仕方ないか。

「それにしても……」

「えっ？ な、なに？」

綾音さんが顔を近づけて僕の頬に触れた。内心心臓が飛び出そう
なほど驚いたけど、なんとか平静を装う。

「ホントお人形さんみたいね」

「だろ？ っと！」

「わっ！？」

突然遙が僕の体を持ち上げ、自分の膝の上に乗せた。何事かと思
上げる僕に、遙はぎゅっと僕の体を抱きしめて笑ってみせた。

「これアタシだから勝手に取るなよ」

「いや、あたし女だから……って、えっ、ちょっと、あんたってそ
ういう趣味の人だったの……？」

綾音さんが遙を変な目で見る。

「そういう趣味ってどういう趣味だよ。アタシは綾音が思ってるよ
うな趣味の人じゃないっての」

「『ゆ』で始まって『り』で終わる人じゃないの？」

それ、まったく分ける必要がないと思う。

「違う違う。アタシはいたってノーマル。ただ例外的に楓のことが
底抜けに好きなだけだ」

「そののどこがノーマルなのよ……」

綾音さんが頭を抱えてしまった。

僕はそんな二人を尻目に、そつと周囲の様子をうかがった。僕が転校初日だからか、もしくは遥の奇行のせいかは知らないけど、クラスのみんなが僕たちに注目していた。

……恥ずかしい。

僕は羞恥で赤くなつた顔を隠すように下を向いた。

「とりあえずあんたが変人ということは分かつたわ」

「これのどこが変人なんだよ。いたってノーマルじゃないか」

「どこが!？」

「可愛いものを愛でるのは人間として普通だろ？」

そう言いながら遥が僕の頭を撫でる。

「その発言自体には賛成するけど……」

「ほらな」

「なにが『ほらな』よ!」

二人が言い争い始めた隙を見計らつて、僕は遥の膝からおりて席に戻つた。

「……はあ。まったく遥は」

「お疲れ様。初日から大変ね」

一息ついていると、葵さんが笑顔で話しかけて来た。

「あ、うん。ありがとう。でも、遥はいつもこんな感じだから」

「そうなの？ 私はこんな嬉しそうな遥は始めてみたかも」

「そ、そう?」

僕の知る遙は、いつもこんな調子だったから、葵さんの言葉に少し驚いた。

「本当に遙は楓ちゃんのが好きなんだと思う。あ、もちろん綾音が言ってるような変な意味じゃないよ?」

「そう、なのかなあ……」

いまいちよくわからない。変な意味と、変じゃない意味とでは一体何が違うのだろう。

それにしても、綾音さんとはかく、葵さんみたいな物静かそうな人がどうして遙の友達なんだろうか。

ふと聞いてみようかと思ったけど、それは失礼な気がした。

「か、楓は、この後、な、何か用事あるか? ……はあはあ」

「ん、特にないけど……」

答えながら視線を向けると、何故か肩で息をしている遙と、机を挟んで向かい側の綾音さんが、こちらも肩で息をしながら悔しそうに遙を睨んでいた。

葵さんと話している間に二人は何をしてたんだ……。

「はあ、はあ……ふう。んじやさ、近くによく行くファミレスがあるから、そこで昼飯ってのはどう?」

「お昼? あ、そうか。今日学校お昼までなんだ」

遙に言われて気が付いた。なんとなくお昼は学食でと思っていたけど、午前中で終わるなら別に学食へいくことはない。それならと、了承しようとしてふと考える。

椿はいつも学校が半日で終わるときはどうしてるんだろう? 家でご飯を作ってくれているのは椿なので、椿に合わせないといけない

い。

僕は時計を見て、まだロングホームまで時間があるのを確認すると、椿にメールで聞いてみようと思いつき、鞆に手をかけた。その時、机にわずかな振動が伝わってきた。もしかと思いつつ鞆を開けると、携帯電話前面のディスプレイが暗闇の中で七色に光っていた。

「ん、どうした？」

「メールみたい」

「一応携帯使用禁止だからこっそり使えよ。風紀委員に見つかったらただじゃ済まないから」

「あんたそれで何度も携帯没収されたわよね」

「うっさいな」

遙の忠告に従って、窓の方を向いて、こっそり携帯電話を開く。メールは椿からだった。

『タイトルなし。本文 今廊下にいるから出てきて』

携帯をポケットに仕舞って廊下を見ると、教室後ろの扉近くに椿が立っていた。

居心地悪そうにそわそわしていたが、僕と目が合うと嬉しそうに手を振った。

「あれ、あの子1年じゃない？」

「どこだ？」

「ほら、あそこ。校章が白色の子いるでしょ？」

綾音さんが椿を指さす。

学園は学年によって制服の胸元に取り付ける校章の色が違う。今年度の場合だと1年は白、2年は黒、3年は銀、とのことらしい。

2年の教室が並ぶ三階では、白色の校章は目立っていた。

「あの子は……あ、なるほど」

葵さんが椿、そして僕を見て眩き、頷いた。

「なんだろう……？」

「あそこって言われてもなあ……アタシ目悪いから」

「じゃあなんで一番後ろにいるのよ」

「クジ運のおかげで」

「そんなことでノートと……らないわよね。あんたは」

「まーな」

「いつもノートを借りてる葵の前でよく堂々と言えるわよね……って、あの子こつち見てない？」

「あ、うん。妹が来たからちょっと行ってくるね」

「ああ。楓の妹さん……妹？」

綾音さんが首を捻っていたけど、なんとなくその理由が分かってしまったので、それには触れずに廊下に出た。

廊下に出るとすぐに椿が駆け寄って来た。さすがにここでは目立つので、少し教室から離れたところで用件を尋ねることにした。

「呼んでくれればいいのに」

「だってわたし一年だし」

気持ちはなんとなく分かるけど、僕がメールに気付かなかつたらどうするつもりだったんだろう。

「で、何の用？」

「朝言つの忘れてたんだけど、午前中に学校終わる時は、お昼は外で食べてね。わたしは部活でそのまま学校に残ることあるから」

ちょうどよかった。その件について椿にメールしようかと思っただとところだ。

「うん。分かった。今日は友達と食べて帰るよ」

「もう友達できたんだ。やった。よかったねっ」

椿が自分のことのように喜ぶ。僕はそれを複雑な気持ちで頷いた。うーん。これじゃどっちが姉なんだか……。

そんなことを考えていると、ふと背後に気配を感じて振り向いた。

「……なんで遥が来てるの？」

「楓の妹、っていうのがどんな子が気になったから」

遥は悪びれた様子もなく答える。

「あの、四条椿です。お姉ちゃ……じゃない、四条楓の妹です」

椿が背筋をピンと伸ばして頭を下げる。先輩だから緊張しているのだろう。

「アタシは水無瀬遥。楓とは中学で一緒だったんだけど、偶然また同じクラスだね」

「中学ってことは、桜花ですか？」

「そういうこと……ああそつだ。ついでにちょっと話したいことがあるんだけど……いいか？」

「はい、わたしはいいですけど……」

首を傾げながら椿は頷いた。

「じゃ、楓はちょっと離れてて」

「ん？ どうして？」

「いいからいいから」

シツシツと遥が僕を追い払う。

渋々遥から離れると、遥は椿を連れて廊下の隅の方へ行ってしまった。

廊下の隅までやってくると、遥は椿の肩を抱き、耳に顔を近づけた。

「あー……。どう話せばいいか……」

遥にしては珍しく、落ち着きなく目をキョロキョロさせ、歯切れも悪かった。

「アタシさ、楓とは三年ちよつとの付き合いだな。それで、楓が『男』だったってことも知ってるんだけど……」

『男』という単語を、一段とボリュームを絞り、囁くようにして

椿に告げる。

「えっ
」

椿が小さく声を上げて遙を凝視した。

「どうしてそのことを知っているんですか？ まさかお姉ちゃんが

」

「いやいや。楓から直接聞いたんじゃないんだけどな。ちょっとした成り行きというか……まっ、いろいろあつて知つちまつたつて感じなんだけど……あ、このことを楓には内緒な。絶対アイツ怒るから。楓が怒るとアタシの財布の中身が厳しくなるんだよ」

「は、はい……。分かりました」

苦笑しながら言う遙に戸惑いながらも椿は頷く。

「それで本題だけど……最近、楓の様子が変なんだ」

「変……ですか？」

「ああ。奈菜……桜花の友達が言うには、とくに転校することが決まった辺りかららしいんだ。なんかアタシ達をあまり頼らなくなつたんだよ。前は困つたらすぐにアタシや奈菜に相談してたのにそれが少なくなつてさ」

「は、はあ……」

「ま、だいたい理由は想像つくけど……」

遙は視線を椿から楓に移す。ジッと二人のことを見ていた楓は思わず目をそらした。

「あの……水無瀬先輩？」

楓に視線を送る遙に、おそろおそろ椿が話しかける。

「ん、あー悪い。……ってアタシのこと先輩なんて呼ばなくていい。そういうガラじゃないし。気軽に遙でいいから」

「いや、そんな」

「いいからいいから。本人がいいって言ってるんだから遠慮しない。変わりにアタシも椿って呼ぶから」

「……では、遙先輩って呼ばせてもらいます。先輩は先輩ですから」

椿の言葉に遙が歯を見せて笑う。

「そういうところ、楓の妹だって思うよ。……で、椿。ちょっと楓のことで協力してほしいことがあるんだけど」

「はい。なんででしょうか？」

「アイツ体弱いだろ？ それなのにさっき言ったように突然頑張りだしてさ、無理しないか心配なんだよ。だから、そつと楓のことを手助けしてやってくれないか？」

「は、はい。お姉ちゃんのためだというのなら……」

椿はしっかりと頷いた。

「ありがとう」

遙は満足そうに椿の頭をぽんぽんと叩く。

「……でもどうしてお姉ちゃんのことをそんなに気にかけてくれるんですか？」

椿の問いに、遙は一瞬目を丸くするが、すぐに笑って、

「アタシは楓のことが大好きで、一番の親友だからな。それに、楓にはいろいろとお世話になったから、今度はアタシが、ってね」

そう答えると、椿の返事を待たず遥は楓の元へ戻っていった。

「結構長かったけど何話してたの？」

やっと戻って来た遥に、何を話していたか気になっていた僕はすぐに尋ねた。

「ん？ ただ、椿にアタシや奈菜がいないところでは楓をよろしくって頼んだんだよ」

遥から少し遅れて戻ってきた椿の肩に遥が手を置く。

「なんで遥がそこまで気にするんだよ」

「まあまあそう言わずに、ちゃんと椿の言うことは聞くんぞぞ？」

「なにその小学校の引率の先生みたいな言い方……」

「お姉ちゃん、ごめんね」

僕が遥をジト目で睨むのを見て、椿が申し訳なさそうに顔の前で手を合わせる。

「別に椿が謝ることじゃないよ。悪いのは遥なんだから」

「お姉ちゃん怒ってない？」

「全然」

「よかったあ……」

僕の言葉に、椿はホッと胸をなでおろした。

「あ、そろそろロングホーム始まるから戻るね」
「うん」

椿は手を振りながら早足で階段を下りていった。

「楓、まさか怒ったか？」

「……まあ、僕のことを心配してくれたことだろうから、怒ってはないよ。奈菜に任せたって言われた手前もあるんだろっし」

奈菜の「任せた」は、僕のことを遥に任せた、という意味のことだろう。薄々は感じていた。

「さすが楓。……あー、そういえば、昼どうする？」

「僕は大丈夫」

「よし。じゃ、葵と綾音にも聞いてファミレスいくか」

「うん。そうだね」

「……そこで相談なんだけど」

「奢らないよ」

間髪いれずに答えると、遥は肩を落として頂垂れた。

第2話 楓と遙 part 5

学校の帰り、僕と遙、葵さん、綾音さんとで桐町アーケード街きりまちへとやってきた。

『桐町アーケード街』、通称『桐町通り』（単に『桐町』とも言う）は全天候型アーケードを採用した全長数キロにも及ぶ商店街だ。数年前に近郊に大型ショッピングセンターがオープンしたせいで一時期は人通りもまばらになったけど、二年前アーケード内に大型家電量販店がオープンしてからは少し活気を取り戻したらしい。

アーケードに並ぶお店を見ると若者をターゲットにしたお店が多かった。葵さん曰く「近隣には学園のほかにもいくつか学校があつて、そこに通う子は大抵ここに遊びに来る」のだそうだ。

たしかに周りを見ると、平日ということもあつて学生服を着た子を多く見かける。その中には学園の制服を着た子も結構いた。学園から桐町はそれほど離れていないし、ここには屋根がある。涼しく買い物するならもってこいの場所だ。僕も日傘を差さなくて済むし。

「ここだ。ここ」

先導していた遙が目の前のお店を指差す。

連れてこられたのは『プラス』という全国にチェーン展開するファミリーレストラン。和風、洋風と豊富なメニューを全て注文しても五万円いかないという低価格がウリだ。

扉を開けるとカランカランと音が鳴り、ウェイトレスさんが僕達を出迎えてくれた。

「いらっしゃいませ。四名様ですか？」

「はい」

「ではこちらのお席へどうぞ」

ウェイトレスさんに案内されて店奥窓側のテーブル席に座る。

「御注文がお決まりになりましたら、そちらのボタンでお呼びください」

「あー。今頼みます」

立ち去ろうとしたウェイトレスさんを遙が手を上げてとめた。

「はい、ではご注文をお伺いします」

もう注文!?

まだメニューも見えてなかった僕は急いでメニューを開いた。

「ドリンクバー四つ、でいい?」

同意を求める遙に葵さん、綾音さんが頷く。僕も頷きながら、一応ドリンクバーが何かをメニューで確認する。予想通りジュースやコーヒーなどの飲み物が定額料金で飲み放題になるものだった。

「えーっと、アタシはビーフスステーキセットのライス大盛り」

「あたしはデミたまハンバーグセットのライス大盛りで」

「オムライスでお願いします」

遙、綾音さん、葵さんが続けざまに注文を終える。

「あとは楓だけだ」

「ちょっと待って。種類多いから迷っちゃって」

メニューをパラパラと捲る。

んー……うどんにしようかな。でもこっちのパスタも捨てがたい。あ、ビーフシチューもいいかも……。

「和風きのこのスパゲティを一つ」

「はい!？」

遙の声に驚いて思わず変な声が出た。

「楓、これ系好きだろ？」

「や、まあ好きだけど」

「だったらいいじゃないか。楓は迷い始めると時間かかるくせに結局いつも同じヤツ頼むからな」

「そんなことは……ある、か。うー…うん。それでいいや」

思い当たる節がありすぎて反論できない僕は、渋々メニューを閉じてテーブルに置く。

「ご注文は以上でよろしいでしょうか？」

「はい」

ウェイトレスさんは再度メニューを読み上げて確認を済ませたあと、ドリンクバーについて軽く説明して厨房へと下がっていった。

「遙は何がいい？」

「コーラ。ゼロじゃないほう」

「ちよつと。あんた自分で取りに行きなさいよ」

椅子に座ったままの遙を綾音さんが睨み付けた。

「えー、せっかく楓が取りに行ってくれていうんだから甘えさせてもらうよ。楓よろしくな」
「はいはい」

遥を残して僕と綾音さん、葵さんはドリンクバーへと向かった。

「ね、楓と遥っていつもこんな感じなわけ？」

ウーロン茶を片手に綾音さんが話しかけてくる。

「うん、そうだけど？」

自分の分のお茶を近くのテーブルに置いて、遥の分のコーラをグラスに注ぎながら答える。

「あんまり甘やかしたらダメよ。ああいうのは甘やかすとすぐ付け上がるから」

「うーん……でも、遥にはお世話になってるし」

「お世話に？ 遥が？ いったいなにを？」

その答えは予想もしてなかったという風に、綾音さんが目を丸くして聞き返す。

「い、いろいろと……ね」

「へえ。遥がねえ……」

それ以上聞いては来なかったけど、綾音さんは訝しげな視線を遥

に向けていた。

僕は遥の分のコーラを注ぎ終わると、自分のお茶を持って席へと戻った。

「はい、ゼロじゃないコーラ」

「さんきゅ」

ストローと一緒に渡したのに、遥はそれを使わず直接グラスに口を付けて飲み始めた。

「やっぱりコーラはこれに限るよな。ゼロは変な甘さがあるし」

「カロリーゼロだからそこは許容範囲内じゃない？」

「別に摂取したカロリーは動いて消費すればいいだろ？」

「まあそうだけど」

「だいたいそこまで気にするほどダイエット中ならジュースなんて飲むなんての」

身も蓋もないことを……。

そんな話をしている間に、遥はコーラを全部飲んでしまう。外はこの暑さだ。きっと喉が渴いていたのだろう。

「またコーラでいい？」

「ああ」

「またアンタはそうやって楓を使う……。自分で行きなさいよ」
「断る」

綾音さんと遥が言い争う声を聞きながら、僕は立ち上がって席を離れた。

「と、ところで遙……。よ、余裕そうだけど明日の実力テストは大丈夫なんでしょうね？ はあはあ……」
「じ、実力テスト？ はあ、はあ……」

戻ってくると、何故か綾音さんと遙は息を切らしていた。よく見るとお互い右腕がプルプル震えていた。

「明日実力テストがあるの？」

綾音さんに問いながら遙にグラスを渡す。

「楓は転校したばかりだから知らないわよね。学園では学期初めに実力テストがあるのよ。前学期の復習を兼ねてね。まあ成績には反映されないんだけど、結果は学年ごとに順位付けされて廊下に張り出されるのよ」

「あれは良いさらし者だよな」

さすが有名進学校。そうやって競争意識を高めるわけか。桜花にはそんなものなかつたので、なんか新鮮だ。

「で、中学一緒だったって言うから知ってるとは思うけど……遙のヤツいつつも下から数えた方が早いところにいるから、今度はちゃんと休み中に復習していたのかな、とね」

「するわけないじゃないか」

「まっ、そうよね」

躊躇なく遙は答え、綾音さんが肩を竦める。

「楓ちゃんは勉強は大丈夫なほう？」

上品にお茶を飲みながら葵さんが尋ねてくる。

「えっと……悪くはない、と思うけど」

僕がそう言うと、遥が大げさに頭を振ってみせた。

「いやいや。なに謙遜してるんだか。楓は桜花でいつも一桁だったじゃないか」

「一桁……ここにも秀才がいたのね……」

綾音さんが肩をがっくりと落とす。話の流れから、僕は葵さんに視線を向ける。

「一学期の期末テスト、トップの朝霧葵さん」

頂垂れたまま、綾音さんが右手を葵さんに向けた。

「すごい」

進学校で有名な学園でトップということはかなり凄いことじゃないだろうか。僕は素直に感嘆の声を上げた。

「そんなこと」

「さすがに葵が謙遜したら嫌味にしか聞こえないからなしね」

綾音が葵さんの言葉を遮って制し、葵さんは苦笑した。

「うんうん。トップなんだから謙遜することないと思う」
「その言葉。そっくりそのまま、楓に返す」

遙に言われて、僕も苦笑するしかなかった。

「失礼します。和風きのこのスパゲティです」

数分後、ウエイトレスさんがやってきて、注文した四人分の料理をテーブルに置いていく。

手を合わせて小さく『いただきます』と言ってフォークを持つ。
パスタにフォークを軽く突き刺しクルクルと回してフォークに巻きつけて口に運ぶ。

低価格がウリのチェーン店なので、凄くおいしいということはないけど不満もないそこそこな味だった。

「へえ〜。上品に食べるのね」

クルクルとパスタを巻きながら顔を上げると、綾音さんがハンバーグを頬張りながら僕を見ていた。

「ん、そう？ って、はやっ」

驚く僕の視線の先には、もう半分も消えてしまったハンバーグ。遙が食べるのが早いのは知っていたけど、綾音さんも負けず劣らずの早さだ。

まさか葵さんも……と慌てて見ると、こちらはあまり減っていない

い。
よかった。これで葵さんまで早かったらどうしようかと。
視線に気づいた葵さんが僕を見て微笑んだ。

「遙も綾音も早くていつも私一人だけ残されてたの。楓ちゃんがい
てくれてよかったあ」

「それ分かる。一人だけ食べてるとジツと見られてる気がして落ち
着かないよね」
「うんうん」

葵さんと話しながら食事を進めていく。

半分ほど食べたところでお腹がいっぱいになってきた。

……結構量多いなあ。

「……ジイ」

視線を感じて顔を上げると、もう食べ終えた遙がものほしそうに
こっちを見ていた。視線を追うと、思ったとおり目の前のパスタに
注がれていた。

「いる？」

「いる！」

お皿を持ち上げる僕に、遙は子供ののように元気よく頷いた。苦笑
しながら少し残ったパスタをお皿ごと遙に渡した。

「食い意地はってるわねえ」

「遙同様食べ終えた綾音さんが呆れたとでも言うように、半眼で遙
を見る。」

「楓はいつも残すからな。勿体無いだろ？」

「楓ちゃん小食なの？」

「うん。あまり食べられなくて」

「ダイエットとか無縁そうね……羨ましいわ」

「お前、部活であれだけ動いてるのに気にしてるのかよ」

「その分食べてるからしょうがないでしょ……」

呆れたように遙が言い、それに綾音が弱々しく反論した。

「うーん……でもやっぱり食べられないのはキツイと思う。特に夏はそのせいでよくフラフラするし」

「そ、それは困るわね。そういえば楓は見た目あまり運動は得意そうには見えないんだけど……向ここの学校ではどうしてたの？ やっぱり体育は見学していたのかしら？」

僕は視線を上げて天井を見ながら、しばらく考える。

「出来るだけ参加するようにしてたけど……時々は休んでたかな」

中学の頃を振り返ってそう答えた。

「話の流れ的に楓が言いそうにないから名誉のためにアタシが言うけど、これでも楓は運動神経良いんだぞ？ 持久力がないだけで」

パスタを平らげてコーラを一気に飲み干して遙が言う。

「だから出席すれば活躍するんで、体育の成績も結構いいんだよ」

「へえ〜。意外ね」

「楓がスポーツする姿を見た人はみんなそう言うよな。楓」

「そ、そうかな……。遥飲み物は？」

自分のお茶がなくなったので、淹れにいくついでに遥の分も聞く。

「アイスコーヒー」

頷いてから葵さんと綾音さんもほとんどなくなっているのに気づく。

「葵さんと綾音さんは？」

「自分で淹れるので一緒に」

「あたしは遥と違うからね」

三人で席を離れ、それぞれ飲み物を淹れて戻ってくる。

「はい。砂糖もミルクもいららないんだよね？」

「ああ。さんきゅ」

僕からアイスコーヒーを受けとって、またストローを使わずに飲み始める。

「ほんと、よく砂糖もミルクもなしで飲めるよね」

「楓は砂糖入れてもコーヒー飲めないじゃん」

「苦さが勝っちゃってダメなんだよね。アメリカンとか薄くすればなんとか飲めるけど美味しいとは思わないし」

僕は紅茶にミルクと砂糖を2本入れてかき混ぜて一口飲んだ。
少し砂糖が足りなかった。

「さっきの話に戻るけど、それだけ運動神経良かったら体育会系の

部活がほつとかないと思うけど、楓は部活何かやってたの？」

「一応中学の頃の所属は剣道部だった……かな」

ほとんどマナージャーみたいなことしかしてなかったけど、間違いないはずだ。

「剣道ね……剣道ってことは級とか段があるのよね？　いくつだったの？」

「去年二段になったよ」

「ふーん。よく分かんないけど二段って凄いいんじゃない？　やつぱり段っていうくらいだから」

「うーん……」

どうなんだろう。同級生の中にも二段取っている人はいたし、それほどでもない気がする。

「奈菜は……桜花の友達に楓のこと褒めてたけどな。初段に続いて二段も一発合格でとかなんとか」

「じゃあやつぱり凄いのね。あたしもそういう段とかあるスポーツにしたら良かったかしら」

「綾音さんは部活は何かしてるの？」

「あたしはバレエ。ちなみに葵は料理部ね。ついでにもう一人は帰宅部」

「ついでっていうな。ついでって」

「あなたは決まった時間に決まったメニューをこなすなんて無理だもんね」

「アタシは練習しなくてもそこそこいけるからいいんだよ」

反論する遥だけど、綾音さんはそれを聞いてにやにやと笑っている。

「葵さんは料理部かあ……」

「うん」

「桜花では剣道部だったし、学園ではそういう文化系の部活に入るうかな」

「文化系の部活も楽しいよ」

葵さんが微笑みながら手招きする。

「あら、剣道はやらないの？」

「うん。剣道は元々友達がいたから始めたようなものだし」

「もったくない……」

「まあ楓はそっちの方が似合ってそうだからそれでいいと思うな。

それに、剣道ってあの防具着るだろ？ よくあんな臭いもの着れるよな。あれ、洗えないんだろ？」

「うん」

「うへえ。楓はそれやめて正解」

「あんた剣道部員に喧嘩売ってるわよね……」

「事実を言ったまでだ。実際臭いしな」

ひどい言われようだ。奈菜が聞いたら絶対怒るだろうなあ……。

「ところで桜花では、授業でバレエってやっていたのかしら？」

「うん。数えるくらいだけど」

まさかバレエ部へ勧誘……とかはないよね？

「よし、これなら今度こそ我が二年D組が優勝できそうね！」

次の言葉に身構えていたら、突然綾音さんは立ち上がってガッツ

ポーズを取った。ここがお店の中だということを忘れているのだろうか。

何人かの人がこっちを見てて、少し恥ずかしい。

「何をこだわってるんだか。クラスマッチなんて優勝しても何もないじゃないか……」

遙が面倒くさそうに吐き捨てた。

……ん、クラスマッチ？

「そっちはただのクラスマッチでも、こちらはバレー部部长としてのプライドがあるのよ!」

「プライドなんて捨ててしまえ」

綾音さんが部長だということに少し驚きつつも、僕は疑問を解決することを優先することにした。

「綾音さん。クラスマッチって?」

「クラスマッチっていうのは、来週の月曜、今日が金曜だから三日後ね。三日後に行われる全校生徒参加の球技大会よ。種目は女子はバレー、男子はソフトボール。一学期のクラスマッチでは準優勝に終わったから今度こそ優勝をいただきたいのよ」

拳を握って力説する綾音さんから意気込みが伝わってくる。それだけ負けたことが悔しかったのだろう。

それにしても、よく一学期にクラスの親睦を深めるためにとクラスマッチを行うというのは聞くけど、二学期にもあるのは初耳だ。とくに学園は進学校だからそういうことはしなさそうに思ったけど。

「うちの学校は行事多いから覚悟しといた方がいいわよ」

僕の様子に気づいたのか、綾音さんがそう付け加える。

「これが終わっても、来月には学園祭で忙しくなるからね」

「学園祭の後には修学旅行があつて、帰ってきてすぐ中間テスト。頭が痛くなるな……」

「あなたは旅行中に勉強したこと全て抜けてしまいそうよね」

「どうせ一夜漬けするから問題なし」

「ああ。あなたに予習復習という言葉はなかったわね。忘れてたわ」

「アタシは過去は振り返らないことに決めているからな」

「過去は振り返らなくても、せめて復習くらいはしようね、遥」

そのあと僕達はウェイトレスさんに白い目で見られるようになるまで、これから訪れるイベントの話に花を咲かせた。

第2話 楓と遥 part 6

数時間後。心持ち店員に白い目で見られながらプランナスを出た僕たちは、まだ早い時間だったけど、綾音さんが『明日の実力テストに備えて勉強したい』ということでお開きとなった。

葵さんと綾音さんは電車に乗って帰るということで、桐町を出たところで別れた。

「うっ……」

アーケードを出ると日差しが肌に突き刺さった。

僕の小さなうめき声に遥が敏感に反応した。

「まだキツイな……。楓、日傘は持ってきたか？」

「うん。鞆の中に」

言い終わる前に遥は僕の鞆をひったくると、中から日傘を取り出して広げた。

「まだまだ暑いんだから、注意しろよ？」

「う、うん。ありがとう」

遥から鞆を返してもらい、次に日傘を受け取ろうと手を伸ばす。けれど、遥は僕の手の届かない所に傘を持ち上げた。

朝も同じことされたよう……。。

「ちよ、ちよつと遙？」

「まあまあ。楓は大人しく入ってればいいんだよ」

「……わかった」

逆らっても無駄だと言うことは分かっているのに、早々に諦めた。どうせこの身長差だ。なにをどう頑張っても取り返せっこない。

「ちゃんとアタシの傘使ってくれてるんだな」

「うん。遥からもらったものだから、大事に使わせて貰ってるよ」

「アタシから、か……」

開いた傘を眺めていた遥は嬉しそうだった。

「そうだ。楓んちってどっちにあるんだ？」

「んーと……柳町五丁目に公園あるんだけど、その近くのマンション」

「柳町の五丁目……あー、楓んちってあのあたりだったのか」「知ってるの？」

少し驚いて遥に聞き返す。

「ああ。いつも登下校で使うバス停がその近くなんだよ。それならちようど良かった。家まで送るのも楽だ。……そうか、柳町か。だったらこれから毎日一緒に学校……って無理だな。ただでさえ朝はギリギリなのに、あのバス停からだ、楓んちは少し戻ることになるからなあ……。物理的に不可能だ」

腕を組んで唸る遥を見て「早く起きればいいんじゃない？」という言葉が頭に浮かんだけど、今日も椿に起こしてもらった僕が言える立

場じゃない。なにより遙は僕以上に朝に弱い。僕を家まで迎えに来るなんて到底無理だろうし、時間を決めて、通学路のどこかで待ち合わせをしたとしても、きっと遙は時間ギリギリまで来ないだろう。遙のように朝から全速力で走るなんて僕にはできることじゃない。結論。朝は遙と登校するのはかなり危険。遅刻的な意味でも体力的な意味でも。

「いや、そこをなんとかして楓と通えるように」

僕は少しおかしくなって笑いそうになったけど、なんとかこらえた。

別に朝一緒に登校するだけのことにここまで考えるなんて。なんか遙らしくない。

「朝は椿と通うことになっているからいいよ」

「そ、そうか？ あー、そういえば椿がいたな。それなら安心だ」

ホッと胸をなでおろす遙。

まったく……。そんなに心配しなくても、僕はもう大丈夫なのに。

「どうだ。葵も綾音もいい奴だろ？」

「うん」

僕が頷くのを見て、嬉しそうに遙は微笑む。

紗枝（ネエ）のように活発な綾音さんと、大人しくて優しそうな葵さん。

どちらもいい人だと思う。いや、遙の友達なんだから間違いない

い人なんだろう。

「でも、綾音さんはともかく葵さんとはどうやって仲よくなったの？」

葵さんの名前が出て来たので、丁度良いと思った僕は、昼間疑問に思ったことを遙に聞いてみることにした。

「ん？ あー、葵か？ 葵は綾音と幼馴染で、綾音からの紹介だよ」

なるほど。綾音さん経由ということであれば納得がいく。

「なんでそんなこと聞くんだった？」

「だって葵さんと遙じゃ性格全然違うから」

「あーたしかに。でも、それだったらアタシと楓も似たようなモンだと思うけど？」

「……言われてみれば」

今気づいた。たしかに遙の言う通りだ。

「まあアタシ達の場合は、寮でルームメイトだったのが大きいな」

「あの時の遙はしつこいぐらいに僕に話しかけてきたよね。こっちは人見知り激しくてほとんど無視していたのに」

「そういうこともあったなあ」

傘を少しだけ傾けて、遙が空を見上げた。

「なんか意地みたいなのが見えたよ。僕と話をするんだ！ みたいな」

自意識過剰でもなんでもなく、あの頃の遥は凄かった。

当時の僕は人見知りやら友達作り方が分からないやら女になって初めての学校やらで、常に余裕がなくて、遥には冷たく当たっていた。なのにそれを遥は気にもせず毎日僕に話しかけ続けた。

おかげで今ではこうして遥と友達になれたわけだけど、どうして遥はあの時、お世辞にも良いとは言えない対応をしていた僕なんか一生懸命関わろうとしたんだろう。ルームメイトだから仕方なくと言えばそれまでだけど、あの頃の僕と遥は別のクラスだったし、桜花の寮は寮母に言えばすぐにも部屋を変わることが出来た。だからあんなに無理して仲良くなる必要もなかったのに……。

「まーあれだ。なんとなくだ」

「なんとなく？」

曖昧な答えだった。本人もそれを理解しているようで、僕から目を逸らして頭を掻いた。

「そう、なんとなくだよ。なんとなく、楓とは絶対に友達になりたかったんだよ」

どこか遠くを見たまま遥がぶっきらぼうに言った。よくよく見ると、夕焼けの色に混ざって遥の頬は少し赤くなっていた。

「……そっか。なんとなくか」

「ああ」

過去は振り返らない。遥はさっきそう言っていた。だっただけならそれに習おう。

僕はそれ以上何も聞かなかった。

「ああそつだ。楓、日曜は暇か？」

「うん」

しばらくの沈黙のあと、遙が先に口を開いた。

「じゃあ日曜は久しぶりにどこか遊びに行くか。奈菜や紗枝も呼んで」

紗枝……浅野あんのん紗枝は、奈菜や遙と同じく、幼等部から桜花に通っている子で、僕たちの友達だ。彼女は今も奈菜と同じく桜花に通っている。

ただ、紗枝とは遙や奈菜ほど遊んだという記憶はない。それは僕だけじゃなく、遙や奈菜にも言えることだけだ。

紗枝の所属する柔道部は桜花では珍しく外部コーチを呼ぶほどの熱の入った部で、休日も返上して練習をしている。それに加えて浅野家という財閥の一人娘ということで、中学一年生の頃から勉強を兼ねて両親の仕事の手伝いをしているらしい。

おかげで日曜日も連休も夏休みのような長期休暇の時も紗枝は何かと忙しく、僕達とはなかなか時間が合わなかった。

とはいえ、それでも桜花にいた頃は少しでも時間があれば一緒に遊びに出かけていたし、平日でも寮生活のおかげで放課後から寝るまでの間一緒にいられたから、紗枝を遠くに感じたことはなかった。もう僕と遙はあの学校から離れてしまったけど、まだ奈菜もいるし、僕も遙も紗枝には定期的に電話している。きっと彼女も僕たちも、お互いが離れてしまって寂しいなんて思ったことはないだろう。

「紗枝は空いてるどうか分からないけど、奈菜は大丈夫だろ」

「そっだね」

「じゃ、膳は急げだ」

そういうと、遙はポケットから携帯電話を取り出して二人にメールを送った。すぐに二人からメールが返ってきた。

「返事は？」

「お、二人ともOKだと」

「珍しいね。紗枝が空いてるなんて」

「そっだな。レギュラーから外されでもしたか？」

「それはないよ」

遙が笑みを浮かべて返事を書く。きつと久しぶりに紗枝と会えるのが嬉しいんだ。

「よし、日曜はいつもの駅前集合。いいよな？」

「うん」

いつもの、ということとは桜花の最寄り駅のこと。あの駅周辺も、桜町と変わらないくらいお店があるから遊ぶには十分だ。

その後何度か二人とメールをやりとりしていると、気づいたときにはマンションにたどり着いていた。

「んじゃ。また明日な。明日も暑いだろうから日傘忘れるなよ？」

遙は日傘を折りたたんで僕に返すと、軽く手を挙げて踵を返した。

「うん、わかった。また明日ー」

角を曲がって見えなくなるまで、僕は遙に手を振って見送った。

「あ、お姉ちゃん。おかえり」
「ただいま」

リビングに入ると、椿が部屋着に着替えてソファーに座りテレビを見ていた。僕は鞆をソファーの脇に置くと、椿の隣に腰を下ろした。

ふと目の前のローテーブルに視線を落とすと、ポテトチップスの袋が開けて置いてあった。僕はその袋に手を突っ込んで一枚手に取り一口食べた。薄塩味だった。

何を見ているんだらうとテレビに視線を向ける。子供向けのアニメのようだ。

「どうだった？ 学校は」
「ん？」

ポテトチップスを食べながら視線をテレビから椿に移すと、椿が少し心配そうな顔をして僕の顔を覗き込んでいた。

パリパリとポテトチップスを一枚食べ切ってもう一枚取る。視線をテレビに移してから僕は口を開いた。

「楽しそうな学校だね」

僕がそう言うと、椿はパアッと表情を明るくして「うんっ！」と元気良く頷いた。

第2話 楓と遙 part 6 (後書き)

第2話 楓と遙 完

登場人物紹介 part 2 遙・葵・綾音 挿絵

○水無瀬 遥 みなせ はるか

> i 1 8 2 7 2 — 2 1 9 9 <

年齢：17歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年D組

部活：無所属

特徴：身長：高 肌色：黄 髪：猫毛の茶色のショート

一人称：アタシ

中学までは『私立桜花女学院中等部』に所属。

楓が元男だったことを知っている。財閥の一人娘。

楓とは中学の二年間寮のルームメイトであり、実の妹のように可愛がっている。

運動神経が良く、しばしば綾音や沙枝と勝負することがある。

中学の頃から何かと事件を起こしており、そのせいで有名人である。

第3話表紙

○朝霧 葵 あさぎり あおい

> i 1 8 3 5 3 — 2 1 9 9 <

年齢：16歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年D組

部活：料理部

特徴：身長：中 肌色：黄 髪：茶色のセミロング
一人称：私

綾音とは幼馴染。

料理が得意であり、学年成績トップの才女。

○白水 はくすい 綾音 あやね

> i 1 8 3 5 1 — 2 1 9 9 <

年齢：17歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年D組

部活：バレー部部长

特徴：身長：高 肌色：黄 髪：黒色のショートのパニーテール
一人称：あたし

バレー部のエースであり部長。
葵とは幼馴染。

第3話 学園デビュー part 1 表紙(前書き)

> i 1 8 2 7 1 | 2 1 9 9 <

第3話 学園デビュー part 1 表紙

転校して2日目。

今日は綾音さんが言っていた実力テストの日だ。

本当だったらもつと気楽にテストを受けられるはずだったのに、昨日遥が葵さんや綾音さんに『桜花では一桁だった』なんて言ってしまったから、下手な点数を取れなくなった僕は、昨夜は早めに晩ご飯とお風呂を済ませ、ドラマを見る椿を横目に部屋に戻り机に向かった。遥に電話して聞いたところ、範囲は特に決められておらず、高校一年から前学期分までの広い範囲から出題されるとのことだった。つまりたった数時間で五教科の一年以上もの復習をしないといけないことになった。仕方なく僕は一学期の範囲と思われる箇所に通すだけにした。それでも結構な時間がかかり、全て目を通し終えた頃には日付が変わってしまっていた。

おかげで今日は朝から頭がフラフラし痛みも伴った。あまり調子が良くない。薬を飲もうかと思っただけど、この程度で飲んでいては薬がいくらあっても足りないし、飲み過ぎると薬に体が慣れて効き目が薄くなったり、場合によっては利がなくなると医者から言われているので極力飲まないようにしている。

そんなわけで今日は薬を飲まず、重い頭を抱えて登校することにしました。

昨日のように椿と並んで一緒に学校へと向かう。心配されないようにと平静を装いながら。

「お姉ちゃんも昨日のドラマ見れば良かったのに。面白かったよ？」

椿は昨日のドラマの話題を僕に振ってくる。

「そう？ でもあのドラマ一話すら見てないからなあ」

「えー、あれ結構人気だよ？ 友達もみんな見てるし」

「ふーん……」

僕は無難に受け答える。

……椿の様子はいつも通り。ちゃんと騙せているようだ。

もちろん今も頭はズキズキと痛みを発している。時々大きな波が来て顔を歪めそうになるけど、なんとか耐えている。

昨日帰って来た時に僕に見せた椿の心配そうな表情から、椿が僕のことを凄く気にかけていることが分かる。

椿の姉として、これ以上椿に心配をかけるわけにはいかない。

「途中からでも絶対見るべきだよ。あ、友達がたしか録画していたと思うから借りてこようか？」

「うーん。そこまで言うなら見てみようかな」

「うん。絶対面白いから！」

……頭痛い。

椿と階段で別れて教室に入ると、中はピリピリとした雰囲気包まれていた。

さすが進学校。成績とは関係ない実力テストと言えど、手を抜くということはしないらしい。

中にはバンドナを巻いてる人までいるし、その意気込みが伺える。

「おはよう」

「よ、よお……」「おはよ」「おはよう。楓ちゃん」

遙、綾音さん、葵さんと挨拶を交わして席に着く。

周りを見ると、席に座り教科書を開く者、単語帳を片手にブツブツと呟く者、教室後ろのロッカー前に立ち、友達同士で問題を出し合っている者と、みんな最後の追い込みに余念がないようだ。

それに引き換え……と、僕は視線を遙、綾音さん、葵さんに向けてる。遙は昨日と同じく全速疾走で登校してきたようで、額には汗をかき、息はゼーゼーと荒いまま、鞆を枕のようにして抱えて休んでいる。そんな遙の前の席では、綾音さんが葵さんと向き合って昨日のドラマの話をしていた。

「楓は昨日のサマバケ見た？」

『サマバケ』とは、登校時に椿が話していたドラマであり、正式には『サマーナイトバケーション』という。たしか先月から始まったドラマで、内容はよくある恋愛物らしいけど、主役が今人気の俳優ということでも毎週高視聴率を記録しているとか。

「ううん。見てない」

「え〜。昨日良いところだったわよ」

綾音さんは勉強すると言って帰ったはずなのにすっかりドラマは見ていたらしい。

元々そういう物に興味がない僕は、昨日に限らずいつもその時間帯は部屋で過ごしている。昨日のように翌日にテストを控えていなければ、音楽を聴きながら読書するのが日課になっている。

「まさかあそこで告白するとは思わなかったよね」

「ええ。ジュンかつこよかったわ。早く来週が来ないかしら……
つて、遙」

「ん〜？」

鞆を抱えたまま、視線だけを綾音に向けて遙が返事する。

「……振りだけでもいいから悪あがきしといたら？」

「しんどい……じゃない、めんどい。そういう綾音も成績アタシとそんなに変わらないんだから悪あがきすればいいんじゃないか？」

やっと遙が上体を起こして鞆を机の脇に置く。

「あたしは真ん中より上だったらいいのよ。一応これでも昨日の夜に一通り復習はしているのよ？」

「中の上も中の下も大差ないだろ」

「五段階評価の三と二は大きいわよ」

睨みあう二人。いつもの光景なのか葵さんはそれを止めようとせず、むしろ楽しそうに観戦している。周りじゃ最後の追い込みをしている最中だというのに、ここだけ浮いているような気がしてならない。

まあ、みんな最後の追い込みに必至なようで、こっちの様子なんて気にかけてないようだけど。

そうこうしているうちにチャイムがなり、担任の先生が教室に入ってきた。

簡単に試験の説明をして出ていき、かわりに問題用紙を持った先生が入ってくる。

カンニング防止のためということ、机の中の物を教室後ろにある個人用ロッカーの中に入れ、その上に鞆を置いて席につく。まだ

男の子数人が教科書や単語帳を見ていたけれど、すぐに先生に注意されるとロッカーの上に放り投げて席に着いた。

教室がシーンと静まり返るなか、先生が問題用紙を配っていく。裏返しにされた問題用紙に視線を落とすと、透けて見える様子から1時間目は国語ということが分かる。

チャイムが鳴り試験が始まる。

問題用紙を返して、まずは一通り目を通す。

……うん。全然分からないということはなさそうだ。

よしっ、と気合を入れて問題を一つずつ解いていった。

「30分経ちましたので退出する人は問題用紙を裏返して静かに退出してください」

先生が言い終わるとほぼ同時に、最後の問の解を書き終える。

シャーペンを置いて手のマッサージをしていると、前の席の葵さんが立ち上がり、こちらをちらつと見たあとに先生から見えない位置で軽く手を振って教室を出て行った。

早いなあ……。さすが葵さん。

隣を見ると、綾音さんは頭を抱えては少し書き込みまた頭を抱えては書き込む、を繰り返していた。かなり苦戦しているようだ。遥に至っては机に顔を伏せてまったく動いていない。

はあ……。まったく。

僕は消しゴムを少し千切って遥にそれを投げつける。

ぺちつと頬に当たり、顔を上げた遙が寝ぼけた表情でキョロキョロとあたりを伺う。

やがてこつちを見た遙に『お・き・ろ』と口ぱくすると、不満そうに眉間に皺を寄せ、渋々といった感じでシャーペンを手に取った。遙が問題を解き始めるのを確認してから、僕は解答を見直し始めた。

試験開始から五〇分後。

「はいそこまで。鉛筆を置いてください」

1時間目終了のチャイムがなり、先生が解答用紙を回収し、教室を出て行った。

「あー。しんどい……」

遙が机に突っ伏し、廊下から葵さんが戻ってきた。

「葵さん早かったね」

「私テスト中に聞こえるシャーペンの芯を出す時のカチカチって音と、書く時のカツカツって音があまり好きじゃなくて……。それで出来るだけ早く解いて退室するようにしてるの」

「あの音かあ……」

たしかに、僕も葵さんほどではないにしろ、例えばボールペンの芯の出し入れする時のカチカチ音は好きじゃない。それで退室を早めるなんてことはしないけど。

「アタシはあれで寝れるけどな」

「寝てどうするのよ……」

綾音さんが遙にツッコミを入れるけど昨日のようなキレがない。二人ともこんな状態であと四教科乗り切れるのだろうか。

昼休み。

午前の四教科の試験を終えた僕はさすがに疲れていた。

頭痛もまったく収まる様子がないし、それどころか悪化している気さえする。今勢いよく立ちあがりでもしたらすぐ眩暈を起こして倒れる自信がある。

残すは午後からの英語一教科だけど、少し休憩しないと頭が回りそうにない。

「学食行くか」

さっきまで眠そうな顔をしていた遙が元気よく立ちあがり、綾音さんと葵さんがそれに続く。

ゆっくりと立ちあがって葵さんを見るとその手には小さな袋が握られていた。

「葵さんお弁当なんだ」

「うん」

「毎朝起きて作ってるんだと。料理部がやるのが違うな」

朝か……僕じゃ無理だろうなあ。
今日も椿に起こされたことを思い出してため息を吐いた。

学食へ来た僕たちは葵さんに席をとってもらっている間に各々注文し、受け取り、レジを通って葵さんがキープしているテーブルについた。

「ここ食券じゃないんだね」

思ったことを口に出してみる。

「ああ、そういえば桜花じゃ食券だったな。これはこれでいいと思うけど、たまーにあのおばちゃん注文間違っただよなあ」

「その時は作り直してもらったらいいいじゃない。食券みたいに取り間違いないから、あたしはこっちの方がいいと思うわ」

大盛りの丼物を食べながら遙と綾音さんが言う。

……昨日といい今日といい、二人ともよく食べるな。

僕はエビピラフを突っつきながら葵さんのお弁当を見る。

「葵さんのお弁当すごいね」

「そう?」

葵さんのお弁当はいくつかの料理が彩りよく綺麗に詰められていた。

さすが料理部。

「料理部、か……」

「おいでおいで。歓迎するよ」

葵さんのお弁当を見ながら唸っていると、葵さんが手招きした。

「椿ちゃんもいるし」

「へ？ 椿？」

「うん。椿ちゃんも料理部だから」

そういえば、椿は料理部って言ってたっけ。……そうか。それで昨日葵さんは僕達の教室に来た椿を見て頷いてたんだ。

妹の椿と葵さんの繋がりを知り、少しだけ運命みたいな物を感じた。

「しかし、まだ一教科あるのか。しかもそれが英語」

空になった井をトレイに乗せながら遙が言う。

「アタシは旅行も込みで海外に出るつもりなんてないのになあ」

「いや、そういう問題じゃないでしょ。今じゃ日本でも標識に英語表記されたりするんだから、海外に出るつもりなくても英語に触れる機会はあるでしょ？」

「断固として拒否する」

「あんたがイヤだと言っても、年々日本に住む外国人は増えてるらしいわよ？」

「そのための通訳だろ？」

「通訳って……。そういえばあんたってお金持ちの子だったのよね。」

そんなんだからさっぱり忘れてたわ」

遙の両親は水無瀬グループという日本を代表する大企業の社長であり、遙はその両親の一人娘だ。遙の両親とは何度かあったことがあるけど……少し娘の遙のことを溺愛しすぎている気がする。おかげでこんなに伸び伸びと良い子に育ったとも言えるけど……少々やんちゃに育ってしまったとも言える。

「まあ通訳のことは冗談として」

「あんたが言つと冗談に聞こえないのよ」

綾音さんが遙を半眼で見る。

まあまあと綾音さんを制しながら、遙が僕に視線を向ける。

僕が無言で半分以上残ったエビピラフを差し出すと、『もう少し食べる』とでも言いたげに睨んできたが、首を横に振ってピラフを遙の前に置いた。遙はしばらくそのまま睨み続けあと、ため息を吐いてスプーンを手を持った。

食欲ないのに、ご飯物にするんじゃないかった。

「今日はあと一時間で終わりだけど、放課後は何か予定あるのか？」

遙がスプーンでピラフを掬いながら尋ねる。

「あたしは部活よ」

「私も部活」

綾音さんと葵さんが答える。

二人とも部活か……。

「へ〜。テスト後だったのによくやるな」

「週明けにはクラスマッチがあるからね。下手なところ見せられな
いわよ」

「部長から連絡あって、ケーキ作るうって言われたから」

綾音さんはフンツと胸を張り、葵さんは苦笑した。

「遙は放課後どうするの？」

「アタシか……。やることないし、帰って寝るか」

遙がそう言って笑う。

それなら僕も頭痛が酷いし、帰って寝ようかな。

「楓ちゃん」

思索していると葵さんに声をかけられた。

「よかつたらだけど、部活見学してみない？ あ、見てるだけじゃ
暇だから体験入部でもいいよ」

「体験入部かあ……」

「あら？ 楓は料理部に興味あるんじゃないの？」

すぐに返事しない僕を不思議そうに見ながら綾音さんが言う。

「何か用事あるなら仕方ないだろうけど、暇なら行ってみたら？」

「うん。でも……実際本当に入部するとしたらどうかなって。いい
のかな？ 僕二年なのに」

やっぱり部活というものは一年生から、もしくは遅くても二年生
になってすぐの出来るだけ早い時期に入部するものじゃないだろう
か。今はもう九月。部活を始めるにはちょっと遅い気がする。

「そう言われてみればそうよね……。あっ、でも料理部って別に体育会系の部活みたいになレギュラー争ったり、試合があるわけじゃないから気にすることないんじゃない？」

「うん。料理部って言っても、ただみんなで集まってクッキー焼いたりケーキ作ったりするだけだから……。どう楓ちゃん？」

「別に予定もないし。うん。ちょっと行ってみようかな」

断る理由もないので了承する。

嬉しそうに微笑みながら手を取る葵さんを見て、僕も笑顔を作る。頭の奥でキリキリと痛みがするのをなんとか誤魔化して。

学食を出て、教室へ戻ると言うみんなに『先生に呼ばれているから』と伝えて一階で分かれた。

「ふう……。……。っ」

みんなが見えなくなると安心して気が緩んだのか、ゆっくりと視界が地震でも起こったかのように斜めに揺れ始めた。同時に吐き気も感じ、足から力が抜け、慌てて壁に手をつけて体を支えた。

思った以上に調子が悪くなっていた。薬を飲むべきだろうけど、薬は教室の鞆の中。遙達がいるだろうから、取りに行くわけにはいかない。

少し横になれば治るだろうと、保健室のベッドを借りようかと考えた。しかし後で保健室の先生経由で遥に体調が悪かったことがばれたら間違いなく怒られる。そう思い僕は保健室の案を棄却する。

どこかに休める場所がないかと壁に手を付きながらしばらく歩くと、少しだけ扉が空いている部屋を見つけた。

おそろおそろの中を覗くと、教室の半分ほどの大きさの部屋の中央に、長机と椅子が数個置いてあるのが見えた。

……もうここでもいいや。誰か来て注意されたら謝ればいい。

吐き気が酷くなり、すぐにでも横になりたかった僕は、部屋の中に入りドアを閉めると、椅子に座り腕を枕にして机に突っ伏した。

目を閉じてもしばらく眩暈は続いたけど、少しずつ軽くなっていき、収まる頃には眠りについた。

「……あら」

楓が眠る部屋に制服を着た少女が入ってきた。胸元の校章が銀色なので三年生のようだ。

彼女は肩にかかった金色の長い髪を払いながら屈んで楓の顔を覗き込む。

「熱は……ないようね」

楓の額に手をあてて眩き、ほっと安堵したように微笑むと、そつと部屋を出て扉を閉めた。

「んん…」

目が覚めて起き上がり時計を見ると、午後のテストが始まる十分前だった。

少し頭が痛いけど、さっきまでの気分の悪さはない。かなりマシになったようだ。

立ちあがって軽く伸びをして、座っていた椅子を元の位置に戻して部屋を出る。

扉を閉めて、一体何の部屋なんだろうと思って見上げると、プレートには『四季会室』と書かれていた。

四季会という言葉に何かひっかかったが、予鈴とともに考えるのをやめ、急いで教室へと戻った。

第3話 学園デビュー part 2

「お、きたきた。遅かったな」

「ごめん、ちよつと時間がかつちやって」

何故か携帯電話を手に持った遙が、教室に入って来た僕を見つけてすぐに声をかけてきた。

僕が席につくと、綾音さんが椅子に座ったまま体ごところらに向いた。

「やっと戻って来たのね。これでやっと遙が大人しくなるわ」

「大人しくってどういうこと？」

「さっきまで遙が電話する電話するって五月蠅かったのよ。そんな小学生や遙じゃないんだからちゃんと時間までに帰って来るって言うてるのに」

「楓はこう見えて方向音痴……っておい、何気にさらっと小学生とアタシを同列に扱わなかったか？」

「さあ」

綾音さんは肩を竦めてみせてから、クルツと体を回転させた。遙はその背中を見て、「コイツ……」と呟きながら奥歯をかみしめた。

「さすがに学校で迷子にならないよ」

遙の様子に苦笑しながらそう言うと、綾音さんの背中を睨んでいた目がこちらを向いた。

「桜花で迷子になってたじゃないか」

「っつ……」

そういえばそんなことが一度あったような気が……。

「なんで迷子になるんだ？」

「そんなこと僕に聞かれても」

分かってたら方向音痴になんてなっていない。

「方向音痴の人は、今の方角が分からないって聞くけど、楓ちゃんはどうなの？ 例えば……今はどっちが北分かる？」

僕の前に席に座る葵さんの質問に答えようと、僕は窓の外を見る。……って、まだ1時過ぎだから太陽がほぼ真上でどっちが南か分からない。

「今はちょっと分からないかな……」

「今は？」

葵さんが僕の視線を追って窓の外の空を見上げる。

「もしかして太陽の位置？」

「うん」

「楓っていちいち太陽見て確認してるのか？」

「うん。普通そうじゃないの？」

僕がそう答えると、遙は腕を組んで首を捻った。

「いや、方角なんてなんとなく分かるだろ？」

遙は「あっちが北」と廊下側を指さし、葵さんが「正解」と手を

叩いた。

「なんで？」

「なんでと言われても……あー。アタシの場合はよく目印を決めて、それが見える方角が北だとか南だとか覚えてるな」

「目印か……」

たしかにそういうものを決めるといいと思うけど、建物の中や来たこともない場所だとそうもいかないんじゃないだろうか。

「方角を知る方法でもっと簡単なものだと……楓ちゃんアナログの腕時計持ってる？」

「うん」

左手を胸の辺りまで上げて、手首に巻いてある腕時計を葵さんに見せる。

「時計を太陽に向けて、その時計と十二時との間の方角が南だよ。あとは家の屋根についてるパラボラアンテナも南を向いてるかな」

僕と遙は揃って「おー」と感嘆の声をあげる。

「覚えておこう……」

「それで少しは楓の方向音痴が治ればいいな」

「ちゃんと方向音痴を治したいなら、自分が今どこにいるか地図で確認したりして、少し訓練する必要があるらしいけどね」

「訓練ね……」

そこまで大袈裟にすることかな……と考えていたところでチャイムがなり、雑談終了。本日最後のテストが始まった。

最後のテストは英語。他の教科より若干難しく感じたけど、時間ギリギリでなんとか全問埋めることができた。見直す時間がなかったけど、今の僕にできるだけのことはやったのでよしとしよう。

テストが終わると、遙は「頑張れよ」と僕の肩をポンと軽く叩いて、誰よりも早く教室を出ていった。見えなくなる前に大きな欠伸をしていたので、帰ったら本当に寝るつもりなんだろう。それから少し遅れて綾音さんが鞆ともう一つバッグを持って立ち上がり、「明後日は頑張りましょ」と僕と葵さんに手を振りながら走っていった。

「それじゃ、私達も行こっか」

「うん」

僕は葵さんに頷いて席を立ち、一緒に教室を出た。

料理部の部室がどこにあるか知らない僕は葵さんについていく。

僕の数歩先を歩く葵さんは二年生の教室がある三階から、三年生の教室がある二階に降りて、廊下を歩いていく。

二階にはまだ多くの生徒が残ってるようで、すれ違う二年生が黒の校章を付けた僕たちを珍しそうに見ている……ような気がする。

「部室って二階？」

居心地が悪くなった僕は葵さんに話しかけた。

「特別棟の三階にある料理実習教室。二階に渡り廊下があってそこから行くと近道なの」

今僕たちがいる建物、各クラスの教室があるのが一般棟。そして美術室等の特別教室があるのが一般棟のすぐ隣の特別棟という建物らしい。

たしかに三階から一階に降りて、一度外に出て、また一階から三階というのは結構しんどい。上級生の教室の前を通ることになるけど、汗をかくよりはいいかもしれない。特に今は残暑厳しい九月。炎天下のアスファルトの通路には出来るだけ出たくないし、廊下も教室から漏れ出る冷気で幾分涼しいけど、あまり長居はしたくない温度だ。

渡り廊下を通り、階段を上がったところで葵さんが立ち止まり、振り返った。

「あ、楓ちゃん。まだ聞いてなかったけど、見学か体験か、どっちにする？」

「……見学でいいかな？」

体験入部もいいかも、とは思ったけど、一、二時間前に眩暈を起こしたばかりなので無理をするわけにはいかない。それでもし倒れでもしたら、葵さんに迷惑がかかってしまう。

「うん。分かった」

葵さんは頷くと『料理実習教室』と書かれた扉の前で立ち止まる。そしてちらっと僕を見てから扉を開いた。

「おはようございます」

「……失礼しまーす」

葵さんに続いて教室に入る。返事は返ってこず、人の気配もないのでまだ誰もいないようだ。

教室には流し付きの大きな調理台があり、壁際には調理器具が納められた戸棚が並んでいる。家庭科の時間に使われるミシンやアイロンは見当たらないから、『料理実習教室』という名の通り、ここは料理するためだけの教室なのだろう。

「楓ちゃん。ここに座って見学してて」

葵さんがどこからか持ってきたパイプ椅子を広げて教室の壁際に置いた。

「ありがとう」

お礼を言っつて、鞆を膝の上に置いて椅子に座る。

「部員は何人いるの？」

「実は……私と部長と一年の子二人の四人だけ」

そう言っつて葵さんが苦笑する。

料理部だからそこまで多くはないとは思っつていたけど、意外に少ない。

「この学校は文化系よりも体育会系の部活に入る人が多くて。しかも体育会系の部活に入らない人達のほとんどは帰宅部になるんだっつて」

そういえば…昇降口にあった掲示板には『部のさん。インターハイで優勝!』などと書かれた新聞が張られていた。学校のパンフレットにもスポーツ推薦は積極的にやっている、と書いてあったし、学園自体が体育会系の部活に力を入れているのだろう。

「ってことは、文化系の部活はどこもこんな感じ?」

「演劇部とか吹奏楽部とか、人気のあるところを除けばどこも部員不足だと思う」

なるほど……。

桜花の生徒会長をしていた奈菜曰く、部費は部員数と学校への貢献度に比例するという。この学校もそうなのだとすると、葵さんが僕の入部に積極的になるのも頷け

「ああつ。楓ちゃんを誘ったのは部員数稼ぎでも部費目的でもないよ? 材料は持ち寄りだし、調理器具は今あるもので間に合ってて部費があってもほとんど使わないから。ただ私は同学年の子と部活動したいな、って」

葵さんが恥ずかしそうに頬を少し赤らめる。

桜花の剣道部にも同学年の子がいなくて、そこに僕が入部したので奈菜が凄く喜んでいたっけ。まあ、あれは廃部にならなくて済むという喜びの方が大きかったんだと思うけど。

「おはようございまーす!」

ガラッと勢いよく扉が開き、元気よく挨拶しながら女の子が入ってきた。

校章が白色なので一年生だろう。葵さんより少し低い身長。短めの黒髪で、前髪は大きく左右に分けて額を出している。

「おはよう。香奈^{かな}」

「おはようございます！　ところで葵先輩。実力テストはどうでした？　あたしはもうぼろぼろだったんですけど……って、葵先輩は聞くだけ無駄ですよ。はあ。ぜったいお母さんに怒られるうう。まっ、いつものことなんですけどね。あはははっ」

元気だと思ったら俯いて頭を抱え、そうかと思いきやすぐに立ち直って笑いだす女の子。

表情がころころとよく変わる子だ。

「あれ、先輩、こちらの方ってもしかして……」

僕の存在に気付いた彼女は、遠慮がちに手のひらを上に向けて前に出し、葵さんに訪ねた。

「昨日転校してきた、私と同じクラスの四条楓ちゃん。今日は部活を見てもらおうと思って」

「はじめまして」

葵さんに紹介されて、僕は椅子から立ち上がり頭を下げる。

「わわっ。えっと、一年A組料理部所属の高内^{たかうち}香奈^{かな}と言います。こちらこそよろしく願いますっ」

慌てた様子で高内さんが僕よりも深く頭を下げる。

「いや。まさか噂の先輩を間近で見られるとは……今日はテストで疲れたので部活休もうかと思ってきましたが来てよかったですっ」

高内さんが胸の前で手を合わせて目をキラキラと輝かせる。

「噂って?」

「あ、え、いや。な、なんでもないです。あはははっ……。あ、部活の準備がありますので失礼しますーっ」

そう言つと高内さんは隣の部屋に走り去ってしまった。

笑つて誤魔化された気がするが、何でもないと言われたのはこれ以上聞くのは気が引けるし、よく考えればこの時期に転校生なんてかなり珍しいだろうから、きつとそういう意味での噂なのだろう。……なんか葵さんが笑つてるけど、そういうことにしておこう。

「おはようございます」

「おはようございます。部長」 / 「おはようございまーす」

葵さんと話していると、金色の長い髪をした女の子が入ってきた。校章は銀色……。三年生で、葵さんが部長と言ったから、この人が料理部の部長ということなのだろう。

金色の長い髪に白肌、よく見ると瞳の色も青いし身長も高い。でも顔立ちは日本人なので生粋の外国人ではなさそうだ。ハーフかクォーターというやつかな。

「あら、あなたは……」

「昨日転校してきた同じクラスの四条楓ちゃんです。部活見学にきてもらつたんです」

「四条楓ちゃん……ああ、例の……」

何か納得した風に頷いて部長さんがこっちにやってくる。

「塚崎穂乃花つかさきほのかです。よろしく」

塚崎先輩は軽く会釈して微笑んだ。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

大人っぽい人だなあ、と思った。

物腰は柔らかいし笑顔も品がある。桜花にもこれだけ様になる人はなかなかいないんじゃないだろうか。

そんなことを考えていると、塚崎先輩が顔を寄せて耳元で囁いた。

「もう大丈夫なの？」

「……はい？」

「あなたお昼に四季会室で寝ていたでしょう？」

見られていた!?

僕は驚いて塚崎先輩を見つめる。

「ああ、安心して。誰にも言っていないし言わないから。転校生のあなたが保健室にも行かず、あんなところで寝ていたということは何かしら理由がある、ってことよね？」

「は、はい……」

その理由が遥に怒られるのが嫌だったからとは言えない……。

「それで、もう大丈夫なの？」

「はい。もう大丈夫です」

「そう、よかった。あの部屋は放課後以外は私くらいしか使わないから、また何かあったら使ってもらって構わないわ。……それじゃ、ゆっくりして行ってね」

そう言っただけ微笑むと、塚崎先輩は高内さんと同じ隣の部屋へ歩いて行った。

「いやあ。さっきのは絵になりましたね」

塚崎先輩と入れ替わりで出て来た高内さんが紅茶ポットとティーセットを持って出てきた。

「四季会の会長、塚崎先輩と四条先輩のツーショット！ あー、さっきの携帯で撮っとけばよかったー！」

四季会の会長……なるほど。お昼に何か用があつて四季会室にきたら僕を見つけた、ってことか。それだったら悪いことしたかも……。

「それを撮ってどうするつもり？」

「もちろん友達に売……うそですうそです。うそですから葵先輩、その後ろ手に持つてる物を戸棚に戻してください……」

「ちえっ」と呟いて葵さんが果物ナイフを戸棚に戻した。

「……はあ。ごめんね。楓ちゃん。本当は良い子なんだけど」
「き、気にしてないよ。本当に撮られたわけじゃないし」

売るとかそういうのも冗談だろう……たぶん。

それよりも葵さんがいつのまにナイフなんて持っていたかの方が

気になる。

「……あの高内さんが出てきた部屋は？」

話題を変えようと、少し気になっていたことを葵さんに尋ねた。

「あつちは部室兼調理器具の保管室。エプロンとか個人の荷物はあそこに置いてるの」

「紅茶淹れたので、どうぞっ」

「ありがとう」「ありがとう。高内さん」

お礼を言って高内さんから紅茶を受け取る。

「四条先輩。あたしのことは香奈でいいですよ」

自分の分の紅茶を淹れてパイプ椅子に座りながら高内さんが言った。

「それだったら僕のことも楓で」

「ブツ！ そ、そんな下級生のあたしが！」

高内さんは飲みかけていた紅茶を吹き出し、それを慌てて拭きながら、動揺を隠さずに僕を見た。

「葵さんのことも葵先輩と呼んでるみたいだから」

「や、まあ、そ、そうなんですけどねっ!？」

「ね、葵さん」

そう言って葵さんに視線を送る。

「楓ちゃんもこう言ってるんだから。あとは香奈次第」

「うー……。こうなったら覚悟を決めるしかないようですね。分かりました。……か、楓先輩」

「うん」

緊張した様子で香奈さんが僕の名前を呼び、僕はそれに満足して頷いた。

第3話 学園デビュー part 3

「椿ちゃん遅いですね」

みななでお茶を飲みながら雑談していると、ふと葵さんがそんなことを言った。

「そうね……。香奈、あなた何か聞いてないの？ 同じクラスでしょ？」

塚崎先輩の言葉に、香奈はカップを調理台に置くと、腕を組んで目を閉じた。

「えーっと……。そういえば何か言われたような……」

額をトントンと人差し指で突きながら眉間に皺を寄せる。

「どうして数十分前のことを思い出すのに長考するのよ……」

「ちよ、ちよっと待って下さい。もう少して何か出そうなんです。

……。ああ、そうだっ。今日日直だから遅れるって言っていました」

手をポンと叩き、すっきりとした顔をする香奈さん。

「そう。日直ならそんなに遅くなることもないだろうから、もう少しこのまま待ちましょう」

「そうですね。……。香奈、そういうことは言い忘れないように、来た時に言ってね」

「はい」

香奈さんは舌を少しだけ見せて返事した。

同じクラスで、同じ部活ということは、香奈さんは椿とは仲が良いのだろうか。

「香奈さんは椿とはどういう関係？」

考えても答えが出るはずもないので、率直に聞いてみることにした。

「ど、どういう関係ってそんな……っ」

「香奈。普通に答えなさい」

「わわっ。えっと、楓先輩すみません」

静かだが少しだけ怒りを含んだ塚崎先輩の声に、香奈は慌てて僕に頭を下げた。

……香奈さんは塚崎先輩に弱いようだ。

「椿とは一学期の頃席が隣で、部活も一緒ってことで仲良くなったんですよ。なので……どういう関係かって聞かれたら……友達ですかね？」

「友達か……」

椿とは会ってなかった頃もよく電話はしていたけど、お互いの友達については話したことがなかった。

ちゃんと椿に友達がいたこと、そして知らなかった椿のことで知れて僕は少し嬉しくなった。

「はい。休みの日には二人で出かけたりもしてます」

「へっ。じゃ、これからも椿とは友達でいてあげてね」

とりあえず、姉として妹の友達にちゃんと挨拶しておくべきだろうというところで言ってみただけ、これでよかったんだろうか。なんか姉というよりは母親っぽくなった気が……。

「へ？ ……は、はいっ。むしろあたしの方こそいつも椿にはお世話になってて、これからもよろしくと言いたいくらいで……」

「香奈はいつもテスト前になると椿ちゃんのノートを写させてもらっているものね」

「あ、葵先輩っ。楓先輩の前でそんなこと言わなくてもっ！」

なるほど、香奈さんは遥を小さくして、もう少し女の子っぽくした感じか。

「か、楓先輩安心してくださいっ。椿にはちゃんとノート写させてもらったお礼にパフェとか奢ってますから！」

「その発言のどこに安心する要素があるのかしら……」

塚崎先輩が香奈さんを見てため息を吐いた。

「あたしが椿を頼ってばかりではなく、ちゃんとギブアンドテイクな対等な関係であることを……っ」と楓先輩。あたしのは呼び捨てで構いませんよ」

「え、えっど……」

僕は困って葵さんに視線を送る。

「……楓ちゃんは桜花の出身だからあまり呼び捨てはしたくないみたい」

桜花だからってわけじゃなくて、初対面から呼び捨てはどうかと

思っているだけなんだけど……まあ、あれこれいづより学校の格
式の高さのせいになれば納得してくれそうだから良いか。

「あぁっ。あのお嬢様学校ですか……」

香奈さんは僕を見て、うんうんと頷く。

「納得です」

納得されてしまった。

数分後、ガラツと勢い良く扉が開き、椿が教室に入って来た。

「す、すみません。日直で遅れました」

「そんなに急いで来なくても……。ちゃんと香奈から聞いているか
ら」

息を弾ませて謝る椿に塚崎先輩は苦笑した。

「へ？ 香奈が？ 本当ですか？」

「なにそのあたしに言っておいてどうせ忘れてるだろうなー的反
応は……」

「うん。期待してなかったから」

「葵先輩、椿が酷いですっ！」

「日頃の行いが悪いからそうなるの」

香奈さんが両手を広げて葵さんに飛びつこうとするも、葵さんに頭を押さえられて手が届かず手足をばたつかせる。

……コント？

「あれ？ なんでお姉ちゃんがここに？」

「部活見学」

「私が誘ったの。楓ちゃん、料理部に興味あったみたいだから」

葵さんに「そうですか」と答えつつ、椿の目は僕に向けられていた。

気のせいだろうか、僕がここにいるのを快く思っていないように見えた。

「それでは、椿も来たことだし、そろそろはじめましょ」

「はい」「はいっ」

そんなこんなで部活動が始まった。

今日は簡単に作れておいしいものを、ということで作ってチーズケーキを作るらしい。

ケーキなんて作ったことがないどころかお店で買った物しか食べたことないのでちょっと期待。

さっそく四人がそれぞれ別々の調理台を使って動き始めた。
けれど

「塚崎先輩。チーズがすごく硬いのですが……」

「レンジで一分程温めれば柔らかくなるわよ」

葵さん、塚崎先輩、そして椿は慣れた手つきで進めていくのに対

して

「えっと…卵の次はどっちだっけ…あ〜！オーブン予熱しとくのわすれてたあ〜！」

「三番目のオーブンを予熱しておいたからそれ使って」

「あ、ありがとうございます、葵先輩！」

終始、香奈さんはばたばたと慌ただしく、塚崎先輩に助言をもらいつつ、椿、葵さんに助けてもらいながら、なんとか生地をオーブンで焼くところまでこぎつけていた。

「あとはオーブンで五十分焼いて、冷やせば出来上がりね」

エプロンを外して塚崎先輩、葵さんが僕の近くに椅子を持ってきて座る。

「結構簡単なんです。香奈さんは大変そうだったけど」

「いや〜。あたしは基本食べる専門なので…料理部に入部したのも、おいしい物食べれるかなあと思ったからでして」

香奈さんは僕たちに紅茶の入ったカップを配りながら、あははと笑って頬をかいた。

椿は僕の隣に座ったけど、やっぱりいつもと様子が違っていた。

チーズケーキは冷蔵庫で冷やして月曜のお昼に各自食べようということになり、今日は解散となった。

校門でみんなと別れて、椿と二人家路をたどる。

明日はクラスマッチ。まだ頭が痛いから今日は早めに寝て明日に備えないといけない。やけに綾音さんが僕に期待しているようだし、それに少しでも応えたい。

歩きながら隣の椿がちらちらと僕の鞆を盗み見ていたけど、取られる前に自分から日傘を取り出して差した。周りには学園の生徒は見当たらないし、大丈夫だろう。

時刻は十七時。日は傾いてきたがまだ暑い。むしろ斜めに日が差しこんでくるし、日中に溜めこんだ熱が足元のアスファルトから漂ってきて気持ち悪い。

「ねえ、お姉ちゃん」

「んー？」

日傘を傾けて椿を見上げる。

「料理部に見学に来てたけど、その……入部するの？」

ちらちらと僕を見ながら、遠慮気味に聞いてくる。

「うーん。まだ悩んでるところ」

葵さんは僕が入部すると嬉しいと言ってくれたし、僕も少しくらいは料理できたほうがいいかなとも思っているの、今のところ第一候補ではあるけど。

「えっと。……できただけど、お姉ちゃんには違う部活に入っ
て欲しいかも」

「えっ。それって」

一瞬嫌な言葉が浮かび、背筋が寒くなる。

「ち、ちがうの！ お姉ちゃんと一緒にいるのが嫌とかそういうんじゃないわよ！ その……お姉ちゃんに見られてると思うと恥ずかしいというかなんというか……」

……ああ、なるほど。たしかに僕も何か練習してるところを妹に見られるのは恥ずかしい。

僕を嫌っているんじゃないわよと良かったと胸をなで下ろしつつ、僕は頷く。

「そっか……うん、わかった。じゃあ、部活は何か違うもの探してみよ」

まだ学園に来て二日しか経ってないんだし、もう少しいろいろ見てから決めよう。

「うん。……ありがとう、ごめんね、お姉ちゃん」

「気にしないでいいよ」

僕は申し訳なさそうに眉尻を下げる椿の頭を撫でた。

家路の途中で、スーパーに寄って買い物をするという椿と分かれた。もちろん僕は荷物持ちくらいしようと思っ、一緒に行くと言

ったのに、椿はやんわりと断り、先に帰って休んでと言われてしまった。いつもならそれでももう少し食い下がるんだけど、頭痛が酷くなってきていて余裕がなかった僕は素直に『うん』と答えてしまった。

仕方なく、僕は椿と分かれて一人歩いていたが、しばらく歩いているとさらに気分が悪くなってきて、近くの公園へと避難することにした。

飲み物を買おうと自販機の前に立って物色するも適当な物がなかった。他に自販機がないか周りを見回す。けど、他に自販機は見当たらなかった。で、渋々百円均一と書かれた自販機でスポーツドリンクを買ってベンチに腰を下ろした。

日傘を閉じてベンチに立て掛け、プルタブを開けてスポーツドリンクを一口飲んだ。変な味がした。

お茶でも買えばよかったと後悔しながらちびちびと飲んでみると、一人の男子学生が公園に入ってきて僕の近くまでやってきた。何気なしに見上げると、彼と目が合ってしまった。

「ごめんかった？ って、うそうそ〜」

語尾を無駄に延ばしながらその男子学生は僕に話しかけた。

この学生服に見覚えがあった。これは桜花近くの男子高だ。学校名は忘れたけどあまり良い噂は聞かないところ。ここからだとなりに距離があるけど……この付近から通っているのだろうか。

「君〜。誰かと待ち合わせ〜？」

「や、別に……」

短く答えながらようやく気付く。

……ナンパか。

不本意ながらナンパは何度かされたことがあるけど、そのどれも

が二人一組だったので気づくのが遅れてしまった。周りを見ても僕と彼しかいないので本当に一人のようだ。まったく勇気のあるヤツだ。

「おおつ。よく見ると君かわいいね〜」

大げさに驚いて見せながら彼が肩に手を置いてきた。

……鬱陶しい。

気分が悪いせいで余計にいらいらする。

「ねえねえこれからどこ行くの？ 僕と遊ぼうよ〜」

彼の手を払い除けながら立ちあがり、まだ半分以上残っていたスपोर्टドリンクを自販機の横のゴミ箱に捨てた。中身が入ったままなのでゴンツと重い音が聞こえた。

「ねえ、遊ぼうよ。僕チョー面白いやつだし」

後を追いかけてきてしつこく僕に話しかけてくる。

「用事があるので」

一瞥してそれだけ言つと彼に背を向けて歩き出す。

「おいつ。ちょっと待てよ!」

彼が僕の肩を掴み無理矢理引つ張る。その勢いで体が回って彼と向き合う形になる。

「なに無視してんだよ!」

キレるの早いな。

思ったよりも早い豹変ぶりに内心苦笑する。こういう時表情が顔に出ないのは楽だ。彼に僕の心の中を見られるなんて吐き気がする。

「コイツ　っ！」

相変わらず無視を続ける僕に痺れを切らした彼は暴言を吐き始めた。

お高くとまりやがってとか、なんかそんなことをいろいろと。

真面目に聞くのもあほらしいので聞き流していると、無反応な僕の態度に怒りが込み上げてきたらしく少しずつ顔が赤くなっていく……うん。頭痛は酷いけど手足はなんとか動かせそうだ。

次に彼がとる行動を予想して、少しだけ右足を前に出し、閉じてある日傘を両手で持つ。

「聞いてんのか！　こらあ！！！」

ついに怒りを爆発させた彼が殴りかかってくる。

大振りな右ストレートを、膝を曲げ頭の位置をずらして避け、前屈みになった体勢のまま地面を蹴り彼の懐に飛び込んだ。両手で握りしめた日傘を思い切り振り抜き、太ももを強打した。

「いつ！？　くくくくく！？」

声にならない悲鳴を上げながら地面に膝をつく彼の喉元に日傘を押し当ててそのまま押し倒す。

「ゲッ！？」

カエルのような声を上げて彼が地面に倒れた。

「……僕の事は放っておいてもらえませんか？」

喉を圧迫したまま彼を睨む。

「はあ、はあ。そ、その傘。もしかして桜花のひい」

「……とつとどっか行ってもらえませんか？」

腕に力を込める。

「は、はい！ 分かりました！ 分かりましたから！」

かすれた声を上げて涙目になる彼を見て『やりすぎたか』と思いつつ離れる。戦意はなさそうだけど、一応すぐに対応できるようにはしておく。

「……」

無言で見つめ、すぐに立ちあがって去っていくのを期待する。
けど

「ほ、本当に済みませんでした！」

彼はその場で土下座をしてそう言った後に、若干足を引きずりながら逃げるようにして公園を出ていった。

「そんな土下座までしなくても……」

走り去る彼の背中を見ながら、僕はそう呟いて苦笑した。

さて、帰ろうと鞆を持った時だった。

「いたっ」

左手首に電流が走ったような衝撃を受けた。

おそるおそる視線を落とすと、手首のあたりが少し赤くなっていた。

おそらくさつき日傘を振った時に痛めたのだろう。たしかに最近竹刀や木刀なんて振ってなかったし、さつきも力の加減なんて考えず振っちゃったけど、まさかあれだけで痛めるとは。

「腫れなければいいけど……」

今の気分の悪さよりも、帰って椿になんて説明しようと、そのことで憂鬱になった。

第3話 学園デビュー part 4

実力テスト翌日の日曜日。

僕は遥との約束通り、桜花女学院近くの駅にやってきていた。

手首の腫れはどうなったかというのと、昨日家に帰るとさっそく椿に見つかって、これでもかというほどの氷の入った袋を患部にあてられ、テーピングをグルグルに巻かれ、安静にして休むようにときつく注意された。おかげで今朝起きた時には腫れは綺麗さっぱりひいていたので椿には感謝しているけど、昨日の椿はちょっと怖かった。

『絶対に手、動かしたらダメだからねっ。いい！？』

『でもこれくらい』

『わかった！？』

『は、はい……』

姉だというのに、すごい剣幕で迫る椿に反論するどころか素直に頷いてしまった。まったく……どっちが姉なんだか。

ちなみに椿には怪我の理由を『ぼーっとしてたら転んで、その時に手を捻った』と嘘をついた。さすがにナンパしてきた男の子を返り討ちにしたなんて言っつて、これ以上心配をかせさせるわけにはいかなかった。

それにしても、転んで手を捻ったってなんてまぬけな……。どうせ嘘を吐くならもっとマシな嘘をつけばよかった。

「はあ……」

今日三度目になるため息を吐きながら、僕は改札口を通過して駅を出た。

待ち合わせ場所に到着したけど、まだ誰も来ていなかった。

「一本早かったかな」

時計を見ると待ち合わせ時間の30分前。僕はバッグから読みかけの本を取り出すと、しおりを挟んでいたページを開き、続きを読み始めた。

「おはよう」「おはよう」

聞き覚えのある声に顔をあげると、目の前に奈菜と紗枝が立っていた。

「おはよう。奈菜、紗枝」

本をしまいながら二人に挨拶を返す。

「遙のやつは……まだ来てないみたいやな」
「うん」

小さい頃に両親と日本を飛び回ったせいで身についたと言う変な方言で紗枝が話す。主なのは関西弁のようだけど、端々が微妙にテレビで聞くようなものと違う。きっとそれが関西以外で得た方言な

んだろつと思つ。

「遙が時間通りに来ると思つ?」

「ああ。それもそうか」

ひどい言われようだけど、その通りなのだから仕方ない。

「なー楓」

「ん?」

「学園は楽しいか? わたしは幼等部からずっと桜花やから他の学校がどんなにか分からのよね」

「んー……まだ転校して二日なんだけど……」

紗枝に問われて、改めて考える。

「……楽しいと思つよ」

このたった二日で葵さんと綾音さんという二人の友達ができ、たし、なにより遙とまた同じ学校、同じクラスになれたことが嬉しかった。テストやクラスマッチ、来月には学園祭もあるといていたからイベントも豊富そうでした。楽しんだ。

「ほー。そんならよかった。もし楽しくないとか言つとつたら引きずってでも桜花に連れ帰ろつと思つとつたけど、杞憂やったよな」

「遙がいるのだから、つまらないということはないでしょ」

「ああ、遙もおるんやったな」

紗枝がニシシと笑う。

「はー、そうか。楽しいかあ……。あー。わたしも学園行けばよかつたわあ」

「あなたには桜花が合ってると思うけど？」

「そうかー？」

「ええ。なんだかんだ言っても、あなたはれっきとしたお嬢様なのだから。桜花以外の学校では不都合な場面が多いと思うわ」

「不都合？」

「ええ。桜花では普通のことでも、他の学校では普通ではないことが多いわ」

「それは僕も転校して思った。桜花は特別だったんだなあって」

例えば、学内でも貴重品はちゃんと管理していないと盗まれるかもしれないことや、通学で日傘を差してる人がほとんどいないことそして生徒間での上下関係は家系ではなく学年だということ。

そのことを話すと、「へえー」と紗枝は少し驚いていた。

「なるほどねー……。そんなら遙はよく学園なんて行けたな」

「あの子もあなたと同じお嬢様だけど……。感覚がどちらかといえばあだし達に近かったから」

「そう聞くと、遙が羨ましいと思うわ」

「そうね。全部とは言わないけど、遙には見習うべきところが多いと思う」

「うんうん……。まっ、遙には言わんようにな」

そう言って人差し指を口元に当てて笑う紗枝に、僕も笑みを浮かべて頷いた。

「海へいこう」

予想通り十五分遅れてやってきた遙は、開口一番、そう宣言した。

「紗枝。今回は何やらかしたの……？」

奈菜が読んでいた本から顔を上げて紗枝を睨む。

「や、やらかしたって人聞きの悪い。今回は悪いのは遙やで？」

「おま、なに人になすりつけてるんだよ。始まりは紗枝からじゃないか！」

「わたしから！？ あれが！？」

「紗枝があんな話するから、アタシがそれにのったんじゃないか！」

「わたしは『砂浜のランニングがしんどかった』としか言っただけだ！？」

「それが悪いんだよ！」

僕は少し離れたところのベンチに座り、紗枝と遙のやりとりを見届けていた。

紗枝が来るといつも同じ展開だ。紗枝が来ると毎回決まって遙が『山へ行こう』とか『ゲーセンへ行こう』とか、何か面倒事を持ってやってくる。それを詳しく聞くと、ほぼ間違いなく紗枝と遙が電話した際にどちらかが言った一言が原因で言い争いを初め、その結果、後日集まったときに雌雄を決する、というのが通例になっている。奈菜が言うように、今回もおそらくは

「で、今回はどうしたの？」

パタンと本を閉じて、奈菜が遙と紗枝の間に割ってはいいる。

「この前、部活で砂浜をランニングしたんやけど、それが結構しんどかったって話を遙にしたら、『コイツ、グラウンドと変わらない』とか言いよったんや。それであーだこーだ言い合いになって、結局、今日海に行つてどっちが早いか競争することになったんよ」
「ああ、そういうこと……」

奈菜がまったく興味がなことをアピールするかのように、ゆっくりとした動作でバッグに本を片付けて、代わりに携帯を取り出して操作し始める。

「つまり、あなたたちが砂浜で競争すれば、今回の話は終わりということね」

「ま、まあそうだけど……」

奈菜がパタンと携帯を閉じてバッグに戻し、それを見て遙と紗枝がたじろいだ。

「本当にこの二人は成長しないわね。この歳で徒競走……」

「どうする？ 今から海岸行く？」

僕が尋ねると、奈菜は首を横に振った。

「いえ、街に行きましょう。海はお昼食べてからということですね。それでいい？ 遙、紗枝？」

「あ、ああ」「い、異議なしや」

「そ。じゃ、行くわよ。楓はどこか行きたいところある？」

遙や紗枝に向ける険しいものとは違う、いつもの表情で奈菜がたずねる。

「アタシは服を見」

「あなたには聞いてない」

「うっ……」

取り付く島のない奈菜の言いように、遙は言葉を失う。

「うーん。僕はとくにこれと行って行きたい所はないかな」

「そう。それじゃ仕方ないけど、遙の意見を取り入れて、ショッピングでもしましょうか」

「よしっ！」

「遙、まだ買い足りないんだ……」

ガッツポーズをとる遙を見ながら呟く。

たしか遙は以前、五月頃に集まった時に『今年の夏の分』と称して夏服を大量に買い込んでいたはず。それはもう宅配を必要とするほどに。さすがお嬢様と感心していたけど、まだ足りないというのだろうか。

って、今は暦上秋の九月。まだまだ暑いからみんな夏服を着ているけど、この時期買う服といたら秋服じゃないか。そうか、遙は秋服を買いに

「ん？ ああ、今日のはアタシのじゃないよ。この前買っただろ？」

「へ？」

あれ？ 遙の分じゃないってことはどういっ……。

まさか

「楓の分だよ」

「もういいか？」

「ち、ちよつとまってる」

遙に返事して、急いで着替えを進める。

これで何回目だ……？

遙に付き合わされてやってきたお店で、何故か遙じゃなくて僕が試着室に入っている。こういうことは過去に何度もあった。『服を買いたい』という遙についてきたのに、気がづいたら僕の服を買っていた。今日もそれだ。

僕自身は服をあまり買わないのに、クローゼットには大量の服がぎっしりと詰まっている。そのほとんどが今日のように遙が僕に買ってくれたものだ。

「あけるぞ？」

「あ、うん。いいよ」

シャツとカーテンが開く。

「うんうん。これも似合ってる」

遙がさきほどと同じ感想を口にする。

「そ、そうかな？」

僕はスカートの端を下に引っ張りながら鏡を見る。

「これ、短すぎない……?」

鏡に映る自分の姿を見ると、スカートが短かすぎるせいで膝が見えてしまっている。

これって間違いなく、走ったりしたら見えるって。

「今はそれくらいが普通なんだよ。なあ?」

遙が奈菜と紗枝に同意を求める。

「そうね。ミニは今年の流行だし」

「ええと思うで。楓は足細いから似合ってるわ」

「うっ……」

三人の視線を受けて、恥ずかしくなった僕は、カーテンで体を包んで隠す。

「ほら、楓。それ早く脱いで。その服もレジに持っていくから」

「これも買っんだ……」

「もちろん」

僕は小さくため息を吐きながら、巻きつけてあったカーテンから離れる。

「じゃ、着替えるから閉めるね」

「あー。ちよつと待った」

カーテンを掴んだまま遙を見ると、手には別の服が握られていた。

「次これな」

「まだあるんだ……」

呆れながらも、僕はそれを受け取ってカーテンを閉めた。

「ありがとうございますー」

買った服を全て配達してもらおうよう頼み、僕達は店を出た。

「どう考えても買いすぎだと思っただけ……」

今回だけで十着も買ってしまった。秋服はいいとしても、夏服は着れてもあと1ヶ月ちょっとだというのに、遥はそんなこと気にせずレジへと持っていくた。まあ、もったいないし来年も着ればいいのか……。

それにしても、遥は服を買うときはいつも黒いクレジットカードを使っている。あれはたしか両親からもらったと言っていたけど……僕の服にそのカードを使用していいのだろうか。

「ねえ、遥。カード使ってたけど、いいの？」

「カード？ あー、大丈夫大丈夫。親父も母さんも知ってるから」

「知ってるって？」

「了承済みってこと。むしろもっと買ってやれって言われたぐらいだ」

遥のご両親とは何度か会ったことはあるけど……何を考えてるんだ。娘のいち友人の僕にこんなにお金を使うなんて。

「親父も母さんも楓のこと気に入ってな。今度いつ来るのかってうるさいよ」

「そ、そうなんだ」

気に入ってって……僕何かしたっけ？

思い当たることと言えば、遥の家に遊びに行った時に少しおじさんとおばさんと話したことくらい。何故か気に入られた僕は晩ご飯を御馳走になって、しかもその日は泊っていったんだっけ。

「感謝しているのよ。可愛い一人娘の友達になってくれたあなたにね」

「……へ？ 友達？」

奈菜の言葉に、僕は戸惑いながら聞き返した。

遥に友達なんて僕以外にもたくさんいたような気がするけど。

「おい、奈菜」

「あら、ごめんなさい。てっきり話しているものかと」

詰め寄る遥に、奈菜は口では謝るけど悪びれた様子もなく、むしろ少し笑みを浮かべているようだった。

「でも、いい加減少しくらいは話しておいたらどう？」

遥が乱暴に頭を掻いた。

「あー……そうだな」

目を逸らしながらも、遥が僕に向き直った。

言いにくそうな遙を見て、「いいよ」と声をかけようとしたその時、遙が口を開いた。

「まあなんだ。楓が来るまではアタシはちよつと家庭の事で荒れてたな。奈菜と紗枝以外に友達はいなかったんだよ」

「そう、なんだ……」

中学の頃の遙はいつも楽しそうに笑っていて、友達に囲まれているところしかみたことない。友達のいない遙なんて想像できなかった。

「そこに楓がルームメイトとしてやってきてさ。その……と、とにかく。楓のおかげでまた友達を作ろうって思えたんだよ」

「う、うん……」

僕の何が遙をそうさせたんだろう。僕には分からなかった。けど、それで遙が元気になったというのなら、それはそれで僕は嬉しかった。

「とにかくそういうわけだから、楓は何も気にすることなんてないんだよ。さ、この話はこれで終わり！ さあ、次はお待ちかねの海だ」

「別にあたしも楓も待つてないわよ……仕方ないから付き合っただけだよ」

先に歩いていってしまう奈菜と遙。

「楓」

名前を呼ばれて振り向くと、紗枝が僕の肩をポンと叩いた。

「誰かがそばにいただけで救われることもある。遥の場合はそれが楓やった。ということや」

「そばにいただけで？」

僕がそばにいたから、遥はまた友達を作ろうと思ったということ？
ますます意味が分からない。

「まっ、そういうことや。遥があんな調子やからちゃんとしたことを言うのはまだ先になりそうやけど……気を長くして待ってやってや。そんなわけで、服は素直に受け取っておけばええよ。なっ？」
「う、うん。分かった」

釈然としないけど、紗枝がそういうのであれば、素直に受け取っておくことにする。

「そ。それでええと思うよ」

そう言っって紗枝は歯を見せて笑った。

第3話 学園デビュー part 5

日曜日を挟んで転校4日目の月曜日。

今日はクラスマッチの日だ。

今日も僕は椿と一緒に家を出て学校へと向かう。

空は今日も快晴で体の調子もいい。けれど、隣の椿は心配そうな表情で僕に視線を向けていた。

「お姉ちゃん。手は大丈夫？」

「平気平気。もう痛くないって。椿もしつこいなあ」

何度目になるか分からない椿の言葉に苦笑しつつ答える。

そんな椿の左手には、いつもなら僕が持つ鞆と体操服が入ったバッグ、そして右手には椿自身の鞆とバッグがある。それに引き換え僕は手ぶらだった。

さすがに『姉が妹に荷物を持たせている』というこの現状は僕的にひじょーに居心地が悪いので、鞆を返してもらおうと声をかけるのに……

「……ねえ、そろそろ鞆とバッグを」

「だめ」

「昨日一日中ハンドバッグを持ってても痛くなかったから大丈夫だって」

「信用できない」

さつきからこんな感じで取り付く島がない。

くう……一体どうしたものか。

「お姉ちゃんはすぐ強がるんだから」

「そうだったっけ？」
「うん」

椿が力強く頷く。

「例えば……ほら、わたしが小学校四年生の時、公園の鉄棒で遊んでたらお姉ちゃん逆上がりしようとして失敗して頭から落ちたことあるでしょ？」

「ああ、夏休みの。たしか家の前にあった公園だよな？」

「うんうん。で、わたしが心配して『大丈夫？』って何度聞いてもお姉ちゃんは『大丈夫』としか言わなかったのに、帰ってお母さんに見てもらったら大きなたんこぶができてたじゃない」

「あー……。あれは痛かったなあ」

「やっぱり。素直にそう言えば良かったのに」

椿が不満そうに半眼でじーっと見つめてくる。

「や、そこはほら、姉というか兄としてのプライドが……」
「プライドなんて投げ捨てればいいのに」
「投げ捨てるのはどうかと……」

ふと気付くと、いつの間にか学校近くまでできていた。

「さて、そろそろ学校に近づいてきたし、ねっ！」
「あっ！」

隙をついて椿から鞆とバッグ、そして日傘を奪い取る。完全に油断していたようで簡単に取り返すことができた。

「もう、お姉ちゃん！」

「平気だって。ほらっ」

目くじらを立てる椿に左手をプラプラと振って見せる。そのとき視界に葵さんと綾音さんの姿が映った。

「椿ごめん。ちょっと先行くね」

そう言うと僕は軽く手を上げて走り出す。

「あー！またお姉ちゃん平気って言ったー！」

走り去る僕の背後で椿の声がしたけど、聞こえなかったことにした。

「チーム分けなら夏休み前に済ませてるわよ。楓は転校生だからあたしが無理矢理あたしのチームに入れたわ。もちろん葵と遙も同じチームよ」

席に着いた綾音さんは僕の質問にそう答えた。

「この学校のクラスマッチってリーグ戦？」

「トーナメントよ。一クラスにつきバレー三チーム、ソフトボール一チーム作ってそれぞれの種目別にトーナメント。一位が十点、二位が八点と点をつけて、総合点でクラス別の順位を決めるってわけ。ちなみに前回はバレーが二位、ソフトが二回戦敗退で総合準優勝だったのよ。バレーは決勝戦でデュースマでいったのに……」

綾音さんが当時のことを思い出してか、拳を握りしめて震わせている。

「優勝したクラスがバレー部の後輩がたくさんいる一年B組だったから悔しかったみたい」

葵さんがそつと耳打ちする。

なるほど……それでこんなに熱が入っているのか。

「あのクラスにバレー部員集中してて、他のクラスだと一チームにせいぜい部員が一人なのに、あのクラスだけ三人もいるのよ。しかもレギュラーとれそうな子ばかり。例えるなら部活でピッチャーで四番やってるソフトボール部員がクラスマツチでもピッチャーで四番やるようなものよ」

「へ、へえ……」

ソフトボールはあまり詳しくないので適当に相槌を打っておく。

「クラスマツチなんだから、偏るのは仕方ないと思うよ?」

「まあそうなんだけどね」

葵さんがなだめて、綾音さんが頬づえをつく。

その時がらつと勢いよく扉が開いて遙が教室に入ってきた。

「はあ、はあ……せ、セーフ?」

「うん。二年は50分から」

クラスマツチだから体操服に着替えないといけなのだけど、さすがに全学年が一斉に更衣室に詰め掛けてはパンクするので、それ

その学年ごとに時間を区切って着替えるようになっていた。

二年の着替えは8時50分からで、開会式は9時15分。今は8時45分なので平常授業の日なら遙は完全に遅刻だった。

「ふう……」

葵さんの言葉を聞いて安心したのか、遙が机に突っ伏す。

「あんたまた寝坊したの？」

「目覚ましは壊れてたんだよ。今日帰りに買って帰らないと……」

「それで何個目よ……」

「さあ。数えてない」

「呆れた」と綾音さんがため息を吐く。

「遙、相変わらず目覚まし壊してるんだ」

「相変わらずって、遙って中学の頃からこんなだったの？」

「目覚ましはよく壊してたけど、遅刻はなかったよ。朝ご飯もちやんと食べてたし。むしろ僕が起こされるぐらいだったから」

「あの頃は寮だったからなあ……。今よりも遅くまで寝ていられたのが大きかったな。それに楓の寝起きを見たかったし」

「ん、最後の方聞こえなかったんだけど？」

「あー。こつちの話」

「……？」

何故か僕から目をそらす遙。

「さっ、そろそろ行くわよ」

綾音さんが鞆とバッグを持って立ちあがる。

「ち、ちよつと待った。まだしんどい……」

「今行つても混んでると思うから、もう少ししてから行かない？」

「それさんせい」

葵さんの提案に遥が手を上げて僕が頷くと、綾音さんはまたため息をついて席に戻った。

「んー……。あつ、ちよつどいいところが空いてるわ」

人がごつた返す更衣室を暫くキョロキョロと見まわしていた綾音さんが空いているロッカーを見つけたらしく、綾音さんに続いて葵さんがその場所へ向かった。

女子更衣室といえば、女子トイレ同様男にとっては縁のない場所。女になった当初は、更衣室やトイレを使うことにひどく緊張したけど、今ではそれもほとんどなくなつた。

けれど……

「大丈夫か？」

「う、うん。大丈夫大丈夫。全然平気」

内心動揺しながらも愛想笑いを浮かべる。

桜花に三年と半年通つて、女の子の裸というものをそれこそ数えられないくらい見てきたけど、結局完全に慣れるということはなかった。昔のように立ちくらみを起こさなくなつただけでも進歩したと考えるべきか。

「……あー。そこ掴まれると歩けないんだけど」

「え？ あっ」

言われて、遥のスカートの裾を掴んでいたことにやっと気付く。

「ご、ごめんごめん」

「ほんっと、まだ慣れてないんだな」

遥はそう言って苦笑してから、僕の手を引いて更衣室に入ってしまった。

「ちょうど四つ空いてたから。その扉空けてるところ使って」

『キープしました』のサインなのだろう。綾音さん、葵さんが使っているロッカーの横に扉が空いているロッカーが2つあった。遥が葵さんの隣のロッカーに荷物を入れたので、僕は一番端のロッカーに鞆とバッグを入れる。バッグから学校指定のTシャツとジャージ上下を取り出して近くのベンチに置き、遥たちに背を向け、壁を目の前にして立った。

はあ……。

視界に誰も入らないので幾分マシだけど、更衣室にいるという事実と耳に入ってくる女の子の声で顔が熱くなるのを自覚する。

早く着替えてしまおう。そう決めて制服の上着とブラウスを脱ぎ、すぐにTシャツを着る。スカートはジャージのズボンを穿いてから脱いで、制服一式をロッカーのハンガーにかけて仕舞う。

ロッカーのカギを閉めてから一呼吸置いて振り向くと、着替え終えたみんながこっちを見ていた。

一瞬声を上げそうになっただけど、何とか踏みとどまる。

「……な、なにか用？」

「楓ちゃんって肌白くて綺麗だな〜って」

「案外胸もあるのね」

「胸……？」

Tシャツの襟を軽く引つ張って中を覗き込む。

……よく分からない。

「着痩せするタイプなのね。もったいない」

もったいないと言われても個人的にはないほうが嬉しいんだけど。

「着痩せといえば葵も実は」

「あ、綾音。そ、そろそろ1年生が来るから体育館いかない？」

葵さんが慌てて綾音さんの声を遮る。

「まあたそうやってはぐらかす」

「い、いいじゃない私のことなんて」

「えー」

そうこうしているうちに入り口から一年生が少しずつ入ってくる。

「そろそろ出ないと大変だな」

「仕方ないわね……」

渋々といった感じに綾音さんが体育館の方へと向かう。

「楓ちゃん、ロッカーにはカギがついてるから、ちゃんと閉めて、カギは持っておいてね」

「うん」

背後の入り口から一年生が入ってくるのと入れ替わりに僕達は外へ出た。

更衣室を出てから十分後に簡素な開会式が行われて、すぐに第一試合が始まった。

「あたし達のチームは第二北体育館の第三コート第二試合ね」

配られたトーナメント表を見て綾音さんが言った。

僕達のチームは、綾音さん、葵さん、遙、僕とクラスの女の子四人の計八人。基本はこの八人でローテーションし、ここ一番の試合の時は比較的運動の得意な六人で回すということらしい。

「第二北体育館ってどっちだっけ？」

「グラウンド北の東側の体育館ね」

この学校には体育館が四つあり、グラウンド北側に二つ、東側に二つあるらしい。そんなに必要なんだろうかと思ったけど、体育会系の部活が多く、活動も盛んであることを考えるとこれくらい必要なのかもしれない。

試合が行われる体育館へ移動しながら綾音さんが作戦を練る。

「楓以外のメンバーは一学期のままだから……まずは楓がどれだけ
できるか見たいわね」

「バレーに関して言えばアタシよりできるんじゃないか？」

「遙より？ へえ……」

綾音さんが僕を見下ろす。

……身長差あるから仕方ないけど。

「ん？ ……あー。楓は身長低いけどその分ジャンプ力あるから。
それにクラスマッチじゃネットの高さは低めにしてるから大丈夫だ
ろ」

「そうなの？ ……あまりスポーツは得意そうには見えないのに」

「そのギャップのおかげで前の学校じゃ」

「遙」

「はいはい。分かったよ」

睨みつける僕を見て遙が口を尖らせて頭の後ろで手を組む。

「『前の学校じゃ』？」

「あー……。いや、前の学校でも同じこというヤツいたなあ、と」

「ふん……」

訝しげに遙を見るがそれ以上綾音さんは追及しなかった。

「話を戻すけど、とりあえず一回戦の相手は二年B組でバレー部
のいないチームだから楽勝とは思う。まっ、楓の腕前拝見といきま
すか」

「そ、そんなに期待されても」

「謙遜、謙遜」

「頑張ってね。楓ちゃん」

「学校のやつらの度肝を抜かしてやれ」

遙のせいで僕に対するみんなの期待値が上がったようで、僕はこっさりため息を吐いた。

目的の体育館に着いた頃には一試合目が終わろうとしていた。

「早いわね」

「あー。良く見たら例の一年B組のチームじゃないか」

遙の視線の先を見ると、生徒が一列に並んで頭を下げている。試合後の挨拶だろうか。

「ホントね。そりゃ早いわ」

つまりはあのチームが以前負けたチームということか。

……あれ？

並んだ生徒の中に見知った女の子を見つける。

「あれって楓の妹の……椿、じゃないか？」

「うん」

遙も気付いたようだ。そっぴいえば椿は一年B組だったわけ。椿は僕達に気づかずには体育館を出て行った。きっと次の試合は別の体育館なのだろう。

「よし、あたし達も即効で終わらせるわよ!」

「あー。綾音がやる気だしちゃったよ。めんどい……」

「遙!」

「はいはい、頑張るって」

「葵も楓も気合入れていくわよ!」

「おー」「お、おー……」

葵さんが微笑みながら、僕は戸惑いながら小さく拳を上げた。

第3話 学園デビュー part 6

「ってお前が本気だしてどうするんだよ！」

遙が床をダンツと力強く踏み鳴らして綾音に詰め寄る。

「い、いや、なんかスイッチはいつっちゃって。あははは……」

乾いた笑いをしながら綾音さんがたじろぐ。

隣のコートを見ると、試合はまだ一回戦の終盤に差し掛かったところ。それに対してこちらは二回戦が終了してしまっていた。

前の試合で前回優勝チームの一年B組が早々に試合を終わらせたということに對抗心を燃やしてしまった綾音さんが、手加減なしのジャンプサーブをビシバシと決めたおかげで二五対〇という圧倒的大差で試合を終了させてしまった。

さすがの遙もこれには噛みついたようだ。練習は嫌いだけど、試合は好きな遙が一度もボールに触ってないのだから仕方ないといえは仕方ないのかもしれない。

「楽勝とか言ってた相手にバレー部部長がマジのサーブとか大人げないんだよ！」

「ラ、ライオンはウサギを狩るにも全力を尽くすっていうじゃない？ それに習っただけよ。ほら、手加減なんて相手にも失礼でしょ？」

「お前、言ってることが変わってるぞ……？」

それにしても、遙が注意する側の立場なんて珍しい。遙といえばいつも何かしらしてかして奈葉に注意されて不貞腐れるという光景を何度も見てきたから、なんか新鮮だ。

「楓の腕前見るとか言っておきながら……なんだこれ？」

「いいじゃない別に勝ったんだから……。楓には次の試合で頑張ってもらおうってことで」

「……はあ。どう思うよ？」

ため息を吐きながら肩を竦め、振りかえって僕と葵さんを見る。

「私は楽できたからよかったかな」

苦笑しながら葵さんが答える。

実際試合中はただ立ってるだけだったし、楽できたかといえそうなる。

「綾音はバレーのことになると周り見えなくなるから」

「そう、そうなのよ！ と、とにかく、次はその第一コートの上回戦に行われる三年F組対一年E組の勝った方と試合だから……つ、次はみんなよろしくね」

「……どっちもさっきの二年B組と同レベルか。おい、次は手、抜けよ？」

「わ、わかってるわよ……」

しゅんとなる綾音さんはなんだか小さく見えた。

次の試合まで時間があるということ、今のうちにと体育館を出て特別棟一階のトイレへ向かった。もちろん体育館にもトイレはあ

るけど、何処かの有名なラーメン屋のごとく長蛇……は言い過ぎた。少しの列ができていて困っていると、『特別棟のトイレを使えば良い』という遥のナイスアイデアを受けてそれを実行することにした。

無事済ませて体育館へと戻っていると、グラウンドの方から歓声のようなものが聞こえた。

そういえばグラウンドでは男子がソフトボールをしているんだよな。……時間もあつし、少し見てみようか。

そう決めて目的の体育館の前を通過してグラウンドへ向かった。

……お、やってるやってる。

グラウンドでは手前と奥の二か所でソフトボールの試合が行われていた。どちらのチームを見回しても見たことのない人ばかりなので、手前も奥も僕達のクラスである二年D組の試合ではないようだ。それならどっちの試合を見ようかと考えつつグラウンドを見渡しているとき、手前の外野脇に植えてある木の下に木陰になったベンチを見つけた。誰も使っておらず、今日は日差しも強いので、そこに座ってゲームを観戦することにする。ベンチに座り、バックネットに張り付けてあるスコアボードを目を細めて見ると、なんとか0対1という数値が見えた。良い勝負をしているみたいだ。

試合に目を向けると、ちょうどピッチャーが腕を一回転させてボールを投げたところだった。ボールは一直線に飛んでいき、バッターはブンツと力強くバットを振るも空振り、それを見て審判が『ストライク。アウト』と身振りを加えて宣言。するとベンチに座っていた人がグラウンドに出ていき、逆にグラウンドにいた人たちはベンチへと戻って行った。どうやら攻守交替のようだ。

テレビでスポーツを見てもあまり面白いと思わないけど、生で見ると結構面白いのかもしれない。

「あの……」

そんなことを思っていた時、ふと背後から声が聞こえた。僕は少し驚いて体をビクッと震わせた。

……あれ、この声はどこかで聞いたことがあるような。

そう思いながら、少し緊張しつつ振り向くと、そこには僕を見下ろすようにして男の子が立っていた。

「やっぱりあの時の……。覚えてる？ ほら、先月に君が道に迷ってて」

先月……ああ、そうか。道に迷った時に声を掛けてくれて教えてくれた人だ。同じ学校だからまた会うとは思っていたけど、まさかこんなに早く再会するなんて。

僕は彼を見て、上へ下へと視線を移動させた。

彼は僕と同じ二年生のようだ。この学校は学年によってジャージの色が違い、二年生は青色のジャージを着る事になっている。彼のジャージの色は僕と同じ青だから同学年ということになる。

「うん。覚えてる。あの時はありがとう」

立ちあがり軽く頭を下げる。

「いいよ、そんなことしなくて。それよりも、俺と同じだったなんて」

「ぐっ……。た、たしかに自分が小さいのは分かってるけど……」

「へ？ ……あつ、そ、そういう意味じゃなくて、俺が聞いたかったのは同じ高校だったことを言いたかっただけで……」

彼は目を丸くしてポカンとしたかと思うと、顔を赤くして慌てて

訂正した。

「なんだ、そつちか……。ごめん早とちりしちゃって」

「いや、俺の方こそごめん。言葉足らずで」

彼はそう言って苦笑した。

……まただ。この前の笑顔同様、この表情も昔どこかで見たことがある気がする。

「もしかして君が転校生？」

「うん。三日前にこの学校に転校してきたばかり」

「やっぱり。……なるほど、和也達が騒ぐわけだ」

「……？」

最後の方が聞き取れなかった。聞き直そうとして、僕はまだ彼の名前を知らないことに気付く。おそらく彼も僕の名前を知らないだろう。

「あの、僕は四条」

「楓、こんなところにいたのか」

名乗る時は自分からということ自分で自己紹介を始めたそのとき、遮るようにして後ろから僕を呼ぶ声が聞こえた。

振り返ると、そこには遥が僕を見下ろして立っていた。

「何してんだ？」

「この前道に迷ったときに、この人が親切に声をかけてくれて、道を教えてくれたんだよ」

「楓……また道に迷ったのか？」

「またって、そんなにしょっちゅう迷子には」

「楓って……もしかして君は依岡楓さん？」

「……へ？」

まさか僕のことを知っているとは思っていなかったなので、驚いて視線を向けた。

「う、うん。今は四条だけど」

「四条……ああ、そうだったね。ごめん。あー、この前おじさんから聞いてたのに忘れてたな……」

伯父さんからきいた……？

それが本当なら、この男の子は伯父さんと親しい間柄ということになる。僕のことを知っていたようだし、もしかすると僕と会ったことがある人？ たしかにこの男の子とはどこかで会ったことがあるような気はするんだけど……親戚にこんな子いたかなあ？

「俺のこと覚えてない？ ほら、昔一緒に遊んだよね？」

「昔一緒に遊んだ……？」

「うん。楓さんが桜花に入るまでの二年間くらいだけど」

桜花に入る前？

……そういえば、昔まだ通院しながらリハビリ中だった僕のところによく遊びに来ていた親戚の男の子がいた。でも、あの子はその時の僕と同じくらい小さい子だったはずだけど。

うーん……他にその時期に遊んだことがある子が思い浮かばない。元々あの時期は元来の人見知りのせいでまともに話したことがある人自体数えるくらいだ。

いくら考えても思いあたるのはその子だけだったので、まさかと思いつつ、とりあえず聞いてみることにした。

「えっと。如月蓮君？」

「正解」

蓮君はそう言うのと、僕を見て微笑んだ。

その笑顔を見て、やっと記憶の中の男の子と蓮君が一致した。

「ほー。つまり、蓮は楓の父方の親戚の子で、楓が依岡家へ引き取られていた時に、親戚同士の集まりで蓮と出会って、それから桜花に来るまでよく遊んでいた、と」

僕達の話聞いた遙は、それを簡潔にまとめて言った。

「うん」

「よくおじさんの家とは家族ぐるみの付き合いをしていたから、何度か会ううちに楓さんとも仲良くなっただよ」

「へー……でも楓って人見知り激しいだろ？ 仲良くなるまで大変じゃなかったか？」

さつきから蓮君に向ける遙の視線は少し厳しく見える。いつもなら遙にひと言言ってやるんだけど、そんな雰囲気ではなさそうだ。

「うん。最初は話しかけようとするたびに逃げられてたけど、あの頃の楓さんは車いすだったから逃げられる場所が少なくて、逃げるのも遅かったからすぐ捕まえることができたんだ。で、俺がしくしく遊ぼう遊ぼうってつきまとった結果、最後には楓さんが折れてくれたんだよ」

「あれはホントしつこかったよね」
「子供だったんだから許してよ」

蓮君は照れたように頭を掻いた。

「……ちゃんと一人で歩けるようになっただね」

蓮君が視線を下げた。

「今じゃスポーツもできるよ。体力ないからすぐバテちゃうけど」
「スポーツもできるようになったなんて、すごいよ。頑張ってるハ
ビリした成果が出たんだね」
「ま、まあね」

今度は僕が照れてしまつて蓮君から顔をそらした。

「こつ見えても楓は運動神経いいから、体育の成績は結構いいんだ
ぞ？」

「へ〜……つて、楓さんつてこの前転校したばかりだよね？」

「あー。アタシは中学校の頃桜花に通つて、楓とは友達だったか
ら」

「なるほど……凄いね。楓さん」

「そ、そうかな」

蓮君に答えながらちらつと横目で見ると、いつの間にか遙は表情
を緩めていた。

「……でも、まさか蓮君だったなんて。あの頃と全然変わってたか
ら気づかなかつたよ」

あの頃は背も僕とあまり変わらないくらいだったのに、今では長身の遙よりも高くなっている。きつとあの後に二次性徴がきて一気に伸びたんだと思うけど……まったく羨ましい。

「僕も気づかなかった。まさかこんなに楓さんが綺麗になっているなんて」

「……へ？」

「あ……」

今、蓮君なんて言った？

「いや、あの……」

僕の目の前でみるみるうちに蓮君の顔が真っ赤になっていく。ふと気づくと、僕も顔が凄く熱くなっていた。きつと真っ赤だろう。

「なに二人して赤くなってんだか……」

遙が大きいためいきをついた。

「そろそろ次の試合始まるな」

遙の声でハツとして慌てて腕時計を見ると、いつの間にか結構な時間が経過していた。

「ごめん蓮君。僕達行くね。また今度ゆっくり話そう」

「うん。分かった」

「それじゃあ、またね」

僕は蓮君に軽く手を振って別れ、遥と一緒に体育館へと向かった。

第3話 学園デビュー part 7

「あんたが本気だしてどうするのよ!」

綾音さんが床をダンダンと力強く踏み鳴らしながら遙に詰め寄る。

「い、いや、なんかサーブの調子が良かったからつい……。はははは……」

乾いた笑いをしながら遙がたじろぐ。

さつきと立場が逆転。今度は遙のサーブだけで二五対0という圧倒的大差で試合を終わらせてしまった。綾音さんのようなジャンプサーブとかテクニカルなことをしたわけじゃないけど、遙の豪腕(女の子にこの言い方は良いのか?)から繰り出されるサーブは女の子のものとは思えない速さと重さで、しかも変な回転がかかっていて余計難易度が上昇。そんなものを一般女子生徒が取れるはずもなく、結局綾音さんと同じ結果となってしまったわけだ。……遙らしいと言えば遙らしいオチだ。

「あんたね。人にあれだけ言っておきながら……」

「ま、まあまあ」

「まったく……まあ、あたしも同じことしてるからもう何も言わないけど、次は手を抜きなさいよ?」

「わ、わかってるって」

そんな二人のやりとりを見て、僕と葵さんは見合わせて肩を竦めて苦笑した。

その後はさすがに相手チームも勝ち上がってきただけあって、二回戦目のようにはいかなかった。とは言えこちらには運動全般万能な遙と、バレー部部長の綾音さんを要する前回準優勝チーム。圧勝とまではいかないまでも、順調に勝ち上がっていった。

遙も綾音さんもあれだけ手を抜けやら何やら言い争っていたのに、結局二人とも毎試合全力投球。おかげで僕と葵さんは準々決勝が終了したというのに、未だほとんどボールに触れずにいた。

そして正午。コートでは試合が続いているけど、僕達のチームはちょうどいい具合に次の試合まで時間があつたのでお昼にすることにした。

学食へいくと注文カウンターにはいつものお昼時のような行列が出来ていなかったの、トレイを取ってそのままカウンターに置く。

「あれ、葵は？」

遙が周りをキョロキョロと見回しながら言う。

「『お弁当取ってくる』って言ってたじゃない」

「あー。そういえばそんなこと言ってたか。おばちゃん。焼肉定食ご飯大盛りな」

「あんだ、このあとすぐ試合なのにそんなの食べて大丈夫なの？ あたしはナポリタン」

「サンドイッチお願いします」

各々が注文するとすぐにカウンターに料理が並び、それを受け取ってレジを通る。人がまばらなおかげでテーブルは空き放題だったので、外の景色が見える窓際のテーブルについた。

「葵はまだ来てないのか？」

「えっと……あ、今来たみたい」

学食入り口を見るとちょうど葵さんが入ってきたところだったので立ち上がって手を大きく振る。葵さんはそれにすぐ気づいて早足にやってきた。

「遅かったな」

「料理実習室に寄ってきたから」

「なんで？」と言いたげに視線を送る遥の目の前、テーブル中央に葵さんが大きなお皿を置いて、陶器製の蓋を持ち上げた。

「チーズケーキ？」

中から出てきた大きな円形のケーキを見て遥が言う。

「あ、これ一昨日の？」

「うん。土曜日に私が部活で作った分」

葵さんが持ってきた紙皿にカット済みのケーキをのせてみんなに配る。

「どつど。」「飯のあとに食べてみて」

「んじゃ、いったただきまーす」

「あんたね。先にご飯食べてから……ってはやっ！」

僕がまだサンドイッチに手もつけていないのに、すでに焼肉定食（ご飯大盛り）を食べ終えた遙がケーキを一口大に切って放り込む。……その食べっぷりがホント羨ましい。

「ふむ……さすが葵。そこらの店のより旨いわ」

「そう？　ありがとう」

褒められた葵さんが少し頬を赤くして微笑む。

僕はサンドイッチをもそもそと食べながら目の前に置かれたケーキを見る。

見た目は売り物と言って良いくらい綺麗にできていて、遙曰く味もよし。将来葵さんはケーキ屋さんとか向いてそうだ。あ、でも頭もいいから大学院まで進んで研究所務めっていうのもカッコいいかもしれない。

「おーい楓。なにぼーっとしてんだ？」

遙の声にはっと我に返って顔を上げると、いつのまにか3人も食べ終えてデザートのカークキに移っていた。

……訂正、遙はそれすら食べ終えてお茶を啜っていた。

「……………」

僕は無言で遙に視線を送る。遙はそれに気づくと、手元のサンドイッチを見てから僕を見て首を横に振った。

『昼からも試合あるんだから、それくらい食べる』

というところらしい。

当然といえば当然の言葉に軽くため息を吐く。

渋々残りのサンドイッチを一口食べては水で流し込み、また一口食べては水で流し込むを繰り返してなんとか完食する。

「…ふう」

一息ついて、フォークを手取る。

これでやっとケーキにありつける。

そういえば最近はコンビニのプリンにはまっててプリンばかり食べていたからケーキなんて久しぶりだ。

「あ、楓ちゃん。お腹いっぱいだったら無理して食べなくていいからな」

僕の様子を見ていた葵さんがそう言って気を使ってくれる。

「あー大丈夫。楓は甘いものは別腹だから」

『そうなの?』と言いたげに僕を見る葵さんに、論より証拠とケーキを一口食べる。

「うん。美味しい」

チーズがしつこくなくてちょうどいい。これなら何個でもいけそうだ。

「ほらな」

「本当……」

葵さんが僕を見て驚いている。数分前にあれだけ苦勞してサンドイッチを食べていた僕が、ヒョイヒョイとケーキを食べているんだから驚きもするだろう。僕も最初は僕自身に驚いていたんだから。

「甘いものだけはよく入るんだよ。中学の時も近くのケーキ屋によく通ったんだが、唯一楓だけが全種類制覇したからなあ……」
「制覇って、楓が？」

綾音さんが目を丸くして僕を見た。

「あ、遙。そのお店、最近新しいケーキが増えたから今度行こうよ。タルトが美味しいんだ」

「へえ〜。こつち来てから全然行ってないから、久々に行ってみるか」

「うんうん。葵さんと綾音さんもよかつたら一緒にどう？」

「うん。いろんなお店のを食べて研究したいし」

「あ、あたしは部活あるから、時間会えばその時はよろしく」

コクコクと頷いてからふと紙皿を見る。気づいたらケーキを全て食べてしまっていた。ちらっとテーブルの中央を見るとまだ数切れケーキが残っている。

みんなはもう食べないのかな……。

そう思って綾音さん、遙、葵さんと順に視線を送る。

「あたしは一つで十分だから」

「おなじく」

「楓ちゃん。どうぞ」

葵さんが紙皿にケーキをのせてくれた。

やった。でも、こんなに美味しいのにみんな食べないなんてもつたない。

さっそくケーキにフォークを入れて一口サイズに切り分け、それをプスツとフォークで突き刺して口に運ぶ。

やっぱりお菓子っていいよね。ホント毎日三食お菓子でもいいのに……。

そんな子供みたいな考えが頭に浮かぶ。さすがに健康のことを考えるとそんなことできるはずないんだけど、思ってしまうのは仕方ない。

「楓ちゃんケーキ好きなの？」

「うん」

もう一口食べたところで葵さんが尋ねた。僕はフォークを啜えたまま葵さんを見上げて頷く。

「そう。じゃあ、また作るね」

そう言って葵さんは微笑んだ。

第3話 学園デビニー part 8

昼食後、少し休憩して体育館に戻ると、ちょうど同じクラスの別のチームが試合をしているところだったので、僕達も観衆に混ざって応援に参加した。けれど応援むなく僅差で負けてしまった。

結果、この時点で我が二年D組は三チーム中二チームが敗退。ソフボールの方も準決勝で敗退したと聞いたので、残ったのは僕達のチームだけとなってしまった。

次の試合が行われる体育館に移動しながら、葵さんと「頑張らないとね」と気合を入れていると、葵さんが「もともと期待してなかったけれどね」と腕を組んで答え、「ひでえー」と遥がジト目を向けた。

体育館について数分後に準決勝が始まった。対戦カードは僕達二年D組対三年E組。準決勝なのでさすがに苦戦するかと思いきや、準決勝と言う舞台でテンションが上がったらしい綾音さんと遥の活躍によって無事決勝へコマを進めることができた。

結局僕と葵さんは活躍という活躍もせず決勝戦まで来てしまった。

そしてついに決勝戦。相手は予想通り前回優勝した一年B組の椿のいるチームだった。

「お姉ちゃん!？」

別の体育館から移動してきたらしい椿が、コート内にいる僕の姿を見てネット際までやってきて声を上げた。

「やつ」

軽く手を上げて返事する。

「お姉ちゃん、遙先輩のチームなんだ」

「うん」

「……手は大丈夫なの？」

「平気平気。ほらっ」

まだ気にしてるのか、と苦笑しつつ左手を持ち上げてプラプラと振ってみせたり、両手を組んで伸ばしたりして大丈夫なことをアピールする。

「一応全部の試合出てるんだから、そんなに心配しなくて良いって」「う、うん……」

頷きながらも僕のことを心配そうに見つめる椿に、心の中でため息を吐く。

まったく。姉の言うことをなかなか信用しない妹だなあ……。

「とにかく、僕のことでは抜かないようにね。前はそっちが優勝したって聞いているから良い勝負になりそうで楽しみなんだから」

「う、うん。わかった」

「まっ、お互い頑張ろう」

踵を返して手を振りながら試合開始前の挨拶のためにエンドラインへ戻った。

『それでは決勝戦。一年B組対二年D組の試合を始めます』
『よろしくお願ひします』

審判役の生徒の笛の音を合図に両チームが挨拶してコートに入る。綾音さんと向こうのチームのキャプテンらしき人がジャンケンして相手チームにボールが渡る。

「きいい。負けた！」

自分のチヨキの形をした手を忌々しそくに睨みながら綾音さんが悔しがる。

「綾音、弱すぎ」

「綾音にジャンケンを任せた時点でこうなるとは思ってたけどね」

遙が肩を竦め、葵さんがクスクスと笑う。

毎試合サーブ権をかけたジャンケンを担当したのは綾音さんだ。

綾音さんは全ての試合でチヨキを出して負けて、そして今と同じリアクションをしていた気がする。

「葵何笑ってんのよ。……まあいいわ。こっちは前回と違って楓という助っ人が加わったんだからサーブ権くらいくれてや」

言い終わる前に審判が笛を吹き、相手チームがサーブの体勢に入った。綾音さんはそこで話を打ち切り、すぐに構えた。バシツツと力強くボールを叩く音が響き、物凄い勢いでボールがこちらのコート目掛けて飛んできた。

「とりゃー！」

遙がレシーブで勢いを殺し、僕がネット近くにトスを上げる。

「はっ！」

綾音さんがジャンプしてスパイクを打つ。しかしそれは相手チームにブロックされてしまいボールはこちらのコート内に落ちてしまった。

「なっ！ ……やるわね」

綾音さんが悔しそうに手を握り締める。

「さっきのを止めるなんて……。そういえば、あいつら夏休みの合宿でかなり腕上げてたのよね……」

「綾音は横這いだったと？」

「あ、あたしもあげてるわよ！ ……たぶん」

「たぶん、ねえ……」

遙が綾音さんを見てニヤニヤしていると笛が鳴り、再びボールが飛んでくる。

弾道から落下地点を予測すると、ぎりぎり僕の守備範囲内だ。すぐに反応して体を動かすけど、少し間に合いそうにない。そう判断して床を蹴って片腕だけでレシーブする。

「遙ー！」

「おりゃー！」

コート中央に上がったボールを葵さんがトスし、遙が強烈なスパイクを打つ。ボールはブロックをかすめて相手コートに叩きつけられた。

「よしっ！」

遙がガッツポーズを取った。

「楓すごいわね。あの位置のボールを取るなんて」
「なっ。言っただろ？ 楓はできる子だって」

ふふんと嬉しそうに、まるで自分のことのように言う遙。
サーブ権が移りこちらにボールが転がってくる。

「よし。先輩の意地を見せてやるわ……」

エンドラインに立った綾音さんが二、三度ボールを弾ませてからジャンプサーブを打つ。ボールは矢のように飛んでいき相手コートのエンドライン上に落ちた。

「どうよ！」

「うっわ、大人気ねえ」

「大人げって……少しは褒めなさいよ！」

「いや、つい本音が……」

戻ってきたボールを受け取り再びジャンプサーブを打つ。今度は若干浅く入り後衛の椿にレシーブされ、トスのちにスパイクが打たれた。

けれどそれを遙がブロックし、相手コートにボールを落とす。

「手えいった〜！ バシンてなったぞバシンて」
「ブロックしたんだから当り前じゃない……。でも、よくさっきのをブロックできたわね。あんた今からでもバレー部入らない？」
「断る」

間髪いれず遙が答え、手に持っていたボールを綾音さんに投げて渡す。

「そう言うと思ったけど、勿体無いわね……っ！」

再びジャンプサーブ。エンドラインぎりぎりに飛んでいったけど椿がそれに追いついてレシーブ。トスを上げてスパイクが打たれる。

「はい、楓ちゃん！」

葵さんがレシーブする。

ちょうど良い位置にボールが上がった。少しネットまで距離があったけど、相手チームの配置を見てチャンスだと思い、助走をつけてジャンプ、スパイクを打った。

「バックアタック!？」

綾音さんの驚く声と同時にボールが床にたたきつけられる音が響いた。

「楓、調子いいな」

「まあね」

遙が手を軽く掲げたのでそれにハイタッチする。

「まったく……。二人ともバレー部にほしいわね……。っと！」

綾音さんがジャンプサーブを打つ。今度は逆サイドに向かって飛んでいく。レシーブ、トスとボールが上げられスパイクが打たれる。綾音さんがそれをレシーブし遥がトスをする。

「楓！」

ネット際に上げられたボールに向かって高くジャンプして渾身の力を込めてボールを叩き落す。ブロックをすり抜けてボールが床に叩きつけられた。

「お、お姉ちゃん凄いね……」

ネット越しの椿は目を丸くして驚いている。

「ふふんっ。さあ椿、かかってきなさい」

「む。よし、わたしだつて」

『よしっ』と気合を入れて椿が守備位置に戻っていく。

「さっきの凄かったな。空飛んでるみたいだったぞ」

「そう？ あははっ」

空飛んでるって、鳥じゃあるまいし。

「楽しそうだな」

「ん？ んー……なんか久しぶりに体動かしたから楽しくって」

「久しぶり？」

「うん。夏休みはずっと家でごろごろしてたから」

「へえ〜。だったらあまり無理はするなよ？ 急に激しい運動なんてするとどこか怪我するぞ。とくに楓の場合はな」

「はいはい。りょーかい」

額にまっすぐ伸ばした手をピシッと当てて答えた。

ふと気づくと、少し遠くの方で綾音さんと葵さんが僕を見て何か話していた。表情が驚いているようにも見えるけど、何を話しているのかまでは聞き取れなかった。

「楓、テンション高いわね。なんだか凄く楽しそうだし。楓ってキラッとしていかにも『優等生』って感じだったから、驚いたわ」

「そうだよな。こんなに笑う子だったんだね」

「そうそう。その落差がまた良いんだよ。いや、別にいつも笑ってくれるならそれはそれで嬉しいんだけどさ。たまに見せるから、この笑顔が何倍にも輝いて見えるというか……」

「……あんたもテンション高いわね」

さっきまで僕と話していた遙がいつの間にか綾音さんと葵さんの会話に混ぜられていた。

「いつもの楓もかわいいけど、今の楓はさらにいいわね。……これは来年いけるんじゃないの？」

「来年？ ……あ、そうだね。楓ちゃんならなれそうだね」

「ま、金髪繋がりであの子がなりそうなのもするけど」

「それってK組の新階しんがいさんのこと？」

「そ。妹の方ね」

「新階より楓の方が良いに決まってる！」

「はいはい。あんたは本当に楓が好きなのね」

「ライク以上ラブ以上だな」

「際限なしなのね……」

話に混ざりたかったけど、何か嫌な予感がしたのでやめておいた。

勢いに乗る僕たちは序盤こそ圧倒していたけど、去年優勝という称号に偽りなく、徐々に相手チームが盛り返してきた。終盤に差し掛かった頃には二三対二三の同点。どちらが勝ってもおかしくない展開になっていた。最初はまばらだったギャラリーも、試合が進むにつれて増えていき、今ではその他全試合が終わったこともあり、どこを向いても物凄い人ばかりができていた。

「はあ、はあ……」

そんな重要な局面だというのに、僕はというと息は乱れてせえせえと五月蠅く、足には疲労がたまっていて鉛のように重くなっていた。気を抜くと座りこんでしまいそうだ。

それに加え一昨日怪我して治ったはずの左手首からは痛みを発していた。

今の状態を一言で言つと『満身創痍』というやつだ。

「楓、大丈夫か？」

「はあ、はあ……げほっげほっ」

心配そうに近づいて来る遙を手で制し、すうはあと何度か深呼吸して呼吸を整える。

「……ふう。平気。あと数プレーだし、頑張るよ」
「……そうか」

呟くようにそれだけ言うと、遙は少し勢いをつけて綾音さんにボールを投げ渡す。

「綾音！ 決めないと後で殴る！」
「なんか物騒だけど、おーけい！」

綾音さんが何度かボールをバウンドさせてからキッと相手コートを睨む。

『白水さん決めちゃってー！』

『葵さん。ふぁいとーっ！』

『遙ー。どじったらこの前のパン代請求するからね！』

ふと気づくと、周りからはそんな声が聞こえてきた。

『四条さん、頑張ってー』

名前を呼ばれた気がして視線を巡らせていると、見知らぬ女の子と目が合った。

『キヤー！ 四条さーん！』

キ、キヤー……？

悲鳴のような歓声があがってちよつとたじろいでしまう。

「楓、どうかしたか？」

「な、なんにも……」

戸惑いながらも首を捻っていると、ピツと審判が短く笛を鳴らし試合が再開される。

遥に向けていた視線を相手コートに移し、意識を集中させる。

バシツと大きな音が鳴ってボールが相手コートめがけて飛んでいく。ラインギリギリに飛んでいったボールをレシーブ、トスとネット際に運ばれ、僕の一番近くにいた女の子がスパイクの体勢に入った。僕もそれに合わせてジャンプして両手を伸ばす。

「っ!?」

バシツとボールの音が聞こえると同時に、ピキツと腕の中から音がしたような気がした。次の瞬間、左手首に激痛が走った。痛みに一瞬顔を歪めたけど、なんとか表情に出さないよう平静を装った。多少体勢を崩しながら着地してすぐに振り返ると、ゆるやかにコート中央に落ちるボールを遥がトスで上空に上げた。

「楓!」

助走なし、その場で垂直にジャンプしてスパイクを打つ。ブロックの合間をぬってボールは相手コートへと叩きつけられた。

「ナイス楓!」

『キヤー!』

体育館を揺らすほどの歓声があがる。

僕はこっさり左手首を動かして調子を見る。少し動かすたびに鋭い痛みが走る。

……素直に怪我をしたと言って交代してもらおうべきだろうか?

けれど、そうになると僕の代わりに入るのはほとんどバレー経験のない女の子。今までの試合を見た限りでは決して上手とは言えなかった。この怪我を差し引いても、僕が出ていた方がまだ戦力になる気がする。

「……がんばろう」

次が決まればそれで試合終了だ。
自分を励ますように呟いて守備位置に戻った。

「おい、楓」

声の方を向くと、遙が鋭い視線を送っていた。遙のことだ。もしかしたら僕が怪我をしたのを察したのかもしれない。

僕は遥を無視して、すでにボールを受け取った綾音さんに視線を向ける。

「綾音さん。ラスト！」

綾音さんが相手コートを睨みつけたまま軽く手を上げて答える。

「楓！」

「あと一点。あと一点だから」

「……ちっ」

遙が珍しく舌打ちした。僕の態度に怒ってしまったようだ。あとで謝らないと。

「これでラストッ！」

綾音さんがジャンプサーブを打ち、相手チームがレシーブ、トス、スパイクを打つ。

「はいっ」

「終われっ!!」

葵さんがレシーブし遥がスパイクを打つ。それを相手チームがレシーブしてトスを上げ、椿がスパイクを打った。

「やばっ!?!」

ボールはブロックした遥の手に当たり勢いはなくなったけど、緩い弧を描いてコート外へ飛んでいった。ボールが一番近いのは僕。間に合うか!?

全力で落下地点目指して走る。足が思うように前に出ないけど、これが最後と自分に言い聞かせて懸命に前を目指した。なんとかボールに追いついた僕は片腕を伸ばしてレシーブする。適当に返したボールだったけれど、運よくコート中央へと飛んでいってくれた。

「楓、前!!」

遥の声とほぼ同時に、目の前に迫る壁に気付く。

ぶつかる　っ!

この距離で止まることは不可能と感じた僕は、咄嗟に背中では衝撃を受けるよう、出来る限り体を捻った。

ドンツと壁にぶつかる音が響き、それから数瞬遅れて後頭部を壁に打ち付けてしまう。

意識を一瞬手放しそうになったけど、奥歯を噛み締めてなんとか踏みとどまる。朦朧とする頭でヨロヨロと二、三歩歩いてから立ち止まり、ぼやける視界で視線を上げた。

試合はどうなったのだろうか……？

「楓、大丈夫か!？」

「お姉ちゃん!」

誰かが僕の名前を呼びながら駆け寄ってくる。

「楓!」

……ああ、遙だ。遙の声だ。

「遙、試合は?」

「試合なら楓のおかげで勝った。今はそれよりもお前だ。さっ、保健室いくぞ」

「へ、へいきだよ」

ぼやけて見える遙にニコツと笑って歩いてみせ……ようとしたけど、すぐにふらつき前のめりになる。

「無理すんな」

遙が僕を抱きとめてくれた。

「……はは。さすがにちよつと無理したみたい」

「ったく。保健室連れていくから、いいな?」

少し怖い顔をする遙に躊躇しつつも頷いた。遙は肩と膝の裏に手を回して僕を軽々と持ち上げた。所謂お姫様だつこだ。

「は、はるか。重くない?」

「重いものか。保健室は一般棟の一階だから、そこまで大人しくしてろよ?」

「うん……」

僕が答えると、遥は保健室目指して歩き始めた。

遥の腕の中で意識が薄れゆくなか、後ろの方から大きな拍手と歓声が聞こえた気がした。

第3話 学園デビュー part8 (後書き)

第3話 学園デビュー 完

登場人物紹介 part 3 香奈・穂乃花・蓮 挿絵

○高内 たかうち 香奈 かな

> i 1 8 6 5 1 | 2 1 9 9 <

年齢：15歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 1年B組

部活：料理部

特徴：身長：中 肌色：黄 髪：黒色のショート
一人称：あたし

椿とは同じクラス、同じ部活であり、友達。

常にテンションが高く周りを巻き込むのが得意。

○塚崎 つかざき 穂乃花 ほのか

> i 1 8 6 4 9 | 2 1 9 9 <

年齢：18歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 3年F組

部活：料理部部长、四季会会長

特徴：身長：高 肌色：白 髪：金色のロング 瞳：青
一人称：私

風紀委員長であり料理部部长。

おっとりとした性格でありながら締めるときは締める人。常にテンションの高い香奈でも穂乃花の前では大人しくなるほど。

金髪碧眼のクォーター。

○如月 蓮きさらぎ れん

> i 1 8 6 5 0 — 2 1 9 9 <

年齢：17歳

性別：男

所属：私立千里学園高等学校 2年B組

部活：剣道部

特徴：身長：高 肌色：黄 髪：黒色のショート

一人称：俺

楓や椿の父方の親戚の長男。

楓とは何度か会ったことがあり、元男だったことを知っている。

第4話表紙

第4話 メランコリーオーバードライブ part 1

表紙(前書き)

> i 1 8 7 4 9 | 2 1 9 9 <

第4話 メランコリーオーバードライブ part 1

表紙

「……ちゃん、お姉ちゃん、朝だよ」

声が聞こえて目を覚ました。鈍痛のする頭と、小さな痛みを発する背中に顔をしかめながら布団から顔を出すと、見慣れた椿の姿が視界に入った。

「んん……つばき？」

「うん。ほら、お姉ちゃん。起きて起きて」

「うー……。いたっ」

布団の中でぐつと伸びをすると、左手がコツンとベッドに当たった。瞬間、包帯の巻かれた左手首に電流のような痛みが走った。

「くう……」

あまりの痛さに涙目になり、体を丸めて布団の中に潜った。

「お、お姉ちゃん大丈夫!？」

手首にそつと触れながらうめき声を上げていると、椿が勢いよく布団を捲りベッドに身を乗り出してきた。

「だ、だ、大丈夫」

「そんな目で言われても全然説得力ないよ」

反射的にそう答えただけ、椿はまったく信じていなかった。

「えっと……あの……い、痛いです」

意地を張っても無駄なので、素直に今の気持ちを述べた。
クラスマッチから二日後。今日もひどい状態で一日が始まった。
元々怪我の治りは遅い方なので、たった二日で治るとは思って
いなかったけれど、ブロックした時に痛めた左手は予想以上にひど
かった。

手首は少しでも捻ると涙が出るくらい痛くてまったく動かせな
かった。何か握ろうにも手にはまったく力が入らなかった。

「ほら、お姉ちゃん」

椿が差し出した手を右手で握り、上半身を起こしてベッドの縁に
腰掛ける。そして手を握ったままゆっくりと立ち上がる。

「あれっ……」

「ああ、お姉ちゃん危ない」

足元がふらつき、倒れそうになる僕を椿が抱きとめた。

「大丈夫？」

「うん。ごめん椿」

迷惑をかけて謝る僕に、椿は首を横に振った。

「元はと言えば、わたしのせいでお姉ちゃんが怪我したんだから」
「椿は何も悪くない。むしろ前方不注意だった僕の責任だよ」

「そんなこと」

「あるの。椿はただ真面目にプレーしただけ。そこで僕が怪我した。
それだけ」

椿に支えられながら立ち上がり、フラフラと歩き出す。隣で椿が今にも手を貸そうと構えていたけど、それを制しながらクローゼットの前に立った。

「だから椿が気に病むことはない。わかった？」

振り返りそう言うと、椿は小さく「うん」と頷いた。

「……あれ？ お姉ちゃんの携帯光ってない？」

制服を手に取り机に目を向ける。充電器に差し込んでいる携帯電話のメール着信ランプが点灯していた。

「メールみたい。それより、今から着替えるんだけど……」

これみよがしに制服をベッドの上に広げ、パジャマの第一ボタンに手をかけた。

「あ、う、うん。じゃあ先に下降りてるからね」

椿は慌てた様子で部屋を出て行った。

扉が閉まり、ほっと一息を吐いた。ボタンから手を離して携帯電話を手に取りメールを確認する。予想通りのメールの内容に苦笑して、携帯電話を閉じた。

「あら、椿に四条さんじゃない」

椿と一般棟一階の廊下を歩いていると、後ろから声をかけられた。

「おはよう」

振り返ると、そこには微笑みながら挨拶する塚崎先輩がいた。

『おはようございます』

挨拶を返し、ふと視線を左右に向けると、塚崎先輩の斜め後ろ両側に一人ずつ女の子が立っていた。視線が合うと、彼女達はあたふたした後に挨拶してきた。僕も慌ててそれに返した。

「クラスマッチ優勝おめでとう。私も最後の試合を観戦させてもらったけれど、あの日一番の好カードだったわ」

「そ、そうですね？　ありがとうございます」

まさか塚崎先輩に褒められるとは思わなかった僕は恥ずかしくなつて視線をそらす。少しだけ横目で見ると、相変わらずの笑顔で僕を見ていた。

「椿はおしかったわね」

「はい。ですがお姉ちゃんに負けるなら本望ですよ」

清々しく言った椿からは微塵も悔しさは感じられなかった。

「ところで、四条さんは怪我はもう大丈夫なのかしら？」

「えっと……」

ちらつと隣の椿を見てから遠慮がちに「まだ少し痛いです」とだけ答えた。

塚崎先輩が視線を僕の左手に下ろす。包帯が巻かれた手を見ると顔を少し歪めて、「そう」と呟いた。

「けれど、四条さんがあんなにスポーツが得意だとは思わなかったわ」

暗い雰囲気振り払うように、塚崎先輩は両手を胸の前で軽くパツツと合わせた。

「前の学校でも言われました。『スポーツまったくできなさそうなのに』って」

苦笑しながらそう言つと、つられて塚崎先輩も口元に手を当ててクスクスと笑つた。

「やっぱり。私も四条さんは、大人しそうな子だからスポーツはあまり得意ではない……と勝手に思い込んでいたからびっくりしたわ」

「大人しそうなのはきつと見た目だけです。それより、僕の話は楓でお願いします」

「楓ね。わかつたわ。では私のことも穂乃花でお願い」

「え、あの……」

「あなただけ名前で呼ぶのはフェアじゃないわ。あなたが名前で呼んでくれないなら、私もあなたのことを『四条さん』って呼ぶけど、いいのかしら？」

少し意地悪っぽい笑みを浮かべて塚崎先輩は言った。
そうか。こんな先輩だからみんなから人気があるんだ。

「……わかりました。穂乃花先輩」

僕がそう言うと、穂乃花先輩は満足そうに頷いた。

「そうだね。楓はもう部活決めたのかしら？」

「部活ですか？ まだ決めてないですけど……」

そこで一度区切って、先週の椿との会話を思い出す。

「……ちゃんとはつきり言わないと、ね。」

「その……この前部活見学しましたけど、別の部活に入ろうと思いません」

「そう。分かったわ」

「へ？」

『残念だ』とかそういう言葉が返ってくるかと思ったのに拍子抜けしてしまった。

「ふふ。別に部活見学したからと行って入部しないといけないというルールはないわ」

「そ、それはそうですけど……」

「だったらいいじゃない。ここにはたくさん部活があるのだから、あなたが気に入ったところに入るのがいいと思うわ」

そのとき、ほんの一瞬、穂乃花先輩は椿に視線を向け、そして僕を見て目を細めた。

「……言葉はなかったけど、穂乃花先輩には僕がどうして入部するのを諦めたのか、見抜かれた気がした。」

「……はい」

「それでは、私は先に行くわね。葵には私から言っておくから心配しないで。椿、また放課後に」
「は、はい」

穂乃花先輩は僕たちに会釈すると近くの階段を上っていった。穂乃花先輩の後ろにいた女の子二人もそのあとをついていった。

「お姉ちゃん……」
「椿は何も気にしなくていいよ」

あの時のように眉尻を下げる椿の頭を僕は優しく撫でた。

いつものように椿と階段を登ったところで分かれて廊下を歩いてみると、各階に設置された学年用掲示板の前に人だかりができていた。

「……んっっ」

なんだろうと思って、最後尾からつま先立ちで掲示板を覗こうとしたけど、いかんせん身長が低すぎてつま先立ちくらいじゃ掲示板の『け』の字も見えない。

……ふいに自分にいらつときた。や、原因は分かってるんだけどね。

「っつとー！」

ならば、と軽くジャンプしてみる。なんとか掲示板に何か張られているのは見えたけど、遠すぎて書かれてある文字が読めなかった。もっと近くに行く必要がある。

……と言っても、この人の量。中に入りたいとは思わない。

仕方ないので休み時間にも……と思つて教室へと向かおうとした時、背後からぼんぼんと肩を叩かれた。

少し驚きながら振り返ると、そこには葵さん、綾音さん、遙がいた。

「おはよう」と挨拶を交わしてから、この3人ならこの人だからについて何か知っているんじゃないか？ そう思つて聞いてみることにした。

「なんか掲示板に張られてるみたいなんだけど……わかる？」

「あー。実力テストの結果発表じゃないか？」

「たぶんそうね」

遙が目を細めて掲示板を見る。

「遙見える？」

「目は良い方なんだけどな。さすがにここからじゃ見えないな」

「順位気になるし、ちょっと見てくるわ。ついでにみんなの分も」

そう言つと綾音さんはメモ帳とシャーペン一つを手に取り、鞆を葵さんに渡して群衆の中に割つて入って行く。

「ちょっと通して。ごめんねー」

綾音さんは少し強引に進みながら掲示板前にたどり着き、メモを取つて来た道に戻ってきた。

「ふう……」

「どうだった？」

綾音さんと合流して、他の人の邪魔にならないよう少し掲示板から離れた場所に移動する。

「思った通り実力テストの結果ね。じゃ、順位と点数発表するわよ。えーっと……」

綾音さんがメモ帳を開く。

「まず、遥は313点で367位。いつも通りの中の下ね」

綾音さんがにやりと笑って遥を見る。

「そういう綾音はどうだったんだよ」

「あたしは328点の341位。中の上よ」

「そう大差ないじゃないか……」

胸を張る綾音さんに、遥は大げさに肩を竦めてみせた。

「遥のくせに細かいわね」

「いや、どう考えても細かいのは綾音の方だろ。な、葵？」

「そっかもね」

同意を求められた葵さんが苦笑する。

「さすが葵、余裕の笑み。……まっ、実際余裕なんだけど。葵は2位に20点差の498点で堂々の1位よ。もう一位はあんたの定位置ね」

綾音さんが大きなため息を吐いた。

100点満点の五教科だから四九八点は五教科全て満点に近い点数と言うことだ。前回の期末試験でトップとは聞いていたけど……本当に葵さんは頭いいんだ。

「葵さん凄いなあ……」

尊敬の眼差しを送ると、葵さんは恥ずかしそうに俯いた。

「あたし達からすると楓も似たようなものなんだけどね……」

「え？」

「楓の順位。なんと9位の462点」

462点……。思ったより点数が高くて少し驚く。きっと答えに迷った問題が運よく正解を引いたのだろう。

「なんであたし達と葵達とじゃこんなに差があるのかしらね……」

「単純に勉強してる、してないの差じゃないか？」

「遙、分かっているなら勉強しようよ」

そう言うと遙はため息をついて「それができないからこの点数なんだよ」と開き直られた。

「四条さん!？」

群衆の中の女の子が突然僕の名前を叫んで駆け寄ってきた。

『あの子が四条楓さん?』

『うそつ。あんなに小さな子が!?!』
『かわいいわね。お人形さんみたい』

それを合図に一斉にみんなが僕に視線を向けた。

「うっ……」

そこかしこから聞こえてくる声と、たくさんの瞳に見つめられて
圧倒され、たじろいでしまう。

そういえば、昨日からどうも学校みんなの様子がおかしい。廊
下を歩いているとよく声をかけられ、学食でご飯を食べているとた
くさんの視線を感じるようになった。

「バレーがあんなに上手だったのに、頭も良いのね。凄いわあ!」
「あの、僕は別に……」

目を輝かせて話す彼女に気圧されて後ずさる。

それにしてもこの女の子は誰だろう。見たことないからクラスの子
でないのは間違いないけど。校章が黒だから同じ二年生だとい
うことだけは分かる。

「ところで四条さんはもうどこの部活に入るか決めたの?」

「ま、まだだけど」

「そうなの!? 聖園の剣道部の子に聞いたんだけど、四条さん
って中学は剣道部に入っていたのよね? しかも二段だとか」

「う、うん」

『剣道してたんですって』

『あの子が!?!』

周囲のざわめきが大きくなる。何十もの瞳に見つめられ、周りはざわざわと騒がしい。

なんだなんだ。何をみんなそんなに話しているんだ。

……って、今はそんなことよりもここから逃げないといけない。さっきこの女の子は部活について聞いてきた。もしかするとこの子は僕を勧誘にきたのかもしれない。

僕は遙にそつと目配せする。遙はそれに気づいてくれたようで、ゆっくりと頷いた。

「ぼ、僕ちよつと用事があるのでっ」

そう言い残して、僕は女の子に背を向けて走り出した。

「あ、四条さん!？」

「おつとそれより先は行かせないよ」

後ろから女の子の声が聞こえたけど、遙に任せてD組の教室へと入っていった。

「なんであんなに楓に注目が集まったんだろっな……?？」

席につき一息ついていると、遙が僕の方を向いて話しかけてきた。

「さ、さあ……?？」

僕が首を傾げていると、綾音さんがため息をついて首をすくめた。

「いや、時季外れに転校してきた小さくてかわいい女の子が、クラスマッチであんな活躍して、しかも頭も良かったなんて知られたらああもなるんじゃない？」

「……」

「ああ、なるほど」

俯く僕に対して、納得がいったように遥が頷いた。

「で、でもそれにしてもみんな騒ぎすぎのような……」

「楓は来たばかりだから知らないわよね。えっとね、この学校には、綺麗な言葉を並べて言う『模範とすべき生徒を敬愛する』みたいな、古臭い伝統……っていうのかしら？ まあ、そんなものがあるのよ。四季会の会長が代表的な例ね。ほら、普通の学校なら単なる風紀委員長で済むところが、この学校だと場合によっては生徒会長以上に発言力あったりするし……。まあそんなのがあるんだけど、最近は塚本先輩以外にそんな人がいなくて、そこに楓が現れたから、いつも以上に盛り上がったと思うのよね」

「は、はあ……」

納得はできないけど、理解はできた。つまりクラスマッチで目立ったから目を付けられたということなのだろう。

「クラスマッチ、大人しくしておけばよかったかなあ……」

終わってしまったことを悔やんでも仕方ないんだけどね……。

「楓の性格からして、遅かれ早かれこうなると思うけどな」

「それどういう意味？」

「楓は手を抜くなんてことしないだろ？」

「そう、かもしれないけど……」
「な？」

そう言っ て遙は歯を見せて笑った。

第4話 メランコリーオーバードライブ part 2

「まだかよ柊のやつ」

「まだ15分前よ。少しは落ち着いたらどう、遙？」

腕を組んであっちへこっちへと落ち着きなく歩く背の高い茶髪の猫毛の女の子に、ベンチに座り本を読む眼鏡をかけた黒髪の女の子が顔を上げることなく答えた。

「待つなんてアタシの性に合わないんだよ。時間が勿体ない」

遙と呼ばれた女の子はそう言っ頭をわしゃわしゃとかいた。

「8時間以上睡眠をとるほうがあたしとしてはよっぽど勿体無いと思うのだけど？」

「その言い方だとアタシがいつも八時間以上寝てるように聞こえるな……」

「寝てるんでしょ？」

「………柊遅いな」

眼鏡をかけた女の子から目線を逸らしながら遙が呟く。

「そついえば遙が待つ側なんて初めてじゃない。いつものあなたなら時間通りに来ないのに」

「それはだな。お宅にお邪魔する時は予定時間よりも10分くらい遅れて尋ねるのがいいって昨日見たテレビで言ってたな……」

「外で待ち合わせなのだからそういう配慮はいらないわ。あたしが聞きたいのは、どうしてあなたはいつも時間通りに来ないのかってことよ」

「まあ主に寝坊のせいだな」

「分かつてるなら直すよう努力しなさいよ」

遙はフツと息を吐き、肩をすくめた。

「……奈菜、一応アタシはこれでも努力してるんだぞ？」

その言葉に奈菜と呼ばれた女の子は本から顔を上げる。

「たとえば？」

「目覚ましを2つに増やした」

「その効果は？」

「これがさっぱり」

呆れたとでもいいいたげにゆっくりと目を閉じてからため息を吐き、再びに本を読み始める奈菜。

「だったらどうして今日は時間より早くこれたの？」

「昨日夕飯食べてテレビ見てたら眠たくなって、ちよーつと横になろうとベッドに飛び込んだら……」

「そのまま寝て、自然にいつもより早く目が覚めたってわけね」

「おお、さすがーを聞いてー〇を知る女だな」

「さっきのは誰でも予想付くでしょ……。ところで、それ昨日のドラマで主演が言ったセリフよね？」

「……柊のやつはまだか？」

「あなたこの流れ二度目よ……」

奈菜は半眼で遙を見て軽く頭をおさえた。

「もう待ち合わせの時間まであと5分だぞ」

「…遙はいつも15分以上遅れてくるけれどね」
「ぐっ……」

たじろぐ遙を余所に、読んでいた本をバッグにしまい立ちあがる。

「そろそろね」

「な、なにが？」

「柊はいつも5分前に来るから。遙と違ってね」

奈菜のきつい視線に、遙は胸のあたりを押さえて、うっと呻いた。

「さつきから胸に棘のようなものがささってる気がするんだが……」

「『気がする』程度なのね」

「いやすみません思いつきり突き刺さってます。……ということ
この棘をとってほしいんだけど……」

「どうやって目に見えない物を取るのかしら？」

「あー、ほら、一言やさーしく『遙、遅刻なんて気にしてないわ。』

あなたはいつも通りのあなたで良いの』とか……」

「食生活を見直せば治るんじゃない？」

「生活習慣病！？ いやそれはまだ早いから！」

「最近じゃ低年齢化が進んでいて10代でも安心できないそうよ」

「それ聞いて少し怖くなっただけど今はそれ関係ねー！」

「あ、柊きたわ」

「無視かよー！」

二人の元へ小柄な女の子日傘片手に手をぶんぶんと振りながらや
ってきた。

「おはよー。奈菜……遙？」

「おはよう、柊」「よお」「

「…………あれ？」

柊と呼ばれた女の子は遙を見てから携帯を取り出し、液晶画面を見て再び『あれ？』と首を傾げてから携帯をしまう。

「…………一応聞くけど、今の行動の意味は？」

「遙がいたから遅れたのかと思って」

「なんか失礼なこと言われてるけど言い返せない自分が悔しい……………」
「だったら今度からも時間通り来ることね」

奈菜がジト目で遙を見てそう言い、遙はがっくりと肩を落とし、柊はそんな二人を見て苦笑した。

三人は昼食として駅前近くの商店街内のハンバーガー屋に入った。

「で、今日の予定は？」

ハンバーガーに齧り付きながら遙が話を促す。

「当初の予定だと買い物してボーリングでもしようかと思っていたのだけれど……………」
「けど？」

奈菜がハンバーガー片手にバッグから小さく折りたたまれた紙を取り出し遙と柊に見えるようにテーブルに広げる。

「へえ〜。久しぶりじゃん。護衛の依頼なんて」

「昨日の夕方に目安箱見たら入っていたらしいわ。まったく……」

「相手は……またあの男子高のヤツか。懲りない奴らだな」

「あれー？ あの学校の子とは結構いろいろやっちゃって、去年くらいから大人しくなっただけ？」

啜っていたストローを離し、小首を傾げる柊。

「アタシがまだいた頃でも、執行部って聞けば尻尾巻いて逃げたと思うんだがな〜」

遥がそう言うと、奈菜は再びバッグから小さく折りたたまれた紙を取り出す。

「最近転校してきたらしいわ。学校でもまだ友達がいなかったから、情報を得る機会がなかったんじゃないかしら」

「あ〜。なるほど。……一七時に城西公園で、か」

「城西公園って、たしか桜花近くの公園だよな？」

「ああ。……一七時までまだ時間あるな」

「買い物してからいこうと思ってるわ。残念だけどボーリングは次回ね」

遥が最後の一口を放り込み立ち上がる。

「じゃ、さっそく買い物にでもいくか」

そんな遥を柊と奈菜が見上げる。

「まだあたし達は半分も食べてないわよ」

「相変わらず遅いな……」

「遙が早いのよ」

「はいはい。待ちますよつと」

肩を竦めてから遙が椅子に座りなおした。

遙達は商店街で買い物済ませた後、バスに乗ってとある住宅街へやってきた。

「遙は今日もたくさん買ったね。バーゲンの帰りみたい」

柊は遙の両腕に下がる紙袋を見てあははと笑う。

「そうか？」

「いくつか宅配便で送ってもらっておいて何を言ってるのかしら」

「自転車と金庫は持って帰れないだろ……」

「金庫を何に使うのよ……。とにかく、自転車は乗って帰ればいいじゃない。あなたなら楽勝でしょ？」

「まだ暑いのに何時間も自転車漕ぎたくないっての」

「遙なら一時間くらいで帰れると思うよ？」

「いやいや充分しんどいから」

遙が顔の前で手をぶんぶんと振る。

「ところでまだ着かないのか？」

「そろそろ着くと思うんだけど……」

携帯で現在地を確認しながら柊が二人を先導して歩く。

「ここを右で到着、かな」

柊に従い遙、奈菜が十字路を右に曲がる。すると右奥に公園が見えた。

「あの公園？」

「うん、ここで間違いないはず」

「城西公園……っと。合ってるな」

一足先に確認のため公園入り口に向かった遙が入口近くのプレートを見てそう言う。

「柊、遙。彼女もう来てるそうだから少し話をしてくるわ。あなたは隠れられそうなところを探してて」

「オーケイ」「はい」

二人の返事を聞いてから奈菜は携帯電話片手に公園へ入って行き、ベンチに座っていた女の子に話しかける。その間に遙と柊は公園内を見て回る。

「二人ともこっちきて」

しばらくすると奈菜が二人を呼んだ。

「いいところはあった？」

「うーん。あの茂みの中なら広場の方からは見えないかな」

「というよりそこくらいしか隠れられそうなところはないな」

「じゃあそこに隠れるとして……莉子りしこさんはさっき話したようにお

「お願いね」

「は、はい。お、お願いします！」

茉莉子と呼ばれた女の子が緊張からか顔を赤くして勢いよく頭を下げた。

「で、今日はどっちがやるのかしら？」

「はいはい！ ボクがいく！」

柊が元気よく手を挙げて返事する。

「柊、大丈夫なのか？」

「うん。この前は遙だったから、今回はボクの番だしね」

「この前っていつの話だよ。かなり前だった気がするんだけど……まあ柊がやる気ならそれでいいか」

「じゃ、今回は柊ね？」

「うん」

柊は奈菜に頷いてから茉莉子に視線を向け、ニコッと笑って手を差し出す。

「よろしくね、茉莉子さん。危なくなる前にすぐ助けに入るから安心して」

「は、はい。よろしくお願いします！ 柊様！」

茉莉子は柊の手を両手で包むように握り、目を輝かせた。

「そ、そう呼ばれるのも久しぶりだなあ……。えっと、ボクのこと
は『柊』とだけ呼んでもらえれば……」

「いいえ！ そんなわけにはいきません！」

手を握る両手に力が入り、キラキラと輝くまなざしでそう言われて、柊は『そう』とだけ答え、そんな二人を見て遥と奈菜は苦笑した。

そして一七時を少し過ぎた頃。

「……きた」

奈菜の囁き声に、柊と遥が茂みの中から広場を見る。広場のベンチには莉子が座っている。そこに走り寄る一人の男の子の姿が現れる。彼は莉子の前で立ち止まると何か話し始める。最初は笑っていた彼も莉子が首を横に振る度に表情が険しくなっていく。

「そろそろ？」

「まだ合図がでてないわ。もう少し様子を見ましょ」

奈菜がそう言った時、莉子の左手が自身の耳たぶに触れる。

「合図が出たわ」

「それじゃ行ってくるね」

「ああ。怪我するなよ」

軽く手を上げて柊が茂みから飛び出し莉子の元へ駆け寄る。柊の突然の登場に彼は驚いたが、すぐに元の険しい表情に戻り何かを叫ぶ。

「って今気付いたんだけど」

そんな二人の様子を茂みから見ながら遙が口を開く。

「柊のやつ手ぶらじゃないか……」

「あなた今頃気づいたの？」

「……本当に大丈夫か？」

「何をそんなに心配しているのよ。遙らしくないわね」

「いや、あいつこの前怪我したんだよ。柊は怪我の治り遅いからちよつと心配でな」

「柊が大丈夫って言っているのだから、心配する必要はないわよ」

「ん……ああ。そうか、柊なら心配する必要はないか」

「ええ」

二人が見守る中、ついに彼が動きを出す。顔を真っ赤にして叫ぶと同時に手を振り上げ柊に殴りかかる。柊は上体を傾けて避けつつ彼の懐へ飛び込み、勢いそのまま彼の腹に肘鉄をくらわせた。

肘鉄を受けた彼は腹部をおさえ、口を何度かパクパクとさせたあとに倒れた。

「……え、もう終わり？」

遙がそう呟き柊を見ると、柊も同じように思ったのか、うずくまる彼を見て少し驚いているようだった。

遙と奈葉は茂みから出て柊と莉子の元に駆け寄った。

「な、なんか当たり所が悪かったみたい」

そう言っつて柊が苦笑する。

「いやコイツが弱いだけだろ……。柎に怪我なくてよかったが、この程度のヤツに貴重な日曜日が……。とりあえず、あとはアタシがやっとくから奈菜と柎はその子の相手してくれ」
「わかったわ」「うん」

遙は蹲る彼の元にしゃがみ込み、肩を掴んで乱暴に引っ張り仰向けにする。

「よお、少年。ちょっと近い将来のことについて話そうか」

いまだ腹部を抑えて顔を歪める彼がちらつと遙を見る。

「面倒だから単刀直入に言うが、金輪際アイツに近づくな」

「なん、で、お前なんか……」

「お前の親父、会社の営業部の部長だよな？」

「なんで知って……っ！」

「その親会社をうちの親父が経営しててね……。……で、自分で言うのもなんだけど、親父はアタシに甘くて結構わがまま聞いてくれるんだよ。あ、一応証拠のあんたの親父の名刺」

遙は名刺を見せながら、ずいっと彼に顔を近づけてにこっと笑う。

「親父が突然会社首とか嫌だよな？ 次の就職先がまったく見つからなくて、家族で路頭に迷いたくないよな？」

「……」

彼が無言で頷く。よく見ると小刻みに体を震わせている。

「よし。まあそういうわけだから、もう桜花には手を出すなよ。だ

したら……だからな」

遙が自分の首に手をあてて水平に振る。

十分に怯えている様子に遙は満足して立ちあがり、柊達の元へ向かった。

莉子を桜花の寮に送り届けてからバスに乗り、駅前へ戻った頃はすでに時刻は一九時を回っていた。

「くそー。あのへなちょこ野郎のせいでもうこんな時間じゃないか！」

時計を見た遙がそう言って近くの壁を蹴る。

「桜花の寮の門限は一九時だったと思うけど、奈菜大丈夫？」

「ええ。ルームメイトに連絡してあるから誤魔化してくれるでしょ」

「元生徒会長がそれでいいのか？」

「ばれなければいいのよ」

その言葉に遙がにやりと笑う。

「さすが奈菜。それじゃ今から朝までカラオケといくか！」

「さすがにそれはボクの体が持たないよ」

柊が苦笑し、奈菜が肩を竦める。

「明日は学校なんだから、バスがなくなる前には帰るわよ」
「ノリ悪いな……。わかったよ。たしかバス最終は二二時の便だっ
け？ それまでカラオケってことで許してやるよ」
「あたしは良いけど……。柊は大丈夫なの？」
「うーん……」

柊は携帯電話を開いて暫く操作した後閉じて顔を上げる。

「大丈夫じゃないけど、大丈夫ということで」
「ははっ。よし、んじゃいくか」

笑顔の柊に遥も笑顔で答える。

「その前に」

歩き始めた遥を呼び止めて、奈菜が近くのファミリーレストラン
に視線を送る。

「じゃ飯食べてからね」

第4話 メランコリーオーバードライブ part 3

「うーん…」

腕を組んで小さく唸り声を上げていると、隣を歩く遙が訝しげに僕を見た。

「どうした楓？ 手が痛むのか？」

「ん？ ……ああ。クラスマッチの怪我なら治ったよ」

今日でクラスマッチからちょうど一週間。人より怪我の治りが遅い僕だけど、ようやく今日の朝完治したところだ。

「ほら」

僕はその証拠とばかりに包帯の外れた左手をフルフルと振ってみせる。

「じゃあ頭か？」

「全然」

こつちの方も三日に一度は来る頭痛が今日はまったくない。むしろここ最近では一番調子がいいかもしれない。

ただ、その調子の良さが今の僕を憂鬱にさせていた。

「だったらなんで唸ってるんだ？」

「うーん……なかなかいい方法が思いつかなくて」

「なんの？」

「水泳を休む方法」

そう、僕のこの憂鬱な気分の原因は全てこれ。次の授業の水泳だ。別に僕が泳げないとか、単純に水泳が嫌いだから憂鬱というわけではないし、また特段水着を着ることが恥ずかしいということもない。

事故に遭うまでの数年間、僕はスイミングスクールに通っていたおかげでそこそこ泳ぐことができるし、その時穿いていた水着は競泳用（スイミングスクールからの半強制）だったから、それに慣れてしまっていて、女の子のスクール水着くらいじゃ恥ずかしいとは思わなかった。むしろ上半身まで隠れる分マシと思っただくらいだ。

というわけで、水着を着て泳ぐこと自体にはまったく問題はなかったりする。

「休む？ …… ああ。着替えか」

「うん」

「着替えくらい気にしなければいいだろ？」

「気にならなければどれだけ楽か……」

つまり何が問題かと言うと、更衣室で水着に着替えるためにみんなが、そして僕が肌を晒すことが大問題なわけだ。水泳ではいつもの体操服に着替えるんじゃなくて、水着に着替えるわけだから、どうしてもいつも見えてしまう、見てしまう部分が多くなる。いくら女の子の肌を見慣れたとはいえ、それは僕の許容を越えてしまっている。

そんなわけで、水泳の授業を休むことができれば、着替える必要はなくなるし、必然的に更衣室にも入らなくて良くなるので、この問題も解決するというわけだ。だからなんとかして水泳を休みたいんだけど、この体の調子の良さのせいで良い方法が思いつかず이었다。

「なんで今日に限って調子が凄く良いんだろう……」

いつものようにどこか一箇所でも調子が悪ければ、それを大義名分に堂々と先生に休むことを告げられるのに。

「仮病で休めばいいんじゃないか？ 楓なら余裕でOKでるだろ」「ズルはだめだよ」

嘘をついてまで休むことはさすがにできない。

「相変わらず優等生だな」

「普通だつて。……だめだ。いい方法が思いつかない。仕方ないから遙、着替えの時、中学の時みたいに頼めるかな？」

僕は顔の前で手を合わせて遙を見上げる。そんな僕を見た遙はなぜか少しだけ顔を赤くして目をそらした。

「あ、ああ。空いてるロッカーと中に残ってる人を見て……着替えしてる時に壁になるんだろ？」

「うん。いい？」

「わ、わかったよ」

頷く遙の顔はやっぱり赤かった。

「あんた達遅かったわね。早くしないと遅れるわよ？」
「先に行ってるね」

更衣室から出て来た綾音さんと葵さんが僕達にそう言ってプールサイドへと上がっていった。

水着に着替えた二人を見送ってから、僕は遥の耳元に手を当ててひそひそと話す。

「ここで待つてるから、よろしく」

「りょーかい」

遥に水着の入ったバッグを渡して、更衣室へと送り出す。僕は更衣室から少しだけ離れた場所で遥が出てくるのを待つことにする。

待っている間にも更衣室からクラスの女の子が出てきてプールサイドへと上がっていく。何人かは僕を見て「どうしたの？」と声をかけてくる子もいたけど、「なんでもない」と愛想笑いを返して無難に乗り切る。

そんなことを繰り返していて、ふと僕は、まだクラスの子の名前をほとんど知らないことに気づいた。転校して一週間とちょっと経つのだからそろそろ名前を覚えなさいといけない。

「楓」

僕を呼ぶ声に目を向けると、遥が更衣室の出入り口で手招きしていた。

緊張しながら遥に従い更衣室に入ると、中には着替え終えた数人の女の子が代わる代わる鏡の前に立って髪をヘアゴムで留めながら談笑していた。その他には誰もいないようで、ほっとしながら遥の隣のロッカーの前に立つ。中から遥が入れておいてくれたバッグを引っ張り出し、バスタオルと水着を取り出した。

着替える前に再度周りを見回すと、残っていた女の子達も全員出ていったようで、残ったのは僕と遥だけだった。

……これなら気にせず着替えられそうだな。

「楓、早く着替えないと時間ないぞ？」

「へ？」

更衣室の時計を見ると、チャイムまで残り二分を切っていた。

急いで僕は水着に着替えることにした。もちろん、誰かが突然来てもいいように、バスタオルで隠しながら。

そんな僕を見て、遥は何故か少し笑っていた。

「こういつのを見ると、ホント私立だって思うよね」
「まーな」

階段を上がり目の前に広がったのは、雨が降ろうが雪が降ろうが入ることができる室内プール。温度調節も可能のようで、プールの水に触ると生温かい。

これだけでも結構な作りなのに、8コースある25メートルプールの横には底の深い飛び込み用のプールがあり、プールサイドには雛段の観客席が設けられている。この屋内温水プールは近隣の学校の中では一番の設備で、週末には大会も行われているらしい。

「お、ちょうど先生来たな」

「え、まだ髪留めてないのに」

「あとでやってやるから。行くぞ」

「う、うん」

仕方なく長い髪そのままに僕は遙を追って集合場所へ向かう。たどり着くと、先生の『集合』と掛け声をかけた。ばらばらだったみんなが四列に並ぶ。一列が男の子、残り三列が女の子。僕と遙は端の列の最後尾に並んで座った。

「ほら、ヘアゴム貸してみ」

「よろしく」

遙に黒色のヘアゴムを渡すと、流れるような動作で僕の髪を綺麗にまとめてヘアゴムで留めた。

なんで遙も椿もこんなに早いのに綺麗にできるんだろう。

「ほい。できた」

「ありがとう。遙、髪短いのに上手だね」

髪を触りながらこっそりと振り返る。

「これくらいみんなできるんじゃないか？ 楓もこれくらいできるようになったほうがいいと思うけどな」

「だって見えないし……」

「慣れだよ慣れ。最初は鏡見ながらやればいいさ」

「あ、そうか。今度家で練習してみようかな」

先生が出席を取る間、途中返事をしながらも僕と遙は小さな声で話し続けた。

第4話 メランコリーオーバードライブ part 4

出席確認を取った後、プールサイドいっばいに広がって準備体操を始めた。今日の当番だというクラスの男の子の号令に合わせて体を捻ったりジャンプする。一通り終わると、先生は「二人一組になつてストレッチ始めてね」と言つて近くのベンチに座りノートを広げて何か書き始めた。

腕を伸ばしながら僕は周りを見回す。探しているのは遙じゃなくて葵さん。さすがに遙とじゃ身長差がありすぎてストレッチをするにはキツイものがある。葵さんでも僕より10センチ以上高いけど、これくらいは仕方ない。だって僕と同じくらいの身長の子がこのクラスにいないから。

「あれ、葵さんいな」

トントン。

肩を軽く叩かれた。

「ん？ ……っ」

何気なく振り向くと、何かが右頬にあたった。よく見るとそれは人差し指。僕はむにと形の変わった頬のまま、指から腕へと伝つて視線を上げていく。その先には嬉しそうに微笑む葵さんがいた。

「ひっかかった」

「……葵さんつて案外不真面目だよね」

「そう？」

「うん」

笑顔の葵さんにジト目を向ける僕。少し嫌味っぽくなったのに全然気にしてないようだ。

「授業中もよく手紙交換してるし」

手紙交換といっても、ちゃんとした便せんを使うわけじゃなく、小さくちぎったルーズリーフにメッセージを書き込んで相手に渡して返事を書いてもらうというものだ。

「だつてずっとノート取ってるだけじゃ暇でしょ？ ほら、特に地理の時間とか」

「まあそうだけど……」

「勉強なら家で一人でやった方がはかどるの。それなら学校にいた間はみんなと遊んだ方がいいでしょ？」

「それが授業中に見つかつても？」

「そういうのも高校生活の楽しみだと思うの」

「ポジティブ過ぎて羨ましい……」

先生に怒られるのも、それで注目されるのも嫌な僕は絶対そんな考えにはならない。

「つと。そろそろやるつか」

周りを見るとみんなストレッチを始めている。少し遠くの方では遙と綾音さんがペアを組んでやっているみたいだけど、二人ともずっと何か話している。表情も若干険しいようにみえるので、きつと『痛い』だの『やりすぎ』だのと文句でも言い合っているんだろう。

「私体硬いから軽くでお願いね」

「分かつた」

プールサイドに座って足を広げて前屈する葵さん。僕はその背中をグツグツと数回力を込めて押す。

葵さんが言う通り、たしかに葵さんの体は硬かった。体があまり曲がらないようで、僕が背中を押してなんとか人差し指が足先に届くくらいだ。

「いたたた……じゃ、次楓ちゃんね」

立ち上がる葵さんの代わりに今度は僕が座る。

「僕もあまり強く押さな ひゃっ!」

ふいに首筋を撫でられた僕はビクツと体を震わせて、小さく声を上げてしまった。

「ご、ごめんなさい。まさかそんなに驚くなんて……」

少し涙目になって見上げると、葵さんが申し訳なさそうに謝った。

「楓ちゃんうなじ弱いのか?」

「よ、弱いつて?」

「……ううん、なんでもない。それより、ホント楓ちゃんって肌白くてすべすべだね」

葵さんが引つ込めた手をもう一度伸ばしてきたので、両手で首をガードする。

「もう、そんなこといいから」

「あゝ……」

残念そうな顔をしながら葵さんが僕の背中に手を置く。何故か悪いことをした気分になりつつ、上半身を曲げて脚にピタッと頬をくっつける。

「わっ。楓ちゃん体柔らかいね」

「んー？」

葵さんに背中を押してもらいながら、脚を開いて右へ左へと体を曲げる。

「どうしたらそんなに柔らかくなれるの？」

「うーん……別に何もしてないけど」

「お酢とかのんでた？」

「酢の物酸っぱくて嫌い」

って、それ以前にお酢に体を柔らかくする効果なんてなかったよ
うな……。

「酢の物おいしいのに……。じゃあ生まれつき？」

「たぶん」

椿はそれほどでもなかったけど、僕も柊も何故か物心ついたときから体が柔らかかった。

「いいな」

「なんで？」

「だって膝曲げなくても、落ちた消しゴム取れるんでしょ？ 楽だな
なっって」

「それくらい面倒がらずにしゃがんで取ればいいと思う……」

こんなこという子が学年トップの秀才なんだもんなあ……本当に人ってよく分からないものだ。と、ちよつと哲学っぽいことを考えながら僕たちは交代にストレッチを続けた。

「前の人が10メートルラインまで泳いだのを確認してから次の人は行くようにね。じゃ、一人目」

ピツと笛が吹かれて、一列目の子がプールに飛び込んだ。まずはウォーミングアップということで、好きな泳法で50メートルゆっくり泳ぐらしい。

「綾音。競争するか？」

「最初から飛ばしてどうするのよ……」

僕と遙は五コース、綾音さんと葵さんは四コースに並んでいた。さつきまでは一緒だった男子達も、さすがにプールの中では別々らしく、一から六コースまでが女子、残りの二コースが男子と別れていた。

ふと葵さんを見ると、その手にはビート版が握られていた。僕の視線に気づいた葵さんが、少し恥ずかしそうに笑った。

「葵どうした？ ……ああ。葵はとんかちなんだよ」

「それをいうならかなづちでしょ？ 微妙な間違いして……」

綾音さんが大袈裟に肩を竦めてみせる。

「昔からあたしが教えてるんだけどね……いつまで経ってもビート

版やら浮き輪やら、あたしの手を離そうとしないのよ」「あ、綾音っ！」

顔を赤くした葵さんが綾音さんの腕を引っ張る。

「どうせバレることだしいいじゃない」

「そ、そうだけど……」

「楓は泳ぎはどうなの？ やっぱりできたりしちゃうわけ？」

「うーん。一応一通りは」

話題の矛先を葵さんからすぐに返るあたり、葵さんのこと気遣ってるんだなと感心しつつ答える。

「一通りって、背泳ぎとかバタフライもいけるってこと？」

「うん。これでも小さい頃はスイミングスクールに通ってたから」

……まあ、その頃とは体が違うけど。

「やっぱりハイスペックね……」

「だろ？」

「だろって、そういうあんたも結構なモンじゃない。なんでもソツなくこなすでしょ？ 勉強以外」

「器用貧乏ってヤツだよ……つと、次か」

遙はそう言うスタート台に上り、すぐに飛び込んだ。その後、それに続くように綾音さんもスタートする。

遙が飛び込んだ後、その次の僕はスタート台に上がり、遙が10メートルラインを超えるのを待つ。横のコースを見ると、葵さんがビート版を持ってプールに入っていた。

遙が10メートルラインを超えたのを視認して、スタート台を蹴

って飛び込む。ウォーミングアップということで、最初の二五メートルを平泳ぎ、残りをクロールで軽く流した。

続いてもう50メートルということで、今度はバタフライと背泳ぎを数メートルずつ交えながら泳ぐ。

泳ぎ終えてプールサイドに上がり、腕をグルリと回した。

今日は調子が良いおかげで腕も重くない。これなら頑張れば個人メドレーくらいならいけそうだ。

「はい。では時間もないので、タイム計ります。去年と同様に100メートルの個人メドレーをしてもらいます。バタフライや背泳ぎができない人は、クロールか平泳ぎに変えて100メートル泳いでください。無理なら途中足についても構いません。では二から七コースを使って始めましょう」

「100メートル泳いただけでもうテストか」

先生の話聞いてから遙が呟いた。

「早くしないと時間内に終わらないしね」

「体育って二時間続けてやるべきだよ……。よし。今度こそ競争するか」

遙が僕や綾音さんに目配せする。

「あたしはバタフライと背泳ぎできないからクロールばかりになるけど、それでもいいのかしら？」

「それくらいハンデでやってやるよ」

「ほー。負けてもあとで言い訳なんてなしよ？」

ふふんと鼻を鳴らす遙と、変な笑いを浮かべながら遙を睨む綾音さん。二人の間に火花が見えそうだ。

「楓、がんばりましょうねっ」

綾音さんが僕を見て手を取る。

「へ？ でもタイム計るなら出席番号順とかじゃ……」

「そんなのないわよ。順番なんて適当」

「アタシが五コースだから、綾音が四、楓が三、葵が二コースな」
「わ、私も!？」

珍しく葵さんが素っ頓狂な声をあげた。

「もちろん。あ、並ぶのは四人目な。ほら、並んだ並んだ」

僕は渋々遙の指示通り三コースの四番目に並んだ。

二コースを見ると、ちゃんと葵さんも四番目にならんでいた。けど、ビート版を両手に持ったまま、それを額に当てて俯いていた。

葵さんが顔をあげたところで手を振ると、苦笑しながらも振り返ってくれた。

……頑張れ、葵さん。

他人事とは思えず、僕は心の中で葵さんを応援した。

第4話 メランコリーオーバードライブ part 5

列に並んで待っていると、遥が僕のところへとやってきた。

「あー。一応釘刺しとくけど、楓はほどほどにしとけよ」

「へ？ だったら競争なんかやめ」

「それは……だめだ」

「……」

僕は遥にジト目を向ける。

競争しようとして僕を巻き込んでおきながら手を抜けて、いったいどうしろと……

「別に手を抜けてことじゃない。しんどくなってきたら無理せず速度を落とさせて言ってるんだ」

……なんで遥は僕の考えていることが分かるんだろう。

「顔見れば分かるんだよ」

絶対心を読んでも。

「とにかくあれだ。ほら、学生駅伝とかでラストスパートしてゴール直後に倒れこむヤツがいるだろ？ あんな感じに全力を出しすぎで倒れるようなことにはなるなってことだ」

なるほど。つまり余力を残しつつ全力を出せということか。

また難しい注文を……。

「いや別に難しいことじゃないだろ……」

「……遥って心読める能力とか持ってたりするの？」

「ないない。ってそんな超能力本当にあるのか？」

「さあ？」

僕はマジックも超能力も、そういつた類のものは信じていない。

でも、もし遥が『アタシは心を読む能力を持つてる』なんて言えば、僕はそれを信じると思う。

「はい、次の組ー！」

「お、アタシ達か。楓、ほどほどにだぞ」

「善処してみるよ」

「善処するなんて言っただけで実行したヤツを見たことない」

「はいはい。じゃあ頑張ってみます」

「ちゃんと守れよ」

遥は僕にそう言いながら自分のコースへと戻って行った。

「では次いきまーす」

先生の声に僕はスタート台上り縁に足の指をかける。緊張から胸がドキドキしてきて、落ち着こうと深呼吸を繰り返す。

「位置について」

膝を曲げて前かがみになり、指先を足の指に触れるように構える。

「よーい」

数瞬後、ピツと笛の音が響いた。

僕は強くスタート台を蹴ってプールに飛び込んだ。深からず浅からず、まずまずのスタートが切れた。個人メドレーの最初はバタフライ。初っ端から一番の難関だ。バタフライは得意じゃないし非常に体力を消耗する。とくに腕に疲労がたまるので、それを軽くするために15メートル付近まで潜ったままだけを使って泳ぎ進む。水面に出たところで腕を使い始めるも、ひとかき毎に目に見えて体力が削られていく。さすがバタフライ。正しいフォームを身につければ楽な泳法だとは聞くけど、僕を含む大多数の人からすればダントツにキツイ泳法だ。両腕で水を体の下に向かってかき、その勢いで上半身を水面上に持ち上げて息継ぎをするというこの動作が酷く疲れる。

それでもなんとか二五メートルを泳ぎきり、ターンして今度は背泳ぎに切り替える。背泳ぎは僕の一番得意とする泳法だ。とは言え、さっきのバタフライで体力をほとんど消費してしまったため、速さよりも息を整えることを優先する。横目でコースロープを見つつ出来る限り真っ直ぐ泳ぐよう心がけるけど、それでも疲労のせいで気づいたらコースロープに当たりそうになってしまう。

あまり息を整えられないうちにプールの端にたどり着き、平泳ぎへ移行する。泳ぎながら隣を見ると、案の定と言うか何と云うか、近くに葵さんの姿は見当たらなかった。遥と葵さんは僕の数メートル後ろにいるようで、二人でいい勝負をしていた。って、僕ともそう離れていないので追いつかれないように頑張らないといけない。そして最後の二五メートルのクロール。タイム的に見ると、実はこのクロールが一番得意じゃなかったりする。すぐ後ろには遥と綾音さんがいるので、追いつかれないよう残りの力を振り絞る。疲労のせいでひとかきする度に体が左右にぶれる。同じ二五メートルプールのはずなのに、さっきまでよりやけに長く感じてしまう。もう隣を気にする余裕もなく、ただひたすらに前へと進む。

あと一五メートル。あと一〇メートル。あと五メートル……。

「ふはあ！」

壁にタッチすると同時に勢いよく顔を上げ、大きく息を吸った。

「はあ、はあ……」

コースロープに掴まりながら周りを見ると、誰もまだゴールしていなかった。僕が一番のようだ。と、ちょうどそこに遥と綾音さんが続けてゴールした。

「ふう。やっぱり楓の方が早かったか」

「ねえ楓、遥とあたしどっちが早かった!？」

この二人はなんで泳ぎ終えた直後だつていうのに、こんなに元気なんだろう。こっちは今にもめまいがしそうなのに。

「はあ、はあ……は、遥の方がタッチの差で早かったかな」

「まじ!？」

「よっし!」

綾音さんが目を見開き、遥がガッツポーズをした。

「こんなことなら平泳ぎなしですつとクロールするべきだったかしら……」

「いやそれはさすがにダメだろ」

二人をぼーっと眺めていると、徐々に気分が悪くなってきた。

「お、おい。楓大丈夫か？」

「ん……たぶん大丈夫」

スタート前にあんなことを言われた手前、大丈夫じゃない、とは言えなかった。それは遥の忠告を無視したことになるから。

「顔真つ青にして大丈夫なんていうやつがあるか。一人で上げれるか？」

「うん」

僕はコースロープをくぐり梯子を使ってプールを出るけど、水の中から出た途端ズンと体が重くなってプールサイドにへたり込んだ。

「ほら、掴まれ」

そう言って差し出された遥の手を握って立ち上がって歩くと、遥は僕がふらつかないように肩を支えてくれた。

結局、それが原因で朝から続いていた好調が嘘のように体調が悪くなった僕は、体育以降の授業全てを休んで保健室のベッドの上で大人しくすることになった。

休み時間には代わる代わる人がやってきた。遥には怒られ、椿や葵さん、綾音さん、穂乃花先輩や香奈さんには心配され、蓮に至ってはお見舞いだと言ってリンゴジュースを買ってきてくれた。

同じクラスの遙や葵さん、綾音さんは分かるけど、他の皆はどうして僕がここにいることを知ってたんだろう……。。

第4話 メランコリーオーバードライブ part5 (後書き)

第4話 メランコリーオーバードライブ 完

間話 楓と椿のとある一日

椿「えー。お母さん他みなさま。おはようございます。今は日曜日の午前九時をほんのちよつと回ったところですよ。今日は『お姉ちゃん』の休日の過ごし方』という事で、お姉ちゃんを一日密着レポトしたいと思います。ちなみに撮影者のわたしは妹の椿です。どうぞよろしくお願いしますと……。それではそろそろお姉ちゃんを起こしたいと思います。お姉ちゃんは学校のある日はもう少し早いですけど、休日でも予定のない日は九時まで寝ています。放っておくとお昼過ぎまで寝ています。そのまま寝かせておいてもいいんですけど、敢えて起こします」

コンコン

椿「お姉ちゃん起きてる？」

……

椿「一応いつも返事がないことを確認してから入ります。親しい仲にも礼儀ありと言いますから」

ガチャ

椿「お姉ちゃん。朝だよ。お姉ちゃん」

楓「……」

椿「声だけでは起きません。たまーに起きますけど」

ユツサユツサ

椿「お姉ちゃん。朝だよ！」

楓「……んー。……今何時？」

椿「九時だよ。そろそろ起きないと」

楓「んー……ん？ 椿、それなに？」

椿「これ？ これはビデオカメラ」

楓「それは分かるけど……なんでそんなもの持つてるの？」

椿「お母さんが寂しいから、お姉ちゃんの一日の様子を撮って送ってほしいんだって」

楓「伯母さんが？ ……それなら仕方ないか」

椿「じゃ、わたしは戻るね」

楓「うん。ありがとう」

椿「……あ、着替えも撮る」

楓「早く出てけっ」

椿「はい。ところ変わって朝ご飯の様子です。これが朝ご飯の時のお姉ちゃんです。凄く眠たそうです。でもそこがかわいいです」

楓「朝ご飯って、僕これ飲んでるだけなんだけど……」

椿「いいのいいの。それだけでもわたしは充分だから」

楓「『わたしは』？」

椿「……」

楓「……それ、伯母さんと伯父さんが見るんだよね？」

椿「う、うん」

楓「椿は見ないよね？」

椿「……」

楓「はいそこで黙らない」

椿「……ほ、ほら、お姉ちゃん。早く野菜ジュース飲まないとめるくなっちゃうよー！」

楓「ぬるくてもいいよ。野菜ジュースだし」

椿「……そ、そうだ。一応撮れてるか確認しないとイケないし、お母さんに送った後に『無くしたからもう一回送って』って言われた時のために保存しておかないと」

楓「ふーん……。まあ椿なら別にいいか」
椿「ほっ……」

楓「僕の様子はもう充分撮っただろうから、次は椿を撮ってあげよ。それ貸して」

椿「あ、わたしはいいの。今回はお姉ちゃんを撮ってほしいって依頼だから」

楓「なんで僕だけ？」

椿「わたしはこの前一人で暮らしてるときに撮って送ってるから」

楓「なるほど……」

椿「ということで、今日は一日お姉ちゃん撮り続けるからよろしく
っ
っ

楓「はいはい」

椿「リビングです。お姉ちゃんはソファに座って何か読んでるみたいです。お姉ちゃん、それなに？」

楓「ん？ これ図書館で借りてきた小説」

椿「どんな内容？」

楓「恋愛物かなあ」

椿「お姉ちゃん恋愛物好きなの？」

楓「嫌いではないけど、自分で買ってまで読もうとは思わないかな」

椿「いつもはどんなの読んでるの？」

楓「探偵物とか、冒険物とかそういうの」

椿「ワトソン君？」

楓「だいたい合ってる」

椿「ふーん……。っここでちょっとカメラを一回置いて……。えいっ

と」

楓「へ？ わわっ！ つ、つばき!？」

椿「これでカメラを持って、と」

楓「ち、ちよつと椿!？」

椿「お姉ちゃん、そんなに膝の上で暴れないでよ」

楓「あ、暴れないでって、人が本読んでいるときに勝手に膝に乗せたのはそつちじゃないか!」

椿「まあお姉ちゃん軽いから暴れてもあまり痛くないけど」

楓「人の話を聞けって!」

椿「まあまあ。暇なんだからお姉ちゃん抱っこしててもいいでしょ?」

楓「や、暇だからって意味がわか」

椿「いいからいいから。お姉ちゃんは大人しく本読んでればいいから」

楓「……」

椿「そんなに睨んでも離さないから」

楓「……じゃあこの体勢しんどいから、椿にもたれるけど、いい?」

椿「どうぞどうぞ」

楓「んじゃ……って、この腰に回した腕はなに?」

椿「お姉ちゃんが落ちないようにガード」

楓「逃げられないように、じゃなくて?」

椿「そうともいうかも」

楓「……はあ」

椿「お昼ご飯はレンジでチンで出来上がりの茶碗蒸しです」

楓「なんで茶碗蒸し?」

椿「えー。お姉ちゃん好きだって言うから買ってきたんだよ?」

楓「あ、覚えてたんだ」

椿「お姉ちゃんのことならなんでも。今度は葵さんに作り方聞いてちゃんと一から作るからね」

楓「作るの面倒だろうから、そんな無理しなくても」

椿「一度作ってみたかったからいいの」

楓「……そういうことなら、楽しみにしてる」

椿「でもそれ一個だけでいいの？ わたし足りないから焼きめし作るけど、お姉ちゃんもいる？」

楓「んーん。デザートにプリンとショートケーキあるから」

椿「お姉ちゃんって絶対そっちが主食だよね……」

楓「あ、冷蔵庫にアイス買い足したから椿も食べていいよ」

椿「もうこの前買ったの全部食べたの！？」

楓「夏だしね」

椿「今9月だよ……お腹壊さないの？」

楓「アイスは案外大丈夫なんだよね。なんでだろ？」

椿「本当に主食だね……」

椿「今午後3時です。午前中のようにお姉ちゃんは本を読んでたんですけど……」

楓「……スー……」

椿「寝ちゃいました。お姉ちゃんが聞くと絶対怒りますけど……こ
う静かに丸まって寝ているところを見ると、子供みたいです。服を
子供っぽくすれば、小学生料金でバスに乗れそうです。妹としては
心配です。いつかお姉ちゃんが誘拐されなにかと……。結構真剣で
す。あ、さっきのはお母さん心配するから編集で切つとかないと。

……それでは、お姉ちゃんが寝ている間に買い物に行ってきます」

椿「現在夜の七時。今から晩ご飯です。今日は豆腐ハンバーグです」
楓「ヘルシーだね」

椿「お姉ちゃんお肉のハンバーグ食べないんだもん」

楓「食べる食べる。ちよつとだけなら」

椿「それを食べないって言うのっ」

楓「そうとも言うかも。……ん、おいしい」

椿「じゃ、お姉ちゃん結婚しよ」

楓「何が『じゃあ』なのか分からないけど、法律と性別的に無理」

椿「ちえっ。最初は驚いてくれたのに今じゃこれだよ……」

楓「毎日のように言われたらこうなるよ」

椿「きつと人はそうやって強くなるんだよ……」

楓「まとめようとしてもダメ」

椿「お姉ちゃんが冷たい！」

楓「僕は早くご飯食べてアイス食べたいんだよ」

椿「妹より食後のデザート!？」

楓「今日のは初めて食べるから楽しみなんだよね」

椿「こうなったらそのアイスをわたしが食べて」

楓「ちゃんと椿の分も買ってあるから一緒に食べようよ」

椿「え？ う、うん」

椿「お姉ちゃんは今洗濯物を畳んでいるところです」

楓「はい、これ椿の分」

椿「ありがとうお姉ちゃん」

楓「お風呂は沸かした？」

椿「うん。もうそろそろ入れると思う」

楓「じゃ、椿からどうぞ」

椿「お姉ちゃん一緒に入ろうよ」

楓「イヤ」

椿「なんでー？ お姉ちゃんいつもお風呂一緒に入るのイヤがるよね？」

楓「イヤなものイヤ」

椿「えー。カメラは防水だから大丈夫だよ？」

楓「撮るつもり！？」

椿「うん」

楓「絶対イヤだ！」

椿「ちえーっ。じゃあ一人で入ってこようかな」

楓「……こつちチラチラ見てもダメ」

椿「ぶー」

楓「ブーイングしてもダメ」

楓「そろそろ寝るね」

椿「それならわたしも」

楓「一緒に寝るはナシだからね」

椿「うっ……」

楓「じゃ、おやすみー」

椿「お、おやすみ」

……

椿「はい。そんなわけで、お姉ちゃんに一日密着したわけですが、いかがでしたでしょうか。お母さん、これ見て元気だしてねー。わたしもお姉ちゃんも元気にやってるよ。たぶん年末にはお姉ちゃんと一緒に帰るから。それではまた次回ーっ」

間話 楓と椿のとある一日(後書き)

間話 楓と椿のとある一日 完

第5話 楓と柝 part 1

表紙(前書き)

> i 1 9 3 1 8 | 2 1 9 9 ^

第5話 楓と柊 part 1 表紙

「ただいまー」

誰もいない家に向かって挨拶しながら、後ろ手にカギを閉める。折りたたんだ日傘を傘立てに立てかけて靴を脱ぎ、廊下上がった。朝のニュースでは、今日の天気は曇り時々晴れ、気温は平年並みと言っていたはずなのに、実際は晴天で真夏のような暑さ。今日は体調もそれほど良くはなかったので、本当に日傘を携帯しておいてよかった。

「んしょ……」

鞆をリビングのローテーブルに置いて、帰りにスーパーで買ったものを冷蔵庫、キッチンに収める。

「疲れた……」

ばたつと近くのソファに倒れこむ。

「ん……っ。はあ……」

うつ伏せのまま伸びをして、体から力を抜く。顔がソファに埋まっているので少し息苦しい。

転校してから二週間とちょっと。クラスマッチ以降いまだ僕に向けられる視線の数は減ることなく、むしろ日に日に増えている気さえする。確実に増えたと感じたのは先日の水泳の授業のあった日の翌日。何故か僕が一〇〇メートルを泳ぎ切ったことが一日にして知れ渡っていたらしく、それが原因で今まで以上に注目されるように

なった。

なんでそんなことで注目されるのだろうと疑問に思ったけど、遙や綾音さん曰く『クラスマッチ同様の運動できなさそうなのにできるギャップ』が注目される要因なのだからか。

そんなわけで、毎日たくさんの視線を浴びせられた結果、最近じや学校が終わる頃には歩くのも億劫なくらい酷く疲れ切っていた。

たぶんそんな僕の様子に気づいたから、葵さんと綾音さんは今日の部活を休み、遙と一緒にファミレスに誘ってくれたのだろう。おかげで多少気は晴れたけど、それでも体はずっしりと重いままだった。

「はあ……」

このまま寝ようかなと思っていたそのとき、誰もいないと思っていた廊下から足音が聞こえた。足音は次第に大きくなり、聞こえなくなったと同時にリビングの扉が開いた。

「お姉ちゃん、おかえり」

入って来たのは椿だった。

「椿、帰ってたのか」

「うん。お姉ちゃんは？」

「遙と葵さんとファミレス行ってた。あ、朝牛乳と卵がないって言うってたから買って来た。あとついでにアイスも補充したから椿も食べね」

「う、うん。ありがとう」

ソファアの上で体を捻って仰向けになり、ローテーブルに置かれていたテレビのリモコンを操作する。電源を入れたテレビでは、ド

ラマの再放送をやっていた。

椿がソファーに近づいてきたので、いもむしのように体を足の方に移動させて頭の上に人一人座れるくらいのスペースをあける。

「あれ。お姉ちゃん調子悪い？」

「んーん。ちよつと疲れてるだけ」

椿はソファーに座ると、僕の頭を軽く持ちあげ、その下に体を滑り込ませて僕の頭を膝の上にのせた。

「重いよ」

「重くない重くない」

椿に膝枕をしてもらいながら、テレビのチャンネルを変えていくもどれも同じようなニュース番組をやっていて、結局元のドラマの再放送に戻した。

「大丈夫？」

椿の手が額に当てられた。ひんやりして気持ちいい。

「うん。まあ中学の頃と比べればこれくらいいたいしたことな」

うつかりそう言うと、椿は眉をひそめた。「失敗した」と思いつつも僕はそれに気づかないフリをして視線をテレビへと向けた。

再放送のドラマは数年前放送されてそこそこ人気だったもので、僕もタイトルは知っていた。だけど、僕はそのドラマをまったく見てはいなかったし、今放送されているのは第六話と中途半端で内容がさっぱり分からない。

「椿、これ見てる？」

「ううん」

「じゃあ、まだ晩ご飯まで時間あるし、何かして遊ぼうか」

「わたしは嬉しいけど……お姉ちゃん大丈夫なの？」

「平気」

僕は椿の顎に当たらないように頭を起こしてソファから立ち上がると、椿に『ちょっと待ってて』とだけ告げてリビングを後にした。

『……………』

僕と椿は無言でテレビを見つめ、両手で握るコントローラーをカチャカチャと操作する。

『ウワー』

僕が操作していたキャラクターが、椿の操作していたキャラクターの攻撃を受けてその場に崩れ落ちた。

『ユーウィン』

また負けた。これで五連敗だ。

「ふー……………」

僕はコントローラーを置いてグラスを手に取る。

「コホッ」

喉を通ったコーラの炭酸がきつくてせき込んでしまった。

「お姉ちゃん……よわいね」

「格闘ゲームは得意じゃないんだよね……。左向いたら技出せないもん」

「普通こういうときって自分に有利なのを持って来るもんじゃないの？」

「部屋漁ってもそれしか出てこなかったんだから仕方ないよ。それに、別に勝つのが目的じゃなくて、椿と遊べたらいいんだし」

「そう、それだよ」

椿がコントローラーを置いて僕に向き直る。僕もグラスをローテーブルに置いて椿に視線を向ける。

「なんでゲームなの？」

「なんでって、椿と遊ぶため、だけど？」

「うーん……」

椿が首をひねって唸りだした。

何が不満なのだろうか。せつかくダンボールの中から引っ張り出してきたのに。

「こんなゲームじゃなくても、わたしはお姉ちゃんとお茶飲みながらお話しできればそれで良いんだけど」

「……いいのそんなことで？」

「わたしももう高校生なんだから」

「……ああ」

なるほどそういうことか。成長したと言っても、椿は僕の妹。しかも面と向かって会ったのは数年ぶり。だからなのか、今でも時々昔の幼かった頃と同じように扱ってしまう。

「そうだよな。椿ももう高校生だもんね」

「……その言い方が子供扱いしてる気がする」

「ごめんごめん」

僕は少し手を伸ばして椿の頭を撫でる。

「それも子供扱いしてる」

「この前頭撫でも何も文句言わなかったのに」

「それはそれ。これはこれなの」

……難しい年頃のようにだ。

「椿だつて僕の頭を触るじゃないか」

「あ、うーん……じゃあこれはノーカンで」

「ノーカンって……」

僕は少し呆れて苦笑した。

「ふー……」

お風呂に入った後、やっとのことで髪を乾かした僕は、自分の部屋に入るとすぐにベッドに倒れこんだ。

「……つと」

そのまま寝ようとして目を閉じたけど、ふと思いついて体を起こした。机の上に手を伸ばして携帯電話を取り、メールを打つ。少しだけ慣れた手つきで文字を打つていき、打ち終えた文を一度読み直してから送信ボタンを押す。数秒後に送信完了の文字が液晶に表示され、それから数秒後に受信完了の文字が表示される。それを未読のまま携帯を閉じて机の上に戻し、布団に戻りこみ目を閉じた。

第5話 楓と柊 part 2

たぶん私はリビングのソファに座っていた。

たぶんというのには周りが真っ暗でほとんど何も見えないから。普通こんな暗いと不安になったりするけど、今の私は半分寝てるような起きてるような曖昧な状態だから、怖いなんて感情はまったくなかった。

で、そんな真っ暗な部屋のソファに座ってる私は何しているのかと言うと、ぼーっと目の前のテレビを見ていた。テレビがついてるなら真っ暗じゃないんじゃない？ と思うと思う。正解。でも普通のテレビと違って、目の前のテレビは凄く見えにくくて文句を言ってしまうそうになるほどに暗いから、部屋を照らすにはあまり役に立ってなかった。

ちなみにテレビでは日常風景が流れている。頭がぼんやりとしてるから詳しくは分からない。けれど別にすっかり見ようとは思わなかった。無駄に私が動けば、それだけ『彼女』に負担をかけることになるのだから。まあそう焦らずとも、その情報が必要となれば随時引き出すことができるし、お互いがお互いの情報を補完し合うために日記やメールでやりとりをしているので、それを見れば大抵のことはなんとかなったりする。

そうして見ていると、ふいにテレビの電源が落ちた。最後が自分の部屋だったから寝たみたいだ。本当に真っ暗になったリビングで、ふと私は最近たまに映像が乱れることがあることを思い出した。映像が乱れることは私の出番が近いことを意味していた。

指折り数えて、たしかにちょうど明日からその日だということを確認する。

……一週間前にも一日外に出たのに、また私の番なんだ。そういえばあの時はどうして外に出たんだっけ？ ……ああ、奈菜と遙と遊ぶ約束したから、久しぶりにどうぞって譲ってくれたんだっけ。

面と向かって『会話』するとあとで酷い頭痛がするから滅多に『会話』はしないようにと決めてたのに。でも、それだけ私のことを考えてくれているということだから、それは嬉しいことなのだけど…
…複雑な気分。

そんなことを考えていると、少しずつ周りが明るくなってきた。予想通り、明日からは私の番みたいだ。

私はソファから立ち上がると、二つある出口のうち玄関に近い方の扉を開けて廊下へと出た。私が廊下へ出ると同時に、玄関から遠い方の扉が閉じた。少しだけ振り返ると、リビングはまた真つ暗になっていた。私は小さく「おやすみなさい」と呟いてから、玄関を出た。

「……っ。……」

……。

「……っ……ん」

……んー？

「……ちゃん」

声が聞こえた気がした。遠く……ではないみたい。すごく近い。重い瞼を少しだけ持ち上げてみる。布団の中にまで差し込む光に目を細めながら、私は体をゴロンとうつ伏せにして枕に顔を埋めた。

「……ちゃん。お姉ちゃん起きて」

ゆっさゆっさと体が揺れ始める。

きつと椿が起こしに来たんだ。起きないと。

そう理解しても、まだまだ私は眠たかった。

「んー……あと五分」

ほんの少しの葛藤のあと、椿にそう返事して起きることを拒否する。

「お、お姉ちゃん……?」

「んー……」

「……柊お姉ちゃん?」

少しの間後、椿はそう尋ねた。

「……うん」

小さな声で答えつつ、布団から右手を少しだけ出して『その通り』と手を振った。

「道理で……。ほら起きてお姉ちゃん。そろそろ起きないと遅刻するよ?」

「準備早くするからもう少し寝かせて……」

「この前の日曜日もそう言って五分どころじゃなかったよね?」

「時間には間に合ったからセーフ……」

「わたしがもう一回起こしにきてなかったら絶対遅れてたよね?」

柊お姉ちゃんの『あと五分』は嘘だって分かっているんだから。だから……起きて!」

突然、バサツと勢いよく布団が剥がされた。体を丸めながら枕に埋めていた顔を横にして椿を見上げた。

「布団了」

「ダメ。起きてっ」

のろのろと伸ばした手は布団を掴むことなく、ただ閉じたり開いたりを繰り返した。と思ったら、椿に引っ張られて無理矢理起こされた。

「んー……」

目をしばしばさせながら椿を見ると、その手には私の着替えがあった。

「はい、着替え」

「んー……」

渋々着替えを受け取りベッドに置いて、パジャマのボタンを外し始める。

「へ？ お、お姉ちゃん？」

パジャマを脱いでショーツ一枚になってからブラジャーをつける。けど、うまくホックをとめられない。まだ起きたばかりで、しかも椿に無理矢理起こされたものだから、手がちゃんと動かせないみたい。

「ねえ椿」

「な、なに、お姉ちゃん？」

手を後ろに回したまま、ベッドの上でクルリと向きを変えて椿に背中を向けた。

「これとめて。うまくとめられなくて」

「え、ええ〜!？」

素っ頓狂な声を上げる椿に目を向けると、何故か顔を赤くして目を丸くしていた。

「どうかした？」

「だ、だってお姉ちゃんいつも恥ずかしがって、そんなこと頼まれたことなかったから……」

「んー？」

椿にそう言われて、記憶の中からそれに合った情報を探し出す。

……そういえば、楓はまだ椿の前で一度も胸を見せたり、肌を露出したことがないみたいだった。まあ、楓は恥ずかしがり屋だから仕方ないと思う。

「『私』は別に平気だから。ね、はやくとめて」

「あ、そうか……。う、うん。わかった」

椿が私に代わりにブラジャーを持つのを確認すると、手を離して椿の邪魔にならないように髪をかき上げた。

「はい、できたよ」

「ありがとう」

椿にお礼を言ってから立ち上がり、ブラウス、スカート、ベストと着ていく。着替えを終えて姿見の前に立ち、おかしなところがないか眺めていると、鏡越しに椿と目が合った。

「ん？ なに？」

「え、あ……」「ごめん」

微笑みを向けると、椿は目を逸らした。

「別に謝ることはないと思うけど、なんで見てたのかわかって」

やっぱり顔の赤い椿に首を傾げる。

「えっと……き、きれいだなんて思って」

そう言うと椿はさらに顔を赤くした。

そんな椿を見て、私は苦笑する。

「ありがとう。楓にも伝えとくよ」

「ねむいーねむいー」

「お姉ちゃん。じっとしてて」

ダイニングテーブルに座ってフラフラと頭を揺らしていると、後ろに立って髪を梳いていた椿から注意された。

「はい」と返事しながら紙パックにプスッとストローを差して

口に啜える。

「あ、お姉ちゃんごめん。今日それしかなかつの
「んー？」

チューチューと吸いながら振り返る。

「あれ？ お姉ちゃん、それおいしくないって言ってなかった？」

その言葉を聞いて、私は記憶の奥からそれに関する情報を引き出す。すると楓が、朝に今と同じ野菜ジュースを飲んで椿に文句を言うシーンが頭に浮かんだ。

「私ニンジン嫌いじゃないから」

「あ、そうなんだ……って、楓お姉ちゃんニンジン嫌いだったの！
？」

あ、まずかったかも。椿にはニンジン嫌いなことを隠していたみたいなのに。

ま、言っちゃったものは仕方ない。あとで謝っておこう。。

「嫌いだったならそう言ってくれば良かったのに……。はい、
きた」
「ん」

椿が髪の設定を終えると、私は飲み終えた野菜ジュースの紙パ
ックを小さく折りたたみながら立ち上がってゴミ箱に捨てた。

「もうこんな時間。お姉ちゃん急いで」

「はい」

先に玄関へと向かった椿に返しながら、鞆を持ってリビングを出た。

家を出て通学路を歩く私と椿。今日は天気が良いから椿に日傘を差してもらっている。普段の楓もそうしてもらっているようだけど、実際は自分が傘を差したいのに椿に取り上げられているようだった。楽だから素直に差して貰っていいれば良いのに。

「ふぁ……」

「お姉ちゃん大丈夫？」

「まだ眠い……」

目を擦る私を見て椿が心配している。ただ単純に眠いだけなんだけど、それを私の調子が悪いのかもしれないと深読みしているみたいだ。

とはいえ、その眠たさで頭が少しだけふらふらするのは事実。

「えいつ」

「お、お姉ちゃん!？」

そんなわけで、椿の左手から鞆を奪い取ってから、その左腕に両腕を絡ませて掴まった。椿は驚いているようだけど、決して振りほどこうとせず、ただ目を丸くしていた。

「眠いからこのままよろしく〜」

「う、うん」

少し緊張したように返事する椿を見て含み笑いをしつつ歩いていると、前方にこの時間見慣れない人を見つけた。

「遙おはよー」

左手をブンブンと元気よく振ると、遙は私に気づいてこっちを向いたあと、少しだけ驚いた表情を見せた。

「おはようございます。遙先輩」

「よお。楓にしては珍しく朝から元気だな」

「ふふーん」

私の反応に、遙は怪訝な顔をして私を見つめた。

「ああ、なるほど。柊か」

「ぴんぽーん」

さすが遙。すぐに私を柊と分かつちゃうなんて。

「そついえば柊は学園通うの今日が初めてだよな。大丈夫か？」

「うん。ちゃんと楓の日記には目を通してるし、何か知りたければ引き出しからひっぱり出せばいいから」

「引き出し？」

ああ。引き出しなんて言っても伝わらないか。私だってなんとなくそんなイメージだっていうものなんだから。

「こつ、ね。必要な情報を記憶詰まった本棚から引っ張り出すよう

な……そういつこと」

左手で引き出しを引く動作を交えて説明する。

「へえ〜……そんなことできるのか。ま、柊なら心配することもないか」

「そうそう」

うんうんと頷きながら、左腕をまた椿の腕に絡ませる。

「……椿」

「は、はい」

遙に返事すると同時にビクツと体を震わせる椿。

「腕、そろそろ疲れてきてないか？」

「い、いえ。そんなに体重がかかってないし、お姉ちゃん軽いから疲れてないですけど……？」

「そ、そうか。それならいいんだ」

「……？」

遙の態度に首をかしげる椿を見ながら、私は一人こっそりと笑った。

第5話 楓と柊 part 3

『職員室に用事がある』という椿と昇降口で分かれて教室へと向かう。

隣を歩く遙に視線を向けると、さっきから私の腕と自分の腕を交互に見ていた。面白そうだったので気づいていないふりを決め込むしばらくしてこっそり横目で窺うと、遙は残念そうな顔をしていた。遙にバレないように笑っていると、私の歩く速さが遅いせいで何人も生徒に追い抜かれていく。そのうちの何人かがちらっと私を見て通り過ぎていった。

……そろそろ気をつけないといけない。葵さんや綾音さんはもちろんのこと、この学校全ての人から怪しまれないように……。私が『楓』ではないということを知られないようにしなければならない。

今通り過ぎた人はみんな楓も知らない人。だけど、楓は人気者らしいからこつちが知らなくてもあつちは『楓』を知っている可能性が高い。また、そんなことを抜きにしても同じ学校の生徒なんだから、今後のことを考えれば注意するに越したことはないはず。だから私は、楓があとで困らないように、『楓』を装わないといけない。……と、深刻そうに考えてみたけど、外見は同じ人なのだからそっくり。また、多少の好みの違いはあるけれど、私と楓は性格やら何やらいろいろと似ている。だから大抵は楓の口調を少し意識して喋るだけで椿や遙、蓮以外は100パーセント騙すことができると思う。

ふと時計を見ると、時刻はホームルームまであと10分というところ。朝家を出るときは椿に急かされたというのに結構余裕がある。これならもう少しだけ寝られたのに……。

「そついえば今日はどうしたの？ 遙があんな早い時間にいるなんて。いつもより早いバスに乗らないとダメなんじゃなかったっけ？」

ただ歩いてるだけじゃつまらなかったなので、話題をふってみることにした。

「今日はちゃんと目覚ましが仕事してくれてさ、なんとそのバスに間に合ったんだよ」

「ふーん。そんなことに運を使い切らなくてもいいのに、もったいない」

「そんなにアタシが早起きすることが希だっていうのか？」

「うん。遙が目覚まし通りに起きるなんて何年ぶり？」

「何年って……まあ、二年ぶり？」

「中学以来ってことね……」

さすが遙。私の想像の斜め上に返してくれた。「何年ぶり」は冗談だったのに……。

遙に呆れていると、ふと廊下の壁に張り出されたポスターに目にとまった。

『私立千里学園高等学校文化祭 千里祭』

ポスターにはそう大きく書かれていた。

「ん？ どうした？」

「これ」

指差した先を目で追う遙。その先のポスターを見て「ああ」と声を上げた。

「学園祭のポスターか。新聞部の奴らもう作ったんだな」
「学園祭？ 千里祭じゃなくて？」

ポスターをもう一度見る。やっぱり『千里祭』と書かれている。そつえば、綾音さんも『学園祭』って言っていたみたいだ。

「なんでかは知らないけど、みんな『学園祭』って言うんだよ。『千里学園』の『文化祭』だから『学園祭』じゃないのか？」
「ふーん」

千里祭でいいような気がするけど……。ポスターの下の方に目を向けると、そこには学園祭の開催日時が書かれていた。それによると開催日は10月の第1土曜、日曜の午前10時から午後3時までとのことらしい。

「もう少しだね」
「面倒だよなあ……」
「そう？ ボクは結構楽しみにしてるけど」

横目で通り過ぎる生徒を見ながら余所行き言葉を使う。

「本番当日はいいんだよ。その前の準備と後片付けがなければ……」
「遙はそついうの嫌いだもんね」
「普通みんなそつだろ？」

私は腕を組んで首を捻る。

「うーん。そうでもないような、そうでもあるような……」

たしかに、遥のように準備や後片付けを面倒がる人もいるけど、あのわいわいとみんなで騒ぎながら作業するのを楽しんでいるという人もいる。私はどちらかというと後者だ。

「ま、去年はテントの設営だけやって、あとは葵やクラスの奴に任せて見学してたから、そんなに面倒でもなかったんだけどな」

「去年はなにをしたの？」

「たこ焼き屋」

「たこ焼きかあ」

たこ焼きと言えば文化祭では定番中の定番。素人でも、とりあえず型に生地を流し込んでタコやその他具材を入れればなんとか様になる。味も表面に塗られるソースが決め手だし、余程のことがない限りはそこそこの味になるはずだ。……たぶん。

「これが結構おいしいと評判で、予想以上に売れたんだよ」

「へえー。もしかして作ったのが葵さんとか？」

「正解。まあ、葵は料理部もあるからずっといたわけじゃないが、仕込みは葵がいる時にしてもらって、焼き方も教わったからな」

「葵さん凄いな〜……」

「葵は料理上手いからな」

「頭もいいし、欠点ないよね」

葵さんは体育の成績もいって聞いたし、これが文武両道っていうんだろっね。

「……お前も似たようなものじゃないか」

ぼそつと遙が何かを呟いた。

「何か言った？」

「別に。ただ、隣の芝生は青いなって思ってたさ」

遙はそつばを向いて頭の後ろで手を組んだ。

「芝生？」

「そ、芝生」

首を傾げる私に、遙は曖昧に答えるだけだった。

「楓、遙。おはよう」

後ろから声をかけられて振り返ると、穂乃花先輩が微笑みながら挨拶した。

『おはようございます』

穂乃花先輩の横には、やっぱり女の子が左右に一人ずつ立っていた。朝から会議でもあるのかな。

「そういえば、遙と話すのは久しぶりじゃない？ 最近疎遠ね」
「アタシに会えなくて寂しかった、とか言わないでくださいよ？」

冗談っぽく言う遙に、穂乃花先輩は微笑みを返す。

遙が敬語を使うのを久しぶりに聞いた私は少し驚いていた。……
そうだ。遙は前に『他薦で選ばれただけはある人』って穂乃花先輩
のこと褒めてたっけ。

さすがの遙でも上級生で尊敬する人にはちゃんと敬語使うんだ。
と、私は少し失礼なことを考えて苦笑した。

「寂しかったと言うよりは、あなたが問題を起こさなくてホッとは
しているわね」

「問題って、別にアタシは何もしてないじゃないですか」

「あれだけのことをやっておいて、本当にそう思っ言っているの
かしら？」

「うっ……」

穂乃花先輩に見つめられて、遙がたじろいだ。

……なるほど、遙は穂乃花先輩のような人に弱いんだ。

「まあ、あなたの場合は、相手側にも非があるからあなただけを責
めるわけにはいかないけれど……それでも、女の子をグーで殴るの
は頂けないわ」

「もうそれは1年前の話じゃないですか。いい加減許し」

「遙」

「な、なんだよ。ひ　　楓」

穂乃花先輩の口振りから何かしでかしてるとは思っていたけど、
まさか女の子を殴っていたなんて……。さすがにそれはやりすぎと
思う。

「なんでそんなことしたの？」

「……そいつ、自分と同じクラスの奴をいじめてたんだよ。それが

上履き隠したりノート破いたりと陰湿だったもんだからイラツときてな。つい手が」

遙は私から目をそらし、頬をかいた。

「つい、でグーなんだ……」

「結果として、いじめはなくなり、いじめられていた女の子も今では新しい友達もできたようで、遙には凄く感謝しているわ。いじめていた女の子もあれからは大人しくなったし、あなたのことも先生や保護者には話さなかったから大事にはならなかったけど……一つ間違えていたら、あなた停学よ？」

「停学くらいアタシは気にしないですよ」

「そういうこと言わないの。あなたが良くて、あなたの友達や、あなたが助けた子がどう思うか分かっているの？」

「……」

穂乃花先輩の言葉を聞いて、ゆっくりと遙が私に視線を移す。私がキツイ視線を返すと、サッと目をそらした。

「でも、最近は大人しくしているようで嬉しいわ。何か心情の変化でもあったのかしら？」

「べ、別にないですよ」

「あら。あなたが、周りの子に友達のことを嬉しそうに話していた、という話を聞いた辺りから大人しくなったと記憶しているのだけど？」

「そ、それは……」

遙と穂乃花先輩が同時に私を見た。

「ん？ なに？」

「……なんでもないよ」

遙は私の頭に手を置くと、少し乱暴に頭を撫でた。

「わっ、遙。髪ぐしゃぐしゃになっちゃっ」

「後でちゃんと直してやるって」

「むー……」

撫でるのをやめない遙に渋々私はそのままにしておく。

「残りの高校生活は大人しく過ごせそうね」

「……そうですね」

何故か穂乃花先輩は楽しそうに笑い、遙は私の頭を撫でながらそう言った。

穂乃花先輩は私たちに会釈すると、後ろにいた女の子二人を連れて廊下を歩いて行った。

「あの後ろの女の子はなんなんだろう」

終始私達の会話に入らず、ただ穂乃花先輩を待っているようだった。

「取り巻きだよ」

「取り巻き？」

遙が棘のある言い方をしている。

「四季会の委員会の奴らだよ」

「四季会ってことは……風紀委員？」

「ああ。この学校の風紀委員の選び方は少し特殊でな、他校のようにクラス毎に立候補して委員になるんじゃないかと、四季会選挙で会長を決めた後に、委員になりたい奴が直接生徒会へ出向いて、委員になりたいって自ら立候補するんだよ。それを生徒会が会長に報告して、会長自身がひとりひとり委員にするかどうか決めるんだよ」

「ふーん……そんなの初めて聞いた」

その選出方法だと、四季会会長の人気が高ければ高いほど、その年の委員の数も多いってことになる。今の風紀委員は一体何人くらいいるんだろう。

「おかげで委員は全員会長を慕う奴らばかりだからもう鬱陶しい鬱陶しい……」

なるほど、だから遙は以前風紀委員のことを『下々』って言ったんだ。たしかに、さっきの二人を思い返せば、遙に向ける視線は厳しいものだったように思える。

「委員ってたくさんいるの？」

「さあ、正確な人数は知らないが、かなりいるんじゃないか？」

「穂乃花先輩人気者なんだ」

「問題起こしたアタシにもあんなだからな」

きつとあの子達もそういうところに惹かれたんだろうな。

……さて。

私は話を変えるため一度深呼吸をして気持ちを切り替える。

「ところで遥」

「ん？」

遥には聞かないといけないことがあった。

「女の子を殴った以外に、他には何をしたのかな？」

さっきの穂乃花先輩の話しぶりから察するに、遥は『女の子を殴った』という出来事以外にも、何かしているようだ。

そんな話は奈菜も私も聞いていなかった。

「……えっ？」

私の言葉に、遥は目を点にして声を上擦らせた。

第5話 楓と柊 part 4

「……つとに、遥は何してんだか」

あの後、遥をなんとか問い詰めて聞きだしたところによると、その女の子を殴った事件以外にも、スポーツ万能な遥が部活に無理矢理割り込み試合を挑むという、道場破りみたいなことをしたり、体育館裏で煙草吸っていた子を吸わないよう注意したり（手はぎりぎり出していない）したらしい。他にもナンパされていた子を助けるどころか相手をボコボコにしたり、ストーカーされている子に頼まれて一緒に帰っていたら、そのストーカーを見つけたので問いたただいてホゴボコにして二度と近づかないよう脅したりといういる。

並べてみると、遥のやらかしたことは、そのほとんどが傷害事件（言いすぎ？）だった。

でも遥に言わせれば、道場破りはちょっと体験入部してみたかっただけであり、別に他意はなく、煙草の方も用事があつて通りかかったところを見つけて、煙草なんて百害あつて一利なしだから吸わないに越したことはないと注意しただけらしい。

実際はどうか分らないけど、とにかく遥が私や奈菜に隠し事をしていたということは事実だ。

話を聞いたあとの昼休み。学食で昼食を取る私に何故か遥はひどく焦った様子で言い訳を始めた。そんな遥を見なくなかったので、昼食を食べ終えると早々に遥を振り切つて図書館へと逃げた。

別に怒ってないのに、どうして必死になつて弁解を始めたんだか

……。

そんなことを考えつつ、自動ドアを通り図書館の中に入る。入り口でカード型の生徒証を取り出して駅の改札口にあるような機械の読み取り部に当てる。ピツと音がしたのを確認して中に入った。

周りを見回すと、お昼休みということもありポツポツと人がいた。みんな机に座って本を読んでいるけど、各々二つないし三つ席を離して座っていた。近くに人がいると気が散って集中して読めないというのは分かるけど、これじゃ座れるところがあまりない。

一階をグルツと見て回ってから二階に上がる。二階は一階よりは空いていて、奥の方は人気がないようだったのでそこへ向かうことにした。

それにしても大きな図書館だ。小さめの二階建てのコンサートホールくらいの建物に、背伸びしても届かない高さの本棚がびっしりと並んでいる。大学の図書館と言われても信じてしまうほどの数だ。

「あれ、楓さん？」

ふいに呼び止められ、足を止めて振り返ると、蓮が本棚から顔を出してこちらを見ていた。

「どうしたの、なんか怒ってるみたいけど」

「どこが？」

「いや、その尖った物言いといい表情といい……」

「いつも通りじゃない」

「いや、それこそ『どこが？』だと思うけど……。あ、もしかして柊？」

蓮はキョロキョロと辺りを見回してからそう言った。たぶん周りに誰もいないことを確認したんだと思う。

「そうだけど？」

「久しぶりだね。でも、なるほど、それでなのか……」

何か呟いている連を横目に、私は手近な本棚から適当に一冊本を引き抜いて、空いている席に座り本を開いた。

「……なにこれ？」

本を閉じて表紙を見ると、『哲学』と大きく書かれていた。

「哲学に興味あるの？」

「ない」

私は本を脇に置いて頬杖をついた。

「なにかあったの？」

「別に……」

正面に座った連を一瞥して遠くの窓の外を見る。今日も天気はいい。

「やっぱり怒ってるじゃないか」

「なにか言った？」

「う、ううん。なにも」

何故か連がたじろぎながら首を左右に振った。

それからしばらく蓮と私は会話はなく、私は窓の外をぼーっと眺

め、蓮は本棚から取ってきた本を読み出した。

たまに蓮が私の様子をちらちらと様子見しているのを肌で感じるけれど、それに気づかないふりをして、外を見続けた。

さすがに疲れてきた私はふうとため息をついて、机に上半身をだらーっと寝かせた。

「はあ……」

「どうしたの？」

蓮が閉じた本を脇に置いて私を見た。私はだらーとした姿勢のまま頬杖をついた。

「遙が隠れているやつてたの」

「水無瀬さんが隠れてって……なにを？」

「私がここに転校してくる前に、いろいろと問題を起こしていたらしいの」

「ああ……そのこと」

蓮が納得したように頷く。

「『そのこと』って、やっぱりこの学校じゃ有名だったんだ」

「学校で有名かはともかく、水無瀬さんが休み時間に突然俺のいる教室にやってきて、目の前で女の子を殴ったからね。あれは強烈だったよ」

「そんな白昼堂々と……」

せめてもっと人気のないところでやればいいものを……。それも

ダメだけど。

「……そうか。さっきから柊が怒ってるのは、水無瀬さんが自分にはそのことを話してくれなかったから、ってことか」

「別に怒ってないって」

「そんな頑固にならなくても……。きつと水無瀬さんも何か事情があつたんだよ」

「私や奈菜 中学の友達に隠すような事情？」

「心配されなくなかった、とか？」

「……」

ありえる。

「怒ってないんだつたらさ、水無瀬さんのこと許してあげたら？」

悪気があつたわけじゃなさそうだし」

「うーん……」

そんなことを話していると遠くから足音が聞こえた。ここは図書館だというのに、誰かが走っているようだ。

……つたく。一体誰が

「あーいたいた」

聞き覚えのある声が聞こえて、私は閉じた本をまた開いた。

「まだ怒ってるのか？ さっきも言ったように、どれもたまたま通りかっただけで最初からやり合おうなんてつもりじゃなかったんだって。……とにかく、諸々話さなかったことは謝る。悪かった」

そう言って頭を下げた。

「ここまで追ってきて、しかもこんなこまでとされると、なんか私
が悪いことをしているような気分になって来る。」

「……もういいよ。私も、というより楓も遙に言っていないことある
し」

「え？ なにをだ？」

ガバッと勢いよく顔を上げて、遙がさらに顔を近づけてくる。

「少し前に例の学校の子にナンパされたからちよつと返り討ちに

」

「誰だそいつは!?!」

「誰って、名前聞いてないし……」

「よし、それなら似顔絵描いてくれ。それでソイツ見つけ出して世
間的に抹消してや」

「そんなことしないでいいって。楓のこと見て怯えて帰っていった
から」

「ちっ……命拾いしたな。ソイツ」

やっと遙が私から離れて椅子に座る。私は心の中でほっと胸をな
でおろした。

「って、アタシ用事あるんだった。柊、その話、後でもう少し詳し
く聞くからな。蓮、またなっ」

そういうと、遙は図書館だというのに足音を鳴らしながら走り去
った。

「まったく、図書館なんだから静かにしないと」

「きつと柊に許してもらいたくて、用事があったのにこっち優先し

てきたんだよ」

「許してって、私は別に怒ってないのにね」

私がそう言っていると、蓮は何故か苦笑した。

「あ、そうだ。蓮って今週の日曜は暇？」

目次のみ読破した本を本棚に返して席に戻ると、私は蓮に声をかけた。

「うん。部活もないし、予定ないよ」

やった。私は喜びを表すかのように、両手を胸の前でパチンと合わせた。

「じゃあ、久しぶりに二人でどこか遊びに行こうよ」

「えっ？」

途端に蓮が目を丸くした。何故驚いているのか分からなかったけど、とりあえず話を続けることにする。

「遙も葵さんも……あ、葵さんっていうのは同じクラスの友達なんだけど、みんな日曜は用事あるらしいんだよね。だからどうかなって」

「う、うん……」

「ちょっと行きたい所もあってさ……ん、もしかして何か予定でも

思い出した？」

蓮の返事が芳しくなく、もしや先に誰かと約束でもしていたのか
と思っただけ聞いてみた。

「いや、そ、そんなことないよ。うん、日曜は間違いなく予定入っ
てなくて暇だ」

蓮は首を勢いよく左右に振り、続いて縦に振った。

なんかさつきから様子が変だけど、日曜は空いてるってことは分
かった。

「よかった。ほら、私が桜花に転校してからは遊ぶどころかまっ
たく会ってなかったし、せつかくまたこうやって同じ学校になったん
だから昔みたいに、って」

「な、なるほど……。そ、それで柊はどこ行ってみたいの？」

「えっと、クレナタ。私も楓もまだ行ったことなくって」

クレナタとは、クレナタショッピングモールという複数の小売店
舗が集まった大型のショッピングセンターのことだ。巷でも一番大
きい商業施設と評判で、このクレナタが出店したせいで桐町のアー
ケード街は一時期人がこなくなっただけらしい。

「クレナタか。うん。あそこならなんでもあるし、遊ぶならちよ
うどいいね」

「ホント？ じゃあ行き先はクレナタってことで。待ち合わせは…
…11時くらいに現地集合でいい？」

「うん。それでいいよ」

「よし、決まり。日曜忘れないでよ？」

「そっちこそ、道迷ったりしないよ？」

「それは楓、私は大丈夫だって」

「本当に？」

「本当だって」

私と蓮はお互いを見て笑う。

「ああ。それとね、蓮ごめん。今まで連絡しなくて。約束だと『連絡をしない』っていうのは中学までだったのに」

「気にしないで。伯父さんから様子は聞いていたし、なにより連絡がないってことは元気にしてるってことだろ？ 楓と柊が元気にしていれば、それだけで十分だよ」

そう言って笑う蓮は、少し格好良く見えた。

第5話 楓と柊 part 5

「あ、楓ちゃん」

ホームルームも早々に終わった放課後。葵さんが鞆を持って立ち上がりながら私に声をかけた。

「なに？」

「今日料理部の部室まで来れる？」

「え？ えつと……」

部室？ 部室ってどこだっけ。さすがに聞き返すのは失礼だと思いい、場所を特定するために『楓』の記憶を探ってみる。だけど、楓自身料理部に顔を出したのは部活見学したときの一回だけのようで、ちゃんと場所を覚えていなかった。仕方なくそれらしき情報をかき集めて推理することにする。

……三年生の教室。渡り廊下。階段。調理台。

集めた情報をパズルのように組み合わせる。

たぶん、二階渡り廊下から隣の建物に移り、階段を上った先にある教室のどこか、のようだ。ここまで解ればあとは現地で人気のありそうな教室を覗いてまわれればたどり着けるはず。

「うん。でも、何か用事？」

「昨日クッキー作ったの。でもちよっと作り過ぎちゃって食べきれないの。だから楓ちゃんに食べてもらおうかなって」

昨日のクッキーといえば、椿も昨日「作りすぎた」と言ってたくさんクッキーを持って帰って来たっけ。おいしかったから思わず全部食べちゃったせいでご飯食べられなくなって椿に怒られたことを

思い出す。

「このことは昨日『日記』に書いたけど、あとで楓が見たら絶対怒るんだろうなあ。「僕も食べたかった」って……。下手すると頭痛するのにも気にせず私に会いに来るかも。まあ、今そんなこと考えても無駄なこと。そのときはそのときのことです。」

昨日の椿のクッキーはおいしかった。デパートの地下で綺麗な箱に詰められてお高い値段で売られているものと遜色なかった。椿でそれくらいおいしかったんだから、その椿の先輩である葵さんならもっとおいしいんだろうなあ。

「教室に持ってくればよかったんだけど、昨日部室に置いたままで……いいかな？」

「うん。葵さんさえよければっ」

葵さんに答えながら、やけに弾んだ自分の声に、顔には出さないけど内心苦笑してしまった。

「よかった」

「……あ、でも今日日直だから少し遅れるけど、大丈夫かな？」

「全然平気。それじゃ、私は先に行ってるから後できてね」

「うん。またあとで」

葵さんは私に手を振りながら教室を出て行った。

「へえ〜。クッキーか」

「あげないよ」

「楓からお菓子をもらおうなんて考えは無いさ。……楓は昨日もよく食べたよな。アタシの奢り含めて三つも」

昨日の帰り、私は遙にケーキを奢ってもらっていた。遙は「学園

でのことを黙っていて、そのせいで楓を怒らせたことへのお詫び」なんて言っていた。

たしかに今思い返すと、昨日の私は遙が隠し事をしていたところを聞いて気分があまりよくはなかった。でもやっぱり怒ってはいなかった……と思うんだけどなあ。

「はあ……小遣いまであと一週間。どうするかなあ……」

「ん？ 足りないならお金貸そうか？」

「本当にヤバかったらそうする」

私は鞆から財布を取り出したけど、遙にやんわりと断られた。

「遙……。借りるって、あんたんちってお金持ちじゃなかったの？」

綾音さんが少し驚いたような表情をして遙を見る。

「現金としては綾音や楓と同じくらいしかもらってないからな。カードは使わないようにしてるし」

「ああ、そういえばあんた前にそんなこと言ってたわね」

綾音さんが納得したというふうになんか頷いた。

……まあ、『楓』はそのカードで遙から服を買ってもらってるんだから、本当なら貸す貸さないなんて問題にもならず、『楓』である私が遙にお金を返さないといけない立場だ。

だけど以前、遙が楓に前日に貸りた分のお金を返しに来たときに楓が服を買ってもらっているからと断ると、「あれはアタシがそうしかかっただけ。何も返す必要なんてない」とかなり真剣な顔で言われてしまったので、それ以降はカードでの買い物（服）については貸し借りに反映しないという暗黙のルールができたらしい。

楓は未だにそれを完全に納得したわけじゃないようけど、私とし

ては遙がそれで良いというなら、それで良いのに……と思う。そんなところが楓らしいと言えば楓らしいけど。

「いい心がけよね。高校生の時分からカードなんて使ってたら金銭感覚狂うだろうし」

「そこまで深く考えてないよ。なんとなくだよ」

「ふーん」

何故か綾音さんはにやにやとしながら遙を見た。

「……げ。もうこんな時間。急いで部活行かないと。楓、遙、また明日ね」

「お、本当だ。アタシもバスケット部に助っ人頼まれたから行くわ」

「うん。また明日」

私を手を振ると、遙と綾音さんは振り返しながらそれぞれの目的地へと走っていった。

「さて……と」

遙と綾音さんを見送ったあと、席を立って教壇前から二つ後ろの席に座る女の子の元へ向かった。

「禅条寺さんぜんじょうじ」

「は、はいっ」

声をかけると、禅条寺さんは何故か声を上擦らせて返事した。

「そろそろ日直の仕事始めよつか。えっと、ボクがゴミ捨てに行くから」

「あぁっ。ゴミ捨てはわたしがいくよ。四条さんはホワイトボード消すのとインク切れの確認お願い」

うーん。まさかゴミ捨てをやりたいただなんて言うとは思わなかった。ゴミ捨ては外まで出ないといけないから一番面倒なのに。

「申し出は嬉しいけど……ボクの身長じゃホワイトボードの上まで手が届かないんだよね」

「あ、あぁ。ご、ごめんなさい。じ、じゃあわたしがゴミ捨ててきたら消すから、四条さんはインクの確認とゴミ拾いと日誌お願い」

「それだと禅条寺さんばかり仕事することにな」

「いいからいいから。四条さんはインクと日誌お願い。ね？」

「う、うん。解った」

少し納得がいかないけど、作業分担を決めてそれぞれ取り掛かる。禅条寺さんは教室の後ろにあるごみ箱を持つと、その中のゴミを教室の前にあるごみ箱に移して元の位置に戻し、教室の前にあるごみ箱を持つて教室を出ていった。私は机と机の間を歩きながら、目に付いた大き目のゴミを拾ってごみ箱に入れた。次にマーカーのインクが切れてないか一本ずつホワイトボードに試し書きしていく。全部ちゃんと書けることを確認すると、教卓で日誌を開いて、今日の欄に自分と禅条寺さんの名前と、コメントとして『特になし』と書き込んだ。

「これでよしっ」と

日誌を閉じて振り返る。目の前には大きなホワイトボードがそびえ立っている。

「届く範囲くらいは消しと」

そう呟いて字消しを手を取った。

「あ。ホワイトボードはわたしが消すよ」

振り返ると、禅条寺さんがゴミ箱を持って教室に入ってきたところだった。禅条寺さんはゴミ箱を元の位置に置くと、もう一つある字消しを取ってホワイトボードを綺麗にし始めた。

禅条寺さんは楽々ホワイトボードの上まで手を届かせていた。やっぱり身長はそこそこ必要だね……。

「四条さんはいつも落ち着いてるね。背小さいのにクールで大人びて見えるし」

手の届くところを消していると、ふいに禅条寺さんはそう言った。

「そう?」

「うんうん」

それは単純に『楓』があまり表情に出ないだけなのと、人見知りしてるだけな気がする。人見知りするときの楓はたしかに大人びて見えなくも無いと思う。内心じゃ結構焦ってるんだけど。

「どうしたらそんなに落ち着いた感じになれるのかなって。わたしってよく五月蠅いって先生からも注意されるからさ」

そういえば、度々授業中に禅条寺さんが注意されるのを見かける。それら全て隣の人とお喋りしてるせいみだから、単純に授業中

のお喋りを止めれば済むことだと思っただけ……ってそれが出来たらとつくにやってるよね。

「うん。どうしたら、と言われても、ボクも意識してやってるわけじゃないし」

「そ、そうなんだ……。わたし最近よく注意されるから成績にも影響してきちゃってどうしたものかと……」

話しているうちに全部消し終わり、禅条寺さんと私は字消しを置いて、少し離れたところからホワイトボードを見て消し忘れがないか確認する。

「うん。オッケー。四条さん、おつかれさまー」

「おつかれさまー」

「じゃ、日誌はわたしが帰りついでに返しておくから。また明日ねー」

ブンブンと元気よく手を振りながら、禅条寺さんは日誌と鞆を持って教室を出て行った。

成績が下がるほどなのはどうかと思うけど、私は元気なままの禅条寺さんの方がいいなと思った。

日直の仕事を終えた私は、二階の渡り廊下を使って特別棟へとやってきた。

三階に上がり、料理実習教室を見つけた。教室からはクッキーを焼いたような甘い香りではなく、何かをフライパンで炒めるような

ジューという音が聞こえてきた。今日はお菓子ではなく炒め物を作っているのだろうか。

間違いないこの教室だ、と断定した私は扉を開けて中に入った。

「えっと。ここに油を小さじ一杯つと」

「香奈、どうして小さじ一杯って言いつつ直接入れてるの？」

「近くに小さじが見当たらなかったものですから。あははは」

「適當すぎる……」

そこにはフライパンを振るう香奈さんと、それを指導するように隣に立つ葵さん、そして椿が包丁を持って香奈さんと同じ調理台に立っていた。

「あら、楓」

「穂乃花先輩。おはようございます」

穂乃花先輩はいつもの微笑みを浮かべて『おはよう』と挨拶を返した。

私がちらちらと香奈さん達の方を見ると、穂乃花先輩が「あ、あれはね」と続ける。

「香奈がこの前野菜炒めの作り方がよく分からないって言っていたから、今日は香奈の腕前を見ようと思っただね。今まで部活動としてはお菓子ばかり作っていたから」

穂乃花先輩は恥ずかしそうに照れ笑いだした。

「そうでしたか。では邪魔してはいけないので、こっそりここから見学することにします」

私が扉に一番近い調理台に置かれた椅子に座ると、穂乃花先輩も私の隣に椅子を持ってきて座った。

「さて、香奈はちゃんとできるのかしらね」

穂乃花先輩は顎に手を当てて呟きながら、少し心配そうに香奈さんに視線を向けた。

「香奈。せめて計量スプーン使ったら？」

「大丈夫です、葵先輩。この数ヶ月で上がったあたしの腕前を見てください！」

「一学期の家庭科でお味噌汁にお味噌まるごと一パック入れた人の言うセリフ？」

「あれは手が滑ったんだよ。外野の椿はだまって人参の皮でも剥いてて」

「はいはいっと、終わったよ」

「早っ！」

「早って、数も少ないしピーラーでしゃっしゃってやるだけだから椿がピーラーマスターだったとは……」

「いや、そんな称号別にいらないから。たぶん、というか間違いなく香奈が不器用なだけだよ」

「針の穴に糸なんて通せなくて良いんです」

「香奈が不器用なのは知ってるけど、それくらい頑張ろうよ……」

「はい。切った野菜ここに置いとくね。香奈」

「葵先輩、ありがとございます。よし、点火！」

「まだ火点けてなかったんだ。って普通熱してから油って引くものじゃ……」

「ちゃんと水分を拭き取ってれば先に油でも大丈夫」

「あ、そうなんですか」
「つまりあたしの手順は間違ってたな　いっつつた！」
「香奈、油が凄い飛んでる！」
「水はちゃんと拭きとらないと……」
「えーい、負けてたまるか！　このまま野菜を投入っ！」
「フライパン熱してからだって！」
「もう遅いっ！」
「あーもう。香奈、前とにも変わらないじゃない！」
「主に思い切りが良くなった！」
「それ香奈的にはダメな方に成長してるって！」
「……香奈、お肉は先に炒めたの？」
「え、お肉なんてあるんですか？」
「うん、ほらここ」
「……あ」
「あーもう！　全部いれてやる！」
「やけになるの早っ！」
「炒める順番も何もあつたものじゃない……」
「むむ。やけに混ぜにくい……」
「そんなに全部まとめて入れるからだよ……」
「なるほど、道理で重いわけですねっ」
「いや、それくらい気づこうよ……」
「ほっ、とりやつ……うわ、フライパンから野菜がダイブしたっ！」
「なんで出来もしないのにフライパンだけで混ぜようとするの……」
「だって家庭科の先生がこうしてたから……。やっぱり見るとやる
とじゃ全然違うなあ……」
「当たり前じゃない……」
「よし、できた！」
「まだ味付けしてないし、全部生焼けじゃない！」
「へ？」

「『へ？』じゃない！」

「……はあ」

「……全然だめね」

「そ、そうですね」

香奈さんの動きはどう見ても素人で、あれならまだ私の方が上手にできるんじゃないだろうか。味付け忘れるぐらいだし。

「はい。もう分かったわ。葵、あとの処理お願い」

小さくため息を吐いてから穂乃花先輩は立ち上がると、手をパンと鳴らしながら香奈さん達のもとへ向かった。

「分かりました。ほら、香奈変わって」

「はい」

葵さんは香奈さんからフライパンを受け取ると、上手にフライパンを操る。

「うわー。葵先輩さすがですっ」

「ここまで、とは言わなくても、もう少し上手になるっね」

「は、はいっ」

葵さんが優しく諭すと、香奈さんは元気よく頷いた。

私も穂乃花先輩のあとを追って、椿の肩をポンと叩く。

「え、お姉ちゃんどうしてここっ？」

「楓先輩いつのまに!?!」

やけに大袈裟に驚く椿と香奈さん。そんなに私がいたのが意外だったのだろうか。

「ちょっと前くらいから。葵さんからクッキーをもらおうと思って」

「お姉ちゃん、昨日あんなに食べたのにまだ食べるんだ」

「お菓子は別腹なの」

「昨日ご飯食べられなくなってなかった?」

「お腹は一つしか無いからね」

「さっき別腹って言わなかった……?」

「はい、楓ちゃん」

椿のジト目をかわしていると、葵さんが調理台に置いてあった紙袋を私に渡した。

それなりに重量感があつて、けっこうな量が入っていることを知る。

「わー。ありがとう。葵さん」

「どういたしまして」

「お姉ちゃん。それ食べてまた今晚ご飯食べられないとか言ったら

……怒るからね?」

「はいはい」

椿に手をひらひらさせながら答えて、私はさっそく早めの晩ご飯に取りかかることにした。

ちなみに、あとで椿に怒られました。

第5話 楓と柊 part 6

窓から柿色の光が差し込んでくる。テレビや漫画なんかでよくオレンジ色なんて言われるけど、アタシとしてはもう少し赤い柿色の方がシックリくる。それに今は秋。柿が旬の季節だ。

旬と言えば、オレンジって旬はいつだ……？

分かりそうにないので考えるのをやめ、椅子から立ち上がり窓際に移動する。窓を開けようとして触れたサッシが少し熱かった。きつと開けると熱風が入りこんでくるだろうと思い、窓越しに外を見ることにする。

視線を上げると、太陽がビルに半分隠れてこちらを見ていた。アタシは思わず目を細めた。

柿色の光を浴びながら、ふいに家の近所にある柿の木に、大きな実がたくさんぶら下がっている風景が頭に浮かんだ。……見た目はおいしそうだが、あれは渋柿だから食べれたもんじゃない。昔一つ取って食べて、すぐ吐き出したのを思い出す。どうせ植えるなら食べられるものにすればいいのに。

「んっ……」

ベッドから小さな声が聞こえた。アタシはベッドの横の椅子に座り直し、そつと柊の頭を撫でる。

「……」

寝ているはずなのに、柊は嬉しそうに微笑んだ。

見てるだけなのに楽しい。アタシはそんな気分だった。

何気なしにポケットに手を入れると、指先が何かに当たった。取りだすと、それはさつき保険室の先生から預かったカードキーだっ

た。

少し時間を戻した放課後、アタシは柊と葵と共に綾音のいるバレー部にお邪魔していた。

事の発端は柊の「体を動かしたい」という言葉。これを聞いた綾音が「だったら放課後練習試合しない？」と提案してきて、柊がそれに食いついた。

バレーならアタシも綾音も柊も経験あるし、なにより放課後はどこの体育館も一杯。この申し出を受けなければ、体を動かすなんてことは明日の昼休みまでできそうにないと考えたアタシは、葵の了承も得て二つ返事でその申し出を受けることにした。

アタシ達がバレー部にお邪魔すると、さっそくチーム分けされ、軽い練習のあとに試合が始まった。試合は順調に進み、アタシと柊、葵のチームはバレー部相手に一進一退の好勝負を繰り広げた。

そして三試合済ませてバレー部チームに勝ち越されたときだった。突然柊は倒れた。幸い近くにアタシがいて倒れる前に抱きとめたので外傷はなかった。

気を失った柊を保健室に運びこんだアタシは、柊をベッドに寝かせながら先生に試合中に突然倒れたことを伝えた。先生はすぐに診察をしてくれ、軽い貧血だと答えた。少し寝かせておけば大丈夫ということだったので、アタシが家まで送り届けると言うと、先生はアタシにカードキーを渡して戸締りを頼み、先に帰っていった。

先生が帰ってすぐに柊は一度目を覚ました。頭が痛いということで、葵に更衣室から柊の荷物と、ついでにアタシの荷物を持ってきてもらい、柊の鞆から頭痛薬を取り出して飲ませた。しばらくすると薬が効いてきたようで、「寝ろ」というアタシの言葉に小さく頷いて

目を閉じた。

一緒に付き添っていた葵には先に帰ってもらった。二人もいては、柊は気を使ってしまっただろう。

その後綾音も一度保健室にやって来た。アタシが大丈夫と伝えると、綾音は安堵した表情を見せて帰っていった。

シーンと静かな保健室。柊の小さな息使いまで聞こえる。ふと部屋の外……いや、学校中が静かなことに気づく。柿色の光が足元まで届いているのを見て理解した。いつの間にか結構時間が経っていたようだ。

撫でるのを止めて手を離すと、ずっと起きていたのかと思ってしまっぐらい絶妙なタイミングで柊がゆっくりと目を開いた。

「おはよう」

「……おはよー」

少し遅れて柊が挨拶を返した。ニコツと笑う柊の頭を撫でると、気持ち良さそうに目を細めた。

楓も柊のように素直に感情を表に出せばいいのに。

無邪気によく笑う柊と、人見知りであり表情に出さない楓。柊は楓がご機嫌な時にそっくりだ。根本の性格は違ってもやっぱり二人は双子で凄く似ていた。

「大丈夫か？」

柊はアタシの問いに答えず、ベッドから上半身を起こして、辺り

を見回した。

「ねえ、誰もいない？」

「ああ、先生も先に帰った。誰もいないよ」

アタシがそう言うと、柊は途端に不機嫌そうに目尻を少しつり上げてアタシを見上げた。

「頭がぼーっとする。喉乾いた。アイス食べたい」

今はここにアタシと柊しかいないことからか、柊は普段の楓じゃ到底言いそうにない不満を素直に並べた。しかもそれがさもアタシのせいというふうに睨むもんだから、アタシは平静を装いつつも心の中で笑った。

「そう言うだろうと思って買って置いてあるよ」

保健室備え付けの冷蔵庫から、さつき売店で買ってきたカップアイスを取り出して柊に手渡した。

柊はすぐにふたを開けてアイスを食べ始めた。時折「んー」と声をあげて美味しそうに食べる姿を見て、本当は無理をしたことをしかるつもりだったのに、そんな気持ちも失せてしまった。

「あれ、なんで私保健室にいるんだっけ？」

口調もいつもの柊のものになっていた。

「バレーの試合中に倒れたんだよ。楓といい柊といい、お前達二人は頑張りすぎだ。限度ってものを考える」

「はい」

「絶対解ってないだろ？」

「解ってるって。またこんなことがあったら遙よろしくねっ」

「やっぱり解ってないじゃないか……」

ふふーんと笑う柊を見て、アタシはつられるように苦笑した。どうやらアタシは柊と楓にはとことん甘いみたいだ。ま、そんなことは解りきったことなただけど。

「はるか〜。喉乾いた。飲み物ほしい。コーラが飲みたい」

「コーラって、柊は炭酸弱いくせに」

「炭酸飲みたい気分なの。飲んだらきつと頭もすつきりするのっ」

まるでだだっ子だ。身長とあいまってまるで高校生に見えない。声に出せば間違いなく拗ねるので、心の中で呟いた。

「どうせ喉が痛いとか言うからだめだ」

「だったらイチゴ牛乳」

「お前牛乳で腹壊すじゃないか。ほら、オレンジジュース」

事前に買っておいたオレンジジュースの入ったペットボトルをベツドの横に置く。柊は「そんな気分じゃないのに……」と文句を言いつつもペットボトルを手に取った。

「開けて」

「開けてあるって」

「蓋取れてない」

「それくらい……はいはい」

柊からペットボトルを受け取り蓋を取って返す。柊はペットボトルに口を付けて少し傾けた。

「……つぶつぶが入ってない」
「入ってない方が好きだろ？」
「うん」

だったらいいじゃないか、という言葉を読み込む。

「んーっ」

柊がちびちびとオレンジジュースを飲みながら、ポンポンとベッドを叩いた。『ここに座れ』と読んだアタシは、要望に答えるために椅子から立ち上がり、柊の隣、ベッドの縁に腰を下ろした。

「よいしょ……っ」と

隣に座ると、柊は体を移動させてアタシの斜め前になると、背中を傾けてもたれかかった。

「はあ……。らくちんらくちん」

まるで重くない柊の重さを感じつつ、柊が倒れないように軽く抱きしめる。

「あー、そうだ。綾音が『付き合ってくれてありがとう』だってさ」
「うーん。私達がお邪魔したんだけどなあ」
「最近単調な練習ばかりで、いい気分転換になったんだと」
「それならよかった。『どういたしまして』って言うついでに」
「柊が明日学校で直接言えばいいだろ？」
「あ、そうか。なんとなく今日土曜日の気分になってた」

「まだ木曜日なのにね」と柘は笑った。アタシも「そうだな」と答えてつられて笑った。

「ねえ、肩揉んで」

「お前肩凝らないって言ってなかったっけ？」

「うん」

「今は？」

「全然凝ってない」

「じゃあなんで揉むんだよ」

「へへへ」

このやり取りの何が楽しいのだろう、と思いつつアタシも少し楽しんでることに気付く。

「ふ〜ん、ふふ〜ん、ふ〜ん」

柘が少し体を揺らしながら鼻歌を口ずさむ。それは最近テレビで聞いたことのある音楽だった。

「上手いな柘。そういえばアタシ達ってカラオケ一度もいったことないな」

「だいたい喫茶店入ってたらだらしてよね」

「主に柘がケーキ食べたいていうせいだけだな。……まあアタシも奈菜も好きだからまったたく構わないんだけど」

「むー……。ケーキの話したら食べたくなかった。帰りにケーキ屋さん寄らない？」

「……奢らないからな。お金ないし」

柘が「ちえーっ」と口をとがらせた。

親が大企業の社長のアタシでも、両親からお小遣いとしてもらっ

ているお金は柊や綾音と同じくらいの金額で余裕があるわけじゃない。……まあ、実際は両親から『使えるところではカードを使い、お金はそれ以外のところで使うように』と言われクレジットカードをもらっているが、それは特別なことにしか使わないと決めていた。ふいにブルブルとポケットの中で携帯電話が振動した。二つ折りの携帯電話を開くとメールが届いていた。迎えに呼んでおいた車が到着したようだ。

行き帰りに車を使うなんていやだったが、柊のこととなると話は別。こんな状態の柊を長時間歩かせるわけにはいかなかった。

「柊。迎えの車が来たから、着替えて校門まで行こう。そこで待ってる」

「分かった。着替えるからちょっと待ってね」

アタシから離れると、柊はベッドの上で体操服を脱ぎ、アタシがもってきたバッグから制服を取り出して着替え始めた。

「あれ、柊まだ帰ってなかったの？」

「うん。ちょっとね」

柊と廊下を歩いていると、蓮と鉢合わせした。蓮は柊の親戚で、小さかった頃の柊を知っている。どんなヤツか解らない以上警戒すべき相手なのだろうけど、柊のこの安心しきった表情から察するには、そういう心配は必要なさそうだ。

「あつ、そうだ。こ、今度のクレナタだけど、映画ってどうかな？」

「映画？ クレナタって映画館もあるんだ」

二人が突然クレナタとやらについて話し始めた。映画という単語から行き着く答えに、アタシは顔の筋肉が引きつるのを感じた。

「うん。お店見るだけじゃ時間あまりそうだから映画でも、って」
「別に私はいいけど、突然どうしたの？」

「か、母さんが商店街のくじ引きで映画鑑賞券二枚当てたんだ。それ貰っちゃって、無駄にするのもどうかなくて……」

怪しい。あの商店街がくじ引きの景品をライバルの施設のチケットにするだろうか。アタシなら絶対しない。

……間違いなく買ったな。

「そっか。うん。だったら勿体ないし、お言葉に甘えて当日のコーズに映画を追加ってことで」

「う、うん。ありがとう。じ、じゃ俺友達待たせてるから！」

「まーた明日」

連は嬉しそうに手を振りながら走っていった。

「……ん？　なんで連は『ありがとう』なんて言ったんだろう」

「さあ、なんでだろうな」

どっちが誘ったのかは解らないが、柊と蓮とじゃ温度差があるのは目に見えて解った。

相変わらずそういつた感情を読み取るのが下手なヤツだ。

ふとアタシは眉間に手を当てた。

これでもかというほどに、皺ができていた。

どうやらアタシは不機嫌になっていた。

「……ひ、柊。連とクレナタへ行くのか？」

「うん。連とは久しぶりに会ったんだし、日曜みんな忙しいでしょ？だからちよつどいいかなって」

クソツ。日曜に親父の用事になんて付き合う約束するんじゃないかな
った！

「今度遙もいこうねっ」

「……あ、ああ」

無邪気にそついう柊に、アタシはそれ以上問いただすことはでき
なかつた。

やっぱりアタシは柊に甘かつた。

第5話 楓と柊 part 7

「ねえ、デート？ デートなの？」

「だーかーらー、違っつて」

野菜ジュースをチューチューと吸っている私の髪を梳きながら、椿が五度目の質問をしてきた。朝からずっとこの話だ。ちよっとうんざりしてきた。

「椿、しつこいと嫌われるよ？」

「お姉ちゃんはそんな心の狭い人じゃないもん」

腕を首に巻き付け、「ね〜」と同意を求めつつ抱きついてくる。

突っぱねようと思った矢先にそんなことを言うもんだから毒気を抜かれた。何も言わずに半眼でストローを啜え直す。

苦い物飲んでシャキっとしたい気分。コーヒー飲めないけど。

「それで本当のところはどうなの？」

「遊びに行くだけだよ。クレナタのお店ぶらぶら見て、ご飯食べて、映画見て、バイバイ」

「デートだよね、それ？」

「ちーがーうー」

これで六度目。椿はどうやって今日連と出かけることをデートにしたいのかな。たとえばもし、それを私が「デートだ」と言っつて、椿はどうしたいんだろう。

「三年ぶりに会ったから、久しぶりに遊ぼっつてなったの。それだけ」

クシャツと野菜ジュースの紙パックを潰してゴミ箱にシュート。クルクルと回りながら放物線を描き……床に落ちた。

「おしいっ」

「全然おしくない」

椿が床に落ちた紙パックを拾って、数歩先のゴミ箱に捨てた。

「もう、投げちゃダメだっつて」

「そんな法律ないもん」

「小学生じゃないんじやだから」

「えっ、最近の小学生って法律も勉強してるの!？」

「お姉ちゃん、話がずれてる」

はあとため息をついてから、「はい、できた」と椿が頭から手を離れた。渡された鏡を覗くと、両サイドの髪をリボンで結ばれていた。小さいツインテール？ みたいな感じ。

「かわいいでしょ?」

「かわいいの?」

視線を鏡から椿へと移す。椿は満足げに頷いた。自分じゃよく解らないけど、椿なら言うならそうに違いない。

「その服に合ってるっていいと思う」

今日の服は、この間楓が遙に買って貰ったピンクのノースリーブのブラウスと膝上丈の黒のスカート。

「楓お姉ちゃんってそういう服着ないよね」

「楓は自分で買った服ばかり着るからね。せつかく遙からもらったんだから、こっちも着れば良いのに」

楓がこんな丈の短いスカートを、自分から進んで穿いたところなんて見たことない。

携帯電話を取りだして時刻を確認。まだ時間に余裕があった。

「暇だし、テレビでも見ようかな」

と、席を立った。でもすぐ肩に手を置かれ、無理矢理座らされた。

「まだ時間あるんだよね？」

「う、うん」

椿の顔が近くにあった、その手には何かが握られていた。

嫌な予感しかしなかった。

「お化粧させて！ 薄く軽く簡単にしとくから！」

いつの間に用意したのか、ばばっと両手から化粧道具が現れた。

目は期待するように輝いていて、拒否できそうな雰囲気ではなかった。

「えっと……じゃあ、少しだけ」

「やった！」

嬉々としてダイニングテーブルに化粧道具を並べ始めた。その数の多さに「どのあたりが薄く軽く簡単？」とツツコミを入れたくなった。

「如月先輩がお姉ちゃんに惚れ直しちゃうくらい可愛くしてあげてから！」

あ、まだ椿の中ではデートって設定生きてたんだ。

椿にやけに応援されながら家を出た。最後まで否定し続けたのに、結局信じてくれなかった。椿はそんなに私と蓮に付き合ってた貰いたいんだろっか？

マンションを出てさっそく携帯電話を開き、アプリを起動。クレナタまでの道順を確認する。

楓もこういう便利なものがあるんだから使えば良いのに。あ、でも使いこなせないんだったら意味ないか。

途中大きな公園の中を歩いていくと近道になるようだ。私は携帯電話を仕舞うとバス停へと向かった。

「ねえねえ、君ちよつといい？ これからどこ行くの？」

「すみません、急いでるんで」

「お、よく見ると君かわいいね。急いでるって誰かと待ち合わせ？ そんなの無視して俺と遊ぼうよ」

「あー、鬱陶しい。うちは急いでるって言ってるっしょ？」

遊歩道もある大きな公園を横切っていると、ふいに人の声が聞こえた。それまで誰とも会わなかったので安堵していると、少し様子

が変だった。悪いことをしていると思いつつ、こっさり覗いてみると、どうも女の子がナンパされて嫌がっているようだった。

「まあまあそんなこと言わずにさあ〜」

「ナンパするならもつと街の方でやれば？　こんなところでやらずにさあ」

「べ、別にお前には関係ないだろ!？」

「あーそうだね関係ないね。ってことでうちは急いでるんで、それじゃ」

「ちよつと待てよ!？」

「なに？　これ以上邪魔するなら警察呼ぶよ?」

「ちよ、おい！　それは卑怯だろ!？」

「何が卑怯なんだか、ええと、いちいちぜろつと……」

「やめろつつてんだろ!？」

「きやつ!？」

男が女の子の腕を掴んだ。

まったく。なんで世の中にはこんなのがいるのかな。

私はすぐに駆け寄ると、男の腕を少し強めに払いのけて二人の間に割り込んだ。

「ごめんね。時間になっても来ないから来ちゃった」

「え？　あなたは」

女の子は何か言いたそうだったが、今はこの男をどうにかするのが先決。私は女の子に背を向けて男と対峙する。

「で、あなたはこの子に何の用　ん?」

何故か男は口を半開きにして私の顔を指差したまま、その手を小

刻みに震わせていた。

「あ、あんたはあのときの……」
「……ああ」

思い出した。この男は以前楓をナンパした人だ。あれからそんなに経ってないのに、まだ懲りずにやってたんだ。

「す、すみませんでした！ 許してください！」
「あっ」

男はそう叫ぶと、逃げるように走り去っていった。

「そんなに必死になって逃げなくても……」

なんか自分が凄い悪者のような気がして、少しだけショックを受けた。

「えーと。良くわかんないけど、とりあえずありがとう。四条さん」
「ボクは別に何も……って、どうしてボクの名前を？」

目を丸くする私に、女の子は胸に手を当てて自己紹介を始めた。

「うち、学園二年B組の西条結奈さいじょうゆきな。四条さんはうちの学校じゃ有名なだしね」

「同じ学園かあ。でも、何でボクが有名人なの？」

私がそう言うと、西条さんはビシッと人差し指を私に向けた。

「そりゃまあ、転校すぐのクラスマッチでのあの大活躍に、実力テ

ストの結果から分かった頭の良さ。そしてこの容姿。とくに今日な
んかすこーしお化粧してるみたいだし、かわいさ増し増しだっ
「かわっ
！」

面と向かって言われたせいで一気に顔が熱くなっていくのが分か
る。きつと真っ赤だ。

「おおっ？ その反応は意外。言われ慣れてるだろうと思ったのに。
でもこれはポイント高いね……」

西条さんはサツとポケットからメモ帳を取り出して何か書き始め
た。

「それでさ、さっきの奴、四条さん見て逃げ出したけど、どうして
？」

「それは……ちょっと前にボクもあの人にナンパされたことがあっ
て、その時にちょっと……」

「ほえ〜。剣道やってたとは聞いてたけど、それで相手をのしちや
ったわけか〜」

「や、のすほどもなかったけど……」

「いいのいいの、そのあたりは。四条さんみたいな子があんな奴を
撃退したっただけでも凄いんだから」

……まあ、怯えてた理由は、『生徒会執行部』という名前の方だ
と思うけど。

「アイツには嫌な思いさせられたけど、怪我の功名ってやつね」

「ん？ どういうこと？」

「ああ、こっちの話。ところで四条さんはなんでこんなところに？」

……あ。すっかり忘れてた。私は急いで携帯電話を取りだして時刻を確認した。よかった、まだ大丈夫だ。

「えっと、クレナタ行きバス停へ向かってて、ここが近道だったから」

「ああ、なるほど。ってことは、これからクレナタ？」

「うん」

「クレナタなら今からうちも行くから、一緒に行こうよ」

「うん。ぜひぜひっ」

バス車内でどうやって時間潰そうと思ってたけど、これでその心配もなさそうだ。

ふと気づくと、何故か私を見ていた西条さんの顔が赤くなった。

「西条さん、どうしたの？」

「え、いや、そんなに笑った顔見たことなくて、しかも不意打ちだったから……。って、もしかやうちってそっち系な人？」

頬に手を当てて狼狽え始める西条さん。何がそっち系なんだろう。

「……まあそれはそれでアリか。男になんてもともと興味ないし」

男？ 興味ない？ よく解らなかった。

「じゃ、行こうか。楓さんって呼んでいい？ うちのことも結奈でいいからさ」

「うん」

お互いの呼び名を改めて、私と結奈さんは公園を後にした。

「ところで、楓さんは一人でクレナタに？」

無事バス停にたどり着いた私と結奈さんは、しばらくしてやってきたクレナタ行きのバスに乗り込み、並んで座席に座った。結奈さんは何故かメモ帳を取り出して私に話しかけてきた。

「ううん」

「ほお〜。じゃ、誰かと待ち合わせってわけ」

途端に結奈さんが目を輝かせて、少しだけ私のほうに身を乗り出した。

「うん。如月蓮っていう二年B組の」

「まさか楓さん、蓮と二人で？」

「うん。結奈さん蓮のこと知ってるんだ。って、結奈さんもB組だから知ってるよね」

よく考えると、結奈さんと蓮は同じクラスだった。

「しかも蓮と呼ぶ間柄とは……。まさかあの女の子には興味なさげだった蓮がね〜……」

結奈さんが私から視線を外してにやりと笑った。

「蓮とは小さい頃からよく遊んでて幼馴染なの。中学校から別々でずっと遊んでなかったから久しぶりに、ってことで」

「なるほどなるほど」

にやりとした笑みをそのままに、メモを取りながら頷く。

「それで蓮の奴、最近嬉しそうだったのか……」

「ん、なに？」

「いやこつちの話」

そう言いながらもやっぱりにやにやしている。……凄く気になる。

「つまり、これはあれだね。デートだね」

「デート？ どうして？」

「へ？ どうしてって、そうじゃないの？」

結奈さんの目が丸く見開かれた。

「ないない。ボクはそのつもりないし、むしろ蓮の方がそんな気は毛頭ないんじゃないかな」

「……哀れ蓮」

結奈さんは目を閉じると、十字を切って手を合わせた。

結奈さんってクリスチャンだったんだ。

「結奈さんは誰かと待ち合わせ？」

「うん。香奈とね」

「香奈さんって、一年の高内香奈さん？」

「そそ。買いたいものがあるから付き合ってたって昨日頼まれてさ」

結奈さんは大袈裟にため息を吐いて肩を竦めてみせた。

「あれ、なんで香奈のこと知ってるの？」

「妹の椿が香奈さんと同じ料理部で、ボクも時々お邪魔してるんだ」
「なるほど……」

納得するように、結奈さんが二回頷いた。

「そういう結奈さんは？」

「うちは、香奈とは同じ寮だから仲いいんだよね」

「香奈さん寮生だったんだ」

「寮って言っても、桜花みたいな本格的なものじゃないよ。二階建ての小さなアパートを寮用に改装して使ってるから」

学園に通う子のほとんどが自宅から。寮から通う子なんて僅かにしかないから、桜花みたいな大きい寮はいらない、ってことかな。

「……あれ、同じ寮なら一緒に行けば良かったんじゃない？」

「そのとおり。香奈のヤツ、うちが遅いからって先に行ったんだよ。ほんっと落ち着きないヤツ」

口ではそう言いながらも、結奈さんの表情は明るかった。

「ありがとう結奈さん。楽しかったよ」

「いや、こっちこそ楓さんのおかげで無傷でここまで来れたしさ。

ありがとう。じゃ、早く行かないと香奈が拗ねるからそろそろ行くわ。蓮によろしく言っといて」

「うん。また学校でねー！」

バスを降りた私は二言三言交わしたのちに結奈さんと別れて蓮との待ち合わせ場所へと向かった。

「ふう。噂通りの子なんて珍しいなあ……」

遠くに見える楓の背中を見ながら、結奈はぽつりと呟いた。そしてメモ帳を取り出して、その表紙をじっと見つめる。

「……まっ、助けてもらったし、悪いようには書けないよね」

苦笑してメモ帳をしまうと、結奈は踵を返して、建物の中に入っ
ていった。

第5話 楓と柊 part 8

腕時計を見ると、針は待ち合わせの五分前、10時55分を示していた。

「うん。ぴったり五分前」

私は予定通り待ち合わせのクレナタの南出入口へとやってきた。

『11時に南出入口で』

それが蓮と約束した待ち合わせ時間と場所だ。

まだ蓮は来ていないようだったので、入口の自動ドア横のガラス壁にもたれて待つことにした。体をあずけるときに、『もしかして割れるかも?』と不安になったけど、ガラスはヒビどころかびくともしなかった。まあ、当り前だよな。

その体勢のまま、私はバードウォッチングならぬヒューマンウォッチング、別名人間観察を始める。

日曜日ということもあってか、さつきから人の出入りが凄い。広大な駐車場には車が所狭しと止められ、見える範囲で空いているところなんて一つもない。それなのに、次から次へと車がやってきては、私の前を通って、奥の立体駐車場へと吸いこまれていく。

視線を建物入口へと向けると、ちょうど親子連れの団体が自動ドアを通って店内へと入っていった。子供は嬉しそうに「ゲーム、ゲーム」と父親の手を握ったまま飛び跳ねている。ゲームソフトを買ってもらえることに喜んでいるのか、それともゲームセンターで遊べることに喜んでいるのか、どっちなんだろう。

……って、ここゲームセンターあるのかな。

そんなことを考えつつ待っていると、遠くから蓮が走ってくる姿

が見えた。

腕時計を見ると一〇時五九分過ぎ。ぴったりだ。

蓮の方はまだ私に気付いていないようで、辺りをキョロキョロと見回している。見つけやすいように軽く手を振る。しばらくすると私に気付いたようで、こっちに視線を固定したまま駆け寄ってくる。けれど、それはさっきまでとは違って、走るというよりは歩くよりちょっと早い程度の早さで、しかも若干首を傾げているように見える。

何か後ろにいるのかと思って、後ろを振り返る。ガラス越しに店内が見えるけど、別段おかしなところはなかった。

「おはよう」

蓮は私の前まで来ると、息を切らすことなく挨拶した。

その持久力が羨ましい……。

先週遙達とバレーをして倒れたことを思い出す。

「おはよう」

「あ、あの……柊、だよな？」

蓮は私に視線を送りながら尋ねた。

「うん。楓はまだ寝てるよ。どうかした？」

「い、いや、いつもと印象が違うなと思って……」

「いつもと？」

私は両手を頭、体に当てつつ、ついでに振り返って、ガラスにうつすらと映る自分を見て身なりを確認する。

別におかしなところはなかった。

「そ、その……ちゃんと女の子してるなって。服とか髪とか……」
「服とか髪？ あー……」

やっと理由が分かった。

蓮とは桜花に通う以前に何度も会ってはいるが、こんな女の子の子供を着たところをあまり見せたことはなかったし、化粧をしたのもこれが初めて。それで『印象が違う』んだ。

「一応私も女だしね。楓はまだ嫌がってるけど」

そう言ってスカートの端を摘んでみせる。

「楓は仕方ないよ」

苦笑する蓮。そんな蓮に見えないところでこっそりとやりと笑う。

「ところで、『ちゃんと』ってどういう意味？ 私が女の子らしい格好してたらダメだって言っの？」

蓮が困ることを理解したうえで、少しいじめてやろうと思った私は、蓮を非難しつつ睨み上げる。

「い、いや、べ、別にそういう意味じゃなくて……」

蓮がそんな私が傷つくようなことを言う人じゃないってというのは、よく理解してる。

「そついう意味ってどついう意味？」

「え、えつと……」

蓮の目があっちこっちと泳いでいる。

あはは。困ってる困ってる。

笑いそうになるのをなんとか堪えつつ、蓮を睨み続ける。

「たしかに楓があんなだから、私がこんな格好するのはどうかとは思っけど、それでも似合ってるなと思って私は着

「う、うん。そうだよ！ 似合ってる！ 凄く綺麗でかわいい！」

「……へっ？」

……い、今なんて言った？

きつと今の私は目が点になってることだろう。それくらい虚をつかれた。

「だから、柊はその服似合ってるしかわいいよ。『ちゃんと』っていうのは、ただ単純に、そういう服も着るんだなって思っただけで他意はなくて……」

「あ……う、うん、そ、そうなんだ」

「だから似合ってないとかは全然思っでなくて、むしろ凄く似合っで、クラスの子よりも全然かわいし……」

「か、かわ　っ」

……なに。なにこれ。なにこの流れ。なに蓮は真顔で凄いこと言っちゃってるの？ で、それを聞いて、なんで私は動揺して上手く喋れなくなって、顔が熱くなってるの？

「化粧もしてるよね？ 普段もかわいいのにさらにそれに上乘せされてるっていうか、だから別に柊を悪く言っただつもりは……あれ、柊どうしたの？ 顔真っ赤だけど」

「え、や、これは別になんでも」

手を顔の前でぶんぶんと振る私に、蓮は手を伸ばして私の額にあてた。

「~~~~っ!？」

ちかいかいかいかいかいかいかいかいかいかいかいかいっ!

「……熱はないみたいだけど」

「ま、まあ。わ、私は楓より、け、健康ですから……」

「本当に大丈夫？」

「だ、大丈夫、大丈夫」

コクコクと頷きながら答える私の顔を、蓮は心配そうにのぞきこんできた。

こっちはこんなにいっぱいだったっていうのに、蓮は涼しい顔。

……なんか段々腹立ってきた。

「……よし。そろそろ中入ろう、中入ってアイス食べよう」

私は蓮の手首をがしって掴んで引っ張りながら自動ドアをくぐり店内へと入っていく。

「え、もうすぐお昼だよ？」

「いいからアイス食べるのっ。ほら、いくよっ」

「なんか柎、怒ってる？」

「怒ってないっ」

そのまま私は蓮をひっぱりながら奥へ奥へと進んでいった。

「広いね、ここ」

入口すぐにあったアイスクリーム屋で買ったアイスを舐めながら店内を歩く。

外から見てもかなり大きな建物だっというのは分かっていたけど、中に入ると余計広く感じた。

入口にあった案内板によると、南側にクレナタ直営の食品売り場や生活雑貨などを売るエリアがあり、北側にいるいるな小売店が軒を連ねる専門店街があるようだ。

別に食品売り場や生活用品に用はないのでそこはスルーして、北の専門店街へとやってきた。

「凄い人だ」

見渡す限り人の山。行き交う人は両手にいくつも紙袋を下げていて、このショッピングモールが繁盛していることが伺える。

なるほど、これはお客が減るわけだ。

桐町と目の前のクレナタショッピングモールとの人通りの多さを比べる。桐町に人が戻って来たと言っても、この人の多さからして、最盛期にはまだまだ遠いんだろうなあ……。

「桐町とは活気が段違いだね」

「うん。迷子になりそう」

隣を歩く蓮もアイスを舐めながらそう言う。

「柊、迷子にならないようにね」

「私は平気。それは楓」

「ああ。そうだったね。ごめん」

「ん、別にいい」

蓮が私を見てにっこりと微笑む。

「で、これからどうする？」

「んー……」

アイスを舐めながら思索する。

「……ん？ 蓮もうアイス食べた？」

ふと蓮の手元を見ると、さっきまであったアイスがなくなっていた。

「うん。食べた」

「はやっ」

「柊が遅いんだよ。ほら、少し溶けてきてるし」

蓮に言われて目を向けると、たしかに私のアイスは少し溶けかかっていた。でも、これくらいなら食べきる頃まではもつだろう。

それよりも今はこれからの予定だ。

「とりあえず、フードコートで何か食べて、それからゆっくりしようか」

「了解。じゃ、フードコートいこうか」

「うん。……で、それはどっち？」

「こつちだよ」

蓮が店内の標識を見ながら進んでいく。私はそれに小走りですいていく。

「あ、ごめん。もう少しゆっくり歩くよ」

「そうしてもらえるのは嬉しいけど、なんか納得いかない」

蓮が苦笑を漏らす。

言葉通り、私の歩く速さに合わせて蓮が速度を落としてくれる。

「フードコート着くまでに食べちゃってよ」

「はいはい」

私は視線をアイスに向ける。

アイスは青色に所々黒い点々が見えるチョコレートミント。

あっ、と私は気付いて蓮のシャツの裾を引っ張る。

「蓮、蓮。見て見て」

「なに？」

振り返った蓮に、私は舌をベツと出す。

「青い？ ねっ、舌青い？」

「う、うん。青いよ」

「えへへ」

なんか嬉しくて笑ってしまった。

第5話 楓と柊 part 9

「うわー、こんなに広いのに人で一杯だ」

眼前に広がる光景に思わず声を洩らした。

「ちょうどお昼時だしね」

広大なスペースにテーブルが整然と並べられていて、そのほとんどが人で埋まってしまっている。その周りにある店舗にも大なり小なり列が出来上がっていて、どこも大混雑だ。

「柊は何食べる？」

「うーん……」

座席スペースを囲むようにして配置された店舗に視線を巡らせる。……うどん？ いやいや、せっかく来たのにそんないつも通りのものを食べるのは勿体ない。出来たらここでしか食べられないものが食べてみたい。

「日本人って、限定って言葉に弱いよね」

「ん？ うん、そうだね」

思索しながら手前から順に見ていくと、大きな看板が目を引くお店が目がとまった。

よし、あれにしよう。

「私、たこ焼き。出来たらソースは醤油で鰹節抜きでお願い。あ、ねぎもいらぬから」

私は『カリッ！ トロツ！』と大きく書かれた看板を指さしながら蓮に希望を伝える。

そんなオプシヨンがあるかどうか知らないけど、チエーン店っほいいし、たぶんこれぐらいのニーズには答えてくれるだろう。

「分かった。じゃ、俺が買ってくるから、柊は場所取りしててよ」

私が頷くのを見て、蓮はお店の方へ歩いていった。

踵を返して蓮に背を向けると、辺りを見回して二人分空いているところがないか探す。

「……ないなあ」

「おい。楓さん」

私を呼ぶ声が聞こえて目を向けると、結奈さんと香奈さんがテーブルにつき、私に向かって手を振っていた。

「奇遇、また会えたね」

「こんにちは。楓先輩」

私が近寄ると、二人は笑顔で迎えてくれた。

私は余所行きの口調に変える。

「こんにちは。香奈さん」

「楓さんとも今からご飯？」

「うん」

「ちよつど二二つ空いてるからどうぞ」

結奈さんが隣の椅子をポンポンと叩く。せつかくなのでその椅子

に座ることにする。

「ありがとう。さっきから探してたんだけど、どこも空いてなくて」「日曜のお昼だしね」

結奈さんがテーブルに肘をつきながら、ポテトを一本取り、リスのように少しずつかじる。

「結奈さん。食べ方がリスみたいです」

「いいじゃん。人の食べ方にいちいちケチ付けない」

「あいたっ」

結奈さんが香奈さんの髪の毛の分け目めがけてチョップした。

「ところで、蓮はどうしたの？」

「蓮なら今食べ物を買いに」

「え。楓先輩まさかデートですかっ!？」

ハンバーガーに噛り付いていた香奈さんがガタツと椅子を鳴らし、立ち上がった。椅子は勢い余って軽く後ろの椅子に当たってしまった、そこに座っていた女の人が香奈を一瞥する。

「あ、す、すみませんでしたっ。以後気をつけますっ」

「え……い、いいえ。いいのよ」

すかさず頭を下げて謝る香奈に毒気を抜かれたようで、女の人は少し慌てた様子で香奈さんを制し、背を向けた。

「……で、楓先輩どうなんですか？」

椅子に座りなおした香奈さんが、何故か口元に手を当てて、小さな声で私に尋ねる。

「どつって……ボク達はただ遊びに来ただけだけど？」

「なるほど……こんなこと言ってますけど、結奈さんはどう思いますか？」

結奈さんはポテトをカリカリとかじりながら、空いている手をひらひらとさせた。

「だめだめ。さっきバスで一緒になったから聞いたけど、楓さん、まったくそんな気ないもん」

「はあ……そういうことですか」

香奈さんは何か納得したようで、腕を組んでうんうんと頷いた。

「哀れ如月先輩……」

香奈さんがバスの結奈さんのように十字を切って手を合わせた。香奈さんもクリスマスチャン……？

「香奈さんも蓮のこと知ってるんだ」

「はい。如月先輩は剣道部の副部長で、レギュラーとしても活躍してますから、結構人気ありますよ」

香奈さんはそう言うと、ハンバーガーを口一杯に頬張った。

へえ……。蓮って人気あるんだ。それもそうか。あんなに身長高くてスタイルいいし、顔もどちらかと言えばカッコいい。それで運動もできるとあれば人気も出るよね。

「まあ、あたしの場合には結奈さんと同じクラスということで、多少なりと話したことがあったのが大きいですけど」

「香奈ってよくうちの教室に邪魔しに来るんだよね。一年なのに勇氣あることで」

「それはいつも結奈さんがやれ体操服忘れただの、やれ財布忘れただのってあたしを呼ぶせいじゃないですかっ」

「あー、そうだったっけ？」

結奈さんがストローを啜えてズブーツと音を鳴らした。

「ところで、蓮はこの場所分かるかな？」

「……分からないかも」

もしかしたら電話してくるかもしれない。そう思っただけでポケットから携帯電話を取り出したところで、ちょうど蓮からかかってきた。

「もしもし」

『もしもし。席は取れた？』

「うん」

『どのあたり？』

「えーと……」

私は何か目印になるようなものを探して辺りを見回す。

「どうしたの？」

「蓮からなんだけど。この場所ってどう説明すればいいかなって思っただけ」

結奈さんは指先をペロツと舐めてからペーパーナプキンで拭くと、「携帯貸して」と手を伸ばしてきた。

「もしもし。結奈だけど今どこ？ ……うん。 ……うち？ ……うちはちよつど香奈とお昼食べてたら、楓さん見つけて空いてる隣を……うん。で、蓮は今どこ？ ……あー、そこか。そこからなら、上の方にトイレはこつちつて看板ない？ あった？ あつたらそつち向かってまつすぐ歩いてきて。そこにいるから」

そこまで話すと、結奈さんは携帯電話を閉じた。

「あ、ごめん。つい切っちゃった」

「ううん。分からなかったら、またかけてくるだろうし」

結奈さんから携帯電話を受け取り、かかってきても出られるようにテーブルに置いておく。

「……きたきた」

結奈さんの声にその視線を追っていくと、片手にビニール袋を二つ下げた蓮がこちらを見ながら歩いてきた。

「結奈と香奈ちゃんも来てたのか」

蓮が私に袋を渡しながら席についた。

「うちは香奈に付き合わされてね」

「そんな嫌々そうに言わなくてもいいじゃないですか。結奈さん暇そうにしてたのに」

「見た目はだら〜つとしてても、頭の中じゃいろいろ考えてたの」

「とか言いつつ、頭の中もだら〜つとしてたんですよね？」

「……」

結奈さんが無言のチョップを振りおろす。

「あいたっ」

「言っでいいことと悪いことがある」

「凶星だったってことで あいたっ」

再び振りおろされる結奈さんのまっすぐに伸ばした右手。
いいコンビだ。

「ほら、ひい……楓。早くたこ焼き食べないと」

「あ、うん」

視線を結奈さんから蓮に移すと、いつの間にか蓮は買ってきた袋から焼きそばを取り出して食べ始めていた。

私は袋から発泡スチロール製の容器を取り出し、容器を止めていた輪ゴムを取り去り、開いた。

「あ、ちゃんと醤油あつたんだね」

「うん。鰹節やねぎも向こうから聞いてくれたから注文通りできた」

蓮の言う通り、ちゃんとソースはたこ焼きソースではなく醤油、鰹節とねぎはかかってなくて、青のりとマヨネーズがかかっている。

「ありがとう」

「いえいえ」

お礼を言っで、串のように長い楊枝のようなものを持って、たこ焼きをつき刺す。持ち上げると湯気がたっていたので、何度かフーフーと息を吹きかけてから噛り付いた。

「……うん。おいひい」

たしかに看板通り、外はカリッととしてて、中はトロツとしてておいしい。

「醤油なんて食べたことないけど、おいしい？」

「ボクはソースよりこっちのほうが好きだけど、好みかも。ためしに食べてみる？」

「へ？」

さすがに食べかけをあげるのは失礼なので、半分ほど残ったたこ焼きを容器に戻して、隣のたこ焼きを突き刺し、蓮の口元へ持ち上げる。

「はい」

「へ？」

「ほら、口開けて。少し熱いから、自分でフーフーしてね」

「え……う、うん」

蓮が何度か息を吹きかけてからたこ焼きを一口で食べた。

「どっ？」

「……うん。醤油もおいしいね」

「でしょ？ たこ焼きはソースだっていうのは分かってるんだけど、ボクは醤油の方がいいんだよね」

私は蓮が共感してくれたことに嬉しくなった。

ふと隣を見ると、結奈さんと香奈さんが私をじーっと見つめていた。

「ん？」

なんでこっち見ているんだろう。

ふとテーブルを見ると、二人の前には、二つ重ねたお盆と、その上に丸めたハンバーガーの包みや、空になったポテトの入れ物が置かれている。

結奈さんも香奈さんも、もう自分の分は食べ終わっていたようだ。
……あ、なるほど。

「結奈さんと香奈さんも食べてみる？」

そう言っただけはたこ焼きを指さした。

きっと二人も醤油味のたこ焼きに興味を持ったんだろう。

「うちも香奈も食べたことあるから大丈夫」

「あれ？ こっち見てたからってつきりたこ焼きに興味あるのかと思っただけ」

「まあ、あるっちゃあるけど……それよりほら、早く食べないと冷めるよ？」

「あ、うん」

何か腑に落ちないけど、蓮を待たせるわけにもいかないなので食事を再開する。

たこ焼きは八個入りで、蓮に一つあげたから私の分は残りの七個。私はそれをつき刺しては二口にわけて食べていった。

結構急いで食べたはずなのに、それでも蓮を待たせてしまった。

「ふー。お腹一杯」

「それだけで？」

「うん。アイス食べてたしね」

「だから言ったのに……」

「いいのいいの。ボクがいいんだから問題なし」

蓮が買ってきてくれたお茶を飲んで一息つく。

「そんなんだから身長伸びなかったんじゃない？」

「なっ……！ 人（主に楓）が気にしてることをっ」

私は上半身を乗り出して腕を振り上げる。咄嗟に蓮は目を瞑り頭を腕でガードした。その隙に財布から取り出しておいた500円玉を蓮の胸ポケットに入れて席に戻った。

「……え？ あ、楓これは」

「さっきのたこ焼きと飲み物代。ちょっと少ないかもしれないけどあとは奢りつてことで」

「奢りつて、元々さっきのアイスも割り勘だったから、お昼くらいは俺が持とうと……」

「そうだと思うっての、その500円」

私は蓮の胸ポケットを指さす。

「返すよ」

「だめだめ。テーブルに置いても取らないからね」

両手を軽く上げて、絶対受け取らないことをアピールする。

「はあ……分かったよ」

渋々といった感じに蓮が財布に500円をしまつ。

「うんうん。それでオッケー。……ん、結奈さんどうしたの？」

振り向くと、相変わらず結奈さんはこちらをじっと見つめていた。

「いろんな意味で満腹なので、そろそろうちと香奈は買い物に行くわ」

結奈さんがそう言いながら立ち上がると、香奈さんがお盆を持ってそれに続いた。

「じゃ、楓さんまた学校だね。……蓮はいろいろ頑張れ」

「楓先輩、また部活で会いましょーっ。……如月先輩いろいろ頑張ってください」

二人とも何故か私に挨拶した後に蓮に耳打ちして去っていった。

「二人ともなんて？」

「え？……ま、また明日って挨拶を」

「ふーん」

そんなことをわざわざ耳打ちしなくてもいいのに。

「私達はもう少し休憩してから行くこうか」

「う、うん」

さつきから少し顔の赤い蓮を見て、私は首を傾げた。

「ねえ、香奈」

「なんですか？」

フードコートを出て、少し離れた位置で結奈は香奈を呼び止め、視線を楓（柊）と蓮に向けた。

「あれ、デート以外に何に見える？」

「……………デートです」

「デート以外で」

「……………あたしの少ないポケャブラリーを検索したところ、適切な単語は見つかりませんでした」

「…だよねー」

「はあ…」

結奈と香奈は蓮を見て、そしてお互いを見て、肩を竦めてため息をついた。

第5話 楓と柊 part 10

「さて、どこ行こうか」

蓮を引き連れて混雑するフードコートを出た私は、近くのベンチに座って、さつき手に入れたパンフレットを開いて眺めていた。

「柊は何か買いたいものないの？」

「んー。別にこれと言っては。元々ここがどんなところか見てみたかっただけだし。そう言う蓮は何かないの？」

「俺も特には……あ、ちよっと靴見てもいい？」

「うん。じゃ、靴屋だね。靴、靴っと……」

視界一杯に広がるパンフレットから靴屋を探す。左端から右へと読み進めていき、半分くらいまで来たところで目的のお店を見つける。

「あつたあつた。えーっと……」

私は立ち上がり、パンフレットと周りの景色を交互に見比べて、現在地からどっちの方角に目的の靴屋があるか調べる。しばらくそうしている、蓮も近寄ってきて隣からパンフレットを覗き見た。

「あっちじゃないの？」

「このお店がこっちにあるから……こっちだよ」

私が指差した方角とまったく反対の方角を指差す蓮。

「あれ？」

蓮がさらにパンフレットに顔を近づけた。

「……本当だ。さすが柀。地図読めるんだね。楓は相変わらずなよ
うだけど」

「相変わらずって?」

「ほら、夏休み最後の日の午後」

「……あー。あの日か」

夏休み最後の日といえば、楓が実家に戻ってきた日だ。たしかに
あの日、楓は道に迷っていたところを蓮に助けられた。その時はま
さか私も楓もそれが蓮だなんて思わなかったけど。

「今思い出したけど、あの時の楓、かなり困ってたよね?」

あの時のことを思い出したのか、蓮が含み笑いをする。

「まあ、あまり日に当たると日焼けして後が大変だからね」

「そういえば肌が弱いんだっけ」

「うん。だからこっさり登下校中は日傘差してる」

「そうか。たいへん」

蓮は途中までいいかけた言葉を飲み込み、軽く頭を左右に振った。
私はそれを見て苦笑した。

「……じゃあ、今日は曇ってて良かったね」
「うん」

私が頷くと、蓮は笑みを返した。

「それにしても、この案内図分かりづらいね……」
「そう？　ちゃんと色でゾーン分けもしてて分かりやすいと思うけど」

パンフレットの案内図では、建物全体をいくつかの色に分けて、この色のゾーンにはこういうお店がある、という具合に分かりやすくしてある。

けれど、たしかに少し分かりづらいかもしれない。きっと楓では迷ってしまうだろう。実際の通路や壁もパンフレット同様の色で固めるような親切さがないと。

「改良の余地ありだね……。まあいいや。行こう」

パンフレットを小さく畳んでポケットに入れ歩きはじめた。

エスカレーターを使って2階に上がりしばらく進むと、目的の靴屋に到着した。

「それでお目当ての靴は何用？」

「普段用。もう結構ぼろぼろだから、そろそろ買い換えようかなって」

蓮が視線を下ろしたので、つられるようにしてその先に目を向ける。たしかに蓮が履いているスニーカーはくたびれていた。

「次はどんなのを買うつもり？」

「奇抜過ぎなければなんでもいいかなあ……」

ふーんと返しながら、蓮の後をついていく。

「あ、今のと同じのがあった」

蓮は棚に飾られていた靴を手を取った。蓮の言う通り、本当にまるで同じデザインの靴だった。

「これ気に入っているし、これでいいかな」

「え。一緒にするの?」

「うん」

それはさすがにどうだろう。せっかく買うなら、同じデザインの物じゃなくて別のものを買えばいいと思うけど。

「柘は別のにした方がいいと思う?」

「うーん。一緒のもいいと思うけど、私ならせっかく買ったから、別のを買うかな?」

「なるほど……」

蓮は靴を棚に戻すと、腕を組んで顎に手をやり、ずらっと並ぶ靴を眺め始めた。

「じゃあどれがいいと思う?」

「どれって言われても……。あ、これとかどう?」

私はさっきの靴があった棚から2段下にあった白地に青の線が入ったスニーカーを手に取り、蓮に渡した。

「今とそんなに違わないし。蓮は青が似合ってる気がする」
「うん。これいいね。これにしよう。すみませーん」

蓮は私から靴を受け取り頷くと、近くの店員を呼びとめた。

「はい」

「この27センチありますか？」

「27センチですね。少々お待ち下さい」

店員は軽く会釈すると、お店の奥へと走っていった。

「なんかあまり考えずに決めたように見えたけど、あれでいいの？」

「うん。正直、履ければデザインはそこまでこだわってないし」

「あーそー」

せつかく選んだのにこの返事。……ま、私もそこまで悩んで選んだわけじゃないからあまり強くは言えないけど。

「それにしても、27センチって大きいね」

身長も高いのに足のサイズも大きいなんて……って身長高いんだから大きいのは当たり前か。

「男だったらこれくらいが普通なんじゃないかな」

「そう？ 蓮が身長高いからじゃない？」

クラスでも蓮ほど身長高い人はあまりいないから、蓮が普通または平均ということはないだろう。

「高いつて言っても180だよ？」

十分高いつての。

「部活じゃ周りみんなこれくらいだし」

「さすがサッカー部……」

サッカーは身長高い方が有利だって聞いたことがあるし、それだろうか。

「そういう柸はいくつ?」

「……はい?」

私は蓮の言葉に驚いて目を丸くした。

「いやそんなに『聞かれるとは思わなかった』みたいな顔されても……」

そう思ったんだから仕方ない。

「いくつって、どっち? 足? 背? 背は言わないからね」

「背はだいたい分かるから足で」

だいたい分かるって、一体私を何センチだと思っっているんだろう。聞いてみたい気もしたけど、ここは我慢することにする。

楓ほどではないけど、私も自分の背にはコンプレックスがある。だからあまり触れられたくはなかった。

「足は22センチ」

「それ小さくない?」

「こんなもんじゃない?」

私が答えると、蓮は「そんなに小さいのか」と呟いた。

「で、身長はつと……」

そう言うと、蓮は私の頭に触れるか触れないかの位置に右手を下に向けて広げ、そのままの高さで水平に移動させた。手は蓮の首の付け根より少し下あたりについた。

「……145くらい？」

「失礼なっ」

言うに事欠いてまさかの小学校高学年の平均身長と間違えるなんて……！

「じゃあ147」

「そんなに低くない！」

蓮は私の身長を過小評価しすぎだ。

「150？」

「……うん」

……まあ、間違っではないよね。四捨五入すると150だし。うん。

「……149センチか」

「なんで！？……あっ」

言ってしまったてからしまったと思ったけど、もう遅い。

蓮は私を見てにやりと笑いながら、肩に手を置いた。

「...さあ、さあ」
「...さあ、さあ」

第5話 楓と柊 part 11

レジが混んでいたのので先に靴屋を出た私は、近くのベンチに座り蓮が出てくるのを待っていた。

床に届かない足をブラブラとさせながら視線をあっちへこっちへと向けていると、通路右奥からうさぎの着ぐるみを着た人が歩いてくるのが見えた。そのうさぎの手にはたくさんの風船が握られている、それらをすれ違う子供達に配っていた。

どこかでセールでもやってるのかな？

そんなことを思いつつ目で追っていると、ふいにうさぎと目が合った。

なんとなく会釈すると、何を思ったのか、うさぎは私に向かって歩き始めた。

……え？ 私何かした？

少しどきどきしながら待っていると、うさぎは私の眼前で立ち止まり、右手を差し出した。

そこには風船が一つ握られていた。

「……へ？ くれるの？」

うさぎは大きく頷いた。

私はおずおずと手を出して風船を受け取った。

風船なんて何年ぶりだろう。

「あの、ありがとうございます」

お礼を言うと、うさぎは大きな手で私の頭を乱暴に撫でた。そうしてから手を振り、ゆっくりと去って行った。

風船はうさぎと同じピンク色をしていた。

「ごめん様。おそくな……どうしたのその風船と頭」
「ん？」

頭に手をやると、髪がぐしゃぐしゃになっていた。

「んーとね」

ピンクの風船に目を向け、それから連を見て微笑んだ。

「つむぎさんにもらった」

「つむぎっ…」

「そっ」と答えてベンチから立ち上がる。

「じゃ、次はどこいこっか」

右手に風船を持っていたので左手だけで髪を直しつつ連に尋ねた。

「そろそろ映画の時間だから、シネコンに行こっか」

「シネコン？」

「シネマコンプレックス。映画館のことだよ」

「なーんだ。だったら初めから映画館って言えば良いのに」

私はパンフレットを開き映画館がどこにあるのかを探した。

しばらく目を走らせて、パンフレットの隅の方に『シネマコンプレックス』と書かれた施設を発見した。ここからすぐ近くにあるみたいだ。

「……シネコンの方が映画館よりも定着してるってこと？」

「厳密に言つと、微妙に意味が違つからね」

「ふーん。まあどつちでもいいや。よくないけど」

「それって結局どつち……?」

私としては分かりやすい映画館で良いと思う。意味は微妙に違つらしいけど。

パンフレットを折りたたんでポケットに直しながら顔を上げて周りを見ると、さっきよりも人が増えていた。

「もしかして、これみんな映画館行き?」

私達が向かう方向に大きな人の流れが出来ていた。

「そうかも」

「時間近いの?」

「あと15分で開演だったかな」

……けっこうすぐだった。

「私達もいこう!」

はぐれないように連の手をしっかりと握って歩き始めた。

「へ? ええっ!?」

何故か連が変な声を上げた。

「ん? どうかした?」

「えっ!? う、ううんなんでもない!」

首をぶんぶんと横に振る蓮に首を傾げながら、私は映画館へと向かった。

「映画館と言えばやっぱりポップコーンだよな。ということではポップコーンとコーラ下さい」

「俺もコーラを」

「コーラを二つ、ポップコーンを一つですね。少々お待ち下さい」
すぐに出てきた商品をお金と引き替えに受け取って列から外れた。

「どうして映画館のポップコーンと飲み物って、こんなにサイズが大きいんだろう」

蓮に持ってもらったポップコーンと、両手に収まり切らないコーラを交互に見る私。

「サイズならSからLLまであったじゃないか」
「へ？」

蓮が指差した先を見ると、そこにはしっかりと『ポップコーン S、M、L、LLサイズ』とサイズ別に値段が書かれたメニュー表があった。

「……このサイズは？」

「何も言わなければLサイズになるみたいだね」

ポップコーンの入れ物には『L』と大きく書かれていた。

「Sサイズにすればよかった……」

「柊ならこれくらい食べられるんじゃない？」

私は頂垂れていた頭を持ち上げて蓮を見上げた。

「いくら私でも一人でこれ一つは無理だよ。あ、そうか。これ蓮が買ったんだから、半分くらい蓮に手伝って貰えばいいんだ」

私はパンツと胸の前で手を鳴らした。

「いや、これはさっきのお昼代のお返しにと買ったものだから柊のもの」

「じゃあ、あげるから食べるの手伝って」

「……はいはい」

蓮は呆れた様子で了承し、ポップコーンを見つめた。

「もしかして、蓮ってポップコーン嫌い？」

「え、ううん。そんなことはないよ」

否定する蓮。じゃあなんで気落ちしているように見えるんだろう。

「なんか締らないな……」

「なんか言った？」

「ううん。何にも」

そう言いながらため息を吐き、その後「よしっ」と顔を上げた蓮に、私は首を傾げるだけだった。

「へえ」。あのドラマ映画化されてたんだ」

私は周りに迷惑にならないよう、隣りに座る蓮の耳元で囁くように話しながら眼前のスクリーンに流れる映像を見ていた。

それは以前テレビで放送され高視聴率のうちに終わった刑事物のドラマだった。内容的にはその続編のようだけど、やっぱり前作を見ていなかった私は周りの人ほど物語に入り込んで見ることが出来なかった。

「終これのテレビ見てなかったんだね。続編ものだけど、見てて面白い？」

そんな私の様子を見て蓮が気にしているようだった。

別に母親から譲って貰った映画のチケットなんだから、その内容まで蓮が気にすることはないのに。

「んー。最初にこれまでのダイジェストがあつたおかげで流れは分かるからそれなりに面白いよ」

私は抱え持った大きな紙コップのような入れ物からポップコーンを一つつまんで食べた。

はちみつ味だというそれはほどよい甘さで美味しかった。

私はもう一つポップコーンをつまんで、その腕を伸ばした。

「はい」

「……なに？」

蓮は口の前に差し出されたポップコーンに困惑しているようだった。

「さっき食べるの手伝って貰うって言ったよね？」

「う、うん」

「だから、はい」

少し強引かとも思いつつ、蓮の口にポップコーンを押しつけた。さすがにここまでされて食べないなんて選択肢を選ぶことはしないだろうと思っていた通り、渋々といった様子で口が開いた。私はそこにポップコーンを投入。はちみつのせいで少しべとつく指をぺろつとなめながら蓮を見た。

「結構おいしいでしょ？」

「う、うん」

反応が悪いけど、さっきとは違って嫌がってはいないように見えた。

うん。この調子で食べて貰おう。

「まだまだあるからね」

「じ、自分で食べるから」

「そんなこと言って食べないんでしょ？ そうはさせないっ」

また一つポップコーンを摘んで蓮の口に近づける。今度は先に口が開いた。ぽいっと投げ込んでから、私はふと朝の椿の言葉を思い出した。

「ねね。蓮」

口をもごもごさせながら蓮がこちらを向く。

「なんかこれってちょっとだけデートっぽいよね」

含み笑いをしながら言った。

「っ!？」

突然蓮が咳き込みだした。ポップコーンを喉に詰まらせたみたいだ。

「ひ、ひいらぎ!？」

ここが映画館ということをおぼろげに忘れたかのように大声を出す蓮。

「すとーっぷ! 迷惑になるから大声出さない!」

口を押さえながら小さな声で叱りつけると、蓮は理解したと数回頷いた。

手を離し、蓮を横目で見ながら私はため息を吐いた。

「まったく。突然なにしてるんだか……」

「それ、俺のセリフ……」

暗闇でも分かるくらい顔を真っ赤にした蓮がそう呟いた。

……そんなに長く息止めたかな？

「蓮は自転車できてたんだ」

「うん」

クレタナの敷地の隅に申し訳ない程度に設けられた駐輪場は、立体駐車場の出口のスロープ下の空間を利用したものだだった。

「蓮の家ってこの近くだっけ？」

蓮の家には昔二、三度だけ遊びに行ったことがあるけど、もう四年前のことなので詳しい位置を覚えていなかった。

「ううん。柊と同じ町内」

「あれ、もしかして蓮って私の家の近く？」

「町内って言っても僕の家は端のほうだからね。近いといえば近いけど、お隣さん、ってわけでもないね」

「でも、柳町からここまで自転車ってことは途中の坂道登ってきたの？」

私たちの住む町からここまで来るには、急で長い上り坂を超えないといけない。だから私はバスを使っただけって言うのに。

「うん。たしかに坂道はきついけど、練習だと思えば」

「……休日まで部活動とは精の出ることだ」

半分感心、半分呆れて蓮に視線を送る。

「そうだ。帰り後ろ乗っていく？ バス代勿体無いし」

「自転車の二人乗りは危ないんだよ？」

「ゆっくり行くよ」

そう言う問題ではないような……。

「次のバスまで30分以上あるから、こっちの方が早いよ？」

「え、そんなに遅いの？」

「バス自体は本数多いけど、今の時間帯で、ここから街までののは一時間おきしかないよ」

一時間……それはさすがに待ってられない。

「うーん……待つのも嫌だし、ここは蓮の言葉に甘えようかな」

私がそう言うと、圭は止めてあった自転車のカギを外して通路に出すと、自転車に跨って座った。

「はい、後ろ乗って」

「ちょっと高いなあ……よいしょっと」

蓮の肩に手を置いて、自転車の荷台に飛び乗るようにして腰を下ろす。安定するように荷台を跨ぎたいところだけど、スカートでそれもできず、見えないように足をきちんとそろえて座る。

「じゃ、行くよ」

「うん」

私は右手を圭のお腹に回してぎゅっと力を入れた。

「ちよ、ちよっと柵なにを……！」

「何って落ちないように掴まってるんだけど？」

肩に手を置いてるだけじゃ落ちてしまいかねない。

「そ、それはそうだけど……く、くつつきすぎて……そ、その、む、む……」

「む？」

「な、なんでもないっ」

ちらつと横から見えた蓮の顔は何故か真っ赤に染まっていて、私
はわけが分からず首をかしげる。蓮は顔が赤いまま、ゆっくりと自
転車をこぎ始めた。

下り坂の帰り道は、風を切って凄く気持ちよかった。

第5話 楓と柊 part 11 (後書き)

第5話 楓と柊 完

間話 蓮と楓と柀のとある夏の日 part 1

中学になって初めての夏休みも残り二週間となった八月半ば。俺は今日も同じ時間に同じ玄関の前に立っていた。眼前にそびえ立つ扉は自分の家のものよりも一回りも二回りも大きく、扉の大きさは家の大きさに比例するのだろうか、ふと思った。もちろんそんなことはない知りつつも、西洋風の外観をした広い庭のあるこの家を見ていると、なんとなくそう考えてしまう。

もうそろそろ良いだろうと携帯電話を取りだして時刻を確認する。この時計が合っているならば、今は午後二時二分。ちょうどいい時間だ。俺は携帯電話をポケットにしまって、『依岡家』と書かれた表札の横にあるインターホンを押す。しばらくするとインターホン越しに聞き慣れた声が聞こえた。

『いらつしゃい、蓮君』

「おばさんこんにちは。楓さんはいますか？」

インターホンのカメラに向かってお辞儀する。

『楓ちゃんなら部屋にいるわ。今玄関のカギ開けるから』

数瞬してガチャツと音が聞こえ玄関の鍵が外れる。身長の二倍近くあるうかという扉を開けて中に入ると、ひんやりとした冷気が体を包んだ。汗をかいていたせいで少し肌寒く感じる廊下を歩き、まずはリビングへと向かう。

リビングではおばさんが二人分の飲み物とお菓子をお盆の上に並べていた。

「お邪魔します」

改めてもう一度挨拶すると、おばさんは「そんなことしなくていいのに」と笑った。

「いつも楓ちゃんのために悪いわね」

「いえ、俺が来たくて来てるだけですから」

「ふふ。だったら少しでも蓮君が来たくなるように、蓮君の好きなお菓子や飲み物で釣らないといけないわね」

「冗談めかすおばさんは上機嫌のようだ。」

「そんなことされると毎日きちゃいますよ?」

「ぜひお願いしたいわ。蓮君が来てくれた日は楓ちゃんも機嫌が良みたいなのよ」

「そ、そうですね」

初めて聞いた話に内心ガッツポーズを取りたくなるほど嬉しくなったが、それは不謹慎だと思い自重する。

正直初めて会った頃からあまり変わっていないように感じて、昨日の夜も少し落ち込んでいたところだったからなおさらだ。

「楓ちゃんが待ってるから行ってあげて。はい、これよろしくお願いするわね」

おばさんからお盆を受け取る。お盆に載せられたお菓子はデパートで売られているような見るからに高そうなものだった。別にお客様という偉い立場でもないのにこんな良いものを出さなくてもと、こっそり苦笑しながらリビングを出た。

深呼吸をしてコンコンと扉をノックする。もう何度となくノックした扉だが、この瞬間はいつも緊張する。

「楓さん、入るよ」

少しだけ待つも返事はなし。いつものことなのでとくに気にもせず、もう一度ノックをしてから扉を開ける。

案の定、楓さんは車いすに座り扉に背を向けていた。ノックの音は聞こえていたはずなのに。

俺はできるだけ平静を装いつつ、背中に向けて話しかける。

「ノックしたんだから返事くらいしてくれてもいいのに」

……。

……あれ？

いつもならここでちらりとこちらを伺い「なに？」と素っ気なく返事してくれて、そこから会話が始まるのに、今日はぴくりともしない。

「楓さん？」

返事なし。顔は窓の外を向いているので、寝ているようではないし……。

……機嫌が悪いとか？もしかして怒ってる？

予想していなかった事態に頭がパニックになる。

え？昨日来たとき、俺なんかやったっけ？……そういえば外

に出るのを嫌がる楓さんに外出を勧めてみたりしたっけか。できる

だけ優しく聞いてはみたはずだが、今思い返せば少ししつこかったのかも。楓さんはほとんど表情を変えないからよく分からない。それで楓さんが機嫌を損ねているのも知らずにペラペラと話し続けたからとか……？ あー、あり得る。ところで楓さんが怒るなんていつ以来？ むしろ今まで怒ったことあったっけ？ ……不機嫌な時はあったが、怒ったことはない気がする。つまりこれが初めて？ うわ、どうしよう。悪いのは俺だから、俺が謝らないといけない。でもどう謝れば……。

頭の中でグルグルといろいろな言葉が浮かぶ。けれどいつまで経っても答えのようなものは出てこない。

と、とにかく何か話そう。沈黙が続けば続くほど何を話せば良いのか分からなくなる。

俺は意を決して口を開く。

「あ、あの……楓、さん？」

うわ、今声の上擦った。ってそんなこと気にしてはだめだ。そのまま続けよう。

「えっと、もしかして昨日しつこく外へ出ようって誘ったこと、怒ってる？」

……返事なし。

違う？ これじゃない？ いやこれだからこそ無視しているとか？

「その、もしそれで怒ってるなら、謝りたいから返事してほしいかなあ〜なんて」

……はい無視っ。もしかこれは謝罪も聞きたくないということなのかそうなのか！？

「あー、そのー、ですから……えっと……」
「……ぷっ」

しどろもどろに何とか話を続けようとしていると、ふいに楓さんが吹き出した。

「あははははっ
「!」
「か、楓さん!？」

急いで回り込んで正面に立つ。楓さんはお腹を抱えて笑っていた。目には涙まで浮かべて。

「はあ、はあ……ぷぷっ、予想通り過ぎてお腹痛いっ」
ペシペシと車いすを叩く楓さん。
……ってこれは楓さんじゃない!

「まさか『柊』か!？」

俺がそう言うと、楓さんの時には見せない輝くような笑顔をした柊が眼前に人差し指を立てた。

「せいかーい。もう、途中で気づいてよ。いくら楓が無愛想だからって、無視したりしないよ」
「い、いや俺は怒ってるんじゃないかと思って」
「なんで楓が怒るの? 昨日のは蓮が自分のことを思ってたって聞いたことだっけ楓も分かっているのに。それよりもさっきの蓮の慌てようがもう思ってたのとぴったりで……あははははっ
「!」

また柊は笑い出した。

「ははははっ。わ、笑いすぎて椅子から落ちそう」

柊は本当に椅子から落ちないように肘掛けに寄りかかっている。

「そ、それは危ないから気をつけて」

「大丈夫大丈夫。はあ、面白かった」

ひとしきり笑い終えたようで、柊はお腹をさすりながら姿勢を正す。

「ごめんね。たまにはこういうのもいいかなって思って」

「やられたこっちはたまったもんじゃないけどね」

「あ、やっぱり?」

柊は「たはは」と笑いながらもう一度「ごめん」と謝った。

彼女の名前は依岡楓^{よりおかかえで}。見た目は体の弱い普通の女の子だが、二年前の事故によって重傷を負ったところを、同じ事故で脳死した双子の妹の体に脳移植することによって一命を取り留めた元男の子であり、さらにはその心に柊という人格を持った、所謂二重人格者である。

「で、どうして楓さんじゃなくて柊なの?」

「それって私じゃ不満ってこと?」

車いすからベッドに移った柊が上半身を起こした姿勢で布団を被りながらそう言った。

俺やおばさんにはちょうど良い部屋の温度も、柊には少し冷たすぎるようだ。

「またそうやってからかう」

不満を返しながらベッドの脇に椅子を持ってきてそれに座る。

「ごめんごめん。楓ならちよつと休憩してる。午前中に家庭教師を相手にしたせいで疲れたみたい」

パジャマ姿でそう言った柊は、少し寂しげに見えた。でもそれはほんの一瞬で、俺が『家庭教師』という言葉に過剰に反応した結果、そう見えてしまったただけだと知る。

楓さんは近くの私立中学に籍を置いている。しかし入学式を含め一度としてその学校の門をくぐったことはない。それは楓さんが二年前の事故によって受けた手術の後遺症により、通学が困難と判断されたからだ。そのせいで楓さんは自宅療養しつつ通院してリハビリを受け、さらに同級生に遅れないよう午前中は毎日家庭教師を呼んで勉強をしていた。

今の楓さんにとってそれらは非常にハードらしく、これまでも何度かこうして柊が表に出ていたことはあった。

「そういえば、頭痛もするって言ってたかなあ」

『頭痛』という言葉から、以前柊から聞いた話が頭に浮かんだ。

「頭痛って……もしかして楓と『会話』した？」

柊が驚いた表情をしてパチパチと拍手する。

「正解。よく分かったね」

「前に『私と楓は面と向かい合って話すことができるけど、それをするとき楓が頭痛になる』って言ってたじゃないか」

柊が天井を見上げる。やっぱり寒いようで布団を首まで引き上げる。

「そう言えばそんなこと言ったっけ」

長い髪をクルクルと指に巻き付ける。考え事をしているときの柊だけが持つ癖だ。

「無理して会話なんてしなくても、携帯のメール使えばいいじゃないか」

「んー……それだとすぐに返事がもらえないんだよね」

「そんなにすぐに返事が聞きたかった内容なわけ？」

俺の問いに「んー……まあそうとも言える……かも？」と曖昧に返す。

「まあまあ、別にいいじゃない。何を話したかなんて」

「いや、俺はまだ楓が怒っているんじゃないかって思っているわけ……」

「だからそれはないって。そんなに気になるなら後で聞いてみれば良いよ。もう少しで出てくると思っから」

俺はその言葉に驚く。

「え、出てくるの?」

「うん。ノルマだからね」

俺が首を傾げると柊が説明してくれる。

「この前から始めたんだ。『蓮が来たときはちゃんと話をする』って。いつまでも人見知りしてちゃだめだからね」

その言葉にさらに驚く。

「か、楓さんって俺に人見知りしてるの!?!」

「うん。すこーしだけどね」

少なからずショックを受けた。楓さんや柊とこんな仲になってから一年と半年ほど。たしかに柊と比べると口数少なく頷くだけがほとんどだったが、それは楓さんがそういう性格だからだと思い、親友とは言わないまでも気兼ねなく話せる友達くらいにはなれていると思っていた。

「あ、落ち込んだ?」

「それなりに」

ガクツと肩を落とす俺の頭に柊がそつと手を置く。

「よしよし。まあ人見知りしてるけど、それでも蓮が一番仲が良い友達だから」

「人見知りされてるけどね」

「蓮って結構気にするタイプ?」

仲が良いと思っていた子が実はそうでもなかったと聞かされれば誰だっpegこうなると思う。

まあ仕方ない。うだうだ言っても何も変わらないのなら、気持ちを切り替えよう。

「……よし。これは俺の努力が足りなかった結果として受け止め、これからはもっと楓さんが人見知りしなくなるまで仲良くなるよう頑張ろう」

「うんうん。そういう前向きな姿勢はいいと思うよ」

嬉しそうに微笑む柊。しばらくすると「あっ」と呟いてから、俺たち以外誰もいないのに何故か手招きをした。とりあえず言っておりにしようと思いを寄せると耳打ちしてきた。

「そうだ。楓と蓮が仲良くなる良い方法があるんだけど………どうかな？」

「良い方法？」

聞き返す俺に、柊は笑顔で頷いた。

問話 蓮と楓と柗のとある夏の日 part 2

翌日の午後。柗との約束通りにおじさんが経営する病院へとやってきた俺は、玄関前に置かれたベンチに座って楓さんが出てくるのを待っていた。

今楓さんはこの病院のどこかでリハビリを受けている。『どこか』というのは、今まで俺は一度として楓さんがリハビリしている姿を見たことがないせいで、楓さんがどこでリハビリを受けているか分からないからだ。もちろんそれは見舞いが面倒だからとかそういう理由じゃない。むしろ見舞いに行こうとして、付いて行って良いかと尋ねたくらいなのだが、楓さんはおるか柗にまで「絶対に来ないでほしい」ときつい口調で言われてしまったので、渋々見舞いに行くのを諦めている。実際今日だって柗の『楓ともっと仲良くなるう大作戦』に従い病院まで来たのに、中に入るのは許されなかった。そんなわけではらくベンチに座って待っていると、リハビリを終えた楓さんが看護師さんに車いすを押して貰いながら病院から出てきた。

笑顔で話しかける看護師さんに対して楓さんは無反応。会話が成立していないんじゃないかとひやひやしたが、よく見ると楓さんの口が僅かに動いているのが見えて胸を撫で下ろす。

看護師さんと目が合い、お互い会釈する。怪訝な顔をするので「親戚です」と伝えると、一転して笑顔になり、「あとはお願いね」と言い残して病院へと戻っていった。

「こんにちは。リハビリどうだった？」

「いつも通り」

ちらっと見ただけで目をそらした楓さんに苦笑しつつ、後ろに回り込んで車いすを押す。車いすは少しの抵抗だけで動き出した。

「なんで来たの？」

「おばさん今日は迎えに来られないんだって。だから頼まれたんだよ」

「……そう」

ぼそつと「だったら来なきゃ良かった」と楓さんの呟きが僅かに聞こえる。

……ちよつと機嫌が悪い？ いやいや楓さんはいつもこんな感じで今も別に怒っているわけじゃないはずだ。きつとこれから言わなければいけない言葉を想像して、若干ネガティブになっているだけだ。そうに違いない。

と、思いつつもこっそりと楓さんの顔色を伺う。

……分からない。

いつも通りと言えばいつも通りだが、その『いつも通り』がほぼ無表情なので、顔色から楓さんの機嫌が良いのか悪いのかがほとんど読み取れない。

俺はこっそりため息を吐く。

こんな様子で柊の言つとおりには楓さんが『うん』と頷いてくれるのだろうか。

俺は柊と昨日話した『作戦』を頭の中で振り返った。

「楓ともつと仲良くなるう大作戦！」

「まんまなネーミングだね」

グツと拳を掲げて宣言した柊に率直な感想を送る。柊は頬を膨ら

ませて俺を睨んだが、ちつとも怖くない。

「で、具体的には何をするの？」

藁とまではいかないが、木片くらいには縋りたい気分だった俺は先を促す。

「楓をお祭りに誘うの。お祭りにいけば楓だってテンション上がっていつもより話してくれるはずっ」

「はい大作戦終了。そんなことで外へ連れ出せるなら、ここまで困ってないよ……」

間を置かずに否定する。また睨まれるかと思っただが、今度はにやりと笑って人差し指を立てた。

「だーいじょうぶ。ちゃんと楓には話をつけていて、誘いに乗るよ
う言っているから」

「へ、へえ〜。どうやってさ？」

これまで俺が何度誘っても首を縦に振らなかった楓さん。その楓さんを柊が説得したという。まるでそれが柊と俺の楓さんまでの距離の違いだと言われた気がして、少し意地になった俺は僅かに語気を荒げた。

「まあまあそういらいらしない。別にこれは私の力じゃなくて、蓮の力を私が借りただけなんだから」

「俺の？」

柊が「うん」と頷く。

「あれでも楓は蓮に感謝してるんだよ？　ただ恥ずかしがって言えないだけなの。だから、『蓮の願いを少しくらい聞いてあげたら？』って昨日の夜に『会話』したときに言ってみたの。そうしたら楓、『一つだけなら』ってオーケーしてくれたの。楓は約束を絶対に守るから間違いないよ」

胸を張って言い切る柊。たしかに楓さんは約束を絶対に守る。この前だって「美味しいお菓子を見つけたから明日持ってくる」と、ただ他愛ない会話の中で明日も来ることを伝えただけなのに、翌日楓さんは酷い頭痛に襲われながらもいつもと変わりなく俺のことを待っていてくれた。ちなみにその日、楓さんは最後まで頭痛のことを隠し通し、俺は後日柊に聞いてそのことを知った。

ちょうど昨日は楓さんに外出を勧めていたのだから、今祭りに誘えば成功する確率は高そうだ。

「だから明日、リハビリの終わった楓をおばさんの代わりに迎えに行つて、その時に誘ってみて。何度か強くお願いすれば、きっと『うん』って言うってくれるから」

「……う、うん。分かった。やってみるよ」

『一つだけ』と楓が言ったことから、こういう機会はこれからもそうそう来ないだろう。俺は戸惑いながらも力強く頷いた。

その後俺はおばさんに、楓を祭りに誘うこと、そのためにおばさんの代わりに病院へ迎えに行く役目を変わってほしいことを伝えた。おばさんは二つ返事でオーケーを出してくれた。本当なら柊から説

明して貰った方が良いのだろうが、おばさんもおじさんも、楓さんの中に柊という人格がいることを知らない。だからこの作戦は俺一人で考え、俺一人で実行することになっていった。

ちなみに作戦と言っているが、決めた事と言えば、おばさんに迎えを代わって貰うことと楓さんを祭りへ誘うこと、たったこれだけ。それ以外のことは全て「蓮に任せよう！」と柊から一任されてしまった。まあ、あの楓さんを本当に祭りに誘うことが出来れば、それだけで充分作戦といえるほどのものだと言えるか……。

タクシー乗り場へと移動した俺は、ベンチに座って楓さんと目の高さを合わせた。そして少し緊張しながらも、ゆっくりと口を開いた。

「ね、ねえ、楓さん」

「なに？」

こちらを見ずに返事する。これもいつも通りのはずなのに、どこか避けられているような気がする。

「き、今日は良い天気だね」

「ほんと、外なんて出たくないほどに良い天気だよね」

タクシー乗り場の屋根下から空を見上げる楓の言葉にとげのような物を感じた。そういえば楓さんの肌は人よりも弱く、あまり日の光に当たってはいけないのだと、おばさんに聞いたことがある。その対策なのだろう、今の楓さんは真夏のこの季節に長袖のワンピースを着ていた。

「楓さん、長袖だけど暑くない？」

「もちろん暑いよ」

少し睨むような視線を向けながら楓さんが答える。だがその顔に汗のようなものは見当たらず、よくよく見て額に一粒だけ浮き出ているのを見つけるのが精一杯だった。一方の俺は外で待っていたせいもあって全身から汗が浮き出している。

「そうなの？ 俺より涼しそうに見えるのに」

「これは体がちゃんと機能していないだけ。これでも立ち上がれば簡単に貧血を起こせるくらいフラフラなんだから。まあ、この足じゃ立てないんだけど」

最後に自嘲の言葉を吐いて、楓さんは目をそらした。

……あ、なんか凄い誘いづらい雰囲気にしてしまった気が。いやよく考えれば祭りは日が傾いた夕方から夜に楽しむもの。むしろ話の流れからして好都合？

そのとき、ふと病院から出てくる浴衣を着た女の人が目に入った。これだ！ これをきっかけに誘うなら今しかない！

「か、楓さん」

意を決して口を開く。

「なに？」

「ほ、ほら、あそこに浴衣を着てる人がいる」

「……ほんとだね」

目だけをその人に向け、興味なさげに相槌を打つ。

「な、なんで浴衣なんて着ているんだろう。あ、あー、そういえば、今日近くの河原で祭りがあるんだった。それにいくのかなー？」

「……？」

楓さんが怪訝な顔をして俺を見る。少しわざとらしかっただろうか。

「そつだ。楓さん。……お、俺達も祭りに行ってみない？」

「……………へ？」

長い沈黙を挟んで、楓さんが目を丸くして驚いた表情を見せた。それは今まで見た中で一番表情豊かなものだった。それを見られただけでも満足してしまいそうになるのを堪えて言葉を続ける。

「か、楓さんの家のすぐ近くなんだ。会場も広くてスロープがあるから車いすでも普通にいけるし、どうかな？」

「え、あの……………」

緊張して声の上擦っているが、楓さんも突然のことに戸惑っているようだった。

雰囲気的にはすぐく断られそつだ。ただ柗の言つとおりであれば……………。

「えつと、その……………」

楓さんは頭を下げようとしたところで動きを止めた。それと同時にハツとした様子で俺を見てから、視線をそらした。

「やっぱり断られるのか？ と思った矢先、

「……………よ」

楓さんは小さな声で何かを呟いた。僅かに聞こえた声に耳を疑いながらも、背けた横顔が朱に染まっていくのを見て、俺は確信した。

「……いいよ」

頬を真っ赤にして、ちらりと俺を見た楓さんは、消え入りそうな声でそう言った。

間話 蓮と楓と柊のとある夏の日 part 3

「想像はしていたけど、やっぱり人が多いなあ」

いつもなら朝と夕方以外ほとんど人通りのない静かな川辺が、今は整然と並ぶ屋台と、土手から河川敷へと続く人の波、そして大勢の人の声と会場に流れる音楽とで、普段とは180度違う姿を見せていた。

「結構大きな祭りだろ？ この町で一番大きな祭りなんだ」

河川敷に広がる祭りの会場を土手の上から見下ろしなから言う。

日は落ち、周りに街灯なんて一つもないのに、露天から漏れる電球の明かりと、対岸からこちらを照らすサーチライトで、ここだけが昼間のような明るさだ。

「うん。そうだね」

昼間とは違うノースリーブのワンピースを着た楓さんが視線を前に固定したまま短く返事する。後ろから見ると汗もかかず涼しげに見えるが、昼間のこともあるので心配して聞いてみる。

「暑くない？」

「ん。平気」

こっそりと顔色を伺う。……嘘は言っていないようだ。

時計を見ると時刻は一九時半を少し回ったところだった。

「九時半から花火があるから、それまでは屋台でも回ろうか」

楓さんが頷くのを確認してゆっくりとスロープを降りる。河川敷は舗装されていないためか少し埃っぽく感じた。

「何か見たいものある？」

「別がないよ」

いつもと同じそっけない言葉。けれど、

「でも、晩ご飯食べてないから、お腹すいたかも」

その表情がいつもより明るく見えるのは気のせいじゃないだろう。俺は自然と笑顔で話しかける。

「じゃあ何か食べようか。何が良い？」

「えっと……」

楓さんがキョロキョロと辺りを見回す。その姿は小柄な容姿と相まって小学生のような無邪気さを感じる。

しばらく待っている、楓さんはふいにその目を留めた。じーっと見つめたままなので、何を見ているんだろうと視線を追ってみる。それは祭りでは定番の屋台だった。

「綿菓子？」

「っ！？」

楓さんが勢いよく振り返り、目を大きく開いた。

「あれが食べたいの？」

その様子に内心驚きつつも平静を装って話を続ける。

「……うん」

間を置いて小さく頷く楓さん。よく見ると露天の明かりに照らされた頬が少し赤く染まって見えた。

「うーん。でもさすがに綿菓子はご飯にはならないんじゃない？」

あれは砂糖を綿状にしただけのものだ。腹の足しになるようなものじゃない。

「わ、分かってるよそんなこと！」

顔を真っ赤にした楓さんが叫んだ。と言ってもその声量は大きいとは言えない物だったが。

「昔食べたことあるから後で食べようかなって思っただけ！ あ、あんな砂糖だけのお菓子をご飯にしようだなんて思わないよ！」
「へ？ あ、ああ、そう……」

いつもの楓さんからは想像つかない、その捲し立てる姿にあっけにとられてしまう。

「……え、これ終じゃないよね？」

そう疑ってしまうくらい、今の楓さんは表情豊かだった。

「ほ、ほんとだからね！？ さすがの僕も砂糖だけじゃお腹いっぱいにならないからね！？ それくらい分かるくらいには成長してるから！」

「い、いや別に疑ってるわけじゃ」

「じ、じゃあ綿菓子なんて子供っぽいとか思ったとか！？ たしかに綿菓子なんて子供っぽいかもしれないけど……うう……た、食べたいって思ったんだから仕方ないじゃないか！」

俺の様子を勘違いして受け取った楓さんが弁明する。かなり必死なようで、少しでも俺に近づこうと、肘掛けに手を置いて立ち上がるようにする。

「わ、分かった。分かったから無理しないで。危ないから」「うー……」

楓さんは無言で俺を睨んだまま、浮かせた腰を下ろした。車椅子に座り直すとプルプルと震えていた腕をそつとマッサージするのが見えた。

「とにかく、綿菓子は食べたいんだよね？」「……うん」

不機嫌そうに楓さんが頷く。

「だったら買おう。晩ご飯とかそんなことは考えずに、ほしいものをとにかく買って、どう食べるかは後で考えれば良いよ」

「わ、分かった」

楓さんが車輪の外側にあるハンドリムと呼ばれる輪を掴む。それを見て楓さんの肩を軽く叩く。

「こんな砂利道のところで回すのは疲れるだろ？ 言ってくれば押すから遠慮しないでよ」

「え？ でも昼間も押して貰ってたし、少しくらいは自分で……」

「今日は俺が祭りに誘ったんだから、楓さんは楽にしていればいいんだよ。ほら、手を離して」

渋々といった様子で手を離す。やけに今日は聞き分けが良いなど感心しながら昨日の柊の話の思い出す。そして、きつとこの祭り中は俺の『お願い』を聞いてくれるのだと納得する。

「……お願いします」

小さな声でそう言った楓さんに「了解」と答え、俺は車いすをそっと押した。

「結局晩ご飯っぽくはならなかったね……」
「うう……」

休憩所に設けられたテーブルに向かい合って座り、テーブルの上にさっき買ってきた品々を並べていく。綿菓子にリンゴ飴、かき氷にベビーカステラ。いずれも二人前ずつだ。

前言通りに楓さんが食べたいものを買っていたら、どれもデザートやお菓子に分類されるようなものばかりになってしまった。

「だって混んでたから……」
「時間が時間だからね……」

ちなみに楓さんは屋台を巡っているときにたこ焼きやイカ焼きにも目を留めていたが、順番を待つ行列を見ると早々に諦めた。

「……いい、一食くらいにういづのがあってもいいと思つ。それに今日はお祭りなんだし……」

楓さんらしからぬ前向きな発言。

「楓さんがそれで良いなら良いけど」

まあどうせこれだけあれば他の物は入らないだろう。むしろ全部食べられるかどうかの方が心配だ。

「う、うん。お祭りだから良い」

『お祭り』をやけに強調する。そんな言い訳がましくなくてもいいのに。

「あ、蓮君はもっと違うもの食べたかったら、今からでも買いに」

「これで良いよ。そんなことより、ほら、かき氷溶けてる」

「へ？ わわっ」

慌てて「いただきます」と手を合わせ、先の開いた長いストローでかき氷を口に運ぶ。

「っ!? ん〜!」

よほど冷たかったようで目をぎゅっと瞑って頭をトントンと叩く。しばらくして開いた目は僅かに潤んでいた。

「大丈夫?」

「……らいひょうぶ」

舌足らずに返事する。二口目からは多少冷たさに慣れたようで、スローペースながらもかき氷の山を崩していく。

「楓さんなら絶対いちご味を選ぶと思ってた」

「ん？」とストローを咥えて視線を合わせる。少し間を置いて気づいた楓さんは視線を落として黄色のシロップがかかったかき氷を見る。

楓さんが注文したのはまったく酸味を感じないレモン味のかき氷だ。

「色が綺麗だったから」

かき氷を突つつきながら答える。味じゃなくて見た目で選んだことになんとなく楓さんらしさを感じつつ、前々から思っていた疑問を口にする。

「へ〜。女の子ってピンクが好きな物だとばかり思ってた」

「どうだろ。柊も椿もピンクが好きって訳じゃなかったし」

「楓さんは？」

そう聞いてから「しまった」と後悔する。

「僕は女の子になってからまだ二年だから……」

そう言っただけで見せてくれたのは初めての笑顔。だがそれは苦笑という決して見たくはないものだった。

「いめん」

「蓮君が気にすることじゃないよ。僕の方こそ、いろいろ気を遣わせちゃってごめん。本当は家に遊びに来てくれているときも、毎回こんな感じに、変に突っかからずに蓮君と話したいんだけどね。毎日ふと気づくと気が滅入っちゃってて。一度そうなるとなかなか戻れないんだ」

そう言っただけでまた苦笑を浮かべる。それから回りを見回してから、俺と視線を合わせる。

「やっぱりお祭りって良いね。昼間あんなに気分が沈んでいたのに、ここにきたら元気になった気がする」

「……それなら良かった」

俺はその言葉だけで今日楓さんを誘って良かったと思えた。

「うん。ありがとう」

それは不意打ちだった。楓さんの言葉に満足して油断していたところをやられた。

『ありがとう』と言った楓さんは優しく微笑んでいた。

やがて花火の時刻が迫ってきたので、俺達は会場から少し離れた橋の上へとやってきた。ここなら少し花火まで距離があることに目を瞑れば、橋の欄干付近に陣取ること目位置が低い車いすでも花火全体を見ることが出来る。

「空いてて良かった。あと五分遅かったら絶対アウトだったよ」

ずらっと並ぶ人を見て、俺は安堵のため息を吐く。車いすを欄干から僅かに離れたところで車輪を固定して楓さんの横に並ぶ。

「どのあたりから上がるの？」

片手でパシパシと水ヨーヨーを弾ませながらも片手でリンゴ飴を舐める楓さん。小食だと聞いていた楓さんが、買ったものを全てを平らげたことに驚いたが、その後でもう一つリンゴ飴を食べたいと言い出したときはさすがに驚きを通り越して心配してしまった。しかし「何故か全然大丈夫」と言ったように、二つ目となるリンゴ飴も、今では口に啜えられるほどに小さくなっていった。

きつとこれはあれだ。お菓子は別腹、というやつなのだろう。

「ちようど真正面だよ」

会場の対岸にある真っ暗な場所を指さす。何も見えないが、毎年そこから花火が打ち上げられるから、今年も同じだろう。

「ちよつとドキドキするね」

「そ、そうだね」

……俺は楓さんにドキドキさせられるんだけど。

柁とはまた違う柔らかな笑みを浮かべる楓さんにさっきから動揺しっぱなしだ。

その楓さんの微笑みは、他人が見ると無表情に近いものかもしれない。しかしこの一年と半年、楓さんの表情を見てきた俺には彼女のその僅かな表情の変化を読み取ることができた。

間違いなく、今楓さんは笑っていた。

「スターマインってずっとパソコンのゲームのことだと思ってた」
膝の上に広げた花火のプログラムを見ながら楓さんが言う。

あれ、スターマインなんてゲームあったっけ？ それってたしか

「マインスイーパーのこと？」

「へ？ ……あっ」

楓さんの顔がみるみる赤くなっていく。

「そ、そうそうそれ！ それが言いたかった！ マ、マイン……ス
ター？ だったね、うん、それだ」

「えっと、マインスイーパーね」

「あう……」

本気で間違えて覚えていたようだ。よほど恥ずかしかったようで、
そのままでも小さいのにさらに小さくなってしまった。

「ま、まあ誰にだってそういう間違いはあるよ」

「伯父さんの書齋に使用ってないパソコンがあったから、眠れないと
きはずっとそれやってたのに……」

眠れないとき……？

「もしかしてたまに目の下に隈があったのってそのせい？」

楓さんが俺の顔を見てハッとす。

「……うん。た、たぶんそう」

俺から視線をそらしてあちらこちらと彷徨わせる。悪いことをしてそれを親に隠しているときの子供のようだ。

「別に悪いとは言わないけど、もう少し自分の体のことを気にした方がよいよ」

「分かってる」

しゅんとなつて頂垂れる。

……さっきまで良い雰囲気だったのに一気に暗くなってしまった。どうしようかと悩んでいたそのとき、心臓にまで響く音と共に真っ暗な夜空に大きな大きな光の花が咲いた。

「わあ……」

隣の楓さんも夜空を見上げ目を輝かせた。打ち上がる度に声を漏らし、小さく拍手するその姿を見て、俺は小さくため息を吐く。

……よかった。機嫌が直って。

「ねねっ。これがスターマインかな？」

くいくいと俺の袖が引つ張られる。

「違うよ。スターマインはこの次。ほら」

さきほどまでの単発ではなく、連続して無数の花火が打ち上げられる。色とりどりの光が咲き、線上に伸びた花びらが大きく広がって頭上に降り注ぐ。

「すごい、流れ星みたい」

「ほんとだ。せっかくだから何か願い事でもしてみたら？」

少し冗談っぽく言うと、楓さんから「うん」と返ってくる。驚く俺の横で両手を合わせて握りしめ、軽く目を閉じた。

花火の光に照らされながら何かを一生懸命お願いするその姿は、少し場違いではあったが、とても神秘的に見えた。

「……きが……でありますように」

願い事を言い終わるとゆっくりと目を開き俺を見た。

「叶うと良いなあ……」

「何をお願いしたの？」

楓さんは視線を上空の花火へと向ける。

「それは秘密」

そう言って笑ってみせた。

こうして楓さんとの初めての外出は終わった。

帰り際に「またどこかに行こう」という俺の言葉に、楓さんはちやんと俺の目を見て「うん」と頷いた。

楓さんの笑顔が見れたことで十二分に成功した今回の外出。楓さんを家まで送り、一人になると『今度はどこへいこう』と、早くも次のことを考えて俺は胸を躍らせた。

間話 蓮と楓と柊のとある夏の日 part3 (後書き)

間話 蓮と楓と柊のとある夏の日 完

登場人物紹介 part 4 柊・結奈 挿絵

○柊 つぐあけ

> i 2 8 4 4 9 — 2 1 9 9 <

年齢：16歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年D組

部活：無所属

特徴：身長：低 肌色：白 髪：黒色のロング

一人称：ボク（私）

楓と体を共有する、楓のもう一つの人格。

体を共有していることから外見上は楓そのもの。

ただし、楓よりも明るく表情豊か。方向音痴でもなく、食べ物の好みも若干違う。

蓮のことを楓が『蓮君』と呼ぶのに対し、柊は『蓮』と呼び捨てにしている。

第5話表紙

○西条 結奈 さいじょう ゆい

> i 2 8 4 4 8 — 2 1 9 9 <

年齢：16歳

性別：女

所属：私立千里学園高等学校 2年B組

部活：新聞部 部長

特徴：身長：中 肌色：黄 髪：茶色のロング（ツインテール）

一人称：うち

香奈とは同じ寮ということもあり仲がいい。

新聞部の部長であり、いろいろなと脚色した記事を書くため、一部の生徒からは目の敵にされている。

第6話 僕が君にできること Part 1 表紙(前書き)

> . i 2 2 8 3 3 8 3 | 2 1 9 9 <

第6話 僕が君にできること part 1 表紙

頭痛と共に目が覚めた。

頭の奥の方でちくちくと痛みが走っていた。顔をしかめながら布団から顔を出すと、まだ周りは真っ暗だった。

頭上に手を伸ばし手探りで目覚まし時計を探す。手に触り慣れた感触を感じ、その頭をポンと叩いた。暗闇の中で浮かび上がった文字は午前3時30分。真夜中だった。

……なんでこんな時間に起きたんだろう。

一度寝ると朝まで起きることがない僕は疑問に思った。けれどすぐにその原因を理解し、勉強机へと目を向けた。

視線の先に光るものを見つけた。暗闇の中、僕は躓かないようにそつとベッドから降り、勉強机に置いてあったそれを手に取った。

それは携帯電話だった。光っていたのはメール着信を知らせるランプ。

メールは柊からだった。

『五日間楽しかった。今週から学園祭の準備で忙しくなると思っけど、頑張ってる』

そういえば来週末には学園祭がある。まだ僕達のクラスは出し物さえ決まっていないし、忙しくなりそうだ。

……倒れたりして、椿や遙を困らせなければ良いけど。

明日からの自分を想像して嘲笑った。

再度短いメール文を読み直した。

『五日間』

それが今回の柊の時間。他にも時間単位、一日単位で交代するこ

とはあつても、柊が表に出ているのは毎月一週間ほど。どう考えても少ない。

『もつと表に出ていると良い。半分ずつでも僕は全然構わない』

以前僕は柊にそう言った。

あの暗い部屋では表の光景はおぼろげにしか見えてこないけど、柊は僕なんかよりも数段充実した毎日を過ごしているようだった。そんな柊をこんな薄暗い部屋に長い間閉じ込めるなんて僕にはできなかった。いつも笑顔の柊には不釣り合いな場所だと思ったから。そんな僕に柊は笑いながら言った。

『時々出るから楽しいの。だからごめんだけど、残りの三、四週間はお願いね』

嘘を言っているのはすぐに分かった。あくまでも自分のわがまのせいにして、僕を気遣わせないようにしようとする柊の気持ちが見えた。だから僕は何も言わず頷いた。

頷いた理由はもう一つある。

それは昔、僕が表に出るのを嫌がっていた頃。僕の代わりに毎日表に出ていた柊は、最初の内は元気だったけど、日に日に疲労が濃くなっていき、最後には病院へ運ばれてしまうほど衰弱していた。

柊は表に出続けることが出来なかった。

それ以降、僕が表に出ることが多くなり、柊も以前のように倒れてしまうようなことはなくなった。

そうしてできたのが今の僕たちの関係。このメールも日記も、あまりにも表に出る時間が少ない柊の隙間を埋めるために僕から提案して始めたものだ。

僕は柊のメールに返信文を打った。

『頑張る。当日は呼ぶから楽しみにしてね』

メールを送信して、受信を確認する。携帯電話を充電器に戻して、僕はベッドへと戻った。

朝。いつもより涼しい時間に目がさめた。目覚ましより早く起きるなんて何ヶ月ぶりだろう。

時間に余裕があったのでシャワーを浴びて頭をすっきりさせた。わずかに残っていた頭痛が引き、柎と変わる前にあった体の怠さも消えていた。久々にすがすがしい気分だ。

髪を乾かして制服に着替えてもまだ時間はあった。僕はリビングの時計を見上げながら思索する。

……そうだ。せっかく早く起きたんだから、椿の朝ご飯を作ろう。名案が浮かび、さっそく作業に取りかかることにした。僕に料理の技術はほとんどと言っていいほどない。そういうわけで必然的に簡単なものを作ることにした。

スクランブルエッグとパンを焼こう。スクランブルエッグなら元からぐちゃぐちゃだし、パンはトースターに入れてダイヤル回せば出来上がりだ。

なんか簡単すぎる気がするけど、素人ならこんなものだろうと自分を納得させて作業に取りかかった。

冷蔵庫にあった野菜ジュースを飲みながら、まずは材料集めから始めた。

「んー……っと。たまごたまご」

ファミリータイプの大きな冷蔵庫を開いて探すと、卵が一番上の段で見つけた。冷凍室とチルド室が下段にあるタイプのせいで卵の位置がやけに高かった。

椿サイズの冷蔵庫だ。これ……。手を伸ばせば届くだろうけど、ここは安全に椅子に乗って取ることにした。

無事卵を手に入れた僕は、次に味付けのための塩こしょうを探し始めた。けれどどこにも見当たらず、代わりに塩、そしてこしょうが別々に入った二つの瓶を見つけた。

……変わらないよね。どれくらいの割合で振ればいいのか微妙だけど。

主な材料はこれで揃った。これ以外に冷蔵庫を漁っているときに見つけたベーコンを加えても、本当にシンプルなものだ。

さっそく調理を開始する。まずは卵をボールに入れて溶くために卵を割る作業から。

僕は卵を右手に持ち、スチール製のボールの縁で卵を軽く叩いた。
コンコン、パキヨ、ベチャ。

……。
無言でもう一つ卵を取った。

コンコ　パキヤ、ベチヨ。
……さっきより酷い。

べったりと汚れてしまった手を見下ろしながら、卵を割るといっ
ー見簡単そうな作業の難解さを身に染みて理解した。

……よ、よし。次こそ。
汚れてしまった手を一度洗い、改めて三つ目の卵を手にとった。

卵をこれ以上無駄にするわけにはいかないのです、今まで以上に慎重に進めることにした。

コンコン、コンコン、コンコン。
割れない。殻が固いのかな？

卵をさっきよりも少し高い位置から振り下ろそうとして踏みとど

まった。

よくよく見ると、卵の殻には小さなヒビが入っていた。危ない。あやうく大惨事になるところだった。あのまま叩きつけていたら、キツチンの掃除以外にぞうきんで床を拭く作業まで追加されるところだった。

胸を撫で下ろし、慎重に卵を何度も叩いてヒビを大きくした。しばらくたたき続けて、やっとの思いで殻を割ることが出来た。

何故か肩で息をする僕は額の汗を拭いながら達成感に包まれていた。

卵をボールに割り入れただけだ……。

次に菜箸で卵をかき混ぜた。ある程度混ぜたのを確認して、先ほど用意した塩とこしょうの瓶を手を取った。

どれくらい振ればいいんだろう。

こうというのは料理本を見ても『適量』としか書いていない。しばらく考えた僕はこんなものだろうというアバウトな感覚で塩とこしょうを振り入れ、それを再び混ぜた。

「くしゅっ」

おー……。

漫画で見たことがあったけど、本当にこしょうでくしゃみが出ることに少し感動した。

たねができれば後は焼くだけ。油をひいたフライパンを熱し先にベーコンを焼く。少し焦げ目が付くまで焼いてお皿に移した。

朝からお肉なんて、ちよつと重いかもしれない。

焼き終えてからそんなことを考えるあたりが素人。

フライパンに残った油を拭いてから味付けした卵を入れ、弱火でかき混ぜた。

これが結構疲れる。

フライパンをただコンロからずれないように軽く持っているだけ

なのに、握りしめた手はプルプルと震え疲労を訴えていた。

椿は毎日こんな大変なことしてるんだよなあ……。

改めて家事の大変さを思い知りながら、最後の仕上げに取りかかった。

「つばきー。朝だよー」

「んん……ん！？ お、お姉ちゃん！？」

椿は一声かけるとすぐに目を覚ました。あまりの早さに起きていたんじゃないのかと思ったけど、その後の慌てようから考えを否定した。

「ど、どうしたの！？」

「今日は早くに目が覚めちゃって」

「そ、それもだけど……どうしてエプロンなんてしてるの？」

良く気付いてくれましたとばかり僕はほくそ笑んだ。

「椿の朝ご飯作ってみました」

「……へ？」

椿の目が点になった。

呆然とした様子で食卓に着く椿。それでもきちんと制服に着替えているところはさすが椿というところだろうか。

「はい」

僕はさっき焼き上がったパンにバターを塗って椿に差し出した。

「あ、ありがとう」

椿はパンを受け取りながら眼前に用意された朝ご飯に目を向けている。

「一応スクランブルエッグなんだけど……良かったら食べてみて」

少し焦げてしまったスクランブルエッグを遠慮気味（『一応』のあたり）に勧めた。

「う、うん」

椿がスプーンを手に取り、スクランブルエッグを口に運んだ。

「……どう？」

「ちよっと塩が多いけど、おいしいよ」

「ほっ、よかった。でも塩多かったかあ……やっぱり素人の分量は当てにならないか」

苦笑しながらそういう僕に、椿は首を横に振った。

「そんなに多いってわけじゃないし、好みの問題かも。お姉ちゃん料理上手だね」

「そ、それはどうだろう……？」

とりあえず、卵がまともに割れないような人は上手とは言えない

と思う。

椿はさっきまでの表情が嘘のように嬉しそうに僕が作った朝食を食べていた。

「これからもたまたまに作るよ」

椿のこの表情が見られるなら、また作ってみようと思った。

「ほんとっ？ あ、でも無理しないでね。特に朝はお姉ちゃん弱いんだから」

「はいはい」

その無理をして毎日ご飯を作ってくれているのが椿なんだなと思
い、これからはもう少し僕が負担しようと思心に決めた。

第6話 僕が君にできること part 2

突然目の前の教卓が揺れた。ジロツと視線を送ると、遙は小さな声で「悪い」と謝った。

「ゴホン。……あー、じゃあお前ら。何やりたいか言ってみろ」

不機嫌さを隠すことなく、遙が教室を見回した。

今にも噛みつきそうな犬に自分から手を差し出す人なんていないように、睨みをきかせる遙に誰も目を合わせようとしない。

「おい、誰かなんか言」

丸めたプリントで遙の頭をはたいた。遙が驚いた表情をしてこちらを見た。

「目が怖い。それじゃ誰も手を上げないよ」

「いや、アタシはただ普通に意見を求めただけで」

「どう見ても普通じゃなかったよ……。僕なら怖くて話しかけられない」

「そうだそうだー。この馬鹿番犬ー。動くもの全部に吠えりゃいいつてもんじゃないのよー!」

綾音さんが嬉しそうに遙を罵った。

「とりあえずお前には吠える前に噛みつくわ……」

遙がにやりと口元を歪ませる。もちろん目つきはさっきのまま。

僕はもう一度遙の頭をはたいた。

「今のは綾音が悪いだろ!？」

「話進みそうにないから代わって。遙は書記お願い」

「え? 書記は楓で進行はアタシがするってさっき決め」

「遙じゃ進まないから僕がする。最初からこうすればよかった」

「はい」とマーカーを渡して背中を押し、教卓の前を譲って貰う。遙は渋々ホワイボードの前に移動した。

「くくつ。遙、楓に怒られて落ち込んでるわ」

「元はと言えばお前のせいだぞ!」

「もう。遙も綾音さんも喧嘩しないで」

注意すると、綾音さんは「はい」と軽く返事し、遙は「悪かった」と肩を落とした。

「……コホン。えっと。じゃ、仕切り直そうか」

そうしてやっとロングホームルームが始まった。

朝のホームルームのあみだくじで学園祭実行委員に選ばれた僕と遙は、この時間を使って学園祭でのクラスの出し物を決めていた。

最初は人前に立つのが苦手な僕が書記、遙が司会進行をやることになったけど、さっきのようにまったく進まなかったのでやむなく交代することになった。

「その、えっと……ク、クラスの出し物を決めたいと思いますが、どなたか案はありますか?」

心臓がドキドキして、自分が緊張していることを感じながらみんなに意見を求めた。

「はい」

控えめな声とともに、すっと手が上がった。

「はい、葵さん」

「この学校の創立から今に至るまでの歴史を、日本や世界の代表的な出来事と共に紹介する歴史館というのは」

「はい却下」

「な、なんで？ どうしてダメなの？」

遙の容赦ない言葉に葵さんは狼狽えながらも反論した。

葵さんもあんな表情をするんだ。それにしても歴史館って……本気、なんだろうなあ。冗談を言っているようではないし。

「葵、いくらなんでもそれはないわ……」

葵さんの隣りの席の彩音さんも呆れていた。

「いかにも高校生らしく、学校側にもプラスになる良い案だと思っただけ……」

根っこが真面目なんだな。葵さんは……。

葵さんが同意を求めるように視線をあちこちへと向ける。けれどももちろん視線を合わせる人なんていなかった。

「か、楓ちゃんはどうかな？」

最後の砦とばかりに話を振ってきた。

「え、あの……うん……」

……。

「……ほ、他にも案はありませんかー？」

「あ、逃げた」

「逃げたわね」

「ありませんかー！」

「か、かえでちゃーん……」

……ごめん。でもさすがに歴史館はないよ。

葵さんはがっくりと肩を落として俯いてしまった。

「ったく。去年といい今年といい、葵はあんなのを本当にやりたいのか？」

振り返ると、遙が腕を組んで首を捻っていた。

ホワイトボードには『歴史館』の文字に大きくバツが付けられていた。

「去年も？」

「去年も葵は似たような案を出してきたんだよ。もちろん即却下してたこやし屋をすることになったんだけどな」

「それで正解だと思う……」

「だろ？」と遙は言って未だ項垂れている葵さんに目を向けた。

葵さんは意外とシヨックを受けているようだ。そっとしておこつ。

「これをやってみたいとか、こんな出し物なら人が来てくれそうっていう案はありませんか？」

『人が来てくれそう』のところで葵さんの肩が震えた。一応自分の案じゃ集客は見込めないことは理解してたんだ。

「質問」

ビシッと綾音さんの手が上がった。

「はい、綾音さん」

「楓は何かないの？」

「僕？ うーん……」

定番で攻めるなら食べ物系の屋台だけど、葵さんの提案を断っておきながら料理部としてその腕前を貸して貰おうというのは虫が良すぎると思う。

だったら喫茶店なんてどうだろう。考えてすぐそれも微妙な気がした。どうせ三年生の中でも喫茶店をやるところは出てくる。そうなるのと下の階の方が昇降口から近く有利だからお客さんを取られそうだ。

「何がいいんだろうね……」

「そういえば桜花では去年なにをやったの？ 参考までにぜひ」

「えっと、たしかダンス教室だったかな」

「ダンス教室？ 生徒がお客さんにダンス教えるの？」

「うん。簡単な社交ダンスだけだね」

綾音さんは驚いているようだけど、桜花では毎年どこかのクラスがやるほどの定番の出し物だ。

桜花では幼等部から授業の一環としてダンスを覚えさせられる。だから僕みたいな中途入学組以外の子なら誰でも踊ることが出来る。

「楓が教えてたの？」

「ううん。僕は上手じゃなかったから、受講者が少ないときに一緒に参加したり、呼び込みをしてたよ」

「それは下手だからじゃなくて、そっちに回した方が客が入るからだ……」

ぼそつと背後から声が聞こえた。

「遙、何か言った？」

「べつに〜」

何故かふてくされてどこからか持ってきた椅子に座ってあさつての方向を向く遙。

とにかく、桜花の文化祭は参考にならないだろう。あつちとこつちではいろいろと違いすぎる。

「いいの思いつかないね……」

「もうお好み焼きとか、焼き鳥とかでいいんじゃないか？ 旨そうだし」

それは遙が食べたいだけじゃないか。

それからぽつぽつと手が上がり、いくつかの案が提示された。綿菓子、型抜き、射的などなど。やはり学園祭「お祭りと言うことで、夏祭りの屋台でよく見るものが多かった。

ホワイトボードが賑やかになり、時間も差し迫ってきた。

「結構出たね。あとはこの中から多数決で決めようか」

ホワイトボードに並ぶ候補一覧を見ながら遙に言った。

「そうだな。それでい」

「ん？ どうしたの？」

「……葵が手を上げてる」

遙が指差した方に振り返ると、たしかに葵さんが手を上げていた。まさか『歴史館』も多数決に混ぜてほしい、なんて言うのだろうか。

未だにホワイトボードにバツを付けられて放置されている葵さんの案。でもたしかに、いくら最初否定された案だとしても、これも候補の一つとして並べるべきだ。

「はい、葵さん」

「プラネタリウム、なんてどうかな？」

「……プラネタリウム？」

葵さんから出た言葉は予想に反して新たな案だった。そのことに少しばかり驚いている僕の後ろで、遙が「プラネタリウムね」と呟きながらホワイトボードに書き加えた。

「いいんじゃないのこれ。他のクラスでもやらなそうだし。なにやり目立つ」

腕を組み、ウンウンと頷く遙。

「投影機は自作することもできるみたいだけど、市販されているものをレンタルしてもいいと思う。あとは教室の中を暗くしてドームを作れば、ちゃんとした施設のプラネタリウムまでとはいかなくても、お客さんに夜の星空を見てもらって楽しんでもらえらと思うの」「この街にプラネタリウムなんてないからいいかもな」

ふいに葵さんから出た案は意外にも遙に好感触のようだった。

「楓はどうだ？」

「うん。良いと思う。問題はその投影機を借りるとした場合、近くのリントルシヨップにそれがあるかどうか、かな」

「ああ、それなら大丈夫。たしかうちに転がってたから」

「転がってた!？」

普通そういう物が家に転がっているなんてことはないと思うけど。

「昔親父に見せてもらったことがあってな。その時使ってた機械が今もどこかの部屋にあるはずだ。なくても親父に聞いてどこかで借りるわ」

遙がこう言うんだから、きっと本当に遙の家のどこかにあるのだろう。そして例えそれが見つからなかったとしても、どこから借りてくるに違いない。

「まあ、まだこれに決まったわけじゃないから、もし決まった場合はそうしようか、ってことで」

「うん。そうだね」

僕は向き直って教卓に手をついた。

「それでは以上の中から今年の二年D組の出し物を多数決で決めたいと思います。どれか一つに手を上げてもらい、最も多かったものを今年の出し物に決定したいと思います」

ちらりと一度振り返り、一つ目を読み上げる。

「お好み焼きがいいと思う人は手を上げて下さい」

反応なし。しばらく待っても手は上がらなかった。

それどころか提案した人でさえ手を上げようとはしなかった。

僕はそれに首を傾げながら次を読み上げることにする。後ろでは遥がお好み焼きの横に0を書き足した。

「では次、射的が良いと思う人は手を上げて下さい」

「葵が提案して、遥と楓がそれに頷いてるんじゃない、もう決まったよ
うなものじゃない……」

ぼそつと綾音さんが何かを呟いていた。

第6話 僕が君にできること part 3

「そのガムテープ取って！」

「ちよつと待って！ ああこれもう切れてるわ。誰か新しいの持ってない？」

「それで最後だよ。売店で買ってくるから金貸して」

「あー、後で払うから立て替えといて」

学園祭でのクラスの出し物をプラネタリウムに決めた翌日。昨日までとは打って変わって放課後の校内が騒がしくなった。

行き交う人を眺めながら、まだほとんどの生徒が夏服を着ていることに気付いた。夏服や冬服の着用期間が定められていないこの学校では、この時期になると夏服と冬服がごつちやになるらしい。ただ最近は夜なら兎も角昼間はまだまだ涼しいとは言えない気候。そのせいで冬服を着ている人はたまにしか見かけない。

ちなみに僕もまだ夏服だけど、数日前から下校時に少し肌寒く感じていたので、帰りにだけカーディガンを着るようにしていた。

「出遅れたと思ったけど、そうでもないんだね」

両手で分厚い本を三冊重ねて運びながら周りの様子を見て言った。どこのクラスも今日から作業を始めたようで、教室を覗いても何の出し物なのかまださっぱり分からなかった。昨日出し物を決めたばかりの僕たちD組だけど、進捗状況に差はないようだ。

「そういえば去年も似たような感じだったな。学級委員長が『余裕を持って始めよう』なんて言って仕切ってたのに、結局出し物が決まったのは二週間前でドタバタしたよ。みんな期限が差し迫って焦りを感じてからでないか始めないんだろっな」

「テスト前の遙みたいだね」

見上げる僕に遙はふんと鼻を鳴らしてそっぽを向いた。声に出さず笑っていると、視界の隅に床に積み上げられた角材を見つけた。

「よっ。……わわっ」

「お、おい」

本を抱え直してから少し勢いをつけて小さな山を飛び越えた。バランスを崩しながらもなんとか着地して振り返ると、遙がため息をついていた。

「それくらい回り込めよ。危なっかしい……」

「や、なんとなく飛び越えてみたくなつて。あはは」

少し子供ばかったかと照れ笑いをする僕に、遙は真剣な表情で近寄り、周りに聞こえないよう耳元で囁いた。

「……見えたぞ」

「へ？ ……ええ！？」

見えたってことはつまり……！

一瞬遅れてその意味を理解した僕は、顔が熱くなるのを感じながら遙に詰め寄る。

「み、みみ見えた！？ 見えたというか、遙見た！？」

顔と顔を近づけて小声ながらも力を込めて遙を問い詰める。

「え、あ、まあ、アタシは見たけど、たぶん他には誰も見てなかつ

たぞ?」

「そ、そう。で、でもたぶんってことはもしかしたら」

「じゃあアタシ以外誰も見てなかった」

「じゃあってなに、じゃあって!」

不満をぶつけるも、遥は涼しい顔をしていた。

「まあまあそう怒るなって」

「だ、だって見られたかもしれないんだよ!？ それなのに遥は適当なこと言っし!」

遥は落ち着けと言うように肩をぼんぼんと叩いてから僕を押し返した。それからしばらく考えるそぶりを見せて、うんうんと頷いた。

「アタシの見た限りでは、あのととき周りには誰もいなかった。運が良かったな」

「うう……」

嘘かもしれない。そう思った。けれどそれが嘘だろうと本当だろうと今更どうにかなるわけでもない。それだったら遥の言うことを信じた方が心は落ち着いてくれるはず。

……。ああ。あんなことするんじゃないかった。

「……ほ、ほんとに?」

弱々しく尋ねると、遥は「ああ」と強く頷いた。

「ほんとにほんと?」

「本当だって。そんなに心配なら聞いてみれば良いじゃないか」
「き、聞くって……。そんなことできないの分かってるくせに」

意地悪な遙に抗議の視線を送る。けれど遙は笑っただけだった。

「はは。ま、見えちゃったものは仕方ない。次からは気をつけるようにして忘れることだな」

「……」

無言の僕の頭に遙の手が伸びた。両手が塞がっていた僕は避けることもできず、されるがままに頭を撫でられた。

僕達二年D組も他のクラス同様に慌ただしく作業が進められていた。とは言っても、まだいくつかのグループに分かれて話し合いが行われているだけのようだけど。

「はあ、重かった……」

図書館から借りてきた分厚い本を教卓に置いて一息つく。こんなに重い物を持ったのは引越しの時以来だ。明日は筋肉痛かもしれない。

ふるふると震える手と腕を見てそう思った。

「よく頑張ったな。図書館からここまで結構距離があったのに」

遙が劣いの言葉をかけながらペットボトルを差し出した。受け取ったそれはひんやりと冷たかった。

いつの間にも買ったんだろ……。遙も本を運んでいたのに。

解決しそうにない疑問を頭の中でぐるぐる回しながらお茶で喉を潤していると葵さんが傍に寄ってきた。

「お疲れ様。どうだった？」

僕は教卓に置かれた本の山をぽんと叩いた。

「結構あったよ。プラネタリウムの作り方に、星座の成り立ち、あと星座にまつわる神話とか」

どういう出し物にするのか具体的な案を練ってもらっている間に、僕と遙は図書館に行ってプラネタリウムに関する本を借りてきた。市の図書館まで借りに行く気持ちで学校の図書館を覗いたところ、意外にもプラネタリウムや星座に関する本が一通り揃っていた。市の図書館まで行く必要がなくなった僕達は予定よりかなり早い時間に教室へと戻ってくる事ができた。

「これだけあれば演目には困らなそう」

積み上げられた本から一冊手に取り、ぱらぱらと捲る葵さん。

「演目？ ただ星を見せるだけじゃないのか？」

葵さんは捲っていた手を止め、とあるページを開いて遙に見せる。

「それだけだとつまらないでしょ？ 実際のプラネタリウムでも星空を見せながら星座の由来やそれになぞらえた神話を紹介して飽きさせないよう工夫がされているの」

開かれたページにはオリオン座の由来について書かれていた。それを見ながら遙が「なるほど」と呟いた。

「それをアタシらでもやろうってことか」

「うん。そっちの方が良いと思って。それじゃ、本借りていくね」

遙から本を返して貰い、積まれた中からも二冊手に取ると、葵さんは席へと戻っていった。

「なんか結局葵さん頼みになったね」

「予想通りってことで」

席に戻った葵さんは本を開きながら周りに集まったクラスメイトと話を始めた。

その中に綾音さんがいなかったの教室を見回していると、葵さんは別の場所でクラスメイトと話していた綾音さんと目が合った。

「あんだ達もう戻ってきてたのね」

「戻っちゃ悪いのか？」

「なんで喧嘩腰なのよ……」

傍に寄ってきた綾音さんに冷たく当たる遙。でも沙枝と同じ扱いをしていると考えればこれが普通なのかもしれない。

「そんなことより、投影機はどうなったのよ？」

「それならさつき使うことを親に伝えたら、ちゃんと動くかどうか分からないんで一度修理に出すっさ。来週には戻ってくるって」

昨日クラスの出し物をプラネタリウムに決めたあと、とりあえず投影機をどうするかについて話し合いが行われた。

あーでもないこーでもないと話し合った結果、せっかく遙が持っているのだからその投影機を使おうということになった。けれど遙によると、

『その投影機を實際使っていたのはもう何年も前であり、しかもメンテナンスもしていないだろうから壊れているかもしれない。まずは家に帰り使用可能か確認する必要がある』

とのこと。結局その日は遙の家の投影機の如何によつて投影機を自作するか、レンタルするか決めることとし解散となった。翌日になり遙は投影機が本当に家にあつたこと、使おうと思えば使えることを僕達に伝えた。一応朝のホームルームを使って話し合いを行い、すぐにその投影機を使うことが決まつた。

そんなわけで、遙は図書館へ本を借りに行くついでに、投影機を学園祭で使うことを電話で親に伝えた。その答えがさきほどのセリフというわけだ。

「そう。でも悪いわね。あんたの両親にそんなことさせて」

「いいって。もう廃棄するかどうしようか考えてたものをまた使う機会ができたつて喜んでたからな」

「それならいいけど……あ、でも修理代いくらなのかしら。生徒会からもらった学園祭の資金は三万円。ドームその他の費用はみんなのカンパでなんとかかするとして、三万円で足りるのかしら？」

実物を見てないからなんとも言えないけど、そういう特殊な機械つて専門のところを持って行って直して貰わないといけないから、結構高くつくような気がする。

「それも別にいいって」

「いいわけないでしょ。あんただけ負担が大きいじゃない」

「どうせアタシはドームの組み立てぐらいにしか役に立たないんだからさ。その分とアタシはカンパはしないってことでチャラで。ちようど今月ピンチでさあ」

たははと笑う遙につられるように、綾音さんが小さくため息をついて笑顔を見せた。

「ま、あたし達はそれで得するんだから何も言えないわ。とりあえず、あなたの両親にみんなが感謝していたと伝えておいて」

「おーけい」

綾音さんは遙の反応に満足した様子で教卓から一冊の本を手に取り元の集団の中へ戻っていった。

綾音さんをなんとなく目で追い、ふと気がついた。

よく見ると教室は大きく分けて二つのグループに分かれていた。

ぱっと見た様子では、葵さんのグループではプラネタリウムの運用方法や講演内容について、綾音さんのグループではドームや機材等の設備について話し合いが行われているようだった。

幼馴染みでも決してべたべたと引っ付くことはなく、自分のいるべき場所をちゃんと理解してそれぞれ行動する。

僕には今の二人がそんなふうに見えた。

遙を見上げると、ちょうど遙もこちらを見ていた。

「そんじゃ、アタシ達も始めるか」

僕の返事を待たずに綾音さんの方へ向かう遙。

僕は迷った末に葵さんの方に加わることにした。

第6話 僕が君にできること part 4

シャープペンを置いて顔を上げると、さっきまで青かった空が茜色に染まっていた。窓から差し込むオレンジ色の光に目を細めながら、いつの間になんか時間が経過したのだろうと驚く。

視線を下ろして机いっぱいに広げたコピー用紙を眺める。今僕が作っているのは学園祭の時に教室の外の壁に貼る予定のポスターだ。星空をバツクにいくつか代表的な星座を描き、その横に解説を加えたシンプルなもので、少しでもプラネタリウムに興味を持って貰えればと思って作成した。パソコンならもっと凄いものが作れるのかもしれないけど、この時期パソコンはどこも埋まっているし、何より僕がパソコンをうまく使えない。仕方なくこのデジタルなご時世に手書きというアナログちつくなポスターになったけど……まあこれはこれで手作り感があった方がいいのかもしれないと思うことにした。

「楓ちゃん、できた？」

顔を上げると葵さんと目が合った。

様子を伺いに来たらしい葵さんに今できたばかりのポスターを見せる。

「これでどうかな？」

葵さんはしばらく考える素振りを見せてから微笑む。

「うん。文字は大きくて分かりやすいし、星座の絵が目を引いて良いと思う。さすが楓ちゃん、上手」

「そ、それなら良かった」

葵さんに褒められたことは素直に嬉しかった。けれど少なからず憧れている人からの賞賛の声に僕は照れてしまい、思いとは裏腹に不機嫌そうに返してしまう。

「あれ、楓ちゃんどこか調子悪いの？」

そんな僕を体調が優れないと勘違いした葵さんが心配そうに見つめてくる。

「だ、大丈夫。どこもおかしくないから」

「それなら良いけど……無理はしないでね？」

「うん。分かってる」

頷く僕に葵さんは優しく微笑んだ。

「じゃ、このポスター持って行くね。今日はもう終わりするから楓ちゃんは帰る準備してて」

僕からポスターを受け取って教壇へと向かう葵さん。しばらくしてパンパンと二回手を打ち鳴らし、今日の作業の終了を宣言した。

こうして今日も無事作業を終えた。

出し物をプラネタリウムと決めてから分かったことだけど、この学校には天文部がなかった。さらにクラスの知人や先生の中にもプラネタリウムについて詳しく知る人は見つからず、結果素人同然である僕達だけでプラネタリウム施設の作成と設営、そして演目の内容を決めなければならなかった。

最初は四苦八苦した僕達だけど、葵さんを中心に毎日昼休みと放課後を使い、図書館やインターネットから情報を得ながら少しずつ作業を進めた。おかげで一週間が終わる頃にはなんとか学園祭までには形になりそうだというところまでこぎ着けることができた。

と言つてもドームは授業が休みになる学園祭準備期間に入つてから作らないと大きすぎて保管する場所がない。そのため今のところは材料だけ集めて組み立てはまだしてない。また、プラネタリウム上映中に行う演目の練習も投影機が修理から戻ってきていないのでやれずじまいだ。

このように不安要素はたくさんあるのに、みんなはあまり気にしていない様子だった。

「どうした楓？」

鞆を持った遙が不思議そうに僕を見下ろしていた。

「あと一週間なのに、みんな思ったより慌ててないなあ、って」

「まあ、仕切っている葵がまったく焦ってないからな。ほとんどのやつが去年葵と同じクラスだったから、計画通りに進んでいれば何も問題ないことを知ってるんだよ」

裏を返せば、それだけ葵さんがみんなから信頼されているということ。今も葵さんはみんなに指示を出しているけど、誰も不満を言う人はいない。それが何よりもの証拠だ。

「さて、帰ろうか」

そう言つて歩き出す遙。僕は周囲を見回して、綾音さんがいないことに気づく。

「綾音さんは？ それに葵さんもまだ」

「綾音ならだいたいぶ前に部活に行ったぞ。葵も後で少しだけ部活に顔を出すんだってさ」

「あ……。そっか。二人とも部活でも何かやるんだよね」

部活に入っている人はそちらを優先することになっている。けど葵さんも綾音さんも初日から毎日クラスの準備に参加してくれていたのですっかり忘れていた。

「部活の方は大丈夫かな？」

「葵の料理部はほとんど会長がやってくれて忙しいのは前日だけだつて言つてたから心配することないだろ。さすがに綾音は部長だから顔を出すだけじゃだめだとか言つて走つていったけどな。くくっ」

そのときのことを思い出してなのか、遙が声を押し殺して笑う。

「忙しそうだね。こっちの分を誰かが代わりにしてくれればいいんだけど」

僕が代われるなら代わりたいたいところだけど、綾音さんが仕切るグループは設営班。非力な僕じゃ綾音さんのように作業に参加しながらみんなをまとめることなんてできない。ただ偉そうに指示を出すだけだ。

「いや、それは自分がしたくてやってることだからいいんじゃないか？ それにバレエ部は毎年新入部員が綿菓子作るのが恒例らしいから、特に綾音がすることもないって」

「……いいのかな？」

「ああ。今日だって予定の作業を終わらせてから部活に行ったんだ。むしろ練習が休みな分普段より楽だと思う」

練習とこれとはまた違うような……。でも、体を使うということではたしかに楽なのかもしれない。

「まあ、綾音が忙しそうだったらアタシが代わりにやってやるよ。あれ読むだけじゃしんどいしさ」

そう言っつて自分のロッカーに視線を送る。その中に入っているのは分厚い投影機の取扱説明書。遙は毎日その本と睨めっこしながら、時々休憩がてら綾音さんの班を手伝っていた。「家のものなんだからアタシが操作する」と言い出して葵さんも遙に任せただけ、さすがに普段教科書も読まない遙が何百ページとある本を読むのは堪えているようで、今もしきりに瞬きしている。

「ふあ……。自分から言い出したこととは言え、アタシが本を読むなんてありえないよな。眠くなるし」

「良い本読みの練習になって良いんじゃない？」

「高校生にもなつて今更遅いつての」

あくびをかみ殺しながら、遙は苦笑する。

葵さんに先に帰ることを伝えて教室を出た途端、鞆から微かに振動が伝わってきた。近くの階段の踊り場に移動して携帯電話を開くと、相手は椿だった。

『もしもし』

携帯からは椿の声と、それを聞き取りにくくするざわめきが聞こえた。

『お姉ちゃんごめん！ 今日遅くなりそう。ご飯遅くなっちゃうけど良い？』

何の用事かと思えば、ここ一週間毎日聞く言葉だった。

「僕のことは気にしないで。それよりも、あまり遅くならないようにね。おばけ屋敷大変だろうけど、頑張って」

姉らしく妹を気遣った言葉をかけると、電話の向こうから歓声のような、叫び声のような変な音が聞こえた。

椿のいる二年B組の出し物はおばけ屋敷。小道具やら飾り付けやらほとんどを自作するために準備が大変らしく、小道具係の椿は家に帰っても部屋に籠もって作業の続きをしている。

『みんなうるさい。お姉ちゃんの声聞こえない!』

遠い声で椿が誰かを叱っている。不思議に思いながら待っていると、椿は少し息を切らせて戻ってくる。

『はあ……。ありがとうお姉ちゃん。それじゃ』

電話を切ろうとする椿を呼び止める。

「まって椿。今日もスーパー寄って帰るけど、何かほしいものある?」

『良いつて。わたしが買って帰るから』

毎度毎度どうしてそんなことを言うんだろ。僕が行くって言うんだから素直に任せればいいのに。

少しだけいらっとした僕は語気を強める。

「な、に、が、ほしいの?」

『え、えっと……。それじゃあ、牛乳と卵と……』

遙にジェスチャーで書く物がほしいことを伝え、受け取ったメモ

帳に書き留めていく。

『……それとレタス。あとお姉ちゃんの野菜ジュースも切らしてるからそれも。好きな物買ってね』

「了解。ちゃんと『僕が』買って帰るから、椿はまっすぐ帰ってくるように」

『もう、分かってるよ』

あははと椿の笑う声が聞こえる。「それじゃ」と電話を切って振り返った。

「終わったか？」

「うん。ありがと」

話している間、先生が来ないか見張ってくれていた遙に礼を言う。

「さすがにこの時期は携帯没収なんてしないと思うが、念には念を、な」

「見つかったら素直に渡すよ。悪いことしてるのはこっちなんだし」

階段を下りて昇降口へ。最上段の下駄箱から靴を取り出して履き替える。

「大事な用なんだからそれくらい大目に見ろっての」

「ルールはルール。それに学校を出てから電話をかけ直せばよかったと言われればそれまででしょ？」

「それはたしかに……でも『その電話に出られていれば最期の言葉が聞けたのに……』ということも」

「ドラマの見過ぎ」

校門を出て桜並木を通る。途切れたところで僕は立ち止まった。

「あ、僕」

「スーパー寄ってくんたる。付き合っよ」

僕の声を遮った遙はスーパーのある方角へと足を向けた。

「え、ちょ、別に遙は来なくても」

「アタシが行きたいんだから良いんだよ。そうだ、そういえば家のポテチが切れてたな。買いだめしよう」

「むう……」

用事があるのなら断るわけにはいかない。仕方なく遙の隣りに並ぶ。

「寄り道して帰り遅くなって、おじさんに怒られても知らないよ？」

遙の両親は娘を溺愛している。そんな両親を心配させまいと、僕達には悟られないよう毎日こつこつ授業中にメールを送っていることを僕は知っている。

「ああ、それなら楓が電話している間にメールうつといた」

「は、早いね……」

見た目に寄らず機械に強い遙。だから投影機の操作も遙に任せただけ。

「『ぜひ家までちゃんと送ってあげなさい』だってさ」
「……」

溺愛している娘の帰りが遅くなっても良いのかな……。
おじさんの考えはよく分からない。

「そういえば今日は卵がお買い得だから急がないと売れ切れているかもな」

「なんでそんなことまで知ってるの……」

訝しげに見上げる僕に、遙はニシシと笑って走り出した。

「ま、待つてよ！」

「最近運動してないだろ？ ほら、スーパーまで競争だ！」

「遙に勝てるわけないじゃないか！」

スーパーで買い物をして、マンション前まで送ってくれた遙と別れ家へと戻ってきた。真っ暗なりビングのライトを付けて、冷蔵庫に買ってきた物を収めていく。

「買い過ぎちゃったけど、大丈夫だよね……？」

遙の言うとおりタイムセールで安かった卵をその場の勢いで三パックも買ってしまった。

それとなく卵料理を催促して消費して貰うようにしよう。

空になったレジ袋を畳んでテーブルに置き、テレビのリモコンを操作しながらソファに寝転がった。

テレビはどこも夕方のニュースだった。

「はあ……」

ため息を吐いて目を閉じる。テレビがやけに五月蠅くて音を消す。シーンと静かになるリビング。ゆっくりと目を閉じると、次第に意

識が薄らぐのを感じた。

第6話 僕が君にできること part 5

「おにーちゃん。おねーちゃん。おかえりなさい」

両手をいっぱい広げてトタトタと走ってくる椿。そのまま玄関にいる僕と柊に飛びつくようにして抱きしめ、笑顔を見せる。

「ただいまー。今日は学校早く終わったの？」

「うんっ」

柊が出迎えてくれた椿の頭を撫でる。椿は気持ちよさそうに目を細め、その手が離れると僕を見た。

「ほら、かえでも」

「分かってるって」

柊に促されて椿の頭に手をやる。

「ただいま、つばき」

「えへへ」

やっぱり気持ちよさそうに目を細める。しばらくして手を離すと、椿は口を尖らせた。

「えー、もつとー」

「ホントにつばきはかえでがお気に入りなんだね」

「うんっ。おにーちゃんすきっ」

ぎゅっと僕を抱きしめてくる椿。少し照れながらも、慕ってくれ

ることに嬉しさを感じて、望む通りもう一度頭を撫でた。

それは遠い遠い昔の記憶。

僕も椿もまだ『依岡』の姓で、父さんも母さんも、そして柊もいた小学生の頃の記憶。

ランドセルを自分の部屋に置いてリビングに向かうと、先にいた椿がダイニングテーブルに座って待っていた。床に届かない足をぶらぶらとさせながら、キッチンに立つ母さんの後ろ姿を眺めている。

「母さんただいま」

「おかえりなさい。今おやつ用意するから手を洗って待っててね」
「今日のおやつ何か？」

母さんの横に並び、目を輝かせる柊。

「この前柊が美味しいって言ってたケーキ屋さんのシュークリーム

「よ

「やった！」

バンザイをして喜びを体全体で表現する。僕も椿も甘いものは好きだけど、柊は別格だ。甘いものに目がなくて、ご飯を食べてお腹いっぱいでも、デザートを出されれば躊躇せず食べてしまう。

「ひいらぎ。手、洗いに行くよ」

「はい」

「シュークリーム、シュークリーム」と何かのメロディに乗せて口ずさむ柊を連れて手を洗いリビングに戻ると、テーブルにはシュークリームが二つずつのせられた白いお皿が三つ並んでいた。

「私これっ!」

柊が真っ先にテーブルにつく。座ったのは三つ並んだ真ん中の椅子。

「おねーちゃんはこっち」

何故かテーブルから離れて待っていた椿が、シュークリームに手を伸ばそうとしていた柊の裾を引っ張りながら左隣の椅子を指さした。

「ん？ あ、はいはい」

柊は左にあったシュークリームと目の前のシュークリームを交換して、それから自分も左の椅子に移動する。それに満足した様子で椿は右の椅子に座った。

「おにーちゃんはここ」

ぼんぼんと真ん中の椅子を叩く。

少し疑問に思いつつも言われたとおりに真ん中の椅子に座る。隣に視線を向けると椿が嬉しそうに僕を見ていた。

「はい、おにーちゃん一個あげる」

「いいの、つばきは一個だけで？」

「うん。さっき二つ食べた」
「ふえ？」

シュークリームを頬張っていた柊の動きが止まった。もぐもぐと口を動かして、ごくんと飲み込んでから椅子の上に立ち上がり声を上げる。

「お母さんずるい！ つばきだけ甘やかして！」

キッチンで洗い物をしていた母さんが振り返り苦笑する。

「だってそうでもしないと椿が寄ってきてくれないんだもの。『お姉ちゃんまだ？ お兄ちゃんまだ？』そればかり聞いてさっさと玄関行っちゃうから」

「あーそれ知ってる。ばいしゅうって言うんだ。お母さん、つばきをばいしゅうしたー！」

そんな二人を横目に僕はシュークリームを受け取る。「ありがとう」と椿の頭を撫でてやると、嬉しそうに微笑んだ。

「ば、買収って……だってあなたたちが仲良すぎるのがいけないのよ？ 普通あなたたち子供は親に『今日は学校でこんなことがあったよ』とか、『クラスの誰々と遊んだよ』とか話すものでしょ？ それなのにあなたたちときたら、お母さんよりもまずは楓、まずは柊、まずは椿ってお母さんの事なんて後回しでしょ？ しかもそれで満足しちゃって、お母さんが聞かないと何も話してくれない。もうお母さんそれが寂しくて寂しくて……」

母さんがわざとらしくタオルを目尻に当てる。子供相手になにを演技しているんだろう。って、それ以前に子供の僕達にそんな文句

を言われても。

「そんなことどーでもいいから、私にもシュークリームちょうだい！ 私もばいしゅうされたい！」

「ど、どうでもいい……。楓え、柊がお母さんに冷たいわ」

ヨヨヨと泣き崩れるふりをして、母さんは僕を巻き込む。それでもちゃんと柊に追加のシュークリームを渡していたのには感心した。柊は「ばいしゅうされた」と喜んでいる。

「母さん……」

「楓……」

見つめ合う親子。でも目が潤んでいるのは母さんだけ。

「あなただけは私のこと」

「嘘泣きはだめだよ」

「楓もお母さんに冷たいのねっ！」

大げさに顔を覆ってイヤイヤと顔を振る。どうしよう、僕の母さんだけに少しめんどうかい。

「おにーちゃんは冷たくない！ あったかいもん！」

僕が困っていると思った椿が少し的外れなフォローを入れてくる。

「つばきは寒いとき、かえでをゆたんぽにしているもんねー」

「暑いときはおねーちゃんにくつつくと冷たくて気持ちいいよ？」

「つばきは毎日かいてきだね」

「うっ」

柊がよしよとつばきの頭を撫でる。

「ほらっ、またあなたたちだけで話が終わってるじゃない！ 私も混ざりたかったのに！」

「母さん駄々こねすぎ」

『ただいま』

母さんの相手をしていると、玄関が開く音の後に父さんの声が聞こえてきた。

「お父さんリストラ！？ リストラされたの！？」

「おねーちゃんりすとらってなに？」

リビングに入るやいなや、柊が真剣な表情で父さんを問い詰めた。その横では『リストラ』の意味を知らない椿が首を傾げている。

「ど、どこでそんな言葉を覚えたんだい？ 今日は早く仕事が終わっただけだよ」

靴と上着を椅子に置いて、父さんが僕の前に座る。さっそく母さんが父さんに泣きつく。

「お父さんからも言って！ もっと親をかまいな もと、親と もっと会話をしなさいって」

「今でも十分話しているじゃないか。同僚なんて娘から顔も見たくないなんて言われて無視されるらしいぞ？」

「そ、そんなことされたらお母さん家出しますからねっ！」

キツと僕達を睨む。けど涙目だからまったく怖くない。

「あ、そうだ。今日ね、図書室で新しい絵本借りてきたから読んで
っ」

「夜寝るときにね」

椿が元気よく「うんっ」と頷く。

「それもお母さんの役目でしょ……？」

母さんがまた僕と椿の話に割って入ってくる。「なにが？」とぽかんとした様子で母さんを見つめる椿。柊がそれを見てため息をつく。

「もー。お母さんが言ったんでしょ？ 絵本は仲良く三人で読みなさいって」

「それは喧嘩しないようにって意味で、まさか自分達だけで本を読むようになるなんて思わなかったのよ」

「手間かからないから良いでしょ？ だからお母さんも私達に構わずに、もっと好きなことしたらいいと思うよ？」

「ひ、柊……」

母さんのためを思って言った柊の言葉だけど、母さんはショックを受けているようだった。

「お父さん……子供達が私の約束を守って立派に育ちすぎて寂しいわ……」

「お前はもう少し子供から離れられるよう成長しような……」

まじめな父さん。子供っぱい母さん。甘えん坊の椿。そして、し
っかり者の柊。

いつもみんな一緒に、いつも笑っていた僕達。

それは忘れたくても忘れられない子供の頃の記憶。

場面は変わり、その日の深夜。

「ぐすつ……おにーちゃん……おねーちゃん……」

呼ぶ声がして目が覚めた。豆電球だけがついて僅かに明るい部屋。
目が暗さになれてくる頃、隣で寝ていたはずの椿が体を起こしてい
るのに気がついた。

「つばきどうしたの？」

「おにーちゃん……」

椿は泣いていた。目には涙を一杯に浮かべて、溢れた涙が頬を伝
っている。

「怖い夢でも見た？」

「うん……」

涙を手の甲で拭う椿の背中をさすってやる。最初はひつくひつく
と泣いていた椿も次第に大人しくなっていた。

ちらりと椿の隣りに目をやると、柊が静かに寝息を立てていた。

柊は一度寝るとなかなか起きない。朝だって何回も起こさないと起
きないくらいだから、きつと今も起きることはないだろう。

「どんな夢だった？」

椿が泣き止むのを待って話を切り出した。優しく問うと、椿はゆつくりと話し始めた。

「……みんながつばきをおいてどっかいったの。お母さんとお父さんは知らないところに行って、おにーちゃんとおねーちゃんはお友達のおうちに遊びに行って、帰ってこなくなるの。つばき一人だけおうちにいるの……」

夢の内容を思い出して、またその目に涙が溢れてくる椿。

寝る前に読んだ絵本のせいかもしれない。絵本では主人公が友達や両親と離ればなれになるシーンがあった。それを読んでいるとき、椿が少し悲しそうな目をしていたのを覚えている。

僕は背中をぽんぽんと叩きながら、

「大丈夫。つばきをおいてどこかに行ったりしないよ」
「ほんと？」

胸の中の椿が僕を見上げる。縋るようなその目に、僕は精一杯微笑みかける。

「うん。本当に」

「ずっと？」

「うん。ずっと」

「ぜったい？」

「うん。絶対に」

「約束してもいい？」

「うん。いいよ」

僕が右手の小指を出すと、椿はそれに自分の小指を引っかけた。

「おにーちゃんはずったいに、ずーっと、わたしといっしょに
いること。ひとりでもっかいつちやわないことっ」

これは昔『指切り』の歌が歌えなかった椿に、「じゃうこうしよ
う」と決めた二人だけの約束の仕方だ。歌の代わりに約束事を言っ
て、それに僕が答える。ただそれだけ。

「はい、ちかいます」

これで終わり。簡単な約束の仕方。それでも椿にとってこの『約
束』は特別なことであり、これまでも数えるほどしかやってない。
だからその『約束』をしたということは、椿にとってこの約束は特
別なことなんだろう。

「えへへ……」

僕の宣言に、椿は涙目ながらも今日一番の笑顔を見せてくれた。

それが椿と交わした約束。

ずっと一緒にいる。絶対傍にいる。

今まで一度たりとも忘れたことのない、大事な大事な約束だ。

第6話 僕が君にできること part 6

なつかしさを感じながら目が覚めた。気だるい体を起こして時計を見ると、時刻は二十時を回っていた。

少し頭痛のする頭を押さえながら体を起こす。音が消えたままのテレビでは歌番組が放送されていた。消音を解除すると聞き慣れた今流行の歌が流れてきた。

……夢、か。

気分がずんと重くなる。何度となく見てきた夢だけど、今でも僕の心の中で輝きを失うことなくあり続けるそれをまざまざと見せつけられたら、立ち上がる気力さえ失せるのも仕方ないことだろう。あの日のことはよく覚えている。今でも目を閉じれば泣いている椿の姿がはつきりと瞼の裏に映るくらいに。……いや、あの日どころか、あの頃の毎日はそれから先の数年間よりもはつきりと思い出せる。

柊と家に帰ると先に帰っていた椿が笑顔で迎えてくれて、リビングでは母さんが家事をしながらおやつを出してくれる。ご飯前には父さんが帰ってきて、五人一緒に「いただきます」をしてにぎやかに晩ご飯をとる。お風呂は三人一緒に入って、寝るときは僕と柊がかわりばんこに椿に本を読んで聞かせ、申し合わせていたかのように三人一緒に夢の中へ。そんな平凡な毎日。

あの頃はいつも近くに誰かいた。一人でいることなんてなくて、いつも楽しく笑っていた。

だから昔の夢を見た後はいつも「あの頃に戻りたい」なんてことを考えてしまう。特に伯父さんの家に引き取られてから桜花に通うようになるまでは毎日そうだった気がする。むしろあの頃は夢を見た見てないにかかわらず、四六時中そんなことを考えていた。それが決して叶うことはないことを知りながらも、あの頃の僕はそうせずつにはいられなかった。そしてもちろん、程度の違いはあれでも今

もその思いは変わらない。

……そういえば、こっちにきてから初めてだな。昔の夢を見たのは。

ふと僕は思った。

椿も今の僕のように、昔の夢を見たりするのだろうか、見て、懐かしんだり、悲しんだりするのだろうか。『椿も昔に戻りたいと思うことはあるのか』と聞いてみたい気がする。

その椿はと言えば、未だ家には帰ってきていない。もう二十時半を過ぎているというのに。

「遅いな、椿……」

ぼつりと呟く。

昨日までの椿ならもう帰ってきている時間。本当に今日は帰りが遅いようだ。

広いリビングに唯一響く流行の歌。軽快なメロディがウリらしいけど、ちっともそんな風には聞こえなかった。

……椿は去年一年間ずっとこんな暮らしをしていたのだろうか。椿は学園に入学してから一年間一人暮らしをしていたという。

いつも僕と柊にぴったりとくっつき、父さんや母さんよりも僕達に懐いていた椿。そんな椿が一年間も一人暮らしをしていたというのは、聞いた当初はひどく驚いた。

記憶の中の椿は甘えん坊で泣き虫、いつも僕の服を掴んで離さない、そんなかわいい子だった。けれど今の椿は違う。しっかり者で決して弱音を吐かない。姉である僕の世話まで進んでする出来過ぎた妹だ。

……何が椿をそう変えさせたのだろうか。

考えるまでもなく、すぐその原因を見つける。

きつと僕のせいだ。

『絶対傍にいる』そう小さい頃の椿に約束したのに、親戚同士の

もめ事に巻き込まれた事とは言え、椿と離ればなれになってしまい、約束を守ることが出来なかった。

だからきつと椿はあんなにしつかりした子に育ったんだ。育つしかなかつたのかもしれない。

それは結果的に椿を自立させることに成功したのかもしれないけど……僕が約束を破って辛い思いをさせたのには変わりない。

だめな兄だ。

そんな後ろ向きなことを考えながら時折玄関に目を向けるも、まだ扉が開かれる様子はなかった。

「寂しいな……」

天井を見上げて、僕はぽつりと呟いた。

「……はっ。いけない。怠けてる場合じゃなかった」

ただ椿の帰りを待つだけなんてだめだ。少しでも疲れて帰ってくる椿の負担を減らさないと。

しばらく考えて、僕は晩ご飯を作ることにした。

とは言っても、さつき見た冷蔵庫の中身では僕は何も作れそうにない。僕にはレパートリーというものが無いんだから。それでも卵はたくさん買ってきたから、卵焼きくらいならと考え直すものの、頭に朝ご飯が浮かびすぎ諦めた。

だったらご飯くらい炊こうと炊飯器を開けると、

「……炊きたてだ」

炊飯器からほかほかと湯気が立ちのぼった。予約炊飯していたよ
うだ。

「……サラダだけでも作ろう」

葵さんにでも今度簡単なもの教えて貰おうかな……。
僕は椿にばれないよう葵さんから料理を教わる良い方法を考えながら冷蔵庫を開いた。

「ただいまー！」

玄関から椿の声が聞こえた。慌てたようにリビングに入ってくる
と、鞆やら荷物を床に投げ置き、制服のままエプロンをつけた。

「おかえり椿。遅かったね。ずっと準備してたの？」

「ごめんねお姉ちゃん。うん、ずっと準備。すぐにご飯作るからま
つてて！」

椿は冷蔵庫に顔を突っ込んでガサガサと漁り出す。

「あ、買い物ありがと。あれ、卵こんなに……」

「タイムセールしてて安かったから買った。買いすぎ、かな
……？」

怒られるか呆れられるかされるだろうと構えていると、予想に反
して椿は顔を横に振った。

「ううん。卵料理はレパートリーたくさんあるから大丈夫。卵こん
なにあるなら……今日はオムライスにしようかな」

料理を決めてからの椿は早かった。

冷蔵庫から必要な材料を取り出し、手際よくオムレツのタネを作ると、熱していたフライパンにタネを流し入れた。ある程度形になってきたら、別口で調理していた味付け済みのご飯を移し入れ、綺麗にオムレツでくるんだ。

レタスやキュウリ、トマトを切って盛りつけただけのサラダをテーブルに並べる頃には食卓にオムライスが二つ出来上がっていた。

「はい、できあがり。ちょっと急いで作ったからいつもより味は大雑把かも。大目に見てね」

スプーンを戸棚から出しながら椿が照れたように笑う。

「椿のご飯はいつも美味しいよ」

「えへへ。ありがと……」

椿はやっぱり照れて笑っていた。

「……ねえ、椿」

「んー？」

テレビをぼーっと眺めながらオムライスを食べていた椿が視線を僕に向ける。

「明日も帰りは遅い？」

「うん。ちょっと予定より遅れてるから」

「そっか……」

僕は少し思案して考えをまとめてから口を開いた。

「だったら、樫も大変だろうから、晩ご飯はコンビニとかスーパーの出来合いの物で済ませ」

「だめ。晩ご飯はちゃんとわたしが作る。コンビニだとお金がかかったら」

「あと一週間とちょっとだし、それくらい」

「だーめ。お姉ちゃん体こわすよ？」

「うっ……」

体のことを言われては二の句が告げられない。

たしかにコンビニのお弁当は揚げ物が多かったり油っぽかったりして僕にはあまり合ってるとは言いがたい。

「そ、それじゃ、僕がつく」

「それも却下。晩ご飯はわたしが作るの。たまーにならないけど、基本わたしが作るって決めたでしょ？」

「それは樫が一方的に」

「それでも決めただからわたしが作るの」

一歩も譲らない樫。これは折れそうにない。

「……でも、遅くなりすぎるとお姉ちゃんに迷惑かけちゃうから、明日からも買い物頼んで良い？」

何か言い返そうと思案していると、先に樫にそんなことを言われてしまった。

「それくらい言われなくてもするつもり」

「お姉ちゃんは頑固だなあ」

それは椿の方だ。

それから結局、椿の意思を変えることは出来なかった。

第6話 僕が君にできること part 7

「じゃあお姉ちゃん、わたし学校行ってくるね！」

「え、今日日曜だよ？」

「学園祭の準備。なんか香奈達のグループが予定よりも全然遅れてるんだって」

「ふーん。大変だね」

「まあ香奈のことだからどうせこうなるだろうとは思ってたけどね。夕方までには帰ってくるけど、お姉ちゃんは何処か出かける予定ある？」

「なし。何かすることあったらやっておくよ？ 洗濯物とか掃除とか」

「掃除も洗濯も昨日のうちにやってあるから大丈夫。最近の洗濯機や掃除機って静かで良いよね」

「い、いつの間に……。じゃあ面白い物」

「お姉ちゃんが昨日買ってきてくれた分があるからそれも良い」

「うう……。そ、それなら晚ご飯作るよ。料理本があったと思うから、それを見ながら作れば僕でも」

「だーめ。ご飯はわたしの担当って言ってるでしょ？ ちゃんと早めに帰ってくるから心配しないで。あ、お昼ご飯は冷蔵庫にロールキャベツがあるから、温め直して食べてね」

「え、あ……。うん」

「おやつのクッキーは机の上、ケーキは冷蔵庫。ジュースなら新しいのを冷蔵庫に入れておいたから冷えてると思う。紅茶が飲みたかったらキッチンに一式置いてあるからそれ使って」

「あ、ありがとう」

「何かあったら電話ちょうだい。それじゃいってきます！」

「……。いってらっしゃい」

週末に学園祭を控えた月曜日。一昨日に引き続き僕達二年D組の面々は放課後の教室に居残り、プラネタリウムの制作に取りかかっていた。

遙は今日も投影機の取扱説明書を一人黙々と読み進めている。たまに低いうなり声を上げて頭を掻きむしっているけど、読み終えたページ数を見る限りは順調そうだ。綾音さんは特別棟にある空き教室の使用許可を今日やっと取れたようで、ドーム組み立て班のみならずそっちに移動して作業している。葵さんは教壇の周りに集まった四、五人のクラスメイトとプラネタリウムの講演内容について話し合っている。

いつもなら僕は葵さんのグループに入るのだけど、体調が悪いことを悟られないようにするため、葵さんに断って今日の所は外して貰った。今は別のグループに加わって、学園祭当日の教室を飾り付ける小物を作っている。僕が担当するのは画用紙を星や星座の形にカッターで切り抜くというもの。これに蛍光塗料を塗ったものを壁や天井に貼って、教室とその中に設置するドームとの間の真つ暗な空間に星空を作ろうということらしい。これは『教室の中に設置したドームは閉鎖的なものであり、通りかかった人が教室を覗くと真つ暗で殺風景だ』というクラスメイトからの意見から考えられた。

予め画用紙に描かれた線にそって切り込みを入れるだけの簡単な作業なのだけど、一つ一つが小さく数が多いため、数をこなしているとさすがにくたくたびれてくる。しかも頭痛を抑えるための鎮痛薬を飲んでいるせいで頭がぼーっとしている。おかげで集中しづらく、それが余計に僕を疲れさせる。

そんな状態で作業を続けていたせいだろう。

「っ！？」

ふいに指先に鋭い痛みが走った。霞みがかつていた思考が少しだけ鮮明になり、カッターで指先を切ったのだと理解すると、痛みはさらに強くなった。

血のにじむ指先を机の下に隠しながらさっと教室を見回して、誰も僕を見ていないことにほっとする。

ポケットからティッシュを取り出して傷口に巻き付ける。ティッシュはすぐに赤く染まり、慌ててもう一枚重ねる。

結構深く切ったのかもしれない。さすがに絆創膏は持ってないし……仕方ないけど、血が止まるまではこのまま

「楓」

「ひっ!?!」

頭上から良く知る声が聞こえた。けれどそれはいつもと違い威圧感を感じていた。

「な、なに遙?」

悪戯をしていたところを母親に見つかってしまった子供のような心境で、少し顔を引きつらせながら視線を合わせる。

「休憩行くぞ」

「う、うん」

有無を言わせぬ雰囲気、反射的に頷いてしまう。

葵さんに何か耳打ちしてから教室を出て行く遙の後に続いて、僕も同じ作業をしていたクラスメイトに休憩することを告げて、遙の後を追った。

休憩と言っていたからってつきり学食に行くものだと思っていたのに、何故かやってきたのは保健室だった。

「そこに座れ」

言われたとおりに大人しく椅子に座る。遙は備え付けの戸棚や机の上を探ってから、僕の前に膝をついた。

「先生もいないのに、勝手に保健室使って大丈夫？」

「保健委員だから心配ない」

「誰が？」

「アタシが」

ポケットから何かを取り出して僕に見せる。それは保健室の鍵だった。

遙が保健委員だなんて意外だ。

「いつでも使って良いと許可も取ってある。ほら、手を出せ」

おずおずと怪我をした左手を差し出す。

「我慢しろよ」

僕が頷くのを確認してから傷口に消毒液を吹きかける。痛みに涙が浮かんだけど、なんとか声は出さずに済んだ。

「これでよし」

「あ、ありがとう」

絆創膏が巻かれた指先を撫でながらお礼を言う。けれどそんな僕を遥は何も言わず、じっと見つめる。居心地悪く視線を彷徨わせながら遥の言葉を待つものの、視線を固定したまま微動だにしない。

「え、えっと。はる」

沈黙に我慢できず口を開いたその時、遥は右手を僕の頬に当てて顔を近づけてきた。

「ち、ちよつと遥!?!」

「静かにしてる」

低い声はやけに響いて聞こえて、体を硬くする。そのまま緊張しながらじっとしていると、遥の指先がそつと僕の目の下に触れた。一瞬それに何の意味があるのかと首を傾げたけど、すぐにその意味に気づいた。

「やっぱり……」

心配するような、呆れるような、そんな表情をして僕の目の下辺りに視線を注ぎ、次いで指先についたオレンジ色の粉に視線を落としました。

「クマ隠すの上手くなったな……」

顔を上げた遥が僕を見つめる。きつと僕の目の下の化粧の薄くなった箇所からクマが顔を覗かせているに違いない。

「これ自分でやったんだろ？」

遙がまた目の下に触れる。

「まあ、椿には言えないし……」

今更嘘が通じるとも思えず白状する。

「ったく。隠すことばかり上手くなりやがって……」

「っ、椿も気付かなかったのに、よく気付いたね。いつ気がついた？」

「違和感は朝からあった。クマに気付いたのは昼だな。すぐにでも言ってやるうかと思っただが、隠しているようだったから放課後まで様子を見ようと思っただよ。そしたら……」

遙が半眼で怪我をした指に視線を向ける。

「こっなるんだったらもつと早く声を掛ければ良かったな」

「い、ごめん。遙に気を遣わせちゃって」

遙が小さく舌打ちする。それを聞いて顔を俯かせると、「悪い」と呟いてからそつと僕の頭を撫でた。

「自分に腹を立ててるだけだ」

「……でもそれも結局は僕のせいだよな？」

僕が怪我をしなければそんな思いをしなくて済んだのだから。

「そつ思っつようにさせたのはアタシのせいだ」

「でも」

「だー。そんなことはどうでもいい!」

遙は立ち上がると近くにあったコットンを手に取り、少し乱暴に僕の化粧を落とし始める。

「は、遥痛いよ」

「少し我慢しろ……まあこんなもんだろ」

変色したコットンをゴミ箱に投げ捨てる。

「よつと」

「え、ちょ、遥!?!」

ふわつと体が浮遊感に包まれ、少し遅れて気付いたときには遙に抱え上げられていた。驚いて声を上げるけど、遙は僕を抱えたまま歩き、ベッドの上を下ろした。

「少し寝ろ」

「や、でも」

「いいから寝ろ。起きるまで見張ってるから、逃げよつとか考えないようにな」

それってつまり起きるまで近くにいってくれるって事じゃ……。

「起きたら話を聞くから、寝てる間に考えとけよ」

「ね、寝てる間について、そんなこと無理だから……」

僕がそう言い返すと、遙はにやりと笑って、

「無理なら何も考えず、思ったことを喋れば良いんだよ」

遙が布団をかけてくれて、そつと頭に手を置く。たったそれだけで、昨日あれだけ眠れなかったのに、魔法がかかったかのようにゆつくりと瞼が降りてくる。

「ん……ごめん……少しだけ、寝る、ね……」

「ああ。おやすみ、楓」

半分ほど閉じてしまった目で見た遙は笑っていた。
そういえば、今日遙が笑っているの見たの、これが初めてかな。

第6話 僕が君にできること part 8

「失礼します。クラスの子が怪我をしたので絆創膏を……あれ？」

扉が開き、保健室に誰が入ってきた。ベッドの周りのカーテンを締めていたため姿は見えないが、それが椿だと声を聞いて分かった。

「どうしたんだ椿？」

カーテンから顔を出すと、やはりそこにいたのは楓の妹の椿だった。

「遥先輩？ あの、香奈が怪我をしたので絆創膏をもらいに来たんですけど、先生いないみたいで……」

突然現われたアタシに声を掛けられた椿は少し動揺しているようだ。

「ああ、それならアタシが持つてる。三枚あれば足りるか？」

「はい。でも良いんですか？」

「これ保健室のだからな」

椿は笑いながら「それなら遠慮なく」と絆創膏を受け取る。

「遥先輩はそこで何をしていますか？」

「アタシか？ アタシは……」

ちらつと横目でベッドで眠る楓を見る。

……まあ、いいか。

どう返答するべきか迷ったあげく、アタシは正直に話すことにした。変に隠して椿から疑われるようになるのはあまりよろしくない。

「楓の付き添いだ」

カーテンを開けて椿を招き入れる。

「……お姉ちゃん？」

おそるおそるベッドに横たわる楓の顔をのぞき込み、そして僅かに驚いたような声を上げる。

意外にあっさりとした反応に首を捻る。

椿ならもっと驚くと思ったんだがな……。

「寝てるだけ、ですよね？」

「ああ。ただの寝不足だ」

椿がほつと胸をなで下ろす。

「良かった。朝から様子が変だったから、もしかすると調子が悪いのかも？ って心配してたんです」

なるほど、そういうことか。

「バレてるじゃないか……」

椿には聞こえないように、ぼそつと呟くように寝ている楓に愚痴る。

「でも、目の下にこんな大きなクマはなかったような……」

「それは楓が化粧で隠してたんだよ」

「お姉ちゃんお化粧できるんですか!？」

ポリウムが大きくなった自分の声にハツとして口を押さえる椿。そして楓を見て起きていないことにほつとする。

「クマや顔色悪いのを隠したりするような化粧だけならな」

そんな器用なことではできるのに、普通に化粧するとなると途端にできなくなるのだから不思議だ。

「そう、ですか……今度からもっと注意して見ることにします」

椿が楓の顔を見ながら言う。

「しかし楓に何があったんだろうな。こんな大きなクマを作る事なんて中学以来じゃないか……」

「中学以来？」

途端に椿の目の色が変わった。

「お姉ちゃん、中学の頃にもこんなことあったんですか？」

しまった。と思ったときにはもう遅かった。椿はアタシの次の言葉を待っている。

「まあ……いろいろあって、楓はよく一人で考え込んでいたからな。それでよく眠れないことがあったみたいで、時々今日みたいなクマを作ってたんだよ」

そういえば、今思い返すと今日の楓はあの頃のようにだった。ぼーっとしているというか、心ここにあらずというか……。おそらく薬を飲んでいたせいだとは思うが。

「そうですか……。考え事……」

椿が軽く目を伏せ、しばらくしてから口を開いた。

「今お姉ちゃんは何か悩んでいる、ということですか？」

「たぶんな。何か思い当たることでもあったか？」

椿はゆっくりと頷く。

「お姉ちゃんに聞かれるとあれなので、外で良いですか？」

「分かった」

椿に同意して保健室を出ることにする。念のため楓の枕元に『起きてもそこにいろ』と書き置きを残してカーテンを締める。保健室の扉に鍵を掛け、ついでに扉に『休んでいます』とプレートを下げて、保健室から離れた。

いつもの階段には人がいたので、少し風が寒いが屋上に行くことにした。

『立ち入り禁止』と書かれた扉を開けて屋上に上がると、すぐに椿は口を開いた。

「金曜の夜から、お姉ちゃんの様子が変なんです」

「金曜ってことは、椿が楓に帰りが遅くなるって電話した日か」

椿は小さく「はい」と返事する。

「それまではわたしがお姉ちゃんにちよっかいを出しても、お姉ちゃん是不機嫌そうにすることはあっても、本当に気分を悪くするよなことはなかったんです。ちよっと拗ねたようにしながらも笑って許してくれるような……そんな感じだったんです。それがあの夜からは急に落ち込むというか悔しそうにするというか……今まで見たことなかった顔をするようになったんです」

椿はそう言いながら、少し悲しげに苦笑した。

金曜の放課後なら楓はアタシと一緒に帰った。その時はまだいつも通りだった。

「アタシと別れて椿が帰ってくるまでに何かあったってことか……？」

アタシの問いに椿は「分かりません」と首を横に振った。当たり前だ。分かっていたら今頃椿がこんな顔をしているわけがない。

「わたし、何かお姉ちゃんを怒らせるようなことしたかな……」

「それはない。椿よりも楓を振り回してるアタシが、今までで一度も、楓に本気で怒られたことがないんだぞ？ まあ、呆れられたことは何度もあるけどな」

アタシが肩を竦めると、椿はくすりと笑った。けれどそれは一瞬で、すぐに笑顔は消えた。

「……もしかしたら、昔のことを思い出したのかもしれない」

ぼつりと、椿は呟くように言った。

「昔って、まだ一緒に暮らしていた頃のことか？」

敢えて詳しくは聞かない。楓と椿の思い出に他人のアタシが勝手に深く入り込むことは失礼だ。それにこの短い言葉だけでも椿は理解してくれるはずだ。

『両親、そして柊が生きていた頃のこと』

予想通り、椿はゆっくりと頷いた。

「あの頃のわたしは、今思い返しても恥ずかしいくらいに、凄く甘えん坊でした。わたしは両親よりも一つ年上の双子のお兄ちゃんとお姉ちゃんに懐いていて、いつも二人にべったりでした。起きてる時も寝てる時も、どんな時でも袖を掴んでくっついて離れず、少しでも離れるとすぐべそをかくような、そんな子でした」

「今の椿からは考えられないな」

楓が甘える姿なら容易に想像できるが、今の椿しか知らないアタシには椿のそういう姿はまったく想像できなかった。

「香奈にもそう言われました」

小さく笑って、椿は続ける。

「そんなわたしだったから、おね　楓お兄ちゃんはいつもわたしの傍にいてくれました。わたしが何か困っていればすぐに助けてくれて、わたしが泣いていれば泣き止むまでそっと頭を撫でてくれました。でも小学生になって三年も経つ頃には、自分で言うのも変で

すが、わたしはクラスの子から学級委員を任されるくらいにしっかりとした子に育ちました。柊お姉ちゃんからも『私よりもお姉さんみたい』と言われたくらいです。それでも楓お兄ちゃんのわたしへの接し方は変わりませんでした。きつと楓お兄ちゃんだけは、わたしの成長に気付かなかつたんだと思います。けれど、わたしは楓お兄ちゃんに何も言いませんでした。それまで通り、楓お兄ちゃんの前では甘えることにしたんです。それが凄く心地よかつたから」

せつかくの居心地の良い空間を自分から壊すなんて愚かなことだ。椿の選択は当然のことだろう。

壊すときは……その時はそれが愚かな行為だと分かりつつも、相手や自分のことを考え、それでもやらなければならぬ時だけだ。

「そしてあの事故があつて、そのままわたしと楓お兄ちゃんは離ればなれになりました。だから楓お兄ちゃんは……お姉ちゃんは、きつとその頃を思い出して、今の自分と比べたんだと思います」

頼られる昔の自分と、決して頼られているとは言い難い今の自分。ずっと頼られていたのに、数年ぶりに会うと立場が逆転していた。

……そんなところだろうか。

……ああ、そうか。楓はそれに気づき、そこから何か悪い方向に物事を考えたのかもしれない。直接本人から聞いてみないと絶対とは言えないが、転校することが決まってから今までの楓の様子を鑑みるに、十中八九正解だろう。

思索していてふと気がつく、椿は両手を合わせて胸に抱き、顔を俯かせていた。

「そうだ……わたしだ。わたしがきつとお姉ちゃんを……」

「椿？」

椿の肩がびくつと震える。

「は、遥先輩……」

ゆっくりと顔を上げ、アタシと視線を合わせる。

「……わ、わたしどうしよう。お姉ちゃんを困らせるつもりなんてなかったのに……。た、ただお姉ちゃんが『ありがとう』って、『美味しかったよ』って、褒めてくれるのが嬉しくて……」

気のせいだろうか、椿の目に涙が浮かんでいるように見えた。いや、気のせいじゃない。椿は泣いていた。

「舞い上がりすぎてたのかな？ お姉ちゃんが苦しんでいることに気付いてあげられなかった。もう、二度とそんなことしないって、決めてたのに……」

椿の手が、肩が震えている。

「どうしよう、どうしよう。またお姉ちゃんが遠くに行っちゃったら……」

「おい、椿？」

震える肩に手を置こうとした。だがそれを半歩下がって椿は避けた。

「お姉ちゃんが遠くに行ったら、わたしは……」

明らかにいつもの椿と様子が違う。叫んで正気に戻してやりたいところだが、ここは入ることが禁止されている屋上だ。アタシだけ

なら良いが、見つかって椿に迷惑をかけるわけにはいかない。

「椿、落ち着け」

「あんなに我慢したのに、あんなに辛いのを我慢したのに……！」

目の前の椿と、『あの頃』の楓の姿が重なる。

「くそっ！」

アタシは椿の手首を掴むと無理矢理引き寄せ抱きしめた。

「っ！？」

「落ち着けっ。楓がそんなことをすると思うか？ 妹を悲しませるようなことをするか？」

耳元で力強く囁く。

「……しない。お姉ちゃんは絶対そんなことしない。でも」
「だったらしつかりしろっ。そりゃ楓は今に変かもしれない。けれど、すぐにいつもの楓になる。アタシがそうしてみせる。だから椿は今まで通り楓に接していれば良いんだよ」
「でも……」

肩が冷たい。椿の目から溢れた涙のせいだ。

「自慢じゃないが、これでも椿と同じかそれ以上に楓から慕われている自信はあるんだ。アタシに任せておきなよ。楓の一人や二人くらい、アタシがすぐに元気にしてやるさ」

背中をぼんぼんと優しく叩いてやると、やっとだらんとしていた

椿の手に力がこもり、アタシをぎゅっと抱きしめた。

「……はい。いつもお姉ちゃんの話に出てきた遥先輩のことですから、信じます」

「ああ。任せとけ」

力強くアタシはそう答えた。

第6話 僕が君にできること part 9

「遙?」

椿と分かれて保健室に戻ると、締め切ったカーテンの中から楓の声が聞こえた。やけに明るいその声に疑問を感じながらカーテンを開けた。

「やっぱり遙だ」

上半身を起こした楓は、嬉しそうに笑いながら左手を振っている。その声の明るさと表情から、目の前の人物が『柊』だということを知る。

「アタシじゃなかったらどうするんだ、柊?」

「その時は正直に謝る」

いつものようににこやかな柊。だがそれはやけに薄っぺらく見えた。

「アタシに何か用か?」

「えー。私は用がないと出てきたらダメなの?」

ぶくーと頬を膨らませる。

「茶化すな」

そう言いつつ、柊はきょとんとしてから苦笑した。

「あー、うー……やっぱ分かる？」

「柊が用もなく、まだ楓が学校にいるのに出てくるなんて、下手したら楓が困るようなことしないだろ？」

「あ、あはは……よくご存じで」

乾いた笑いが保健室に響く。無理して笑っているのが嫌でも分かる。

数秒の沈黙。柊は喋りづらそうに口を開いた。

「えーっと、遥が気にしてるようだから教えておこっと思って。たぶん気付いてると思うけど、楓は今ちょっと悩んでる。ちょっとじゃないか。結構悩んでる」

笑顔は消えていた。今の柊が自分のことを『楓』だと言えば、きつとアタシも椿も信じるだろう。

「ああ。さっき椿とそのことについて話していた。金曜の夜あたりから変だつてな。何かあったのか？」

「うん。私もなんでそんなに悩んでるのか気になって、さっき楓の記憶をちよつと覗いたんだ。そしたら原因が分かった。金曜日の夜、楓は夢を見たんだ。まだみんなと一緒にいた頃の夢。楓はその夢を見て自分に愕然として、これから自分はどうすればいいんだろっつて、ずっと考えてる」

「……やっぱりそうか」

椿の言っていたことは正しかった。楓は昔のことを思い出し、今の自分と比べてしまったんだ。

「それで楓は今いろいろ悩んでてね……。あつ、別に楓が昔のことを忘れてたわけじゃないよ？ 楓は今もあの楽しかった頃のことを

ちゃんと覚えてる。けれどそれを直視するのは少し辛くて、無意識にその記憶に封をしてるんだ。ふっと思い出して、落ち込むことがないようにね。けれど最近生活が変わって、気付かないうちにストレスが溜まったせいなのかな。最近その封が剥がれたんだ。それで昔の夢を見たんだと思う」

そうか。それで楓はあまり昔のことを話そうとしないのか。話すとせつかくの封が剥がれ、自分が落ち込んでしまうから。

とにかく原因は確定した。だが、ここからどう楓を立ち直らせれば良い？ 頭の良い葵なら何か良い方法が思いつきそうだが、彼女に相談するわけにはいかない。葵や綾音に楓の昔話をすれば、きつと二人の楓を見る目が変わる。それはきつと楓は望んでいないだろう。それに、これは中学からずっと楓を見てきたアタシがやるべきことだ。椿にもあんな啖呵を切ったんだ。甘えなんて許されない。

「ほんと遥は楓が好きだよな」

「は？」

突然の言葉に、アタシはぽかーんと口を開けてしまう。

「遥は、楓のこと、大好きだよな？」

子供に言い聞かせるように、ゆっくりと区切って言う。

「……そ、そりゃまあ中学からの付き合いで、二年間寮ではルームメイトだったし、アタシのこと慕ってくれるし、たまに見せる笑顔が物凄く可愛いし、他にもいろいろと世話になったし……嫌いになる要素はどこにもないからな」

「……な、なんか実際目の前で楓のこと褒められると、私まで恥ずかしくなっちゃうね」

「半分以上は柊のことでもあるしな」

「そ、そうなんだ……」

顔を赤くして俯く柊。そんな柊を見て小さく笑う。

「と、とにかく」

まだ頬が赤いままの柊が顔を上げて視線を合わせる。

「一途だし、ぐいぐい引つ張ってくれるし。遥が男だったら、絶対楓は惚れてたよね。二人は性格的にもお似合いだし。うんっ。もっ
たいない」

「も、もったいないって、別にアタシは」

バツとアタシの眼前に柊の手のひらが現われ、言葉を制する。

「分かってるっ。女の子同士じゃ結婚できないもんね。残念だけど諦めてね。あ、海外でっていうのはナシで。楓は海外旅行よりも国内旅行派だから」

「まったく分かってないだろ……」

呆れるアタシに、柊はニシシと笑ってみせる。

「まっ、結婚できないからって悲しまなくて良いよ」

「別に悲しんでないっの」

「代わりに遥は、一生楓の一番の親友でいられるんだから」

……ったく。本当に柊はアタシをからかうのが上手だな。

「……だったら、結婚よりもそっちの方がいいな」

「あ、やっと話に乗ってくれた」

アタシが反応してくれたことに嬉しかったのか、柊はより一層笑顔を輝かせる。

「そんな一番の親友の遥のだから、遥の言葉なら楓はちゃんと話を聞いてくれる。だから、楓のこと、任せてもいい？」

「ああ。大船に乗ったつもりでゆっくり寝てろ」
「うんっ」

元氣よく頷く柊。

そのとき、ふいに柊の目に光るものが見えた。それは瞬く間に大きくなり、滴となって頬を伝い落ちた。

「どうした柊？ 嬉しくて涙が出たのか？」

突然のことに動揺しつつも、アタシは冗談を言った。

「ち、違う。私は涙なんて流してない」

けれど、返ってきた言葉はアタシなんかよりもずっと動揺に震えた声だった。

「流してないって、実際目から」

ぼろぼろといくつもの涙が零れる。それを拭うことも忘れて、柊は視線を合わせた。

「楓だ。楓が泣いてる！」

第6話 僕が君にできること part 10

あれは梅雨の時期だっただろうか。厚い雲に覆われた空から雨がしとしとといつまでも降っていたのを覚えている。

冷たい雨が降り注ぎ全身を濡らしていく。ずぶ濡れの僕は体の芯まで冷え切っているはずなのに、まったく寒さを感じなかった。

背中に固いアスファルトの感触がする。どうやら道路に降り出されたみたいだ。わずかに動く手を動かすとゴツゴツとしたアスファルトの表面を流れるぬるっとした液体に触れた。

ゆっくりと目を開く。視界の右半分が真っ暗なままだった。半分になった視界に映ったのは、真っ赤に染まった地面だった。

誰かが僕に駆け寄ってきた。知らない人だった。その人は僕に何か話しかけてきたようだけど、何も聞こえなかった。

眠い。

体を打ち付ける雨が子守歌のように僕を眠りに誘う。

少しずつ目が閉じる。知らない人がずっと僕に話しかけている。

でもやっぱりその声は聞こえない。

目が完全に閉じる。誰かが僕の肩に手を置いた。

ごめんなさい。後で謝るから、もう、眠くて……。

……。

目を覚ますとそこは知らない場所だった。白とピンクを基調とし

た壁紙が張られたその部屋には小さなテレビぐらいしか置いていないくて、お客さんが来たときに使う部屋のようにあまり生活感がしなかった。

ぼーっとしていた意識が少しずつはつきりとしてくる。代わりにずきずきと頭が痛み始めた。

感じたことのない痛みに困惑する。ふと柔らかい布の感触を感じた。そこでやっと僕は自分がベッドに寝かされていたことを知る。

なんでこんなところにいるんだろう。

当然の疑問を鈍痛のする頭で考える。

さっきまで僕は父さんの車の後部座席で寝ていた。本当だったら、次に起きたときは武道館に到着していて、剣道の試合に出るはずだったのに。

……いや、そうじゃない。僕は何か怖い思いをしたような……。

でもあれは現実感に欠けていたし、もしかすると夢だったのかもしれない。記憶もどこか曖昧だし。

……。

兎にも角にも、考えても答えは出てこなかった。ただ、『何か』が頭の隅っこの方において、僕に「気づけ」と言うように存在を主張しているのに気付いた。

なんだろうこれ。嫌な予感しかしないけど、僕はこれを知らないといけない気がする。

おずおずとその『何か』に手を伸ばそうとしたとき、部屋の扉が開いて誰かが入ってきた。仕方なく意識を現実に戻す。

部屋に入ってきたのは、小さなかわいい女の子、僕の妹の椿だった。

綺麗な花を生けた花瓶を持って部屋に入ってきた椿は、僕を見るなりみるみるその目に目に大粒の涙を浮かべた。花瓶がパリンと音を響かせて床に細かく広がったときには、椿はその音を掻き消すほどの大声で泣きながら僕に抱きついていて、「お兄ちゃん、お兄ちゃん」と繰り返す椿の顔は涙でぐしゃぐしゃで、それを見た僕は頭

痛なんて吹き飛ぶほどの痛みを胸の辺りに感じた。

兄が妹を泣かせてどうするんだよ。

何故椿が泣いているのか、理由は分からない。けれど理由なんてどうでも良い。とにかく椿が僕の名前を呼びながら泣いている。それが事実。

椿を泣かせてしまった自分を情けなく思う。

『泣かないで』

そう言うつもりで口を開こうとした。なのに僕の口は意思に反して少しも動こうとしなかった。

内心酷く動揺しながらも、声が駄目なら頭を撫でようと腕に力を込めた。

そこで僕はさつき感じた『何か』にやっと気づいた。それは決して知りたくはなかったことだけれど、否応にも知ってしまう、とても簡単なことだった。

口が動かない、首が動かない、腕が動かない、手が動かない、足が動かない。

文字通りに本当に動かなかった。いくら力を込めても、いくら『動け』と念じても、まるで他人の体かのように言うことを聞いてくれなかった。

ジェットコースターに似た気分を味わいつつも、ただただ椿に泣いてほしくなかった僕は、椿が握りしめた僕の右手、その人差し指だけに精一杯の思いと力を込める。

しばらくしてから、ゆつくりと人差し指は動いた。椿の手を握りかえしたと言いはれ難いけど、それでも僅かに動いた人差し指は椿の手の甲に触れることができた。

椿がハツとして顔を上げ、僕を見る。僕はいつも椿に見せる笑顔を作る。

椿の目から涙が止まった。そして「お兄ちゃん！」ときゅつときゅつと抱きついて再びあふれ出した。

その涙はさつきまでとは違い、少しだけ暖かい気がした。

数分後にやってきた僕の主治医だという親戚の叔父さんから、あれから僕に何が起こったのか、全て話してくれた。

僕達が乗っていた車は交通事故に巻き込まれ、父さんと母さんは即死。柊も搬送されたこの病院で息を引き取り、車に同乗して生き残ったのは僕だけだった。けれどその僕も体に致命傷を受けて生死の狭間にいた。そこで叔父さんは比較的軽傷だった柊の体に僕の脳を移植することで僕を助けようと考えた。親族の同意の下行われた手術は無事成功し、僕はまた目を覚ますことができた。

叔父さんが用意した姿見に映る僕は柊の姿をしていた。僕と柊は双子でよく似ていたから他人が僕を見てもきつと気づかないだろうけど、たしかに間違いなく柊だった。

看護師さんに支えられて上半身を起こしている僕は、全身に包帯が巻かれていて見ていてとても痛々しかった。ただ頭痛を除くと痛みというものはほとんどなかった。叔父さんが言うには、移植してまだ数日なので体がまだ馴染んでおらず、痛覚その他があまり機能していないから、ということらしい。あともう数日もすれば車いすで生活するくらいには回復できるとのこと。ただ前のように歩いて普通に生活できるようにするには数年かかると言われた。

叔父さんの言葉を理解しながらも、僕は父さん、母さん、そして

柁を失ったことがあまりにも大きすぎて、酷い喪失感に泣くことも忘れて三人のことを考えていた。

もう数日前のことらしいけど、僕にとってはついさっきの出来事。さっきまで柁と試合のことで話していたのに、その柁はもうこの世にはいない。

もう柁と話すことどころか会うこともできないんだ。もう柁に「楓」と呼んでももらえないんだ。あの屈託のない笑顔で微笑みかけてくれることもないんだ。

涙腺が緩み、涙がじわりと浮かんだ。

裾を引つ張られる感覚に目を向けると、椿が僕の服の裾をぎゅっと掴み見上げていた。その瞳は不安で揺れているようだった。

そうだ。僕が泣いちゃ駄目だ。僕は椿の兄なんだから。

ぐっと涙をこらえて椿に微笑みかける。ちゃんと笑えているかどうか鏡を横目で見る。うん、ちゃんと笑えてる。

椿は一瞬驚いたような表情をしたあと、すぐに安心したように涙目ながらも笑顔になった。

そう、これでいいんだ。父さんも母さんも柁もいなくなって、胸がすごく痛くて寒くて辛いけど、僕はお兄さんなんだから。僕が椿を安心させてあげないと。

数日後、看護師さん同伴で車いすであれば外出できるようになった僕は、椿と一緒に母さん、父さん、そして柁のお葬式に出た。

椿は泣いていた。僕に縋り付くように、膝の上ですっと泣いていた。そんな椿の頭を、僕はやっと動くようになった右手ですっと撫で続けた。

どこにも行かないで。

それはとてもとても小さな声だった。けれど、たしかに僕にはそう聞こえた。

だから僕は応えた。小さな小さな声で椿にだけ聞こえる声で。どこにも行かないよ。

びくつと椿の体が震え、それからぎゅつと僕の服を掴んだ。

どこにも行かないよ。

もう一度囁く。

椿の手から力が抜けた。頬を伝う涙の線も、少し細くなった。

どこにも行くもんか。

心の中で強く呟く。

だって僕は椿と一緒にいるって『約束』したんだから。

第6話 僕が君にできること part 11

翌日の放課後。

担任の山本先生が差し入れと称してみんなにジュースとお菓子を
持ってきてくれた。放課後の教室に顔を出さず、ホームルームで学
園祭の出し物について話し合っているときもあまり乗り気じゃなか
ったようなので、てっきり放任主義なのかと思っていたけど、実際
は先生である自分が僕達生徒の邪魔にならないようにと、余計な口
は出さずに影からこっそりいつも見ていたのだという。そして今日、
修理から戻ってきた投影機が学校に到着し、無事遙が操作してみせ
たことで、一番不安だった「ちゃんと投影機は使えるのか？」とい
う問題が解消され一区切りがついたところを見計らい、みんなの労
いを込めて差し入れを持ってきたというわけだ。

小腹の空いていたみんなはすぐに作業を一時中断し、一斉に差し
入れに群がった。わいわいとお菓子やジュースを飲み食いする様子
はさながら打ち上げのようだった。

「何してるんだ楓？」

コーラ片手に遙が僕の所へやってくる。それに気づいて内心動揺
するものの、なんとか表面上は平静を装う。

結局昨日保健室で眠りから覚めた後、何故か遙は何も聞いてこな
かった。それを不思議に思いつつも、僕自身話すつもりはなかった
ので、ほっとしつつ教室へと戻った。

そのせいで、いつこのクマのことを聞かれるのかと、遙が近くに
来る度にビクビクしていた。

「先生に聞いたら、綾音さん達のところへは行ってないって言うから、持って行くことと思って」

余っていたジュースとお菓子を袋に詰める。たしか向こうにいたのは六人だから……。

「ああ、だったらアタシが持って行く」

「良いよ。遥は慣れない作業で疲れてるでしょ？」

ふいに遥が顔を寄せてくる。飛び退くようにして遥と距離を取る。

「人のこと言えないだろうが」

遥の眉間に皺が寄る。

まさか隈を見られた？ いや、たぶん僕の反応で察したんだろう。

「僕のは私事。遥のとは違うよ」

「またそんなことを言う」

「またって、前に言った覚えはないけど？」

「そついう意味じゃなくてだなあ……」

ふと視線を感じて、その方角を横目で見る。そこにいた禅条寺さんと目が合う。禅条寺さんは不思議そうな顔をして僕を見ていた。

「せっかくクラスが良い雰囲気なんだから、それを壊すようなことは止めようよ」

声のボリュームを抑えて遥に言う。

「楓が素直だったらアタシだってこんなこと言う必要ないんだよ」

「あーあー聞こえない聞こえない」

耳を押さえて軽く顔を振る。そんなこと自分でも理解しているんだから、わざわざ言わないでほしい。

とりあえず何かさされる前に教室から出ようと、ジュースとお菓子が入ったビニール袋を持ち上げる。ずしりと重みが伝わってきて一瞬落としそうになるも、なんとか持ちこたえる。

「僕、綾音さんのグループに差し入れ持ってくね」

「えっ、楓ちゃん？」

僕を見て驚いた表情をする葵さん。

「アタシが付いていく。葵あとは頼む」

若干ふらつきながら教室を出て行く僕の背後で遙の声が聞こえる。余計なことかと思いつつ、ホッとしてしまうのは、僕が遙に甘えているからだろうか。それとも何か別の理由だろうか。

「アタシ達も休憩するか」

綾音さん達に差し入れを渡して部屋を出たところで遙が言った。

「それだったら綾音さんのところで良かったんじゃないの？」

「良いところがあるんだよ」

「良いところって？ 中庭とか？」

「違う違う。まあ付いて来なっ」

歩き始めた遥の後を付いて行き、綾音さん達のいた二階から三階に上がる。いつもだと人の居ない特別棟の三階も、今週末に学園祭を控えた今は一般棟と変わらない人気ひとけを感じる。

何人かとすれ違いながら廊下を歩いていると、遠くから僕に向かって手を振る女の子を見つけた。

「こんにちは楓さん。クレナタ以来だね」

誰だろう？ クレナタ以来って……。そういえば先週柊が蓮君と遊びに行った施設がそういう名称だったはず。

慌てて先週の柊の記憶を探る。クレナタの記憶へと行き着くと、すぐに彼女の姿が現れた。

「こんにちは結奈さん。教室もすぐ近くなのに、案外会わないものだね」

彼女は蓮と同じ二年B組の西条結奈さん。クレナタへ向かう途中、ナンパされていたところを助けた女の子だ。

「まーねー。特に今は学園祭控えてて、みんな忙しいからね。うちも今はこれで忙しいし」

結奈さんはそう言って首からぶら下げていたカメラを手に取る。

「カメラ？」

それは結奈さんが持つには少し大きい、よくドラマに出てくる記者役の人が持っているような黒いデジタルカメラだった。

「そそ、カメラ。これでもうち実は新聞
」
「結奈は新聞部だからな」

遙が結奈の言葉を強引に遮って言う。なんか若干いらいらしているようにも見える。

「あ、これはこれは遙さん。その節はどうも」
「ああ、本当にその節はどうも」

知り合いらしい遙と結奈さんは「どうもどうも」と言いつつお互い頭を下げる。けれど二人の目は笑っていない。

「あなたのおかげで、その頃無名だったうちの名前が一気に広まった。感謝してるよ」

「あーそうですか。っていやそれ悪い方での意味だろ。そんなことで喜んでどうするんだ」

「良きにしろ悪きにしろ、知名度というのは重要なんだよ……」

腕を組んでうんうんと頷く結奈さん。

「ところで最近大人しくなりすぎじゃない？ もー少しはしゃいでくれた方がうちとしては嬉しいんだけど」

「はっ。なんで結奈のためにそんなことしなくちゃならないんだ」
「丸くなったあなたなんて見たくない書きたくないといううちの気持ちに分からない？」

「分かるかつ！」
「……えーと、二人はどういう関係？」

このままだと遙が爆発してしまいそうなので、ちょっと怖いけど

二人の話に割って入った。

何故か遙が「うっ」と言葉を詰まらせる。その横では結奈さんがニシシと笑っている。

「見ての通り、うちがスクープを追いかける記者で、遙がその被写体。あとはご想像通りの犬猿の仲ってところ」

「……なるほど」

それだけで理解できた。遙は僕がいない間にいろいろと問題を起こしていたようだから、きつとそれを結奈さんが記事にして校内で発表、遙がそれに噛みつく。そんなところだろう。

「それにしてもあなたってほんつと楓さんに弱いんだ」

「うっさいな。悪いかっ」

「いゝえ全然。その気持ちなんとなく分かるから」

結奈さんの表情が柔らかくなる。

「ま、今は楓さんがいてそっちで忙しいし、遙がうちのために騒ぎを起こしてくれたとしても、記事にするかどうかは分からないので、そのあたりよろしく」

にやりとする結奈さんに、遙は鼻で笑って返す。

「安心しろ。そんなことは絶対ない。あと、楓のことを書くのを止めたりはしないが、悪く書くようなことがあれば、結奈とアタシが一年前の記事みたいになるからそのつもりでな」

「はいはい分かっているって。ってあれ？ 遙なら記事にするのは止めろって止められるかと思ったけど……案外理解あるんだね」

「別に理解なんてしてない。ただ止めても無駄だろうと諦めている

だけだ」

いやそこは諦めないでほしいんだけど……でも、遙がこんなことを言っつてことは、きつと止めても無駄なことなんだろうなあ。

二人に気づかれぬようにため息をつく。

「で、結奈はこんな放課後にカメラなんか持って何をしてるんだ？まさか盗撮か？」

「さすがに法に触れるようなことはしないって。新聞部での出し物のために校内を回ってみんなの写真を撮ってるだけ」

「それを盗撮っていうんじゃないのか？」

遙が半眼で結奈を見る。

「あーうーん……」

凄く悩み始めた。まさか今言われて気づいたとか？

「た、たとえ盗撮だとしても、別にやましいことをしているわけじゃないし大丈夫なはずっ」

「いやだめだろ……」

冷めた視線を送る遙に「やっぱり？」と結奈さんが苦笑する。

「新聞部はどんな出し物するの？」

「よくぞ聞いてくれましたっ」

さっきまでの苦笑は消え失せ、ぱあっと目を輝かせる結奈さん。

感情の起伏の激しさが香奈さんに似ている。そういえば二人は同じ寮っていつてたっけ。

「また今年もミスコンやるのか？」
「のーのー。あれは先生に怒られたからなし。今年は準備期間中に『これだっ！』と思う瞬間のみんなを写真に収めて、それにまつわるエピソードと共に学園祭期間中に展示、来場者に良いと思ったものに一票入れて貰って、入賞者にはあとで記念品を贈呈しようつてのを企画してるところ」

そっか。それで結奈さんはカメラを持っているのか。

「根本は変わってないのな……。でも、当日本人が駆り出される去年のミスコンよりはマシか」
「去年は苦勞したなあ……。まさか二位の新階さんが途中で逃げ出すとは」

結奈さんが遠い目をする。

「あれは無理矢理連れてきた結奈の責任だ」
「分かってるつて。だから今年はやらないことにしたんだから。いつものうちなら先生に注意されたくらいで自粛なんてしないつての」

そう言っつて胸を張る結奈さん。

「ま、そんなわけだから、そのうち楓さんのことも写真撮ると思っつけど、その時は許してね」

顔の前で手を合わせて片目を閉じる。女の子らしい仕草をする結奈さんを見て、自分自身を撮つて展示する気はないのだろうかと考える。

「別に变なのじゃなければ」

「さすが楓さんは心が広いっ」

「へ？ わわっ」

結奈さんが僕の手を取って上下に振る。それに引かれて僕の体が揺れる。

「あ、ごめんごめん。嬉しくてつい。……ああっ。もうこんな時間。今日はテニス部を回る予定だったのに……いや、今からでも間に合うかも」

一人慌て始める結奈さん。

「それじゃ、そろそろうちはいくね。楓さん、今度会ったときは良い写真撮れること期待してるからねー！」

そう言いながら、結奈さんは手を振って廊下を走っていった。

第6話 僕が君にできること part 12

「いいところって、ここ？」

「そう、ここだ」

やってきたのは料理部の部室、料理実習教室。普段、特別棟の中で唯一騒がしいその部屋は、今日も中から賑やかな声が聞こえていた。

『塚崎先輩！ 大発見です！ プリンにしょうゆをかけるとウニの味かします！』

『そう、良かったわね』

『むっ。コーンポタージュに味付けのりを付けても少しウニっぽい味がします！』

『そう、良かったわね』

『やっぱりウニって美味しいですよね、先輩！』

『そうね』

『ということで塚崎先輩！』

『なにかしら？』

『プリンとしょうゆをご飯にかけてウニ丼として学園祭に』

『香奈』

『何でしょう、先輩？』

『真面目に学園祭に出すメニューを考えなさい』

『は、はあ〜い……』

……さすが香奈さんだ。部活動として真面目に料理を作るはずの料理部が、しょうゆとプリンのった『偽ウニ丼』を出してどうするんだ。そういうものはクラスで出すようなネタを追求したお店が出すメニューじゃないか。

それにプリンにしようゆなんて勿体ない。プリンはプリンのまま食べるべきだ。

「相変わらずだな。香奈は……」

「あれ、遙は香奈さんを知ってるの？」

「穂乃花先輩に誘われてここに来てから、何度か足を運んでいるんだよ」

四季会長繋がり、ということかな。いくら顔の広い遙でも香奈さんと直接知り合ったというわけではなさそうだ。

「んじゃ入るぞ」

振り向かず遙は言っただけ扉を勢いよく開ける。

「穂乃花先輩、楓連れてきましたよ」

「へ？ 連れてきた？」

頭にハテナマークが浮かぶ。

不思議がる僕に、「さっき穂乃花先輩に今から行くってメールしてたんだよ」と耳打ちする。

いつの間に……。

「待ってたわ。さあこっちに来て座って」

穂乃花先輩はパイプ椅子を部屋の隅から持ってきて二つ並べて置く。お礼を言っただけ座りると、目の前に美味しそうなケーキと紅茶が現われた。

「え、あの、いいんですか？ ……って遙もう食べてるっ」

「出された物は食べないと悪いだろ？」

それはそうだけど、物には順序というものが……まあ遙だから仕方ないか。

「楓も遠慮することないわ。これは学園祭に出す予定のチョコケーキトシフォンケーキなの。味見してくれると助かるわ」

「あー！先輩あたしも食べたいです！」

香奈さんが元気よく「はい！」と手を上げてピョンピョンと跳ねる。

「あなたはさつき食べたじゃない。しかも料理部員なのにろくな感想も言えなかったし……」

「はう！」

香奈さんが胸の辺りを押さえて机に突っ伏す。

「はあ……。さつきからこの繰り返しで、ずっと香奈の相手していて少し疲れてたの。あなたたち二人が来てくれて良かったわ」

「そ、そうですか」

やっぱり穂乃花先輩でも香奈さんの相手は疲れるんだ……。

「さあ、ケーキ食べてみて」

「えっと……。じゃあ遠慮なく」

フォークでケーキを一口サイズにカットして口に運ぶ。チョコレートの少しの苦みと甘さ、そして生地のふんわりとした食感がちょっといい。

「おいしいです。ちょっとチョコレートが苦めなので、子供向けというよりは大人向けの味、ですか？」

「苦かったか？ アタシはまったくそうは思わなかったけど」

遙がそう言いながら顔を上げる。頬にチョコレートの欠片がついているのを見つける。

「遙、チョコ付いてる」

「ん、どこだ？」

遙が反対側の頬を触る。

「取ってあげる」

手を伸ばして頬についたチョコレートを人差し指で取って口に運ぶ。

「うん。やっぱりちょっと苦い」

「そうか？」

「楓の言うとおり、少し甘さ控えめのチョコレートを使用しているわ。甘党だと聞いていた楓が食べられるか心配だったけど、これなら大丈夫そうね」

「はい。これくらいの苦さならちょうどいいです」

穂乃花先輩が嬉しそうに頷く。

「……いや、塚崎先輩。さらっとスルーせず、そこは楓先輩が遙先輩の頬に付いたチョコを取って舐めたところを突っ込むべきでしょう！？」

いつのまにか復帰していた香奈さんがパンツと調理台を叩いて語気を荒げる。

「微笑ましい光景じゃない」

「たしかにそうですけどそうじゃなくて！ もっとこう『エロい！』とか『百合い！』とかいろいろあるでしょう！？」

エロいはまだ分かるとして、『ゆりい』ってなに……？

「私はあなたみたいに漫才師を目指しているわけじゃないのよ」「あたしも目指してませんよ！」

香奈さんが調理台を再び叩く。
穂乃花先輩が目丸くする。

「目指してないの？」

「目指してないのか？」

「目指しているものとはかり」

「目指してませんよちょっとしか！ って楓先輩まで！？」

ちょっと目指してるんだ。香奈さんなら弄られキャラとしてテレビとか出られそうだと思うんだけどなあ……でも、身内だから面白いと言うこともあるのかもしれない。安易にその道を進めるのは香奈さんのためには

「なんか楓先輩深刻そうな顔してますけど、そんなに真剣にあたしの将来とか考えなくていいですからね！？」

「いいじゃないかお笑いでテレビに出るっていうのも。有名になったらサインもらってやるからさ」

「そういうなげやりなものもどうかと思います！」

「あら、だったら今のうちに香奈のサインもらっておこうかしら」
「塚崎先輩も乗らなくていいです！」

穂乃花先輩が「そう?」と首を傾げてどこから取り出したペンと紙を引っ込める。

「乗る乗らないはともかく、そろそろ戻った方がいいんじゃない?」
また椿に怒られるわよ?」

穂乃花先輩が微笑みながら時計を指差す。それを見た香奈さんが「あ」と口を開けて動きを止める。

「わ、わわわっ。ちょっと休憩のつもりがもう30分も経ってる!」
先輩方、いろいろ言いたいことはありますが、ここは渋々引き下がります! ではまた!」

そう言い残して、香奈さんは教室を走って出て行った。

香奈さんがいなくなつて、途端に静けさを取り戻す料理部。
ケーキを口に運び、紅茶を飲んでほっと息を吐く。

さっきのにぎやかな感じもいいけど、これはこれでまったりできていいかもしれない。

「ねえ。楓」

「はい?」

穂乃花先輩がカップをソーサーに置き、視線を合わせてくる。

「椿は中学の頃、何の部活をしていたか知っているかしら？」
「いえ」

僕と椿は、自ら進んで昔、そして離ればなれになっていた頃の話はしない。それは特に意識しているわけでもなく、なんとなく自然とそういうことになっていた。

きつと、

『安易に過去に触れてはいけない』

椿も僕も心の何処かでそう思っているのだろう。

「調理部。今の料理部とそう変わらない部活に所属していたそうよ」
「中学の頃から、ですか」

そうか。それで椿はあんなにも料理が上手だったんだ。高校から料理部に入って料理を習い始めて、数ヶ月であの腕前になったとは到底無理なことだとは思っていたけど、それは叔母さんから少し習っているものだと思っていた。まさか中学から部活動として料理を作っていたなんて。

「ねえ、楓。どうして私が料理部に所属しているか分かる？」

「えつと……料理することが好き、だからですか？」

「ええ、そうよ。では、どうして料理することが好きなのか、分かるかしら？」

手の込んだ料理を上手に作ったときの達成感？ それとも新しい

料理を作り出すことの未知の探求？ ……違う気がする。

穂乃花先輩は優しく微笑んで僕の言葉を待っている。

……ああ、そうか。きっとこれは単純なことなんだ。

「自分の料理を食べて貰って、美味しいって喜んで貰うこと、ですか？」

穂乃花先輩がゆっくりと頷く。

「正解。そしてそれは、椿も同じなの」

「椿も同じ？」

「ええ。中学の頃の椿はいろいろ考えたのでしようね。その人に喜んで貰いたい。笑ってほしい。できればそれが一瞬ではなく、長く長く続くように。そのために自分は何ができるだろうって。そして行き着いたのが、ご飯を作ってあげること。ほら、ご飯って毎日食べるものでしょ？ 毎日、美味しい物を作ってあげれば、その人に毎日喜んで貰えて、笑って貰えるでしょ？ そう考えた椿は目標に向けて中学から調理部に所属し、高校に入ってもそれを続けた。最初は腕を磨くことに必死だった彼女も、ここの料理部に入部する頃には、料理することが好きになっていたそうよ。そして先月にはついにその人にご飯を食べて貰えて、美味しいって言って貰えたそうなの。部室にきた椿は私に言ったわ。涙が出るほど嬉しくなったのは生まれて初めてだって」

そこで話を区切り、ふうと息を吐いて紅茶を一口飲む穂乃花先輩。その人。それはつまり僕のことだろう。椿が中学の頃から調理部に所属していたことに驚いたけど、それ以上にその所属していた理由が『僕にご飯を作りたいから』ということにことさら驚いた。

「好きな人にご飯を作ってあげて、美味しいって言って貰えると、

ご飯を作る事なんて手間だなんて思わないの。むしろ楽しいのよ。どんなに忙しくても、その人に喜んで貰えるなら頑張って作るうと思えるの。そしてそれは、それだけあなたのことを慕っているという事なのよ。楓」

椿が今の僕を慕っている？

穂乃花先輩の言葉が心に響く。

「そう。椿はね、あなたが思っている以上に、あなたのことが大好きなのよ」

第6話 僕が君にできること part 13

「椿はね、あなたが思っている以上に、あなたのことが大好きなのよ」

料理部の部室を出て教室に戻っても、その言葉が頭の中に残っていた。

椿が僕を慕ってくれていることは分かっている。それに気づかないほど僕も鈍感じゃない。だって、そうじゃなければ一緒に暮らすことなんてできないだろうし、あんなにも僕のことを心配してはくれないだろうから。

でも、「どのくらい慕われているのか？」と聞かれると、僕には応えられない。

穂乃花先輩の言うように、椿は僕が思っている以上に、僕のことを好きだと思ってくれているのだろうか？ それは僕が唯一の肉親、姉だから？ それとも小さかった頃によく遊び相手になってあげたから？

……結局、椿は僕の妹といえども、僕自身ではない「他人」。
だから、椿が僕をどう思っているかなんて、椿以外誰も分からないんだ。

姉である僕でさえも。

朝。いつもよりも早い時間に用意を済ませた僕は、制服姿で部屋から出てきた椿を横目に玄関へと向かった。

「へ？ お、お姉ちゃん？」

僕がこんな時間に一人で起きていること、そしてさらに着替えを済ませていることに椿は驚いているようだった。

「僕、用事あるから先出るね」

靴を履きながら、振り返ることなく告げる。

トントンとつま先で地面を叩いて、鞆を持つ。

「や、野菜ジュース飲んだの？」

「時間ないから飲みながら行くよ。ほら、ちゃんと持ってる」

鞆の中から紙パックの野菜ジュースを取り出す。

「えっと、あの……き、気をつけてね」

「うん。じゃ、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

心配そうな椿の声を背中に受け、僕はドアを開いた。

空は快晴。天気予報によれば気温もちょうど良く、過ごしやすい一日になるでしょうと言っていた。それなのに、マンションを出た僕は酷い倦怠感に襲われていた。

一応学校に行くふりだけでもしよう。

まったく働かない頭で考え、ゆっくりと歩みを進める。

それにしてもさつきは危なかった。もう少し椿が部屋から出てく

るのが早かったら、間違いなく顔を見られ、そして椿に調子が悪いことがばれてしまっていたに違いない。

フラフラと歩きながら、額に手を当てる。熱い。体温を測っていないけど、38度くらいはありそうだ。

はあ、と体の怠さを少しでも外に出そうと息を吐く。もちろんそんなことで改善するはずもなく、重い頭のせいで自然と視線が下がる。

今日の朝、目覚ましよりずっと早い時間に、息苦しさを目覚ました僕は、すぐに自分の体の異変に気づいた。異変と言っても、単に最近の疲れがたまつて、それが吹き出したことによる発熱だ。中学の頃によくそれで寝込んでいたから、起きてすぐに分かった。

大抵のことは我慢する僕でも、この状況で学校へ行こうとはさすがに思っていない。ただあのまま大人しくベッドで寝ていたら、椿に熱のこもる感じが伝わって心配されるかもしれない。もしかすると看病すると言い出して、学校を休むと言い出すかもしれない。それだけはダメだ。姉の僕のせいで学校を休むなんて……姉の僕が妹の椿にこれ以上迷惑をかけるなんてこと、あつてはならないんだ。

だから僕は重い体を引きずって、学園祭の準備を理由にして先に家を出るふりをしたんだ。あとは椿が家を出た後に戻って、今日一日部屋で大人しくしてればいい。

のろのろと歩き続け、住宅街を抜けたところで通学路から外れる。2、3分歩いて見つけた公園に入りベンチに座る。鞆の中から携帯電話を取りだして、学校へと電話をかける。

「もしもし。2年D組の四条楓ですが、今日体調不良のため、学校を休みます。……はい。……はい、すみません。よろしくお願います」

手早く済ませて電話を切り、携帯電話を鞆に戻す。出てくれたのが担任の山本先生で良かった。

空を見上げてベンチの背もたれに体重をかける。木製のベンチが少しだけきしむ。

遠くの方で笑い声が聞こえる。たぶん同じ年くらいの子だ。朝からあんなに笑えるなんて、元気だな。

「はあ……」

ため息をつく。誰かが今の僕を見たらどんな風に映るのだろう。

朝の登校時間に公園のベンチに座る制服姿の女の子。

待ち合わせ？ 何か思い悩んでいる？ 登校拒否？

3つ目と思う人が多そう。きつと今の僕はそんな雰囲気を出していると思う。まあ、ある意味間違っていない。

時計をちらちらと見ながら時間を潰す。やけに自分の息づかいがうるさくてゆっくりと呼吸してみようとすると、すぐに疲れて元に戻ってしまう。

時間が少しずつ進む。早く時間が経ってほしいときに限って時間というものはゆっくりと流れる。ほら、さっき見たときから30秒しか経っていない。

椿はそろそろ家を出た頃かな。いつもならこれくらいの時間に家を出るはず。とすると、あと10分くらい待てば、椿に出会うことなく家に戻れそうだ。

寒気を感じて胸の前で手を合わせる。朝の冷たさのせいかな、それとも熱のせいかな、合わせた手は小刻みに震えていた。

寒い。早く家に帰って布団に入りたい。食欲はないから、布団にこもって、椿が帰ってくる夜までに調子が良くなっていれば

「あれ、楓さん？」

聞いたことのある声に目を向けると、そこには不思議そうな顔をして僕を見る蓮君がいた。

うあ……まさか知っている人がこの道を通るなんて。でも見つかってしまったてはもう遅い。できるだけ調子が悪いのを悟られないよう、普通に接しよう。

「おはよう、蓮君。自転車通学なんだね」

「おはよう。うん。家から学校までは少し距離があるからね。歩けない距離ではないんだけど……って、楓さん顔が赤いけどどうしたんだ？」

「赤い？ そう？ 気のせいじゃない？」

とりあえずとぼけてみる。もしかすると見逃してく

「ううん。絶対赤い。ちよつとごめん」

「あ

れなかった。蓮君は自転車を止めて近づいてくると、僕の返答を待たずに額に手を当てた。

あーあ、これは確実にばれた。でも蓮君の手、ひんやりしてて気持ちいいな……。

そんなことを思いながら蓮君の顔をぼーっと見上げていると、みるみる蓮君の表情が険しくなっていく。

「凄いい熱じゃないか！ どうして学校を休もうとしなかったんだ！？」

突然の大声に驚いて、思わず目を閉じてビクツと体を震わせる。ゆっくりと目を開けておそるおそる視線を上げる。

案の定そこには怖い顔をした蓮君がいた。

「や、あのね、学校は休むんだよ？」

「じゃあどうしてこんなところにいるんだよ。制服まで着て」

「そ、それにはいろいろと深い事情があつて……」

「事情つて、椿ちゃんに迷惑かけたくないから、先に学校へ行くふりして出てきたつてこと？」

「……なんで分かつたの？」

蓮君が大きいため息をつく。

「分かるよそれぐらい。もう3年も前になるけど、楓さんとは伯父さんの家にいる頃によく遊んだだろ？ これでも少しは楓さんのこと分かつてるつもりだ。まったく、見た目は女の子らしく成長しているのに、中身はあまり変わってないんだから……」

「あの、後の方が小さくて聞こえなかつただけ……」

「……なんでもない。とにかく、家に戻ろう。もう椿ちゃんも学校に着いた頃だろうし」

そう言われて公園の時計を見ると、いつの間にか予鈴の時刻を過ぎていた。

「蓮君は学校行かないの？」

「こんなところに楓さんを放っていけるはずないだろ？ どうせ1、2時間目は自習だし」

蓮君はポケットから携帯電話を取り出す。

「とりあえず椿ちゃんに連絡」

「ま、待って！」

慌てて立ち上がり、蓮君の手を両手で包み込む。

「椿には連絡しないで」

勢いよく立ち上がったせいで頭がクラリとする。前に倒れそうになるところを蓮君が肩を押さえて支えてくれた。

「椿ちゃんには連絡しないよ。でも、遙には伝えておこうと思ってね」

「え、遙に……？」

『無理すんなって言っただろ！？』

……遙の怒声が聞こえた気がする。

「は、遙に電話するのはいいけど、ここに僕はいないことにしてね」

「いや、連れて帰るんだからそれは無理」

「お願い！……そうしてくれないと、蓮君の言うことも聞かないからね」

「もう……。分かったよ。遙に電話しても楓には絶対代わらない」

「本当に？」

「本当に」

じっと見つめる蓮君の目は嘘を言っているようには見えなかった。渋々蓮君から離れてベンチに座り直す。それを見届けた後、蓮君が携帯電話を耳に当てた。

「もしもし。楓さん来てないだろ？　なんか公園で怠そうにしてたからこれから家に連れて帰るところ。うん。うん。椿ちゃんにはな

んとか隠しておいて、心配するだろうから。え？ し、しないうってそんなこと！ うん。それでいい。元々そうしてもらおうと思ったから。うん。じゃあまた後で」

携帯電話をポケットにしまいながら蓮君がこちらに向き直る。

「それじゃあ行こうか。歩ける？」

「……正直に言うところ、ちょっとしんどい」

「だったら自転車で行こう。掴まることはできるよな？」

蓮君の言葉に頷く。

「よし。じゃあ行こう」

蓮君が自転車に乗り、その後ろに僕が乗る。落ちないようにながみつくと、自転車はゆっくりと走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7353q/>

私（ぼく）が君にできること

2011年12月21日16時47分発行